

原町市埋蔵文化財調査報告書第26集

県営高平地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ

町遺跡・法幢寺跡・泉平館跡

2001年3月

福島県相双農林事務所
原町市教育委員会

原町市埋蔵文化財調査報告書第26集

県営高平地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ

町遺跡・法幢寺跡・泉平館跡

2001年3月

福島県相双農林事務所
原町市教育委員会

序

文化財は、わが国の長い歴史の中で生まれ、今日まで守り伝えられてきた貴重な国民共有の財産であり、その地域の歴史、伝統、文化などの理解のために欠くことのできないものであると同時に、将来の文化の向上・発展の基礎をなすものであります。

とりわけ、地中に埋もれている埋蔵文化財は、文字資料だけでは知ることのできなかった先人の生活の様子や文字がなかった時代の人々の生活や文化について私たちに多くの情報を与えてくれます。

近年、原町市内では広範囲にわたり開発の波が押し寄せつつあります。その一方、長い歴史を経て保存されてきた埋蔵文化財が一日にして失われてしまう危険性があります。このような状況のなか、教育委員会では開発によって失われてしまう埋蔵文化財について、図面や写真などによる記録保存のための発掘調査を実施しております。

本報告書は、高平地区は場整備事業に伴い失われてしまう町遺跡、法幢寺跡、泉平館跡について実施した発掘調査の成果報告書です。

調査の結果、町遺跡では古代の掘立柱建物跡などの遺構、法幢寺跡では平安時代の集落と近世法幢寺の墓地、泉平館跡では古代の河川跡や近世初頭の館跡の堀などが発見されました。

おわりに、調査にあたってご協力いただきました、福島県相双農林事務所、高平は場整備施行委員会、地権者の皆様に深く感謝するとともに、調査及び報告書刊行にあたってご指導、ご協力いただきました各位に衷心より謝意を表します。

平成13年3月

原町市教育委員会

教育長 鈴木清身

例 言

1. 本報告書は、平成7年度から平成10年度にかけて県営高平地区農業基盤整備事業に伴って実施した発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査に係る経費は、福島県相双農林事務所、原町市が負担した。
3. 発掘調査は、原町市教育委員会が主体となり実施した。
4. 発掘調査は、町遺跡の一部を(南)山武考古学研究所に、法幢寺跡の測量の一部を株式会社日建に委託した。
5. 各遺跡の発掘調査体制は、各編ごとに記載した。
6. 発掘調査にあたっては、次の機関及び個人から協力を得た。

福島県相双農林事務所、原町市土地改良区、高平ほ場整備施行委員会、高野勝芳、佐藤富雄、鈴木健司、新妻晴一、鈴木光雄、村田恒明、桜田 力、鈴木守夫、今野一郎、紺野丞、紺野末治、門馬重敏、小林 清、佐藤辰男、門馬初雄、佐藤仁一、佐藤幸良、今野寛、星 稔、鈴木 求、高野光幸、瀬川隆夫

7. 本報告書に係る調査組織は、以下のとおりである。

調 査 主 体	原町市教育委員会		
調 査 担 当	原町市教育委員会生涯学習部		
	文 化 課	発掘調査係長	堀 耕平
		主 査	鈴木 文雄
		文化財主事	荒 淑人
		発掘調査員	藤木 海
事 務 局	原町市教育委員会	教 育 長	鈴木 清身
	生涯学習部	部 長	渡部紀佐夫
		次長兼文化課長	阿部 敏夫
		主幹兼課長補佐	高倉 一夫
		課長補佐兼係長	小田 幸夫
		文化振興係主査	山内 茂樹
		主 査	北山 淑英
		事 務 補 助	小林美枝子

調査補助員 狭川麻子

整理補助員 山本恵子、遠藤和子、古谷洋子、太田正子

7. 本報告書の執筆は、以下のとおり。

序説、第3編第1章・第3章：堀 耕平

第1編、第3編第4章(遺物)：荒 淑人

第2編第1章・第2章・第3章・第5章：鈴木文雄

第2編第4章、第3編第2章・第4章(遺構)・第5章：藤木 海

8. 出土遺物等の自然科学的分析・調査は、次の機関・諸氏に委託し、その結果を付章に掲載した。

火山灰分析：株式会社古環境研究所

動植物遺体の同定：バリノ・サーヴェイ株式会社

9. 調査の期間中及び報告書作成にあたって次の機関及び個人から指導・助言をいただいた。
福島県教育庁文化課、玉川一郎・木本元治・青山博樹（福島県教育庁）、平川 南（国立歴史民俗博物館）、大和田正明、佐藤仁司、関根達人（東北大学埋蔵文化財調査研究センター）

10. 出土遺物及び発掘調査に関する一切の資料は、原町市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 図中の方位は、国家座標の北を示している。
2. 図中、Hで示された数値は、セクション図の水系の海拔高度である。
3. 遺物実測図では、須恵器・金属製品の断面を黒ベタ、それ以外を白抜きで示した。なお墨書は黒ベタで表示している。
4. 掲載した遺構遺物の縮尺率は、図版の右下に記載し、挿図下方にスケールを付している。
5. 遺構平面図のスクリーントーンは柱穴を示し、土層断面図のスクリーントーンは、地山を示している。
6. 遺物で使用したスクリーントーンは、土師器においては黒色処理及び黒斑、転用硯については硯の使用面、フイゴ羽口では融着した鉄塊を示している。
7. 本文並びに図作成に際しては、以下の記号・略号を使用した。
T：トレンチ、SB：建物跡、SD：溝跡、SI：竪穴住居跡、SK：土坑

目 次

序	
例言	
凡例	
目次	
挿図目次	
写真図版目次	

序 説

第1章 原町市を取り巻く環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	5
第2章 調査に至る経過	12
第1節 調査に至るまで	12
第2節 調査実績	14

第1編 町遺跡

第1章 調査に至る経過	19
第1節 調査経過	19
第2節 調査要項	19
第2章 調査の方法	20
第3章 調査成果	21
第1節 掘立柱建物跡	22
第2節 竪穴住居跡	29
第3節 竪穴状遺構	39
第4節 溝跡	49
第5節 その他の遺構	53
第6節 遺構外出土遺物	55
第4章 まとめ	68

第2編 法幢寺跡

第1章 調査に至る経過	73
第1節 調査経過	73
第2節 調査要項	73

第2章 遺跡の概要	74
第1節 位置と地形	74
第2節 周辺の遺跡	76
第3節 法幢寺跡	76
第3章 調査の方法	78
第1節 試掘調査	78
第2節 本調査	78
第4章 調査成果	83
第1節 弥生時代	83
第2節 平安時代	84
第3節 江戸時代	112
第4節 遺構外出土遺物	167
第5章 まとめ	169
第3編 泉平館跡	
第1章 調査に至る経過	175
第1節 調査経過	175
第2節 調査要項	175
第2章 遺跡の概要	176
第1節 位置と地形	176
第2節 周辺の遺跡	176
第3節 「奥相志」の記載	177
第3章 調査の方法	178
第1節 試掘調査	178
第2節 本調査	179
第4章 調査成果	181
第1節 堀跡	181
第2節 流路跡	188
第3節 土坑	201
第4節 遺構外出土遺物	204
第5章 まとめ	205
付章1 原町市、泉平館跡の火山灰分析	209
付章2 泉平館跡の自然科学分析	213
写真図版	225
報告書抄録	268

挿図目次

序 説

- 図1 原町地域の地質図……………4
図2 原町市主要遺跡図……………9
図3 ほ場整備事業範囲……………12
図4 ほ場整備事業計画及び遺跡位置図 ……13

第1編 町遺跡

- 図1 町遺跡位置図……………21
図2 町遺跡全測図……………22
図3 1号掘立柱建物跡……………23
図4 2号掘立柱建物跡……………25
図5 3号掘立柱建物跡……………26
図6 4号掘立柱建物跡……………27
図7 5号掘立柱建物跡……………28
図8 1号竪穴住居跡……………30
図9 1号竪穴住居跡出土遺物(1)……………31
図10 1号竪穴住居跡出土遺物(2)……………31
図11 2号竪穴住居跡……………32
図12 2号竪穴住居跡出土遺物……………32
図13 3号竪穴住居跡……………34
図14 4号竪穴住居跡……………35
図15 5号竪穴住居跡……………37
図16 5号竪穴住居跡出土遺物……………37
図17 6号竪穴住居跡……………38
図18 1号竪穴状遺構……………40
図19 1号竪穴状遺構出土遺物……………41
図20 2号竪穴状遺構……………42
図21 2号竪穴状遺構出土遺物……………42
図22 3号竪穴状遺構……………43
図23 4号竪穴状遺構……………44
図24 5号竪穴状遺構……………46
図25 6号竪穴状遺構……………47
図26 7号竪穴状遺構……………48
図27 7号竪穴状遺構出土遺物……………49
図28 1号溝跡・2号溝跡・3号溝跡 ……50
図29 4号溝跡・5号溝跡・6号溝跡 ……51
図30 7号溝跡・8号溝跡・9号溝跡 ……52
図31 7号溝跡・8号溝跡土層断面図 ……53
図32 10号溝跡・3号土坑……………54
図33 1号溝跡・1号土坑・2号土坑 ……54
図34 遺構外出土遺物 土師器 杯……………56
図35 遺構外出土遺物 土師器 高杯……………57
図36 遺構外出土遺物 土師器 高台付杯……………57
図37 遺構外出土遺物 土師器 甕(1)……………58
図38 遺構外出土遺物 土師器 甕(2)……………59
図39 遺構外出土遺物 土師器 甕(3)……………60
図40 遺構外出土遺物 土師器 甕(4)……………61
図41 遺構外出土遺物 土師器 甕(5)……………62
図42 遺構外出土遺物 土師器
その他の遺物……………64
図43 遺構外出土遺物 須恵器 蓋……………65
図44 遺構外出土遺物 須恵器 壺……………66
図45 遺構外出土遺物 須恵器 杯……………66
図46 遺構外出土遺物 須恵器 甕(1)……………67
図47 遺構外出土遺物 須恵器 甕(2)……………68
図48 遺構外出土遺物 須恵器
その他の遺物……………68

第2編 法幢寺跡

- 図1 法幢寺跡位置図……………75
図2 法幢寺跡平面図……………79
図3 試掘トレンチ、グリッド配置図 ……80
図4 法幢寺跡遺構配置図……………81
図5 SK1……………83
図6 SK1出土土器棺……………84

図7	SI 1	85	図31	溝跡出土遺物	111
図8	SI 1出土遺物	86	図32	土壌(1)	113
図9	SI 2	87	図33	土壌(2)	117
図10	SI 2カマド	88	図34	土壌(3)	119
図11	SI 2出土遺物	88	図35	土壌(4)	123
図12	SI 3	90	図36	土壌(5)	125
図13	SI 3出土遺物	91	図37	土壌(6)	128
図14	SI 4	92	図38	SK 59	129
図15	SI 4カマド	93	図39	土壌(7)	131
図16	SI 4出土遺物	93	図40	土壌(8)	135
図17	SI 5	94	図41	土壌(9)	137
図18	SI 5出土遺物	95	図42	土壌(10)	139
図19	SI 6	96	図43	土壌(11)	141
図20	SI 6出土遺物	96	図44	土壌(12)	143
図21	SI 7	97	図45	土壌(13)	147
図22	SI 7出土遺物	98	図46	土壌(14)	149
図23	SB 1	100	図47	土壌(15)	151
図24	SB 2	101	図48	土壌(16)	155
図25	SB 3	102	図49	土壌出土遺物(1)	156
図26	SB 4	103	図50	土壌出土遺物(2)	157
図27	SB 5	104	図51	法幢寺跡出土古銭(1)	158
図28	溝跡配置図	105	図52	法幢寺跡出土古銭(2)	159
図29	溝跡土層断面図(1)	108	図53	法幢寺開山碑拓影	166
図30	溝跡土層断面図(2)	109	図54	遺構外出土遺物	168

第3編 泉平館跡

図1	泉平館跡位置図	177	図12	1号流路跡出土遺物 土師器(4)	194
図2	泉平館跡試掘トレンチ配置図	179	図13	1号流路跡出土遺物 須恵器(1)	195
図3	泉平館跡グリッド配置図	180	図14	1号流路跡出土遺物 須恵器(2)	196
図4	泉平館跡遺構配置図	183	図15	1号流路跡出土遺物 瓦・陶磁器類	197
図5	堀跡・流路跡土層断面図	185	図16	1号流路跡出土遺物 土製品	198
図6	1号堀跡出土遺物(1)	187	図17	2号流路跡出土遺物(1)	199
図7	1号堀跡出土遺物(2)	188	図18	2号流路跡出土遺物(2) 縄文土器	200
図8	2号堀跡出土遺物	188	図19	1～4号土坑	202
図9	1号流路跡出土遺物 土師器(1)	189	図20	7・8号土坑	203
図10	1号流路跡出土遺物 土師器(2)	191	図21	9号土坑	204
図11	1号流路跡出土遺物 土師器(3)	192	図22	遺構外出土遺物	205

図版目次

序説

図版1 航空写真……………225

第1編 町遺跡

図版2 町遺跡(1)……………226

1 町遺跡

図版3 町遺跡(2)……………227

2 遺跡近景(北から)
3 町遺跡から泉廃寺跡を望む(県指定地)
4 町遺跡から泉廃寺跡を望む(郡庁院)
5 調査区近景(1)(西調査区)
6 調査区近景(2)(西調査区)
7 竪穴住居跡(3号・4号)
8 調査区近景(3)(東調査区)
9 調査区近景(4)(東調査区)

図版4 町遺跡(3)……………228

10 1号掘立柱建物跡1(南から)
11 1号掘立柱建物跡2(南から)
12 1号掘立柱建物跡3(東から)
13 2号掘立柱建物跡
14 3号掘立柱建物跡
15 4号・5号掘立柱建物跡
16 4号掘立柱建物跡
17 5号掘立柱建物跡

図版5 町遺跡(4)……………229

18 5号掘立柱建物跡
19 北部遺構群
20 1号竪穴住居跡(南から)
21 1号竪穴住居跡
22 1号竪穴住居跡(カマド近景)
23 2号竪穴住居跡(南から)
24 3号竪穴住居跡(北から)
25 3号竪穴住居跡(南から)

図版6 町遺跡(5)……………230

26 3号竪穴住居跡カマドセクション
27 4号竪穴住居跡(北から)
28 4号竪穴住居跡(南から)
29 4号竪穴住居跡(南から)
30 4号竪穴住居跡カマドセクション
31 5号・6号竪穴住居跡(西から)

32 5号竪穴住居跡(西から)

33 5号竪穴住居跡(南から)

図版7 町遺跡(6)……………231

34 6号竪穴住居跡
35 1号竪穴状遺構
36 4号竪穴状遺構
37 5号・7号竪穴状遺構
38 10号溝跡検出状況
39 10号溝跡(東から)
40 2号・3号溝跡セクション
41 2号溝跡・3号溝跡セクション

図版8 町遺跡(7)……………232

42 土器出土状況
43 作業風景
44 1号溝跡
45 4号溝跡
46 5号溝跡セクション
47 6号溝跡セクション
48 7号溝跡セクション(1)
49 7号溝跡セクション(2)

図版9 町遺跡(8)……………233

50 7号溝跡(東から)
51 7号・8号・9号溝跡・1号井戸跡
52 1号井戸跡(西から)
53 1号土坑(西から)
54 2号土坑(西から)
55 3号土坑(南から)
56 土器出土状況(1)
57 土器出土状況(2)

図版10 町遺跡(9)……………234

58 4号・5号・6号溝跡
59 6号溝跡
60 土器出土状況
61 土器出土状況

図版11 町遺跡(10)……………235

62 出土遺物(1)遺構出土

図版 12	町遺跡 (11).....	236
63	出土遺物 (2) 土師器 杯・高杯・高台付杯	
図版 13	町遺跡 (12).....	237
64	出土遺物 (3) 土師器甕	

図版 14	町遺跡 (13).....	238
65	出土遺物 (4) 土師器 その他の遺物 須恵器 壺・壺・杯・甕・その他の遺物	

第2編 法幢寺跡

図版 15	法幢寺跡 (1).....	239
-------	---------------	-----

1	法幢寺跡遠景 (南から)	
2	調査区全景 (南から)	

図版 16	法幢寺跡 (2).....	240
-------	---------------	-----

3	遺跡北西部部分 (西から)	
4	遺跡南西部部分 (西から)	
5	遺跡南東部分 (西から)	
6	遺跡北東部分 (東から)	
7	SK1 (再葬墓) (西から)	
8	SK1 (再葬墓) 断面 (西から)	
9	SI1 (南から)	
10	SI1 カマド (南から)	

図版 17	法幢寺跡 (3).....	241
-------	---------------	-----

11	SI2 (南から)	
12	SI3 遺物出土状況 (南から)	
13	SI3 カマド付近遺物出土状況 (南から)	
14	SI3 全景 (南から)	
15	SI3 カマド (南から)	
16	SI4~7 (南から)	
17	SI4 (南から)	
18	SI4 鍛冶炉 (南から)	

図版 18	法幢寺跡 (4).....	242
-------	---------------	-----

19	SI5 (南から)	
20	SI5 カマド (南から)	
21	SI6 (南から)	
22	SI7 (南から)	
23	SB1~3 (南から)	
24	SB1 (南から)	
25	SB1 No.2 柱穴土層断面	
26	SB1 No.10 柱穴土層断面	

図版 19	法幢寺跡 (5).....	243
-------	---------------	-----

27	SB2 (南から)	
28	SB3 (南から)	
29	SB4・SI1・SD6・7 (南から)	
30	SB5 (南から)	
31	SD10・11・15 (東から)	
32	SD10~15 (西から)	

33	SD14 羽口出土状況 (南から)	
----	-------------------	--

34	SD1・13 土層断面 (D-D') (南東から)	
----	---------------------------	--

図版 20	法幢寺跡 (6).....	244
-------	---------------	-----

35	SD15 土層断面 F-F' (南から)	
36	SD15 土層断面 G-G' (南から)	
37	土壌群 (D2-21 グリッド) (南から)	
38	土壌群 (D2-41 グリッド) (南から)	
39	土壌群 (D2-43 グリッド) (南から)	
40	土壌群 (D2-51 グリッド) (南から)	
41	土壌群 (D2-67 グリッド) (南から)	
42	土壌群 (D2-76 グリッド) (南から)	

図版 21	法幢寺跡 (7).....	245
-------	---------------	-----

43	SK6 堅棺土層断面 (南西から)	
44	SK13 遺物出土状況	
45	SK17 堅棺土層断面 (南西から)	
46	SK19 堅棺土層断面 (南西から)	
47	SK22 鉄鍋出土状況 (南東から)	
48	SK29 堅棺底板出土状況 (南西から)	
49	SK30 遺物出土状況 (南東から)	
50	SK34 (南西から)	

図版 22	法幢寺跡 (8).....	246
-------	---------------	-----

51	SK34 硯出土状況 (南西から)	
52	SK40 遺物出土状況 (南西から)	
53	SK45 遺物出土状況	
54	SK46・47 土層断面 (南から)	
55	SK46・47 遺物出土状況 (南から)	
56	SK82 遺物出土状況 (南から)	
57	SK104 火葬骨出土状況 (南から)	
58	SK105 火葬骨出土状況 (南から)	

図版 23	法幢寺跡 (9).....	247
-------	---------------	-----

59	SK106 火葬骨出土状況 (南から)	
60	SK117 火葬骨出土状況 (南から)	
61	SK140 遺物出土状況 (西から)	
62	SK145 鉄鍋・遺物出土状況 (西から)	
63	SK155 遺物出土状況 (北から)	
64	岡田氏墓地 (南西から)	
65	開山碑 (南から)	

図版 24	法幢寺跡 (10) ……………	248
66	SK1 SI1・2 出土遺物	
図版 25	法幢寺跡 (11) ……………	249
67	SI3 出土遺物	
図版 26	法幢寺跡 (12) ……………	250
68	SI4・5・6・7 出土遺物	
図版 27	法幢寺跡 (13) ……………	251
69	溝跡出土遺物	
図版 28	法幢寺跡 (14) ……………	252
70	土壌出土遺物 (1)	
図版 29	法幢寺跡 (15) ……………	253
71	土壌出土遺物 (2)	

第3編 泉平館跡

図版 34	泉平館跡 (1) ……………	258
1	遺跡近景 (南から)	
2	調査区全景 (南から)	
図版 35	泉平館跡 (2) ……………	259
3	1号堀跡東辺 (北から) 手前が土橋	
4	1号堀跡東辺土橋 (西から)	
5	1号堀跡東辺中央部 (西から)	
6	1号堀跡南東角部 (西から)	
7	1号堀跡東辺 (南から)	
8	1号堀跡南辺 (東から)	
9	1号堀跡南辺 (西から)	
10	1号堀跡南辺土橋 (南から)	
図版 36	泉平館跡 (3) ……………	260
11	1号堀跡南辺南北セクション (西から)	
12	1号堀跡出土呪符	
13	2号堀跡 (西から)	
14	2号堀跡 (東から)	
15	1号土坑	
16	2号土坑	
17	3号土坑	
18	4号土坑	

図版 30	法幢寺跡 (16) ……………	254
72	土壌出土遺物 (3)	
73	土壌出土遺物 (4) キセル	
74	土壌出土遺物 (5) 留金具・釘	
図版 31	法幢寺跡 (17) ……………	255
75	古銭 (1)	
図版 32	法幢寺跡 (18) ……………	256
76	古銭 (2)	
図版 33	法幢寺跡 (19) ……………	257
77	遺構外出土遺物	

図版 37	泉平館跡 (4) ……………	261
19	7号土坑 (西から)	
20	1号流路跡 (南東から)	
21	1号流路跡 (南から)	
22	1号流路跡セクション (南から)	
23	2号流路跡 (南から)	
24	2号流路跡 (北から)	
25	2号流路跡セクション (北から)	
26	現地説明会風景	
図版 38	泉平館跡 (5) ……………	262
27	出土遺物 (1)	
図版 39	泉平館跡 (6) ……………	263
28	出土遺物 (2)	
図版 40	泉平館跡 (7) ……………	264
29	出土遺物 (3)	
図版 41	泉平館跡 (8) ……………	265
30	出土遺物 (4)	
図版 42	泉平館跡 (9) ……………	266
31	出土遺物 (5)	
図版 43	泉平館跡 (10) ……………	267
32	出土遺物 (6)	



序 說



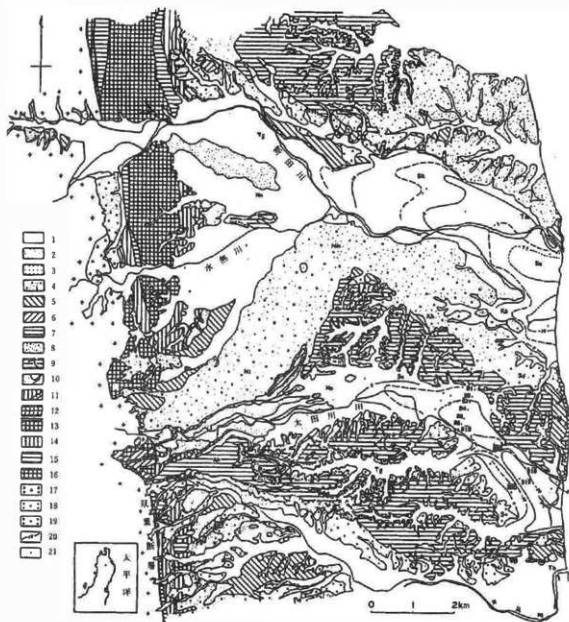
第1章 原町市を取り巻く環境

第1節 地理的環境

福島県原町市は、浜通り地方のいわゆる阿武隈高地東縁部東部の低地帯北方、相馬地方のほぼ中央に位置しており、東は太平洋に面し、行政境としては北は相馬郡鹿島町、南は小高町、西は飯館村・双葉郡浪江町と境界を接している。人口は約49,800人、面積は約199.66km²で、当地方の産業及び政治面での中核都市となっている。主要交通網は南北方向に縦走するJR常磐線と国道6号線であり、仙台方面や市内などへの通勤・通学手段として利用されている。

原町市の地形は、西部域を南北方向に縦走する阿武隈高地、そこから派生する相双丘陵・常磐丘陵と称される標高100m以下の低丘陵、及び丘陵間に開析された沖積平野とで構成されている。全体として阿武隈高地にかかる西側が高く、東部にいくにつれて標高を下げている。阿武隈高地東縁部と浜通り低地帯と双葉丘陵地域（岩沼-久之浜構造線）によって地質的に明瞭に区分され、低地帯もまた断層以東の相双丘陵地域と以南の常磐丘陵地域とに区分されている。阿武隈高地は東西約50km・南北約200kmの規模を有し、古生代から新生代中頃新第三紀中新生に至る地質を有し、北上高地と並ぶ日本最古の地質構造を形成している。基盤層は古生代末期のアパラキア褶曲と中生代末期のララマイド褶曲に代表される二度に渡る世界的な造山運動の際に、古生層及び中生層に貫入した古期及び新期・最新期の花崗岩、変成岩類である。地形的には山頂がなだらかな隆起準平原を呈しており、原町市付近の標高は500～600m前後になっている。高地周辺では標高100～150m前後を測り、東延するにしたがって徐々に高度を下げ、海岸部では20～30mを測る。

阿武隈高地裾部から東に派生している低丘陵は、新生代第三紀に形成された固結度の低い凝灰岩質砂岩で構成されており、双葉断層により、上層部の相双丘陵（滝の口層）と中・下層の常磐丘陵地域とに区分されている。第四紀洪積世における氷河期と間氷期の海水準変動により、丘陵上には海成及び河成の段丘が構成され、高位より順に第1段丘、第2段丘、と命名されている。原町市内では埋没段丘を含む7段丘の存在が知られており、特に第1段丘である畦原段丘と第4段丘である雲雀ヶ原扇状地が発達しているが、他は河川上流域沿いに小規模に分布する在り方を呈している。低丘陵の間には、各河川が樹枝状に開析した谷間に土壌が埋没した沖積平野が入り込んでいる。標高は20m以下であり、縄文時代前期を中心とする海進期には海岸部の大部分が海水面下にあったと考えられており、大木2 a 式期の遺跡である菅浜の赤沼遺跡



1: "沖積層", 2: 第6段丘構成層, 3: 第5段丘構成層, 4: 第4段丘構成層, 5: 第3段丘構成層, 6: 第2段丘構成層, 7: 第1段丘構成層, 8-11: 竜の口層, 8: 同c層 (砂岩), 9: 同c層 (シルト岩・京塚沢凝灰岩), 10: 同b層, 11: 同a層, 12-19: 基盤岩類, 12: 堰手層, 13: 小山田層, 14: 富沢層, 15: 中の沢層, 16: 柳屋層, 17: 古生層, 18: 花園岩類, 19: 脈岩, 20: 竜の口層上面標高(m), 21: ボーリング地点と孔番, Ah: 桂原, Bb: 馬場, Hi: 雲雀ヶ原, Hm: 原町市街, Ht: 東高松, Ka: 菅浜, Kh: 北原, Kk: 片倉, Mg: 間形沢, Mm: 米々沢, Nn: 長野, No: 中太田, Om: 大塚, Sd: 幸, Se: 下江井, Sk: 下北高平, So: 下太田, Ss: 下清佐, Tb: 塚原, Tg: 鶴谷, Tm: 館前, Yg: 横上

図1 原町地域の地質図 (原図1979中川他)

の調査では、海水面を標高6m前後に求めている。現在ではほ場整備が進み、一面の美田地帯が形成されている。

第2節 歴史的環境

最近の原町市では、県営ほ場整備事業などの大規模開発が推進されており、それに伴う埋蔵文化財の発掘調査により、従来不明であった弥生時代遺跡の在り方や、浜通り低地帯における律令期の政治動向を究明する一端となるような多大な成果が続々と報告されてきている。原町市では、これまでも分布調査や発掘調査を通じて遺跡の保存・活用を努めてきたが、今後増加の一途をたどるこれらの遺跡に対して、尚一層の保存・活用の努力が求められているところである。

また、平成7年(1995)には国指定重要無形民俗文化財「相馬野馬追」の繰り広げられる野馬追祭場地の東隣に「野馬追の里歴史民俗資料館」が建設された。平成10年度には「野馬追の里原町市立博物館」と名称変更され、当地方の歴史・民俗における生涯・社会教育の場として活動している。

原町市における旧石器時代の遺跡は現在のところ、遺跡の出土する散布地が9ヶ所知られている。立地条件を概観すると畦原A遺跡(1)、熊下遺跡(2)、袖原A遺跡(3)などは太田川流域の第1段丘面の畦原段丘上に所在し、陣ヶ崎A遺跡(4)、南町遺跡(5)、橋本町A遺跡(6)、桜井遺跡(7)などは第4段丘面の雲雀ヶ原扇状地に所在している。

縄文時代の遺跡は、早期末から前期初頭の住居跡の調査が行われた片倉の八重米坂A遺跡(8)、隣接する羽山B遺跡(9)などが阿武隈高地裾部に所在している(註1)。太田川を北に臨む第1段丘面に所在する片倉の畦原F遺跡(10)の調査(註2)では早期末から前期前葉の土坑3基が調査されている。この時期は、高地寄りに立地する遺跡がある一方で海浜側の微高地上に所在する遺跡も知られている。前期初頭大木2a式の土器片が出土した萱浜の赤沼遺跡(11)(註3)や前期前半の土器片が多量に見えられた雫の犬這遺跡(12)は雲雀ヶ原扇状地の先端部の微高地上に所在しており、該期の古環境を知る上での貴重な成果を上げている。

中期の遺跡は、大木9～10式の土器片を多量に出土する押釜の前田遺跡(13)が阿武隈高地裾部の低位丘陵に立地しており、新田川流域の第3段丘面上に所在する上北高平の高松遺跡(14)周辺から西側の平坦面一帯は、末葉の大木8a～10式土器片を出土することで知られている。高松遺跡の東方約1km、同段丘面上に立地する榎松A遺跡(15)では、昭和52年(1977)の宅地造成に伴う発掘調査により、大木10式期の複式炉を伴う竪穴住居跡1棟が市内で初めて調査されている。

後期から晩期の遺跡は、大洞C1～A式期土器片を出土した片倉の羽山遺跡(16)などの遺跡が市内各地に所在している。平成8年(1996)の宅地造成に伴う高見町A遺跡(17)の発掘調査では晩期中葉の埋設土器を伴う石囲炉の竪穴住居跡1軒が調査されている(註4)。浜通り

低地帯の海岸部には多くの貝塚が所在しているが、原町市では全く確認されておらず、現在まで空白地帯となっているが、今後発見される可能性を秘めている。

弥生時代の遺跡は、東北地方南部の標式土器として使用されてきた中期末葉の桜井式土器を出土する桜井遺跡（7）（註5）が知られていたが、最近の調査では、海岸部の丘陵の尾根部に小規模な集落を構成していた例や海浜寄りの低位丘陵中から土器や石庖丁が出土する例が報告されている。また、平成5年（1993）に調査された高見町A遺跡（17）からは弥生時代の後期に位置付けられる十王台式土器を出土し、その北限となる竪穴住居跡が2棟発見されている（註6）。平成8年（1996）に高平地区は場整備事業に伴う法幢寺跡（18）からは桜井式期の土器が1基調査されている。

古墳は、前方後方墳として東北第4位の規模を誇る国指定史跡の桜井古墳（19）新田川南岸の河岸段丘上に所在しており、周辺古墳と共に桜井古墳群上浜佐支群（20）を構成している。桜井古墳は昭和58年（1983）に範囲確認調査（註7）が行われており、主軸長7.2mの墳丘部に、幅約1.1～2.0mの周溝が巡っていたことが確認されている。平成8年（1996）の高平地区は場整備事業に伴う相馬胤平居館跡（21）の調査では方形周溝墓2基が発見されている。

他に昭和42年（1967）に、中太田所在の墳丘部軸上約40mの前方後円墳と推定される与太郎内1号墳（22）、高見町1丁目所在の墳丘部直径約1.2mの円墳である高見町1号墳（23）の発掘調査が行われ、高見町1号墳からは粘土施設を伴う割竹形木棺の痕跡が確認されている（註8）。

平成5年（1993）の高見町A遺跡の調査では、既に削平されてマウンドや埋葬施設は未発見であったが、外郭直径約1.5m、幅約2mの円形の周溝1基が発見され、高見町2号墳と命名されている。この調査では埴釜式期の竪穴住居跡2棟が市内では初めて発見（註6）されており、この地域が弥生時代から古墳時代への変遷や古墳の出現過程について極めて重要であることを示している。高見町A遺跡は同時に桜井古墳群高見町支群（17）としても重要な地域で、平成7年には市道予定区域とその西側の部分について発掘・試掘調査が実施され、古墳8基、周溝を伴わない例抜石棺3基、箱式石棺1基の他、弥生時代から古墳時代の竪穴住居跡2.1棟が確認されており、同古墳群の密度の高さをあらためて示している。

また、平成8年（1996）には荷渡古墳群（24）の3基の山頂墳が調査され、いずれの主体部も割竹形木棺の直葬であった（註4）。その他、市内各地の丘陵上に古墳が築かれており、北泉の地藏堂古墳群（25）、江井の西谷地古墳群（26）、鶴谷の五治郎内古墳群（27）などが所在している。

後期になると、当地方でも横穴が多く作られている。現在確認されている分布状況を見ると、鹿島町との境に近い新田川北部の上北高平には北沢横穴群（28）、京塚沢横穴群（29）、新山前横穴群（30）、北泉に大蔵横穴群（31）、地藏堂横穴群（32）、太田川北部の上太田には道内迫横穴群（33）、大覚には西迫東迫横穴群（34）、幸には坂下横穴群（35）、太田川南部の高には、昭和40年（1965）に調査された高林横穴群（36）（註9）などが河川流域の沖積平野を望む丘陵に所在しており、古墳の分布の在り方とはほぼ合致している。また、中太田の中畑横穴群（37）、

羽山横穴群 (38)、上太田の新橋横穴群 (39) は、雲雀ヶ原扇状地を望む丘陵に所在している。この内、昭和48年(1973)に発掘調査が行なわれた国指定史跡の羽山横穴(40)は、玄室奥壁に壁画が描かれており(註10)、調査後に保存施設を建設して年間4回の一般公開を通して社会教育に役立てている。

奈良・平安の遺跡は、律令体制のもとに行方郡衙に想定される泉慶寺跡(41)や軍団跡に想定される植松慶寺跡(42)が新田川北側の丘陵裾部に所在している。両遺跡についてはこれまで発掘調査による成果はなかったが、泉慶寺跡については、平成6年度(1994)、県史跡内の従来焼け米が出土する地点から西側で、宅地新築に伴う試掘調査により、8～9世紀の掘立柱建物跡と礎石建物跡が検出されると共に、掘立柱建物跡から礎石建物跡への変遷が確認された。平成7年度には県史跡の南東外側で、官衙的な色彩の強い一本柱柱列跡が2列発見され、平成8年度の第3次調査では掘立柱建物跡3棟、一本柱列2列などが調査され、第4次調査では掘込地業を伴う礎石建物跡とこれを囲む溝跡が検出され、なんらかの院を構成するものと推定される(註4)。今後の調査が期待される。また、両遺跡からは布目瓦が出土しており、供給源として泉慶寺跡には大甕の京塚沢瓦窯跡(43)が、植松慶寺跡には昭和59年(1984)に国士館大学により発掘調査が行われた入道迫瓦窯跡(44)(註11)が考えられている。この他、馬場の滝ノ原窯跡(45)では平安時代の須恵器窯跡3基が調査され、杯、長頸瓶などが出土している。

また、海岸部の金沢丘陵の帯には大規模な製鉄遺跡(46)が所在している。平成元年度(1989)から5年度までに、財団法人福島県文化センター遺跡調査課により発掘調査が進められた結果、7世紀後半から9世紀の製鉄炉跡123基・木炭窯跡140基・竪穴住居跡121棟・鍛冶炉跡16基・掘立柱建物跡10棟など全国最大の調査数を誇り、内容においても古代の鉄生産に関する技術や社会的背景などを知る上で多大な成果が報告されている(註12)。

東北電力原町火力発電所では、発電所敷地内に木炭炉と製鉄炉の保存館を建設し、年4回の一般公開を行っている。

この時期になると、土師器や須恵器を出土する集落が増えるが調査例は少ない。変化としては新田川や太田川流域の河岸段丘の平坦面、あるいは自然堤防上など、これまで遺跡が少なかった平野部の微高地にも多くの遺跡が立地している。特に延喜式内社の押雄神社・冠嶺神社を中心とする北長野一帯、多珂神社・日祭神社を中心とする大甕一帯、太田川中流域の上太田一帯、桜井の河岸段丘面に多く所在しており、かつての野馬追原を取り囲むような立地構成をしている。大甕地区は場整備事業に関連して平成2年(1990)に範囲確認調査が実施された米々沢の竹花A遺跡(47)では、奈良～平安時代の竪穴住居跡3棟が確認(註13)されており、平成4年(1992)には上北高平の高松B遺跡(48)でも奈良～平安時代と推定される竪穴住居跡2棟が試掘調査により発見されている。

中世の遺構として城館跡が挙げられるが、信田沢の内城のように現在では所在地不明のものや城館の構造が不明確のものも多い。その中でも、北泉の泉館跡(49)は、中世山城の典型的な形態をとどめている。館主は相馬氏の一族泉氏の館跡といわれ、その重要性から市指定史跡となっている。他にも、牛越城跡(50)・大甕七館の一つである明神館跡(51)・奥州下向の際、

最初に相馬氏の拠点となった別所の館跡（現、相馬太田神社）(52)などが比較的良好な中世山城の形態を残しながら所在しており、在地の領主の館跡も丘陵上や平野部の各地に点在しているが、発掘調査の手続きもなされないまま、部分的な破壊を受けているものも見受けられる。

中世の村落遺跡の把握は難しいが、米々沢の谷地畑遺跡(53)はその可能性が高い。平成2年に範囲確認調査が実施(註13)され、祥符元寶などの北宋銭が出土しており、近世にかけての遺跡と推定される。遺跡は奈良～平安時代の集落竹花A遺跡に隣接し、太田川北岸の自然堤防上に立地している。

中世末の館跡である泉平館跡(54)は、相馬一族の長、岡田氏の居城とされ、短期間に使用された館であるが、ほ場整備事業に伴い、平成7年度に主郭から南側の発掘調査が実施された。小規模な畝堀を伴う堀跡と出入口が見つかった。

近世の遺構として、初頭期の慶長2年(1597)から同8年(1603)に相馬氏の居城として再整備されて使用された牛越城跡や中期初頭の寛文6年(1666)以降に築かれた野馬土手(55)及び出入口となる木戸跡がある。野馬土手は、野馬追に欠かせない野生馬の保護に力を尽くしてきた結果、増殖した馬が畑の作物を荒らしたり、放散しないように雲雀ヶ原扇状地を囲むように、東西約10km、南北約2.6kmに築かれたものである。大部分は土塁であるが、石垣としていた所もある。平成5年には、小高町が菖蒲沢で石垣の野馬土手の一部分を調査している。現在ではほとんど消滅してしまっており、その保護が急がれるが、昭和62年(1987)の桜井野馬土手の範囲確認調査(註14)及び、平成5年の牛来、歴史民俗資料館予定地における調査では、土手の規模と内側に溝を掘っていた状況が確認されている。木戸跡は、多い時で30数ヶ所が設けられていたといわれているが、現在その姿をとどめているものは市指定史跡の羽山岳の木戸跡(56)一ヶ所だけとなっている。

近世後半から近代にかけては藩営の大規模なたたらとして馬場鉄山があり、周辺の小規模なたたらとしては財団法人福島県文化センター遺跡調査課により調査された馬場の五台山B遺跡(57)、片倉の羽山B遺跡(9)が阿武隈高地の山間部に遺されている(註1)。

また、近年、泉の正福寺跡(58)では火葬墓が調査され、泉の法幢寺跡(18)、北泉の地藏堂B遺跡(59)ではいわゆる鍋被りを含む土坑墓が調査され、近世の葬制・墓制に関する資料も蓄積されつつある。

参考・引用文献

- 註1 1990 寺島文隆 他『原町火力発電所建設関連遺跡調査報告書Ⅰ』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 註2 1994 武田耕平 『県道相馬浪江線付替え工事関連遺跡発掘調査報告書畦原F遺跡』
原町市教育委員会
- 註3 1983 長島雄一 『赤沼遺跡試掘調査報告』 原町市教育委員会
- 註4 1997 鈴木文雄 他『原町市内遺跡発掘調査報告書2』 原町市教育委員会
- 註5 1992 竹島國基 『桜井』

図2 原町市主要遺跡図

原町市の主な遺跡

No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	龍原A遺跡	31	大磯穴群(北原)
2	熊下遺跡	32	徳家堂横穴群
3	袖原A遺跡	33	迫内迫横穴群(上大田)
4	陣ヶ先A遺跡	34	西迫東迫横穴群(大磯)
5	南町遺跡	35	坂下横穴群(栗)
6	橋本町A遺跡	36	高林古墳群
7	桜井遺跡	37	中巻横穴群(中太田)
8	八重米坂A遺跡	38	岡山横穴群
9	羽山B遺跡	39	新橋横穴群(上大田)
10	龍原F遺跡(片倉)	40	羽山横穴
11	赤沼遺跡(堂沢)	41	泉原寺跡
12	大沼遺跡	42	徳松庵寺跡
13	前田遺跡(押釜)	43	穴塚穴群(北原)
14	森松遺跡(上北高平)	44	久道迫互深跡
15	榎松A遺跡	45	滝ノ原跡
16	羽山遺跡(片倉)	46	金沢製鉄遺跡
17	高見町A遺跡	47	竹花A遺跡(米ヶ沢)
18	法蓮寺跡	48	高松B遺跡(上北高平)
19	桜井古墳	49	倉館跡(北原)
20	桜井古墳群上佐佐支群	50	牛越城跡
21	相馬風平館跡	51	明神館跡
22	与太部内1号墳	52	別所の館跡
23	高見町1号墳	53	谷地畑遺跡(米ヶ沢)
24	南波古墳群	54	泉原館跡
25	地蔵堂古墳群	55	野馬土手
26	西谷地古墳群(江井)	56	羽山居の木戸跡
27	五太郎内古墳群	57	五台山B遺跡
28	北沢横穴群(上北高平)	58	三福寺跡(泉)
29	京塚穴群	59	地蔵堂B遺跡(北原)
30	前山横穴群		



- 註 6 1996 辻 秀人 他 『桜井高見町 A 遺跡発掘調査報告書』
東北学院大学文学部史学科辻ゼミナール・原町市教育委員会
- 註 7 1985 玉川一郎 他 『国指定史跡桜井古墳範囲確認調査報告書』
原町市教育委員会
- 註 8 1969 竹島國基 他 『原町市高見町 1 号墳・与太郎内 1 号墳調査報告書』
原町市教育委員会
- 註 9 1965 竹島國基 他 『原町市高林古墳群調査報告書』 原町市教育委員会
- 註10 1974 渡邊一雄 他 『羽山裝飾横穴発掘調査概報』 原町市教育委員会
- 註11 1984 戸田有二 『考古学研究室発掘調査報告書福島県原町市・入道迫瓦窯跡』
国士館大学文学部考古学研究室
- 註12 1991 寺島文隆 他 『原町火力発電所建設関連遺跡調査報告書Ⅱ』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 1992 寺島文隆 他 『原町火力発電所建設関連遺跡調査報告書Ⅲ』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 註13 1991 玉川一郎 他 『原町市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ』
原町市教育委員会
- 註14 1988 玉川一郎 『野馬土手跡範囲確認調査報告書』 原町市教育委員会

第2章 調査に至る経過

第1節 調査に至るまで

原町市高平地区は、原町市の中心部から東へ約3kmに位置し、国道6号線の東側、二級河川新田川の北側に開けた水田地帯である。

高平地区は昭和28年から30年に耕地整理で10aの区画整理済であるが、地区内の用排水施設が未整備の上、用排水兼用であるため排水条件が悪く、一部地下水位の高い湿田があった。また、農道についても直線ではあるが幅員狭小で通行に支障をきたしていた。

そこで、福島県相双農林事務所と高平地区ほ場整備施行委員会は、耕地を大型ほ場に整備するとともに道路・用排水路を系統的に配置し、耕地の集団化を図り、大型機械導入による営農労力の節減と、畑作振興により農業経営の安定と食糧の安定供給に寄与するため、低コスト化水田農業大区画ほ場整備による担い手育成基盤整備事業に取り組むこととなった。事業面積は240haであった。

平成5年、この事業計画について原町市土地改良区は、地区内に所在する文化財の有無について、原町市教育委員会に照会し、同委員会ではその時点で、福島県史跡泉庵寺跡を含む6遺跡の所在を回答した。



図3 ほ場整備事業範囲

0 2.5km
1/50000

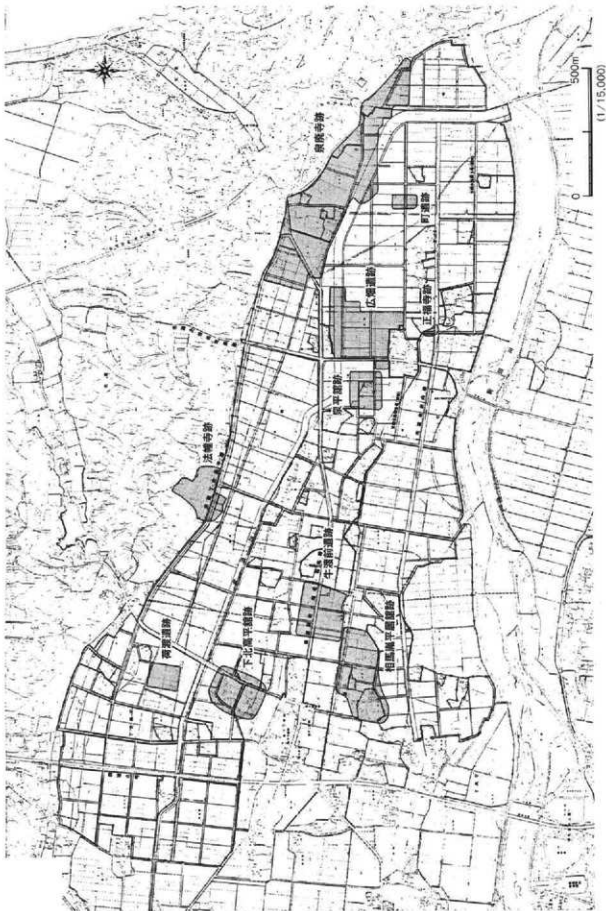


図4 ほ場整備事業計画及び遺跡位置図

工事の面整備は平成6年度から着工し、文化財の調査と調整を図りながらすすめることとなった。本地区では文化財の占める面積が大きいことから、工事に合わせて発掘調査を行い、整理業務及び調査報告書作成はその後に行うこととなった。

発掘調査経費は原則として、試掘調査は文化財保護側負担、本調査は市及び県の負担、そして農家負担金については市が負担することとした。

その後、工事と文化財調査が進むにつれ、地元の伝承や遺物の散布から新たに4遺跡が確認された。

表1 高平地区ほ場整備事業関連遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	種別	時期	面積(m ²)	備考
1	荷渡遺跡	下北高平字荷渡	散布地	弥生	12,000	石斧、石鋸
2	下北高平館跡	下北高平字古館	城館跡	中世	8,000	金沢氏
3	法輪寺跡	泉字寺前	社寺跡	近世	25,000	
4	泉麿寺跡	泉字宮前、寺家前	官衙跡	奈良・平安	120,000	行方郡衙
5	相馬嵐平居館跡	下高平字牛渡前	散布地	奈良平安、中世	21,000	
6	泉平館跡	泉字町畑、館腰	城館跡	近世	12,000	岡田氏
7	正福寺跡	泉字前向	社寺跡	近世	660	
8	町遺跡	泉字町	散布地	奈良・平安	14,000	
9	広畑遺跡	泉字館腰、塚越	散布地	奈良・平安	52,800	土師器、瓦
10	牛輪渡前遺跡	下北高平字赤字津木、下高平字荒井前	散布地	弥生	15,500	石包丁
合 計					280,960	

第2節 調査実績

発掘調査は平成6年度から12年度まで、10遺跡について合せて試掘調査29,595 m²、発掘調査79,000 m²を実施した。試掘調査成果については、国庫補助事業により刊行した調査報告書に記載し、本発掘調査成果については、本事業の一環として、平成11年度から13年度までの期間で継続的な整理業務と発掘調査報告書を刊行することとなった。

発掘調査報告書は、平成11年度が下北高平館跡・正福寺跡・広畑遺跡、平成12年度が町遺跡・法輪寺跡・泉平館跡、平成13年度が荷渡遺跡・泉麿寺跡・相馬嵐平居館跡の発掘調査成果を掲載することとした。

表2 発掘調査実施一覧表 (単位はm²)

番号	遺跡名	6年度	7年度	8年度	9年度	10年度	12年度	計
1	荷渡遺跡		400					400
2	下北高平館跡		640	1,900				2,540
3	法輪寺跡			3,550				3,551
4	泉魔寺跡	4,640	1,000 (4,000)	5,100 (1,600)	6,000 (2,558)	7,000 (11,200)	250 (3,500)	23,900 (22,858)
5	相馬胤平居館跡		(3,600)	19,297				19,297 (3,600)
6	泉平館跡	912	9,350	4,200				14,462
7	正福寺跡		660					660
8	町遺跡				11,000	900		11,900
9	広畑遺跡				(2,137)	2,200		2,200 (2,137)
10	牛渡前遺跡		(1,000)					(1,000)
計		5,552	12,050 (8,600)	34,048 (1,600)	17,000 (4,695)	10,100 (11,200)	250	79,000 (29,595)

() は国庫補助事業による試掘・確認調査

第1編 町 遺 跡

第1章 調査に至る経過

第1節 調査経過

町遺跡は、原町市内を流れる新田川北岸の沖積平野に所在している。現在は遺跡周囲のほとんどが水田地帯として整備されており、遺跡は水田地帯のなかに残された桑畑として利用されていた。この桑畑は水田地帯の中において一段高い微高地として残されていること、表面採集によって奈良・平安時代の土器片が採集されていることから奈良・平安期の散布地として周知の遺跡に登録されていた。しかし、県営ほ場整備事業にともなう遺跡が所在する一体が面整備の施工区域となったことにより、遺跡の保存協議をおこなったが、保存は困難であると判断されたため、平成9年8月1日から発掘調査を実施した。

第2節 調査要項

1 遺跡名	町遺跡（まちいせき・遺跡番号20600273）		
2 所在地	福島県原町市泉字町		
3 遺跡の性格	奈良・平安時代の集落跡		
4 調査期間	平成9年8月1日～平成10年3月31日		
5 調査面積	11,900㎡		
6 調査体制	調査主体 原町市教育委員会		
	調査担当 原町市教育委員会生涯学習部文化課		
	発掘調査係	文化財主事	荒 淑人
		発掘調査員	大越 直樹（山武考古学研究所）
事務局	原町市教育委員会	教 育 長	千葉 良則
	生涯学習部	部 長	中善寺敏行
		次 長	佐藤 一男
		文化課長	大内 勝
		主 幹	高倉 一夫
		文化振興係長	高田 毅
		主 査	木幡 雅巳
		発掘調査係副主査	鈴木 文雄
		主任文化財主事	堀 耕平
		事務補助	綱川 裕子

発掘補助員 青田博子・青田光収・青田 翠・五十嵐フミ子・稲村丑治・岩本 等・
遠藤 明・遠藤キミ子・大石順二郎・大石房子・大内スミ子・大竹裕一
小川美紀子・加賀田勇一・菅野秀雄・北原 廉・北山富子・北山 睦・
北山八重子・清信 厚・草野ヤイ子・国分孝徳・木幡利子・木幡春江・
今野あや子・今野一子・紺野弘子・佐久間政好・佐久間三雄・佐藤 昭・
佐藤一男・佐藤紀美子・佐藤セイ・佐藤昭子・佐藤 整・佐藤フクイ・
佐藤順厚・志賀とも子・志賀秀夫・白石正男・新聞光子・杉浦桂子・
鈴木清身・鈴木シケ・鈴木伸子・高井孝子・高玉 親・高橋キイ子・
高野勝子・武志正信・立川正綱・玉木 清・玉木セツ子・寺島日出雄・
寺島博喜・中田幸一・新妻順子・星アキヨ・堀川清隆・松本武雄・
松本充博・宮林イエ子・八木米子・横山 賢・横山キミ子・吉田陽一・
渡部トヨ

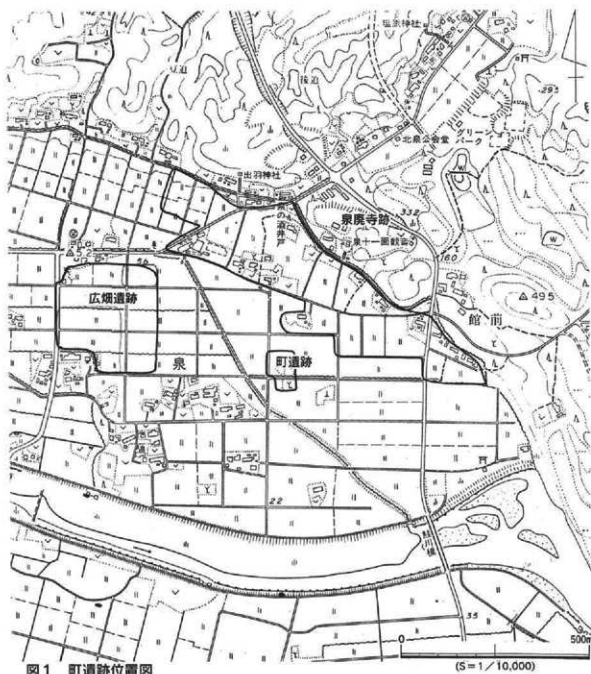
第2章 調査の方法

調査に先立ち、遺跡全体に5m四方のグリッドを設定した。グリッドのX軸は南北方向を示し5m毎にA・B・C・D・・・と移行する。同様にY軸は東西方向を示し5m毎に1・2・3・4・・・と移行する。グリッドの交点には木杭を設置し、このうちNo1・No2・No3・No4には標高を付している。

調査は、遺構が良好に残存していると想定される微高地の全域を発掘調査の本調査対象範囲として重機による表土除去をおこない、それ以外の遺構検出作業および精査作業は人力で行った。遺構の精査は検出された順に遺構番号を付し、出土した遺物はグリッド、遺構名、層位などの記録をとって取り上げた。

すでに後世の土地利用により遺構が削平されてしまった可能性が強い微高地周辺部には、幅2mの調査区を設定し遺構の有無及び旧地形の確認をおこなった。微高地の周辺部は、微高地の北側・東側・南側は泥炭層となり遺構や遺物などは確認されなかった。また西側からは溝跡が確認されたが、遺構の検出レベルが施工計画より低い位置で検出されたことから、本調査は掘削を受けてしまう微高地において実施した。

各種測量図作成はグリッド杭を基準に平板測量をおこない、写真は35mmカメラで撮影した。記録写真に使用したフィルムはフジクロームSENSIA・フジフィルムPURESUTO100・フジカラーSUPERIA100を使用した。



第3章 調査成果

本調査の対象範囲となった微高地からは、掘立柱建物跡、堅穴住居跡、溝跡の遺構と土師器、須恵器、瓦などが出土した。

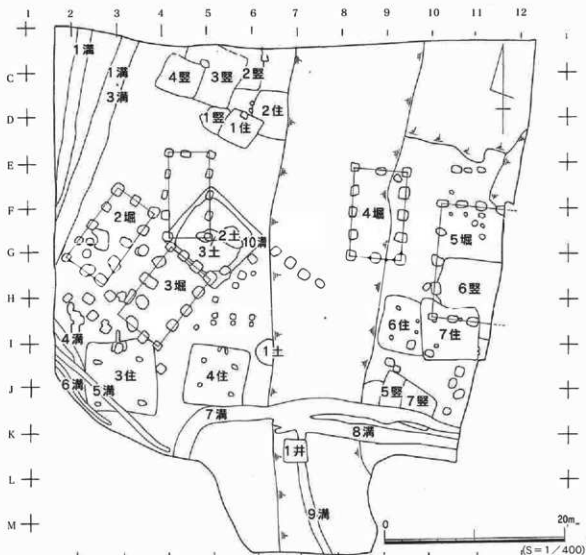


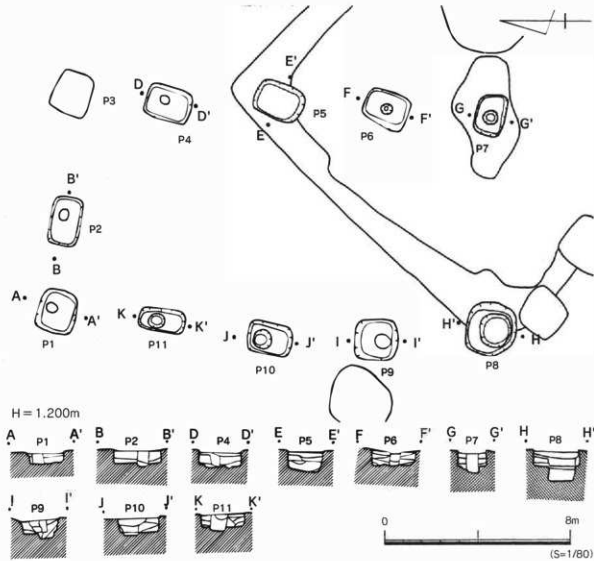
図2 町遺跡全体図

第1節 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は5棟を検出した。いずれの建物跡も側柱建物跡であり南北棟である。検出した5棟の掘立柱建物跡のうち1号掘立柱建物跡・4号掘立柱建物跡・5号掘立柱建物跡は建物の棟方向が南北方向を向き、2号掘立柱建物跡・3号掘立柱建物跡の棟方向は南北方向から東側に偏している。

1号掘立柱建物跡 (図3)

1号掘立柱建物跡はD-4からF-4グリッドで検出された建物跡である。桁行4間×梁間2間の側柱建物跡であり、建物跡の棟方向はほぼ真北方向を向く。建物跡の規模は桁行東側が1112cm・西側柱列は1170cmであり西側柱列のほうが58cm長い。梁間は北側柱列で514cm・南



- P1**
- 1 1 黄褐色砂質層 粘性弱 しまり中 土層を含む。
 - 1 2 暗茶褐色砂質層 粘性弱 しまり中 所々に黄褐色土を含む。
 - 1 3 黄褐色粘土層 粘性強 しまり強 所々に黄褐色土を含む。
- P2**
- 1 1 黄褐色粘土層 粘性強 しまり中 所々に黄褐色土・焼土を含む。
 - 1 2 黄褐色粘土層 粘性強 しまり強 所々に黄褐色土を含む。
 - 1 3 黄褐色粘土層 粘性強 しまり強 所々に黄褐色土を含む。
 - 1 4 黄褐色粘土層 粘性強 しまり強 所々に黄褐色土を含む。
 - 1 5 黄褐色粘土層 粘性強 しまり強 所々に黄褐色土を含む。
- P3**
- 1 1 黄褐色砂質層 粘性なし しまり強 所々に黄褐色土・焼土を含む。
 - 1 2 黄褐色砂質層 粘性なし しまり強 焼土は特になし。
 - 1 3 黄褐色粘土層 粘性強 しまり強 焼土は特になし。
 - 1 4 黄褐色砂質層 粘性強 しまり強 所々に黄褐色土を含む。
 - 1 5 黄褐色粘土層 粘性強 しまり中 焼土は特になし。
- P4**
- 1 1 黄褐色砂質層 粘性なし しまり強 所々に黄褐色土・焼土を含む。
 - 1 2 黄褐色砂質層 粘性なし しまり強 焼土は特になし。
 - 1 3 黄褐色砂質層 粘性なし しまり強 焼土は特になし。
 - 1 4 黄褐色砂質層 粘性なし しまり強 所々に黄褐色土を含む。
 - 1 5 黄褐色砂質層 粘性なし しまり強 所々に黄褐色土を含む。
 - 1 6 黄褐色粘土層 粘性強 しまり強 所々に黄褐色土を含む。
- P5**
- 1 1 黄褐色砂質層 粘性なし しまり強 所々に焼土・炭化物を含む。
 - 1 2 黄褐色粘土層 粘性なし しまり強 所々に黄褐色土を含む。
 - 1 3 黄褐色砂質層 粘性なし しまり強 所々に黄褐色土を含む。
 - 1 4 黄褐色砂質層 粘性なし しまり強 所々に黄褐色土を含む。
 - 1 5 黄褐色砂質層 粘性なし しまり強 所々に黄褐色土を含む。
 - 1 6 黄褐色粘土層 粘性強 しまり中 所々に黄褐色土を含む。
 - 1 7 黄褐色粘土層 粘性強 しまり中 所々に黄褐色土を含む。
- P6**
- 1 1 黄褐色砂質層 粘性なし しまり中 層の表面に直径1mmほどの黄褐色土を含む。
 - 1 2 黄褐色砂質層 粘性なし しまり中 所々に赤褐色土を含む。
 - 1 3 黄褐色粘土層 粘性中 しまり中 所々に黄褐色土を含む。
 - 1 4 黄褐色粘土層 粘性強 しまり中 焼土は特になし。

- P7**
- 1 1 黄褐色砂質層 粘性なし しまり強 黄褐色粘土・焼土を含む。
 - 1 2 黄褐色砂質層 粘性なし しまり強 所々に黄褐色土を含む。
 - 1 3 黄褐色粘土層 粘性中 しまり中 所々に黄褐色土を含む。
 - 1 4 黄褐色粘土層 粘性強 しまり中 所々に黄褐色土を含む。
 - 1 5 黄褐色粘土層 粘性強 しまり中 所々に黄褐色土を含む。
 - 1 6 黄褐色粘土層 粘性強 しまり中 所々に黄褐色土を含む。
- P8**
- 1 1 黄褐色砂質層 粘性なし しまり中 焼土を含む。
 - 1 2 黄褐色砂質層 粘性なし しまり中 所々に黄褐色土を含む。
 - 1 3 黄褐色砂質層 粘性なし しまり中 所々に黄褐色土を含む。
 - 1 4 黄褐色砂質層 粘性中 しまり中 所々に黄褐色土を含む。
 - 1 5 黄褐色粘土層 粘性強 しまり中 黄褐色粘土を含む。
 - 1 6 黄褐色粘土層 粘性中 しまり中 黄褐色粘土を含む。
- P9**
- 1 1 黄褐色砂質層 粘性なし しまり中 黄褐色土を含む。
 - 1 2 黄褐色砂質層 粘性なし しまり中 焼土は特になし。
 - 1 3 黄褐色粘土層 粘性強 しまり強 焼土は特になし。
 - 1 4 黄褐色砂質層 粘性なし しまり強 焼土は特になし。
 - 1 5 黄褐色粘土層 粘性なし しまり強 所々に黄褐色土を含む。
 - 1 6 黄褐色粘土層 粘性中 しまり中 焼土は特になし。
 - 1 7 黄褐色粘土層 粘性強 しまり中 所々に黄褐色土を含む。
- P10**
- 1 1 黄褐色砂質層 粘性なし しまり強 所々に焼土を含む。
 - 1 2 黄褐色砂質層 粘性なし しまり中 焼土は特になし。
 - 1 3 黄褐色砂質層 粘性なし しまり強 焼土は特になし。
 - 1 4 黄褐色砂質層 粘性なし しまり中 焼土は特になし。
 - 1 5 黄褐色砂質層 粘性なし しまり中 焼土は特になし。
 - 1 6 黄褐色粘土層 粘性強 しまり中 焼土は特になし。
 - 1 7 黄褐色粘土層 粘性強 しまり中 所々に黄褐色土を含む。

図3 1号掘立柱建物跡

側柱列が

594cmを測り南側柱列が80cm長い。柱間寸法は桁行の東側柱列で北から258cm・280cm・304cm・270cm、西側柱列で292cm・276cm・318cm・294cmである。梁間の北側柱列で西から260cm・314cmである。ただし南側柱列は中間の柱穴が検出されていないため柱間の寸法は不明である。柱穴には柱材は残存していなかったが土層の観察では柱痕跡は直径約25cmであると判断される。柱穴の埋土は暗褐色砂質層が主体となる。東側には2号掘立柱建物跡が、南側には3号掘立柱建物跡が位置しているが、直接の遺構の重複関係にはなく建物跡同士の新旧関係は不明である。建物跡は11号溝跡と1号土坑との重複が確認されており、1号掘立柱建物跡が新しい。柱穴や柱痕からは遺物は出土しなかった。

2号掘立柱建物跡 (図4)

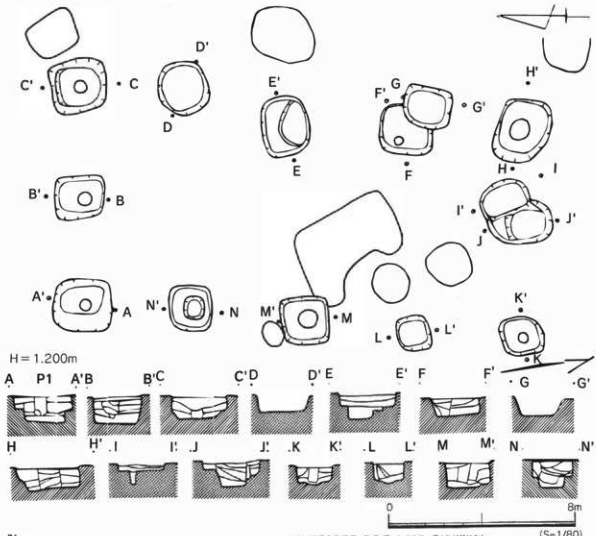
2号掘立柱建物跡はE-2からG-2グリッドにかけて検出された建物跡であり、桁行4間×梁間2間の南北棟の側柱建物跡である。建物跡の棟方向は真北方向より東に偏する。建物跡の規模は桁行の東側柱列で1164cm・西側柱列で1158cm、梁間の北側柱列で570cm・南側柱列で542cmである。柱間寸法は、桁行の東側柱列は明瞭な柱痕跡を確認することが出来なかったが、西側柱列では北から285cm・300cm・284cm・284cmである。梁間の北側柱列で西から285cm・285cmであり、南側柱列で西から271cm・271cmである。柱材は残存していなかったが土層観察により柱痕跡は直径約25cmであると判断している。柱穴の埋土は暗褐色砂質層が主体となる。東側には2号掘立柱建物跡が位置している。他の遺構との重複関係にはなく、柱穴や柱痕からは遺物は出土しなかった。

3号掘立柱建物跡 (図5)

3号掘立柱建物跡はF-3からI-4グリッドで検出した建物跡である。桁行4間×梁間3間の南北棟の側柱建物跡であり、建物跡の方向は2号掘立柱建物跡と同様に東に偏する。建物跡の規模は桁行が東側柱列で1192cm・西側柱列で1190cm、梁間が北側柱列で692cm・南側柱列で694cmである。柱間寸法は桁行が東側柱列で北から300cm・304cm・244cm・344cm、西側柱列で北から266cm・288cm・314cm・1cm、梁間が北側柱列で西から216cm・254cm・222cm、南側柱列で西から1cm・252cm・226cmである。柱穴の埋土は暗褐色砂質層が主体となる。土層観察では柱痕は直径約35cmであったと判断されるが柱材は残存していなかった。建物跡の北側柱列は11号溝跡との重複が確認されており、3号掘立柱建物跡が新しいことが確認されている。柱穴や柱痕からは遺物は出土していない。

4号掘立柱建物跡 (図6)

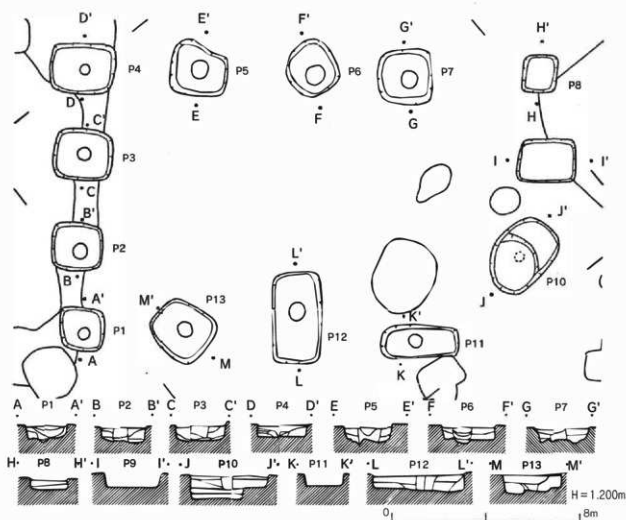
4号掘立柱建物跡はE-8からG-8グリッドで検出した建物跡である。桁行4間×梁間2間の側柱建物跡であり、建物跡の軸方向は真北方向から微妙に東に偏する。規模は桁行東側で900cm・桁行西側で974cm×梁間北側で542cm・南側で572cmを計測し、やや歪んだ長方形であ



- H = 1.200m
- A P1 A'B B'C C'D D'E E' F F' G H H' I I' J J' K K' L L' M M' N N'
- P1
- 11 暗褐色砂質層 粘性なし しまり中 所々に黄土を含む。
 - 12 暗褐色砂質層 粘性なし しまり中 透人物は特になし。
 - 13 暗褐色砂質層 粘性なし しまり中 所々に黄褐色土を含む。
 - 14 黄褐色粘土層 粘性中 しまり中 所々に黄褐色土を含む。
 - 15 黄褐色粘土層 粘性強 しまり中 黄褐色土を含む。
 - 16 黄褐色粘土層 粘性強 しまり中 透人物は特になし。
- P2
- 11 暗褐色砂質層 粘性なし しまり中 透人物は特になし。
 - 12 暗褐色砂質層 粘性なし しまり中 直径 1mm の黄褐色土を含む。
 - 13 褐色砂質層 粘性なし しまり中 少量の炭化物を含む。
 - 14a 暗褐色砂質層 粘性中 しまり中 透人物は特になし。
 - 14b 暗褐色砂質層 粘性中 しまり中 1.4a より若干薄い。
 - 15 暗褐色シルト層 粘性中 しまり中 透人物は特になし。
 - 16a 黄褐色粘土層 粘性強 しまり中 所々に濃い黄褐色土を含む。
 - 16b 黄褐色粘土層 粘性強 しまり中 所々に濃い黄褐色土を含む。
 - 17 黄褐色粘土層 粘性強 しまり中 透人物は特になし。
- P3
- 11 黄褐色砂質層 粘性なし しまり弱 赤褐色の堆土を多量に含む。
 - 12 暗褐色粘土層 粘性中 しまり中 透人物は特になし。
 - 13 黄褐色砂質層 粘性なし しまり中 所々に黄色土を含む。
 - 14 黄褐色粘土層 粘性中 しまり中 所々に黄色土と赤褐色土を含む。
- P4
- 11 暗褐色砂質層 粘性なし しまり中 透人物は特になし。
 - 12 黄褐色粘土層 粘性中 しまり中 黄褐色ブロックを含む。
 - 13 黄褐色粘土層 粘性強 しまり中 透人物は特になし。
- P6
- 11 暗褐色砂質層 粘性なし しまり中 所々に黄色土、黄褐色土を含む。
 - 12 暗褐色砂質層 粘性中 しまり中 所々に黄色土を含む。
 - 13 暗褐色砂質層 粘性中 しまり中 所々に黄色土、赤褐色土を含む。
 - 14 暗褐色砂質層 粘性中 しまり中 所々に黄色土を含む。
 - 15 暗褐色砂質層 粘性中 しまり中 所々に黄色土、赤褐色土、炭化物を含む。
 - 16 黄褐色粘土層 粘性強 しまり弱 所々に黄色粘土ブロックを含む。
- P7
- 11 黄褐色砂質層 粘性弱 しまり中 所々に黄色土、赤褐色土を含む。
 - 12 暗褐色砂質土 粘性弱 しまり中 所々に黄色土を含む。
 - 13 暗褐色砂質層 粘性弱 しまり弱 透人物は特になし。
 - 14 黄褐色粘土層 粘性中 しまり弱 透人物は特になし。
 - 15 黄褐色粘土層 粘性強 しまり弱 所々に黄土を含む。

- 18 暗褐色砂質層 粘性弱 しまり弱 透人物は特になし。
 - 17 黄褐色粘土層 粘性なし しまり弱 透人物は特になし。
 - 18 暗褐色砂質層 粘性なし しまり弱 透人物は特になし。
 - 19 暗褐色砂質層 粘性なし しまり弱 透人物は特になし。
 - 11a 黄褐色粘土層 粘性強 しまり弱 透人物は特になし。
- P8
- 11 炭化物層 多量に黄土を含む。
 - 12 暗褐色シルト層 粘性弱 しまり中 透人物は特になし。
- P9
- 11 黄褐色砂質層 粘性弱 しまり弱 透人物は特になし。
 - 12 黄褐色砂質層 粘性弱 しまり弱 所々に暗褐色土を含む。
 - 13 黄褐色砂質層 粘性弱 しまり弱 透人物は特になし。
 - 14 暗褐色砂質層 粘性弱 しまり弱 透人物は特になし。
 - 15 暗褐色砂質層 粘性弱 しまり弱 透人物は特になし。
 - 16 黄褐色砂質層 粘性弱 しまり弱 透人物は特になし。
 - 17 黄褐色シルト層 粘性中 しまり中 透人物は特になし。
- P10
- 11 暗褐色砂質層 粘性弱 しまり弱 少量の黄褐色土を含む。
 - 12 暗褐色砂質層 粘性弱 しまり弱 透人物は特になし。
 - 13 黄褐色砂質層 粘性中 しまり中 所々に赤褐色土を含む。
 - 14 黄褐色砂質層 粘性弱 しまり中 所々に黄色土を含む。
 - 15 黄褐色粘土層 粘性強 しまり弱 透人物は特になし。
- P11
- 11a 暗褐色砂質層 粘性なし しまり中 所々に黄色土ブロックを含む。
 - 11b 暗褐色砂質層 粘性なし しまり中 所々に黄色土ブロックを含む。
 - 12 黄褐色粘土層 粘性中 しまり中 所々に黄色土ブロックを含む。
 - 13 暗褐色砂質層 粘性なし しまり弱 透人物は特になし。
 - 14 黄褐色粘土層 粘性強 しまり弱 所々に黄色土ブロックを含む。
 - 15 黄褐色粘土層 粘性強 しまり弱 透人物は特になし。
- P12
- 11 暗褐色砂質層 粘性なし しまりなし 所々に直径 1mm 以下の堆土を含む。
 - 12 黄褐色砂質層 粘性中 しまり中 層の全体に暗褐色粘土を含む。
 - 13 黄褐色砂質層 粘性中 しまり中 層の全体に暗褐色粘土を含む。
 - 14 黄褐色砂質層 粘性中 しまり中 層の全体に黄褐色粘土を含む。
 - 15 黄褐色砂質層 粘性中 しまり中 層の全体に黄土を含む。
 - 16 暗褐色粘土層 粘性強 しまり弱 所々に黄色土を含む。
 - 17 黄褐色粘土層 粘性強 しまり弱 所々に黄色土ブロックを含む。
 - 18 黄褐色粘土層 粘性強 しまり弱 透人物は特になし。

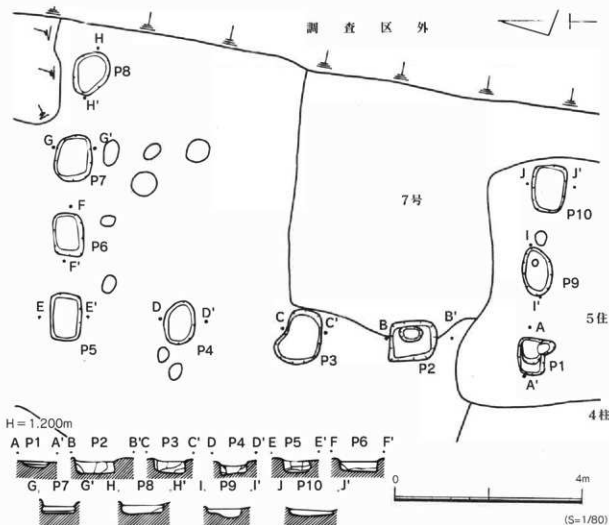
図4 2号掘立柱建物跡



- P1**
- 1.1 暗褐色砂質層 粘性なし しまり中 所々に黄土を含む。
 - 1.2 暗褐色砂質層 粘性なし しまり中 所々に黄褐色土を含む。
 - 1.3 暗褐色砂質層 粘性なし しまり中 所々に灰褐色砂を含む。
 - 1.4 灰褐色粘土層 粘性強 しまり中 所々に暗褐色土を含む。
 - 1.5 灰褐色粘土層 粘性強 しまり中 灰褐色土に特になし。
- P2**
- 1.1 暗褐色砂質層 粘性なし しまり強 黄土を含む。
 - 1.2 灰褐色粘土層 粘性強 しまり中 所々に濃褐色土を含む。
 - 1.3 灰褐色粘土層 粘性強 しまり中 灰褐色土に特になし。
 - 1.4 暗褐色砂質層 粘性なし しまり中 灰褐色土に特になし。
 - 1.5 暗褐色砂質層 粘性なし しまり強 黄褐色土を含む。
 - 1.6 灰褐色粘土層 粘性強 しまり中 所々に黄褐色土を含む。
 - 1.7 灰褐色粘土層 粘性強 しまり中 所々に黄褐色土を含む。
- P3**
- 1.1 暗褐色砂質層 粘性なし しまり強 所々に粘土を含む。
 - 1.2 暗褐色砂質層 粘性なし しまり強 黄土を含む。
 - 1.3 暗褐色砂質層 粘性強 しまり中 所々に粘土を含む。
 - 1.4 暗褐色シルト層 粘性中 しまり中 所々に黄褐色土を含む。
 - 1.5 暗褐色粘土層 粘性強 しまり中 所々に黄褐色粘土を含む。
 - 1.6 暗褐色粘土層 粘性強 しまり中 所々に粘土を含む。
 - 1.7 灰褐色粘土層 粘性強 しまり中 灰褐色土に特になし。
- P4**
- 1.1 暗褐色砂質層 粘性なし しまり中 灰褐色土に特になし。
 - 1.2 灰褐色粘土層 粘性なし しまり強 灰褐色土に特になし。
 - 1.3 灰褐色粘土層 粘性強 しまり中 黄褐色土を含む。
 - 1.4 暗褐色砂質層 粘性なし しまり中 11より黄褐色が強い。
 - 1.5 暗褐色シルト層 粘性中 しまり中 灰褐色土に特になし。
 - 1.6 灰褐色粘土層 粘性中 しまり中 黄褐色土を含む。
 - 1.7 灰褐色粘土層 粘性強 しまり中 灰褐色土に特になし。
- P5**
- 1.1 暗褐色砂質層 粘性中 しまり中 所々に黄褐色土を含む。
 - 1.2 暗褐色砂質層 粘性中 しまり中 灰褐色土に特になし。
 - 1.3 暗褐色砂質層 粘性中 しまり中 暗褐色土を含む。
 - 1.4 黄褐色粘土層 粘性強 しまり中 暗褐色土に特になし。

- P6**
- 1.1 暗褐色砂質層 粘性なし しまり中 灰褐色土に特になし。
 - 1.2 暗褐色砂質層 粘性なし しまり中 黄土を含む。
 - 1.3 暗褐色砂質層 粘性なし しまり中 黄褐色土を含む。
 - 1.4 暗褐色砂質層 粘性なし しまり中 所々に暗褐色土を含む。
 - 1.5 黄褐色粘土層 粘性なし しまり強 黄土を含む。
 - 1.6 暗褐色砂質層 粘性なし しまり強 灰褐色土に特になし。
- P7**
- 1.1 暗褐色砂質層 粘性なし しまり中 黄土にブロックを含む。
 - 1.2 暗褐色砂質層 粘性なし しまり中 所々に黄褐色土を含む。
 - 1.3 暗褐色砂質層 粘性強 しまり中 所々に黄褐色土を含む。
 - 1.4 暗褐色粘土層 粘性中 しまり中 所々に黄土を含む。
 - 1.5 暗褐色シルト層 粘性中 しまり中 所々に粘土を含む。
 - 1.6 暗褐色粘土層 粘性強 しまり中 所々に粘土を含む。
 - 1.7 暗褐色粘土層 粘性強 しまり強 所々に黄褐色ブロックを含む。
- P8**
- 1.1 暗褐色砂質層 粘性なし しまり中 黄土にブロックを含む。
 - 1.2 暗褐色砂質層 粘性強 しまり中 所々に黄褐色土を含む。
 - 1.3 暗褐色砂質層 粘性強 しまり中 所々に黄褐色土を含む。
 - 1.4 暗褐色粘土層 粘性中 しまり中 所々に黄土を含む。
 - 1.5 暗褐色シルト層 粘性中 しまり中 所々に粘土を含む。
 - 1.6 暗褐色粘土層 粘性強 しまり中 所々に粘土を含む。
 - 1.7 暗褐色粘土層 粘性強 しまり強 所々に黄褐色ブロックを含む。
- P9**
- 1.1a 暗褐色砂質層 粘性なし しまり中 黄褐色ブロックを含む。
 - 1.1b 暗褐色砂質層 粘性中 しまり中 黄褐色土を含む。
 - 1.2 暗褐色砂質層 粘性中 しまり中 黄褐色土を含む。
 - 1.3 暗褐色砂質層 粘性なし しまり中 灰褐色土を含む。
 - 1.4 暗褐色砂質層 粘性なし しまり中 灰褐色土に特になし。
 - 1.5 暗褐色シルト層 粘性中 しまり中 暗褐色土を含む。
- P10**
- 1.1 暗褐色砂質層 粘性なし しまり中 直径1mm以上の黄土を含む。
 - 1.2 暗褐色砂質層 粘性中 しまり中 直径1mm以上の黄土を含む。
 - 1.3 暗褐色シルト層 粘性中 しまり中 直径1mm以上の黄土土を含む。
 - 1.4 暗褐色粘土層 粘性強 しまり中 直径3mm以上の粘土ブロックを含む。
 - 1.5 暗褐色シルト層 粘性中 しまり中 暗褐色土を含む。
- P11**
- 1.1 暗褐色砂質層 粘性なし しまり中 所々に黄褐色土を含む。
 - 1.2 暗褐色砂質層 粘性中 しまり中 黄褐色土を含む。
 - 1.3 暗褐色砂質層 粘性中 しまり中 黄褐色土を含む。
 - 1.4 暗褐色粘土層 粘性強 しまり中 暗褐色土に特になし。
 - 1.5 暗褐色シルト層 粘性中 しまり中 暗褐色土を含む。

図5 3号掘立柱建物跡



- P1
 1 1 暗褐色砂質層 粘性弱 しまり弱 所々に黄色土を含む。
 1 2 黄褐色砂質層 粘性中 しまり中 所々に暗褐色土を含む。
- P2
 1 1 暗褐色砂質層 粘性弱 しまり弱 所々に黄色土・黑色土を含む。
 1 2 暗褐色砂質層 粘性弱 しまり弱 層の全体に黄褐色土を含む。
 1 3 暗褐色砂質層 粘性中 しまり中 所々に黄色土を含む。
 1 4 暗褐色砂質層 粘性中 しまり弱 所々に黄色土・黑色土を含む。
 1 5 黄褐色粘土層 粘性強 しまり中 埋人物は特になし。
- P3
 1 1 暗褐色砂質層 粘性弱 しまり弱 所々に黄色土を含む。
 1 2 黄褐色砂質層 粘性中 しまり中 所々に黄色土を含む。
 1 3 暗褐色砂質層 粘性弱 しまり弱 所々に黄色土・黑色土を含む。
 1 4 暗褐色砂質層 粘性弱 しまり弱 所々に黄色土を含む。
 1 5 黄褐色粘土層 粘性強 しまり中 埋人物は特になし。
- P4
 1 1 暗褐色砂質層 粘性弱 しまり弱 所々に黄褐色土を含む。
 1 2 暗褐色砂質層 粘性中 しまり弱 所々に黄色土を含む。
 1 3 暗褐色砂質層 粘性中 しまり中 所々に黄色土を含む。
 1 4 暗褐色シルト層 粘性中 しまり弱 所々に黄色土を含む。

- P5
 1 1 暗褐色砂質層 粘性弱 しまり弱 所々に黄色土を含む。
 1 2 黄褐色砂質層 粘性中 しまり中 所々に黄色土を含む。
 1 3 暗褐色砂質層 粘性弱 しまり弱 層の全体に黄褐色土・黑色土を含む。
 1 4 暗褐色シルト層 粘性中 しまり弱 所々に黄色土を含む。
 1 5 黄褐色粘土層 粘性強 しまり中 埋人物は特になし。
- P6
 1 1 暗褐色砂質層 粘性弱 しまり弱 所々に黄色土を含む。
 1 2 暗褐色砂質層 粘性弱 しまり弱 埋人物は特になし。
 1 3 黄褐色粘土層 粘性強 しまり中 所々に黄色土を含む。
- P7
 1 1 暗褐色砂質層 粘性弱 しまり弱 所々に黄褐色土・黄褐色土を含む。
 1 2 暗褐色砂質層 粘性弱 しまり弱 埋人物は特になし。
 1 3 黄褐色粘土層 粘性強 しまり中 所々に黄色土を含む。
- P8
 1 1 暗褐色砂質層 粘性弱 しまり弱 所々に黄色土を含む。
 1 2 黄褐色砂質層 粘性中 しまり中 所々に黄色土を含む。
- P9
 1 1 暗褐色砂質層 粘性弱 しまり弱 所々に黄色土を含む。
- P10
 1 1 暗褐色砂質層 粘性弱 しまり弱 所々に黄色土を含む。

図7 5号掘立柱建物跡

から244cm・234cm・236cm・262cm、梁間が北側柱列で西から271cm・271cm、南側柱列で西から286cm・286cmである。柱穴には柱材などは残存していなかったが、土層観察により、直径約20cmの柱痕を確認している。柱穴の埋土は暗褐色土を基本とする。他の遺構との重複はなく、また柱穴及び柱痕からは遺物は出土しなかった。

5号掘立柱建物跡 (図7)

5号掘立柱建物跡はE-10からH-10グリッドで検出した建物跡である。桁行4間×梁間3間以上の南北棟の側柱建物跡であると考えられるが、建物跡の桁行東側柱列は調査区外へ広がっていることから建物跡の全体規模は不明である。建物跡の軸方向は真北方向を向き、建物規模は桁行の西側で柱列が約1000cm、梁間は北側柱列で600cm以上を計測する。柱間寸法は桁行の西側柱列で北から250cm・270cm・220cm・260cm、梁間が北側柱列で西から150cm・160cm・180cmである。柱穴には柱材などは残存していなかった。柱穴の埋土は暗褐色砂質層を主体としており、所々に黄褐色若しくは明褐色土を含む。

5号掘立柱建物跡は7号竪穴状遺構及び5号竪穴住居跡との重複が確認されており、いずれの遺構よりも新しいものであると判断している。

第2節 竪穴住居跡

竪穴住居跡は、C-6からD-5グリッドにかかる調査区の北西付近とG-8からI-11グリッドにかかる調査区東部中央付近でまともな確認された。調査では重機によって表土を除去し人力作業によって丹念な精査をおこない、住居跡の平面形および重複関係の把握に努めた。検出段階では各遺構の重複関係を把握することができなかつたため、各遺構にかかるセクションベルトを設定し、遺構の掘り下げをおこない遺構の重複関係についてはセクションベルトの検討によって判断することとした。

1号竪穴住居跡

遺構 (図8)

1号竪穴住居跡はC-5からD-5グリッドで検出した住居跡である。住居跡の平面形は一辺が約400cmの方形である。住居跡は検出面よりほぼ垂直に掘り込まれ、床面は遺構検出面より20cmほど掘り進んだところで検出した。壁周溝や壁柱穴などは確認されない。堆積土は5層からなり暗灰褐色土を主体とする。床面からは3基のピットを検出したが、柱痕や検出した位置からみても、竪穴住居跡にともなう柱穴の可能性は低い。床面には踏み締りなどの硬化面を確認することは出来なかつた。住居跡北辺の中央部にはカマドが確認されたが、明瞭な煙道は検出することが出来なかつた。検出したカマドは燃焼部の側壁を黄色の粘質土によって構築し、焚口部及び天井部には凝灰岩質泥岩を切り出したものを利用していることが特徴的である。下床部は燃焼による土質の硬化が見られる。1号住居跡は2号住居跡との重複が確認されており、1号住居跡のほうが古いと判断している。

遺物 (図9・10)

1号住居跡からは土師器が出土している。図示した遺物は土師器の杯、甌、高台付杯、高杯である。1はカマド周辺から出土した杯である。ロクロによって整形されており、内面には黒

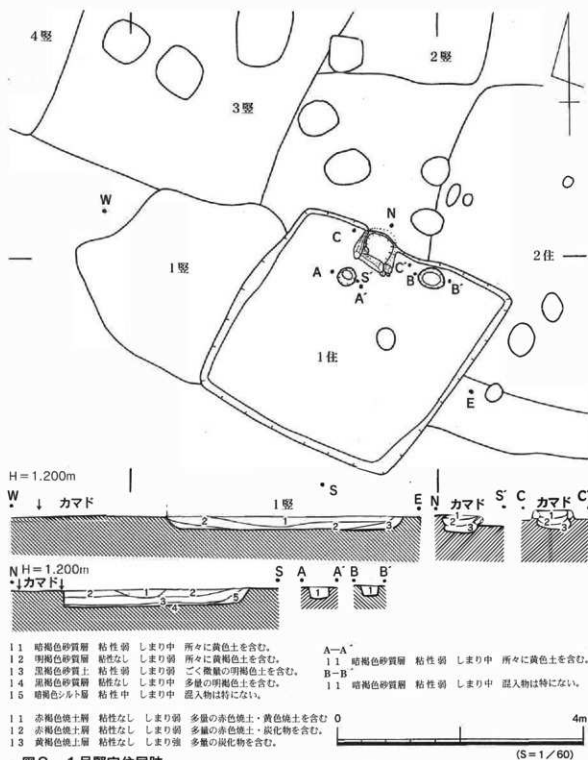


図8 1号竪穴住居跡

色処理が施される。丸底の底部から緩やかに立ち上り口縁部にいたる。外面は2次のな火を受けたためか赤褐色に変色している。2はカマド周辺から出土した甌である。大きく穿孔された底部（穿孔部）から下膨らみの体部を有し、短い口縁部にいたる。口縁部は折り返されているためにこの部分の器厚は厚くなっている。外面の下部にはヘラケズリを施し、中段から上半にかけてはヘラナデが施される。3・4・5は住居内堆積土から出土した杯である。3・4はロク

口整形による杯で、内面にはミガキと黒色処理が施される。器形は平らな底部から強く立ち上り口縁部にいたる。3は底部が丸底の杯である。外面はヘラケズリが施され、内面には黒色処理及びヘラナデが施される。5はロク口整形による高台付杯である。約5mmほどの短い高台部から強く外傾しながら口縁部にいたる。内面にはミガキ及び黒色処理が施される。6は高杯である。杯部及び裾部の形状は欠損しており不明であるが、柱突の太く短い脚部には内黒処理とミガキを施した杯部、広がり弱い裾部がつくものと考えられる。

まとめ

1号竪穴住居跡は、住居跡北壁にカマドを有する約400cm四方の住居跡である。カマドには凝灰岩質泥岩をカマド材に利用している。住居跡の年代は、出土した杯は栗囲式の特徴

である段は見られず、非ロク口整形で外面の全面にはヘラケズリが施されるものとロク口整形による平底の杯が見られる。両者の杯も内面には黒色処理が施されるといった特徴から8世紀代から9世紀にかけての国分寺下層式からの表杉ノ入式頃の住居跡と考えられる。

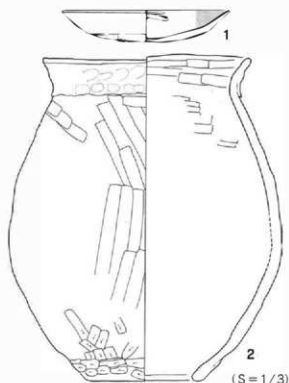


図9 1号竪穴住居跡出土遺物(1)

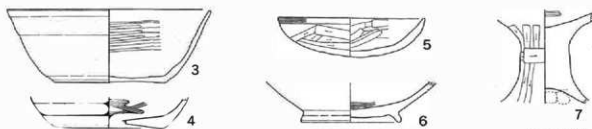
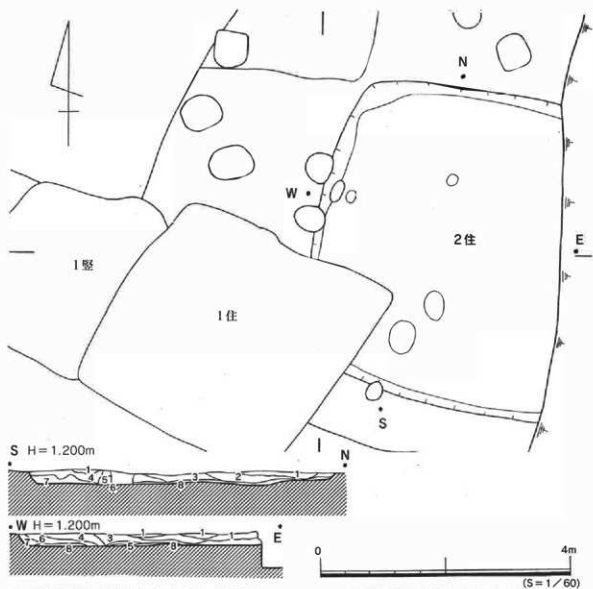


図10 1号竪穴住居跡出土遺物(2)

2号竪穴住居跡

遺構 (図11)

2号竪穴住居跡はC-5からD-6グリッドで検出した住居跡である。住居跡の平面形は一边が約5mの方形であり、住居跡東辺は削平されている。住居跡は、遺構検出面より若干の傾斜をもって掘り込まれ、約20cm掘り進んだところで床面を検出した。床面には踏みしまりのような硬化面や柱穴などを検出することはできず、また壁周溝や壁柱穴などの施設も確認することはできなかった。住居跡北辺の中央部には多量の焼土が検出され、当初この焼土が広がる範囲をカマド跡として判断したが、明瞭なカマドの平面形を認識することができなかったため、



- | | |
|-----------------------------------|-------------------------------|
| 1 明褐色砂質層 粘性なし しまり中 所々に焼土を含む。 | 15 明褐色砂質層 粘性なし しまり中 混入物は特でない。 |
| 2 灰褐色砂質層 粘性なし しまり弱 混入物は特でない。 | 16 暗褐色砂質層 粘性なし しまり中 混入物は特でない。 |
| 3 明褐色砂質層 粘性なし しまり弱 多量の炭化物・土器片を含む。 | 17 暗褐色砂質層 粘性中 しまり中 混入物は特でない。 |
| 4 暗褐色砂質層 粘性なし しまり弱 混入物は特でない。 | 18 暗褐色粘土層 粘性強 しまり中 混入物は特でない。 |

図11 2号竪穴住居跡

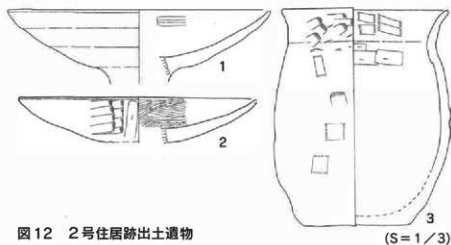


図12 2号住居跡出土遺物

(S = 1/3)

十字方向の断ち割りを行ったが、断面観察においてもカマド構造を確定することはできなかった。2号住居跡は1号住居跡との重複が確認されており、2号住居跡が新しいと判断している。

遺物 (図12)

3点の土師器が出土した。1・2は高杯の杯部である。約22cmの大きな口縁部から緩やかに脚部にいたる。内面にはミガキと黒色処理が施される。2の外面にはヘラナデが施される。脚部や据部の形状は欠損しており不明である。3は小型の甕である。平らな底部から直立気味に口縁部に向かう。体部の上半ではやや括れ、短く外傾する口縁部がつく。器面の調整は粗雑で凹凸が激しい。

まとめ

2号竪穴住居跡は一辺が約5mの住居跡である。住居跡北側に多量の焼土が広がっていることから北カマドの住居跡であった可能性が高い。2号竪穴住居跡から出土した遺物は非ロクロ整形の甕が出土していることから8世紀後半から9世紀初頭の表杉ノ入式の範疇でとらえられよう。1号竪穴住居跡との重複関係を考慮すれば8世紀後半頃の年代が妥当であると考えられる。

3号竪穴住居跡

遺構 (図13)

3号竪穴住居跡はI-2からH-3グリッドで検出した竪穴住居跡である。住居跡の平面形は一辺が740cmの方形である。住居跡は検出面からほぼ垂直に掘り込まれ、約10cmの深さで床面にいたる。比較的平坦な床面の中央付近には焼土や炭化物が広がるが、踏み締りのような硬化面は確認されなかった。カマドは北側の住居壁ほぼ中央に位置している。燃焼部の側壁は黄褐色の粘土で構築されており、構築部材として凝灰岩質泥岩を切り出したものをカマド壁として利用している。燃焼部の幅は約90cmであり、北側に向かって約120cmの煙道がのびている。また住居跡内の堆積土は2層に分けられ、このうち1層及び床面には大量の焼土が広がっている。

床面からは焼土層から掘り込まれたピットが4基検出された。平面形は東西方向の卵型である。土層断面の観察では柱の痕跡は認められなかったが、位置から判断すると住居跡にともなう柱穴の可能性が高い。住居跡の南西付近は5号・6号溝跡との重複が確認されており、3号住居跡は5号・6号溝跡よりは新しい。住居跡にともなう遺物は出土しなかった。

まとめ

3号竪穴住居跡は、一辺が740cmの非常に大型の竪穴住居跡である。カマドには1号竪穴住居跡のように凝灰岩質泥岩をカマド材として利用していることから1号竪穴住居跡との共通性がうかがえる。住居跡の年代を決定できる遺物は出土しなかったが、カマドの構造が1号竪穴住居跡と類似することから、1号竪穴住居跡に前後する8世紀後半から9世紀前半にかけての表杉ノ入式期頃の住居跡であると考えておきたい。

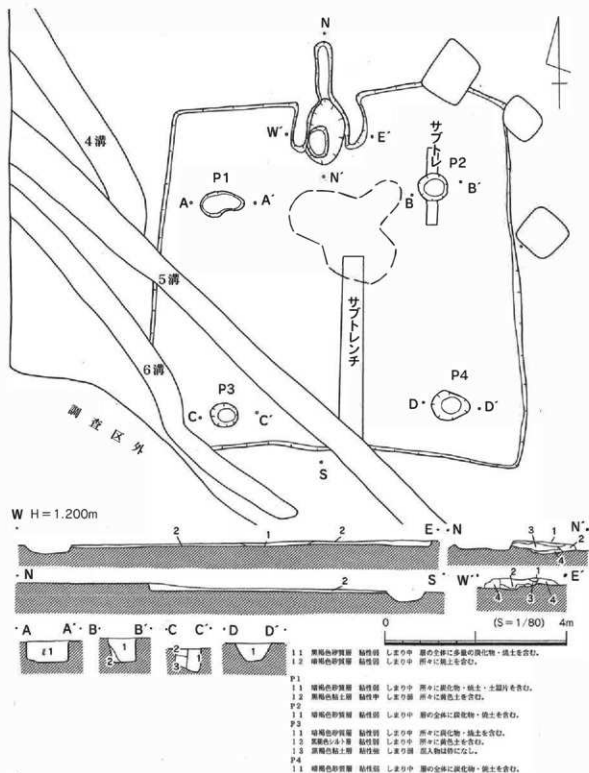


図13 3号竪穴住居跡

4号竪穴住居跡

遺構 (図14)

4号竪穴住居跡はI-4からH-5グリッドで検出した住居跡である。住居跡は一辺が約630cmの方形である。西側には4号竪穴住居跡がほぼ平行して位置している。また住居跡の南辺は5号溝跡との重複が確認されており当住居跡が古いことが確認されている。

住居跡は検出面からほぼ垂直方向に掘り込まれ、約15cmの深さで床面となるが、遺構検出面から住居跡床面までの深さが住居跡の平面規模と比べて非常に浅いことから、本来の掘り込み面はすでに削平されている可能性が強い。住居跡内の堆積土は4層からなり、このうち1層

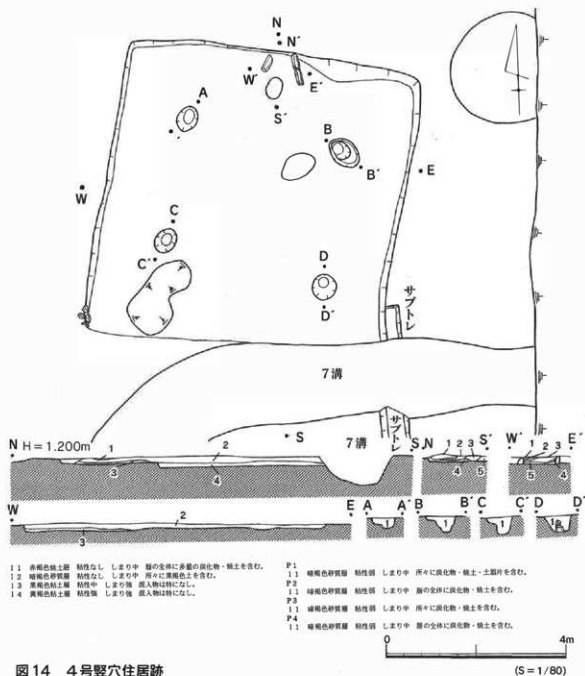


図14 4号竪穴住居跡

には多量の焼土が広がっている。ほぼ平坦な床面には踏みしまりのような硬化面は確認されなかった。また、床面には焼土層から掘り込まれた6個のピットが確認されたが、いずれのピットにも柱痕は確認できなかった。しかし1・2・3・4号ピットは検出された位置から、住居跡にともなう柱穴であると判断している。

カマドは北壁のほぼ中央に布設されており、燃焼部の側壁は黄色粘質土によって構築されている。また、燃焼部の焚口付近には切り出した凝灰岩質泥岩をカマドの構築材として利用しているのが特徴的である。燃焼部は80cmの幅をもち、燃焼部は焼けたために硬くなっている。煙道は削平のためか確認されなかった。住居跡からは土師器の破片が出土しているが、いずれの遺物も非常に破片であることから住居跡の年代を判断することはできない。

まとめ

4号竪穴住居跡は一辺が630cmの大型の竪穴住居跡である。カマドは住居跡北壁中央に位置しており1号竪穴住居跡・3号竪穴住居跡との共通性がうかがえる。住居跡にともなう遺物は出土しなかったが、カマドの構造が類似する1号竪穴住居跡・3号竪穴住居跡の年代を考慮して8世紀後半から9世紀前半の表杉ノ入式期の住居跡であると考えておきたい。

5号竪穴住居跡

遺構 (図15)

5号竪穴住居跡はH-9からI-11グリッドで検出した。住居跡の平面形は一辺が約600cmの方形であり、住居跡北西コーナーがやや外側に張り出すのが特徴である。住居跡は検出面よりほぼ垂直に掘り込まれており、約35cmほど掘り進んだところで床面を検出した。床面には3基のピットが確認され、検出位置から考えると住居にともなう柱穴の可能性が高い。住居跡の床面には踏みしまりのような硬化面は確認することができなかった。

住居内の堆積層は7層からなり暗褐色砂質層が主体となる。住居跡の西辺はほぼ中央には多量の焼土が広がっており検出段階ではカマド跡であると判断したが、カマド跡の平面形を把握することができなかったため、カマドの構造は十字方向の断ち割りをおこない土層観察によって判断することとした。土層断面の検討では燃焼部や燃焼部側壁などカマドの構造を判断する知見を得ることはできなかった。

当住居跡は、6号竪穴住居跡・6号竪穴状遺構・5号掘立柱建物跡との重複が確認されており、5号竪穴住居跡は6号竪穴住居及び6号竪穴状遺構よりは新しく、5号掘立柱建物跡よりは古いと判断している。

遺物 (図16)

3点の土師器が出土している。1、2は杯である。

1は丸底の底部から丸みの強い体部がのびる。口縁部は短く外反し、口縁部の内面には口縁部の外反のため稜が形成される。器面の調整は内外面ともにヘラナデが施され、外面下部にはヘラケズリが施される。

2は平底の底部から丸みの強い体部がのびる。口縁部は短く外傾するが、外傾の度合いは弱

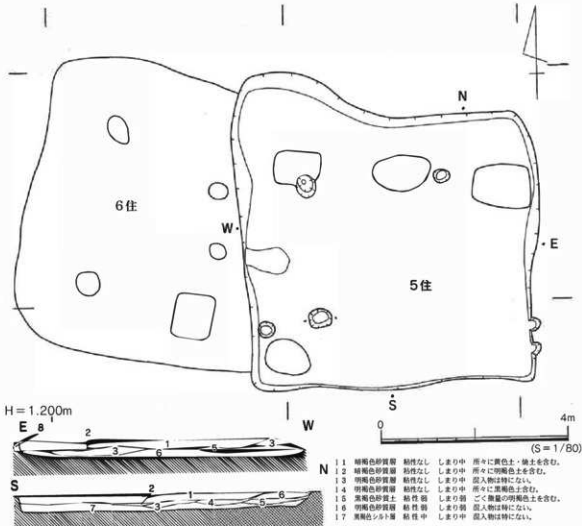


図15 5号竪穴住居跡

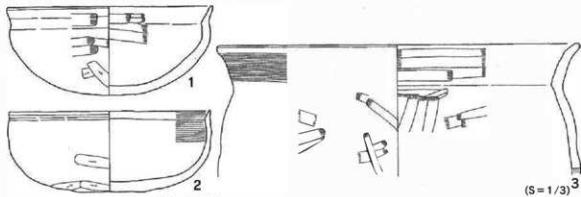


図16 5号竪穴住居跡出土遺物

い。外面の調整は体部下半にはヘラケズリが施され、外面上半にはヨコナデが施される。1、2ともに内面の黒色処理は見られない。

3は堖である。残存している範囲は口縁部から体部上半であり、底部から体部下半にかけて欠損しているため不明である。器面の調整は、口縁部付近にはヨコナデが施され、体部の外面にはヘラナデが施される。内面にはヘラナデが施される。

まとめ

5号竪穴住居跡は、一辺が6mの竪穴住居跡である。出土した遺物は杯が2点と甕が1点あり、杯は口縁部付近で括れて外反しており、内面には稜が形成されている。このような特徴を有する土器は古墳時代後葉の引田式から佐平林式に比定できるものであり、5号竪穴住居跡は古墳時代後期の所産であると考えられる。

6号竪穴住居跡

遺構 (図17)

6号竪穴住居跡はG-9からI-9グリッドで検出した。住居跡の平面形は一辺が約600mの方形でであり、5号竪穴住居跡と同様に住居跡の北西コーナーがやや外側へ張り出すのが特徴である。

住居跡は検出面よりほぼ垂直に掘り込まれており、約15cm掘り進んだところで床面を検出し

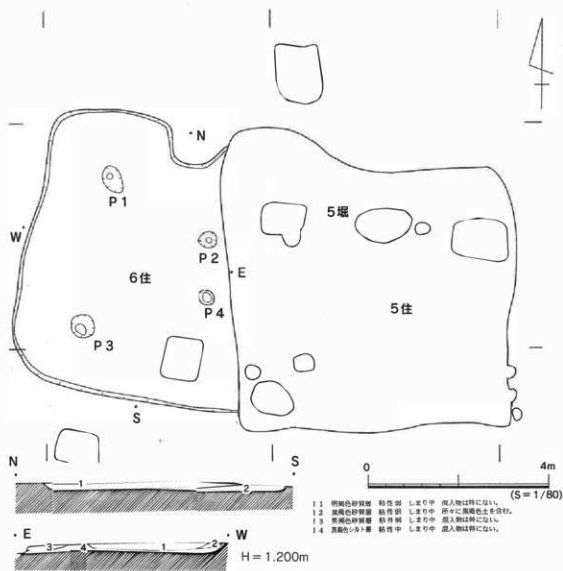


図17 6号竪穴住居跡

た。住居内の堆積土は4層からなり暗褐色砂質層が主体となる。床面では4基のピットを確認した。これらのピットは検出した位置から、当住居跡に伴う柱穴の可能性が高い。床面には踏みしまりのような硬化面は確認されなかった。

6号堅穴住居跡は5号堅穴住居跡との重複が確認されており、住居跡の東辺は5号堅穴住居跡に切られている。6号堅穴住居跡のカマドは検出することができなかったため、5号堅穴住居跡によって壊されてしまった可能性が高いと考えられ、当住居跡のカマドは住居跡東側に布設されていたと考えられる。

住居跡からは土師器の碎片が出土したが、住居跡の年代を判断できる遺物は出土しなかった。
まとめ

6号堅穴住居跡は一辺が約6mの堅穴住居跡である。カマドは確認されなかった。遺構からは年代を決定できる遺物は出土しなかったが、重複関係にある5号堅穴住居跡が古墳時代後期の土器をとまなうことから、当住居跡は古墳時代後期もしくはそれ以前の所産である。

第3節 堅穴状遺構

堅穴状遺構として記載するものは、堅穴住居状の掘り込みは確認できたが、カマドや柱穴などの住居跡の可能性を示す積極的な知見が得られなかったものである。

1号堅穴状遺構

遺構 (図18)

1号堅穴状遺構はC-4からD-5グリッドで検出した。遺構の平面形は不整形な楕円形である。検出面より約40cmのところ検出した底面は若干の起伏が認められ不整形である。10層からなる堆積土は暗褐色砂質土が主体となり、このうち3層には炭化物を多く含む。遺物はこの3層から出土している。

他の遺構との重複関係としては、東側に位置する1号堅穴住居跡に切れ、北側に位置する3号堅穴状遺構を切っていると判断されることから、1号堅穴住居跡よりは古く3号堅穴状遺構よりは新しいと判断した。

遺物 (図19)

土師器と須恵器が出土した。出土した土師器は蓋と高台付杯である。

1・2は土師器の蓋である。1・2ともにロクロによって整形されており、内面には黒色処理が施されている。つまみは欠損しており不明であるが、器形は緩やかに開きながら口縁部にいたる。

3は高台付杯である。ロクロにより整形され、内面には黒色処理が施される。約1cmの高い高台から緩やかに外傾しながらのびる杯部は、杯部中段で急に屈曲し口縁部にいたる。

4は須恵器の小型壺であり平底である。体部は底部から直立気味に立ち上がるが、上半で急に内傾するために肩部を形成し頸部にいたる。頸部は直立したまま口縁部にいたる。

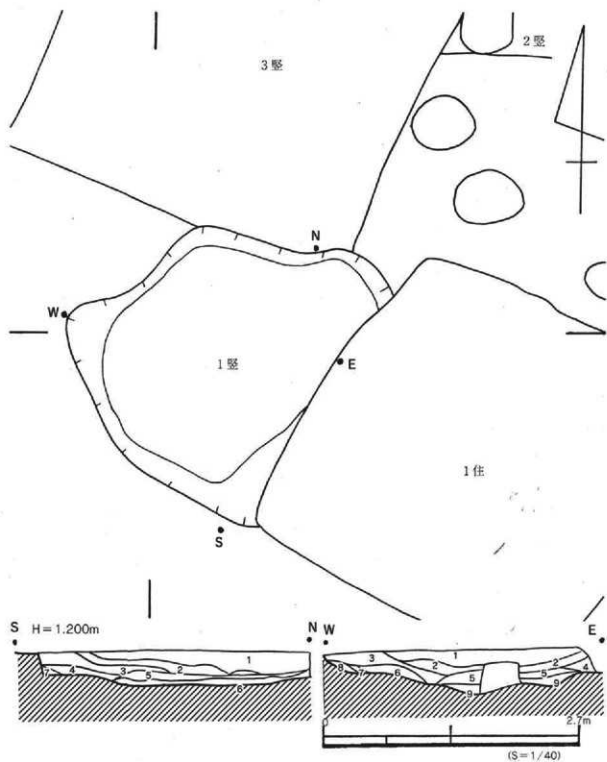


图18 1号壑穴状遺構

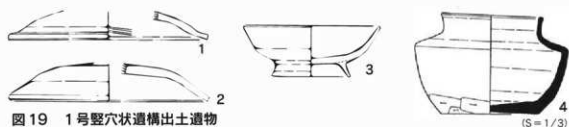


図19 1号竪穴状遺構出土遺物

まとめ

1号竪穴状遺構は、不整形な竪穴状の遺構である。出土した土師器は須恵器を模倣したと考えられる蓋2点と須恵器の壺が出土した。1号竪穴状遺構の年代は須恵器模倣の土師器の蓋と須恵器の壺の特徴から8世紀後半頃の表杉ノ入式期であると考えられる。

2号竪穴状遺構

遺構 (図20)

2号竪穴状遺構としたものは、調査区北側のほぼ中央であるB-5からC-6グリッドに位置している。遺構の北側は調査区外へむかい、西側は3号竪穴状遺構に切られているため全体の形状は判然としないが、確認された南東コーナー部分は直角のプランであることから、遺構の平面形は方形であったと考えられる。底面は平坦であり検出面より約20cmほど掘り進んだところで確認した。底面からは2基のピットが検出されたが、遺構にともなうピットかは判断できなかった。遺構堆積土は4層に分けられ、暗褐色砂質土が主体となっている。

遺物 (図21)

7点の土師器が出土した。出土した土師器は杯・高杯・高台付杯である。1・2は杯である。いずれもロクロ整形によるもので内面には黒色処理が施される。1は平底の底部から直立気味に外傾しながら口縁部にいたる。口径は約10cmと小型である。2は平底の底部からやや外傾しながら口縁部にいたる。口径は約15cmと1と比べると大きい。3・4・5・6は高杯の脚部である。3は短く柱実の脚部に小さな裾部がつくものである。4は柱実の脚部に内黒処理及びミガキが施された杯部がつくものである。裾部の形状は不明である。3はハの字に開く脚部に開きの強い裾部がつくものである。杯部は内面に黒色処理が施される。6は口径が14.5cmの杯部に柱実の脚部がつくものである。杯部は内面に黒色処理が施され脚部外面はヘラケズリが施される。7は高台付杯である。約1cmの高い高台部からやや外傾しながら口縁部にいたる杯部を有するものと考えられる。

まとめ

2号竪穴状遺構は、遺構の全体の規模は不明であるが形状は方形の遺構である。遺構内からはロクロ整形の杯が出土しており、その特徴から8世紀後半から9世紀初頭にかけての表杉ノ入式期であると考えられる。よって2号竪穴状遺構は8世紀後半から9世紀初頭の所産であると考えられる。

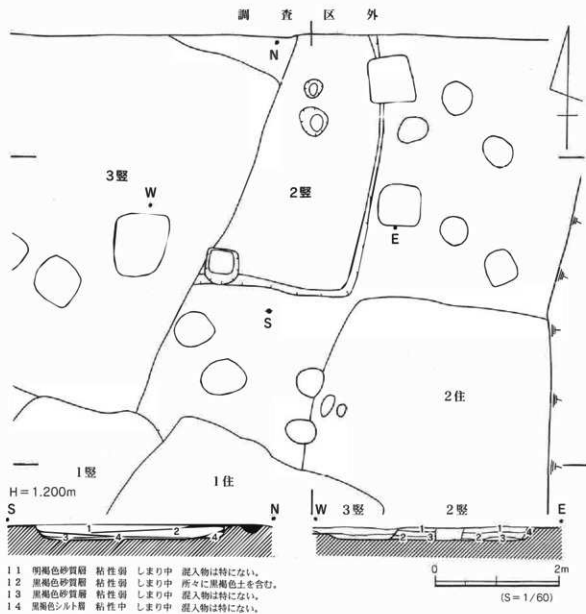


図20 2号壁穴状遺構

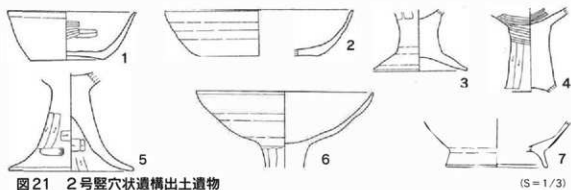


図21 2号壁穴状遺構出土遺物

3号竪穴状遺構

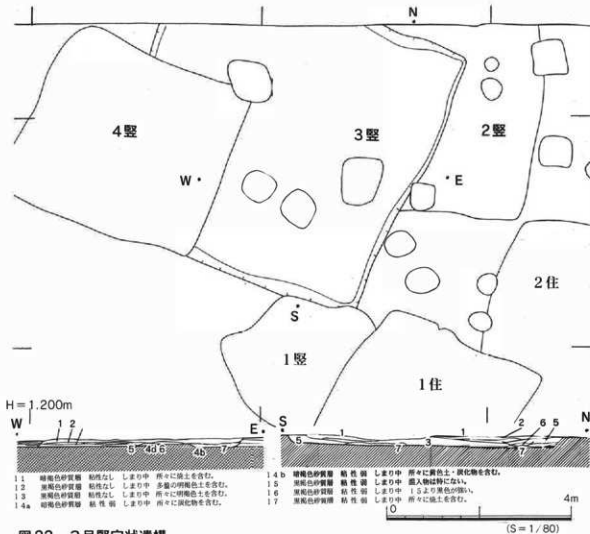
遺構 (図22)

3号竪穴状遺構は、調査区の北側ほぼ中央のB-4からD-5グリッドに位置している。遺構は1号竪穴状遺構・2号竪穴状遺構・4号竪穴状遺構との重複が確認されており、3号竪穴状遺構は1号竪穴状遺構・4号竪穴状遺構よりは古く、2号竪穴状遺構よりは新しいと判断した。

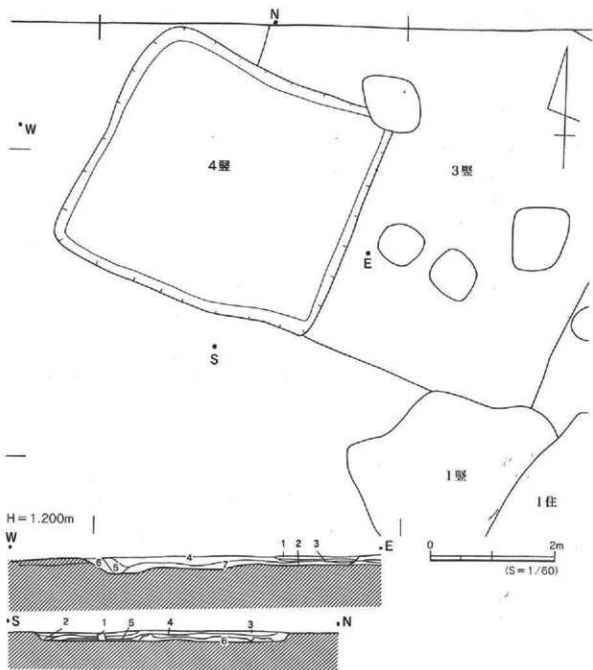
遺構は北側が調査区の外へのびていること、西側は4号竪穴状遺構に切られていること、南側には1号竪穴状遺構が位置していることから、全体の形状は判然としませんが、遺構の東辺が直線的であり、北東コーナーが直角であることから、一辺が約620cmの方形であると推定される。底面は検出面より約20cmほど掘り進めたところで検出した。床面の形状は平坦である。底面からは当遺構にともなうと考えられる柱穴などの遺構は確認することができなかった。遺構内の堆積土は7層からなり、暗褐色砂質層を主体とする。

まとめ

3号竪穴状遺構は一辺が約600cmの竪穴状遺構である。柱穴やカマドは検出されなかった。



遺構からは良好な遺物は出土しなかったため、遺構の年代については不明であるが、1号堅穴状遺構・2号堅穴状遺構との重複関係にあることから、8世紀後半から9世紀初頭にかけた時期の所産であると考えられるが、1号堅穴状遺構及び2号堅穴状遺構との時期差はさほどないものと考えられる。



- | | | | | |
|---|--------|------|------|--------------------|
| 1 | 暗褐色砂質層 | 粘性なし | しまり中 | 所々に少量の炭化物を含む。 |
| 2 | 明褐色砂質層 | 粘性なし | しまり中 | 所々に黒色砂質土を含む。 |
| 3 | 明褐色砂質層 | 粘性なし | しまり中 | 黒色土・黄色土・壤土・炭化物を含む。 |
| 4 | 暗褐色砂質層 | 粘性なし | しまり中 | 混入物は特いない。 |
| 5 | 暗褐色砂質層 | 粘性なし | しまり中 | 黄色土・粘土・土断片を含む。 |
| 6 | 黒褐色砂質層 | 粘性なし | しまり中 | 混入物は特いない。 |
| 7 | 黒褐色粘質層 | 粘性中 | しまり無 | 混入物は特いない。 |

図23 4号堅穴状遺構

4号竪穴状遺構

遺構 (図23)

4号竪穴状遺構はC-3からC-4グリッドに位置している。平面規模は400mであり、平面形は方形であると推測される。底面は遺構検出面より約20cmほど掘り進んだところで確認した。底面の形状は比較的平坦であり、柱穴やカマドなどの施設は確認することができなかった。遺構内の堆積土は7層からなり、暗褐色砂質層が主体となる。4号竪穴状遺構は東側に位置する3号竪穴状遺構と重複関係にあり、4号竪穴状遺構が3号竪穴状遺構より新しいと判断している。遺構からは年代を決定できる土器資料は出土しなかった。

まとめ

4号竪穴状遺構は一辺が約400cmの方形の竪穴状遺構である。遺構からは良好な遺物が出土しなかったため遺構の年代については不明であるが、重複関係にある3号竪穴状遺構が8世紀後半から9世紀初頭にかけて作られたものと推測されることから、4号竪穴状遺構は3号竪穴状遺構よりも新しいと判断され、3号竪穴状遺構の年代である8世紀後半から9世紀初頭との所産であると考えるのが妥当であると判断される。3号竪穴状遺構との時期差はさほどないものと判断される。

5号竪穴状遺構

遺構 (図24)

5号竪穴状遺構はI-8からJ-9グリッドに位置している。遺構は7号竪穴状遺構及び7号溝跡との重複関係にあり、いずれの遺構よりも古いと判断している。

遺構の平面規模は1辺が約420mの方形と考えられ、約25cmほど掘り進んだところで底面を検出した。底面からは住居跡であることを示す柱穴やカマドなどは検出されなかった。遺構内の堆積土は、暗褐色砂質層及び黒褐色砂質層が主体となる。遺構からは、良好な土器資料は出土しなかった。

まとめ

5号竪穴状遺構は全体の規模は不明であるが、不整形な方形の遺構であると判断される。遺構からは、良好な土器資料が出土しなかったため遺構の年代については不明であるが、重複関係にある7号竪穴状遺構が5号竪穴状遺構よりも古いと判断されることから、古墳時代後古墳時代後期の引田式から佐平林式とほぼ同時期か若干古い時期の所産であると考えられるが、7号竪穴状遺構との時期差はさほどないものと判断される。

6号竪穴状遺構

遺構 (図25)

6号竪穴状遺構はG-10からI-11グリッドで検出した。6号竪穴状遺構は5号竪穴住居跡との重複が確認されており、5号竪穴住居跡より古いと判断している。

遺構の形状は遺構東辺が調査区外へかかっていること、南辺の一部は5号竪穴住居跡によっ

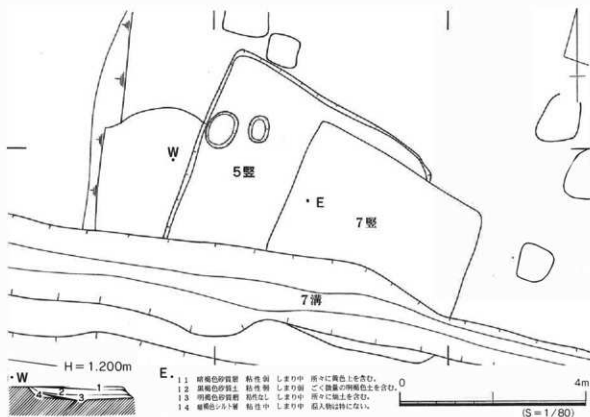


図24 5号竪穴状遺構

で切られていることから判然としえない。遺構の底面は平坦で、検出面より約20cmほど掘り進んだところで確認した。

当遺構からは柱穴やカマドなどの住居跡の可能性を示す痕跡は得ることができなかった。遺構内の堆積土は5層に分けられ暗褐色砂質層が主体となる。

まとめ

6号竪穴状遺構は方形の遺構である。遺構からは良好な土器資料は出土しなかったため年代については不明であるが、6号竪穴状遺構は古墳時代後期の5号竪穴住居跡との重複関係にあり、6号竪穴住居跡が古いと判断される。6号竪穴住居跡の年代は5号竪穴住居跡の古墳時代後期かそれ以前と考えられるが、5号竪穴住居跡との時期差はさほどないものと考えられる。

7号竪穴状遺構

遺構 (図26)

7号竪穴状遺構は、調査区の南東付近であるI-9からJ-9グリッドに位置している。遺構は7号溝跡及び5号竪穴状遺構との重複が確認されており、7号竪穴状遺構は5号竪穴状遺構よりは新しく、7号溝跡よりは古いと判断している。遺構の平面形は一辺が約400cmの不整形である。また底面は検出面より約40cmほど掘り進んだところで確認した。平坦な床面からは3基のピットを確認したが、住居を構成する柱穴であるかを判断する知見を得ることはできず、当遺構にともなう柱穴は不明である。遺構内に堆積した堆積土は3層からなり、暗褐色砂質土が主体となる。

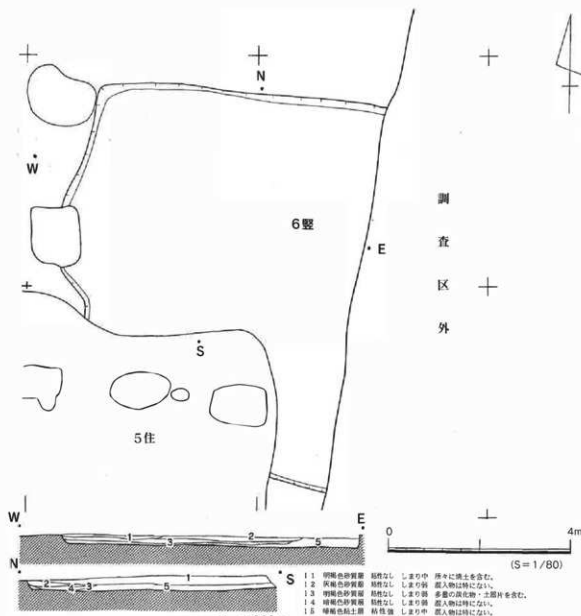


図25 6号竪穴状遺構

遺物 (図27)

7点の土師器が出土している。1から4は土師器の杯である。1は中央がやや窪む平底状の底部からやや外傾しながら上方に体部がのびる。体部は上半で直立気味に立ち上り口縁部に向かう。口縁部は短く、外方に向かって弱く外反する。外面には細かなヘラケズリが施され、内面には粗いミガキが放射状に施される。2、4は平底の底部から強く外傾する体部を有するものである。口縁部は体部上半で直立しおさまる。外面には粘土継痕が残る。調整は観察できない。内面には粗いミガキが施され、口縁部はヨコナデによって整えられる。3は平底で径の小さな底部から丸みの強い体部が口縁部に向かっている、口縁部は強く外傾する。器面の調整は摩滅のため観察できない。

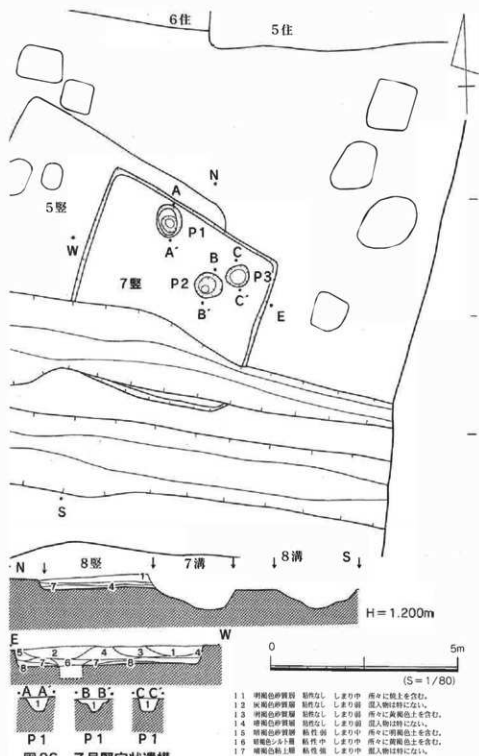


図26 7号壑穴状遺構

5・6・7は壑である。5は口縁部から体部上半の資料である。丸みの強い体部から直線的に外傾する口縁部を有する。内面にはヘラナデが施され、口縁部にはヨコナデが施される。6は丸みの強い体部に直立する口縁部がつくものである。口縁部は直立気味に立ち上り、また粘土が貼り足されている点が特徴的である。また口縁部は口唇部で強く外反する。器面の調整は観察できない。7は底部資料である。平底の底部から丸い体部がのびるものである。詳細は判

然としない。

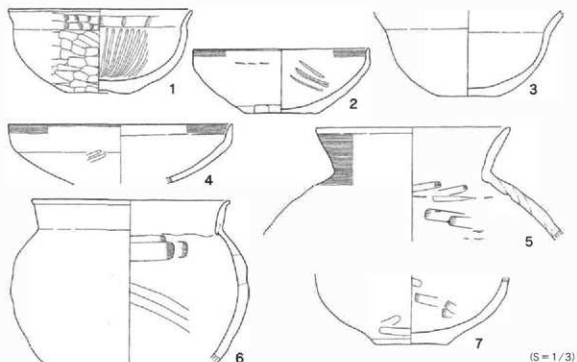


図27 7号竪穴状遺構出土遺物

まとめ

7号竪穴状遺構は一辺が400cm前後の不整形の遺構である。遺構からは7点の土師器が出土した。出土した4点の杯は、口縁部下部でやや括れ口縁部は外反するものと直立気味に立ち上がるものが見られ、引田式から佐平林式の前古墳時代後期の土器群である。よって7号竪穴状遺構は古墳時代後期の所産であると考えられる。

第4節 溝跡

1号溝跡・2号溝跡・3号溝跡 (図28)

1号溝跡はB-2からG-1グリッドで検出した南北方向の溝跡である。上幅約120cm～140cm、下幅約80cm～100cm、深さ約25cmであり、溝跡の断面形は浅く溝の底面は平坦である。溝跡の底は平坦である。堆積土は黒褐色土が主体となる。2号溝跡はB-3からG-1グリッドで検出した南北方向の溝跡である。上幅約130cm～150cm、下幅約70cm～90cm、深さは約40cmである。溝跡の断面形は逆台形で、溝跡の底は平坦である。溝跡の方向は真北方向より東に偏し、遺構の堆積土は黒褐色土が主体となる。3号溝跡はB-3からG-1グリッドで検出した溝跡である。上幅約120cm～130cm、下幅約40cm～50cm、深さ約80cmである。溝の底は平坦である。溝跡の断面形は逆台形であり、堆積土は黒褐色土が主体となる。

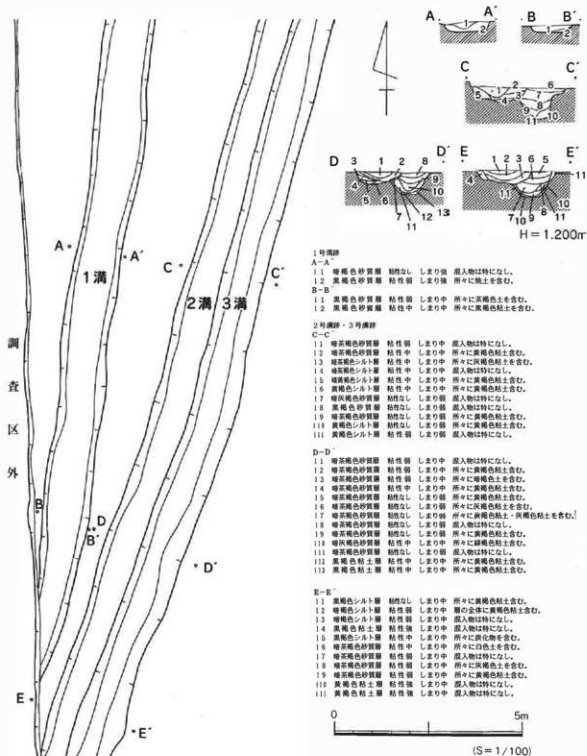


図28 1号溝跡・2号溝跡・3号溝跡
4号溝跡・5号溝跡・6号溝跡 (図29)

4号溝跡はH-1からI-2グリッドで検出した東西方向の溝跡である。上幅約80cm~100cm、下幅約40cm~70cm、深さは約20cmである。溝の底は平坦であり、断面形はゆるい逆台形である。溝跡は真北方向から西に偏する。5号溝跡はI-1からK-3グリッドで検出した東

- 1号溝跡
- A-A'
- 11 暗褐色砂質層 粘性なし しまり強 埋入物は特になし。
 - 12 黒褐色砂質層 粘性弱 しまり強 所々に黄土を含む。
- B-B'
- 11 黒褐色砂質層 粘性弱 しまり中 所々に黄褐色土を含む。
 - 12 黒褐色砂質層 粘性中 しまり中 所々に黒褐色粘土を含む。
- 2号溝跡・3号溝跡
- C-C'
- 11 暗褐色砂質層 粘性弱 しまり中 埋入物は特になし。
 - 12 暗褐色砂質層 粘性中 しまり中 所々に黄褐色粘土を含む。
 - 13 暗褐色シルト層 粘性中 しまり中 所々に黒褐色粘土を含む。
 - 14 暗褐色シルト層 粘性中 しまり中 埋入物は特になし。
 - 15 暗褐色シルト層 粘性中 しまり中 所々に黄褐色粘土を含む。
 - 16 暗褐色シルト層 粘性中 しまり中 所々に黄褐色粘土を含む。
 - 17 暗褐色砂質層 粘性なし しまり強 埋入物は特になし。
 - 18 暗褐色砂質層 粘性なし しまり強 埋入物は特になし。
 - 19 暗褐色砂質層 粘性なし しまり強 所々に黄褐色粘土を含む。
 - 110 暗褐色シルト層 粘性なし しまり強 所々に黄褐色粘土を含む。
 - 111 黄褐色シルト層 粘性弱 しまり強 埋入物は特になし。
- D-D'
- 11 暗褐色砂質層 粘性弱 しまり中 埋入物は特になし。
 - 12 暗褐色砂質層 粘性弱 しまり中 所々に黄褐色粘土を含む。
 - 13 暗褐色砂質層 粘性弱 しまり中 所々に暗褐色土を含む。
 - 14 暗褐色砂質層 粘性中 しまり中 所々に黄褐色粘土を含む。
 - 15 暗褐色砂質層 粘性なし しまり強 所々に黄褐色粘土を含む。
 - 16 暗褐色砂質層 粘性なし しまり強 所々に黒褐色粘土を含む。
 - 17 暗褐色砂質層 粘性なし しまり強 所々に黄褐色粘土・灰褐色粘土を含む。
 - 18 暗褐色砂質層 粘性なし しまり強 埋入物は特になし。
 - 19 暗褐色砂質層 粘性なし しまり強 所々に黄褐色粘土を含む。
 - 110 暗褐色砂質層 粘性中 しまり中 所々に黒褐色粘土を含む。
 - 111 暗褐色砂質層 粘性なし しまり強 埋入物は特になし。
 - 112 黒褐色粘土層 粘性中 しまり中 所々に黄褐色粘土を含む。
 - 113 黒褐色粘土層 粘性強 しまり中 所々に黄褐色粘土を含む。
- E-E'
- 11 黄褐色シルト層 粘性なし しまり中 所々に黄褐色粘土を含む。
 - 12 暗褐色シルト層 粘性弱 しまり中 層の全中に黄褐色粘土を含む。
 - 13 暗褐色シルト層 粘性弱 しまり中 埋入物は特になし。
 - 14 黄褐色粘土層 粘性強 しまり中 埋入物は特になし。
 - 15 黄褐色シルト層 粘性中 しまり中 所々に炭化物を含む。
 - 16 暗褐色砂質層 粘性中 しまり中 所々に白色土を含む。
 - 17 暗褐色砂質層 粘性弱 しまり中 埋入物は特になし。
 - 18 暗褐色砂質層 粘性弱 しまり中 所々に黒褐色粘土を含む。
 - 19 暗褐色砂質層 粘性弱 しまり中 所々に黄褐色土を含む。
 - 110 黄褐色粘土層 粘性強 しまり中 埋入物は特になし。
 - 111 黄褐色粘土層 粘性強 しまり中 埋入物は特になし。

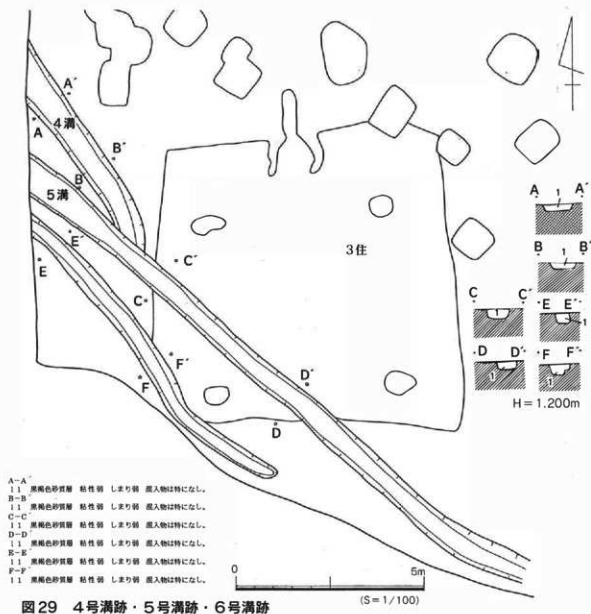


図29 4号溝跡・5号溝跡・6号溝跡

西方向の溝跡である。上幅約60cm～90cm、下幅約30cm～70cm、深さは25cmである。溝跡の底は平坦で、断面形は逆台形である。6号溝跡はJ-1からJ-2グリッドで検出した東西方向の溝跡である。上幅約50cm～60cm、下幅約20cm～30cm、深さは約30cmである。溝跡の底は平坦で、断面形は逆台形である。

7号溝跡 (図30)

7号溝跡はK-4からK-10グリッドで検出した東西方向の溝跡である。溝跡はK-10から西側に向かうがJ-4付近はほぼ直角に南に方向を変える。上幅約70cm～170cm、下幅約20cm～90cmであり、深さは約60cmである。溝跡の断面形はV字形であり、堆積土は黒褐色土を主体とする。他の遺構との重複関係は4号竪穴住居跡・5号竪穴状遺構・7号竪穴状遺構・8号溝跡・9号溝跡との重複が確認され、いずれの遺構よりも新しい。

8号溝跡 (図30)

8号溝跡はK-10~J-6グリッドで検出した東西方向の溝跡である。溝跡は上幅約140cm~200cm、下幅約40cm~60cmであり、深さは約50cmである。溝跡の断面形はU字形であり、堆積土は黒褐色土である。溝跡は7号溝跡・9号溝跡との重複が確認されており、7号溝跡よりは新しく9号溝跡よりは古い。

9号溝跡 (図30)

9号溝跡はK-7からM-7グリッドで確認された南北方向の溝跡である。上幅約80cm~110cm、下幅約40cm~70cm、深さ約20cmである。溝跡の断面形は逆台形であり、底の形状は平坦である。堆積土は黒褐色土が主体となる。遺構の重複関係では8号溝跡・1号井戸跡との重複が確認されており、いずれの遺構よりも古いことが確認されている。

10号溝跡 (図32)

10号溝跡はE-5からG-5グリッドで確認した方形の溝跡である。上幅約60cm~130cm、下幅約20cm~80cm、深さ約20cmである。溝跡の断面形はU字形であり、底の形状は丸い。堆積土は灰褐色土である。10号溝跡は1号掘立柱建物跡・3号掘立柱建物

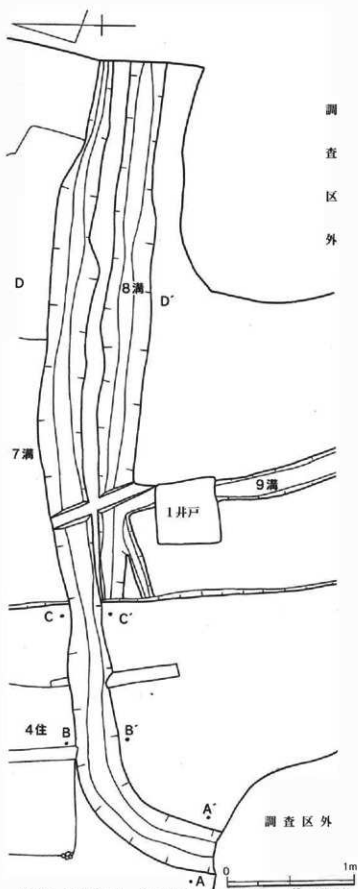


図30 7号溝跡・8号溝跡・9号溝跡 (S=1/100)

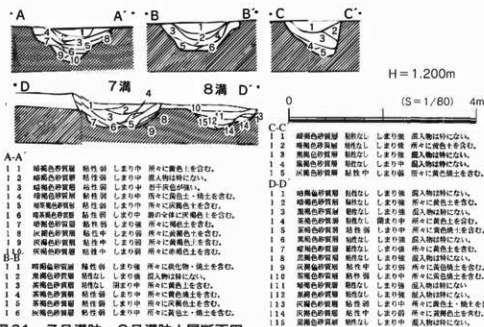


図31 7号溝跡・8号溝跡土層断面図

跡との重複が確認されており、いずれの建物跡よりも古いことが確認されている。10号溝跡により囲まれた内側のほぼ中央には楕円形の3号土坑が位置している。

第5節 その他の遺構

1号井戸跡 (図33)

井戸跡はK-7グリッドで検出した。一辺240cmの正方形でありほぼ垂直に掘り込まれているが、約160cm掘り進めたところで調査を断念した。

1号土坑・2号土坑 (図33) ・3号土坑 (図32)

1号土坑はI-6グリッドで検出した土坑である。平面形は円形で直径は約280cmである。底面は遺構検出面より10cmのところ検出した。堆積土は暗褐色砂質層を主体とする。遺物は出土していない。

2号土坑はF-5グリッドで検出した土坑である。平面形は不整形な円形であり直径は最大で300cmである。底面は遺構検出面より10cmのところ検出した。堆積土は暗褐色砂質層を主体とする。遺物は出土していない。

3号土坑はF-4グリッドからG-5グリッドで検出した土坑である。土坑は不整形な楕円形であり長軸は約250cm、短軸は約130cmである。深さは検出面より約20cmである。土坑は10号溝跡の中央に位置しており、当初10溝跡を方形周溝墓と判断し3号土坑を埋葬施設ではないかと想定し調査を進めたが、方形周溝墓として積極的な知見を得ることができなかったため、本報告書では10号溝跡・3号土坑として判断した。

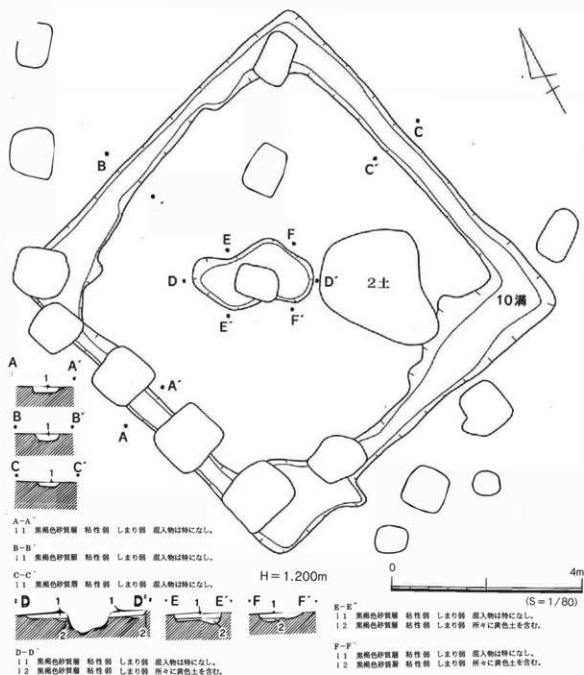


図32 10号溝跡・3号土坑

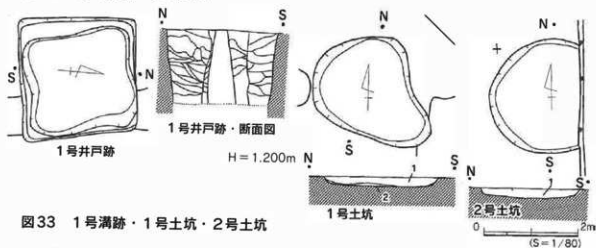


図33 1号溝跡・1号土坑・2号土坑

第6節 遺構外出土遺物

この節では、調査に際して遺構検出段階や遺構にともなわずに出土した遺物について記載する。遺構外から出土した遺物は土師器・須恵器がある。

(1) 土師器

遺構外から出土した土師器には杯・甕・高台付杯・高杯・蓋・壺などがある。

杯 (図34)

杯は32点を図示した。大きくは非ロクロ整形によるものと、ロクロ整形によるものに大別される。1から17は非ロクロ整形の杯である。1から6は平底状の底部から強く湾曲した体部を有するものである。口縁部は丸みの強い体部から立ち上り、直立するものと内湾するものに分けられる。

外面の調整は摩滅のため判然としないものが多いがヘラケズリによる調整が主であると考えられ、内面調整はヘラナデが施される。黒色処理は施されない。

7から17は丸底状の底部から緩やかに内湾しながら口縁部にいたる。口縁部は微妙に直立するものと、体部からの自然に外傾し口縁部にいたるものが見られる。外面調整は明瞭なヘラケズリを施すものが多く、内面にはミガキ及び黒色処理が施される。

18から32はロクロ整形によるものである。回転糸切り若しくは回転ヘラ切りによって切り難された底部には回転ヘラケズリ、手持ちヘラケズリの再調整を施すものと再調整は施されないものが見られる。内面にはミガキによる調整が施され、黒色処理が施される。

高杯 (図35)

高杯は16点を図示した。1は杯部資料であり図示した資料では唯一杯部内面に黒色処理を施さないものである。器形は脚部から緩やかに外傾しながら口縁部にいたる。外面にはヘラケズリ若しくはヘラナデの調整が施され、口縁部にはヨコナデによる調整が施される。

2は脚部から裾部にかけての資料である。中空の脚部から大きく広がる裾部を有する。器面の調整は内外面ともに縦方向のケズリが施され裾部付近で横方向のケズリが施される。1と同一固体の可能性が高い。

3から16は杯部内面に黒色処理を施すものである。4は杯部から裾部のほぼ全体が残存している。器形は丸底の杯部から太く短い脚部が伸び、脚部は中空で外面に明瞭な縦方向のケズリが施される。裾部の広がりも弱く、脚部から放射状にケズリが施される。なお、杯部と脚部の接合付近に刺突状の円窓が見られる。5は杯下部から脚部にかけての資料である。直線的に外傾して形成された杯部から急激に開きながら裾部にいたるため明瞭な脚部は見られない。6から15は脚部から裾部にかけての資料である。6・7・9・10・11・13・14・15は中空状の脚部であり、8・12・16の脚部は柱突である。6・8・11・12の脚部は他の資料と比較すると細身で長いのが特徴である。

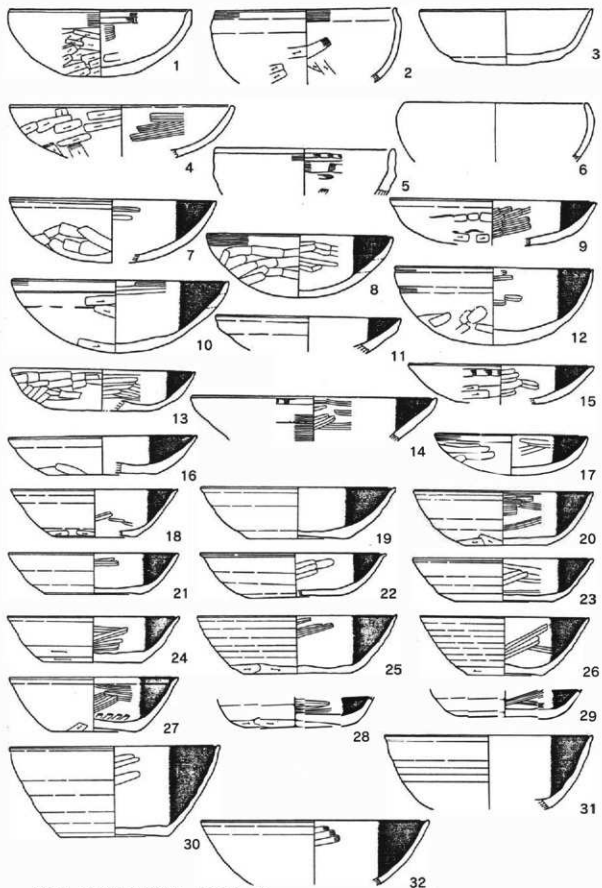


图34 遺構外出土遺物 土師器 杯

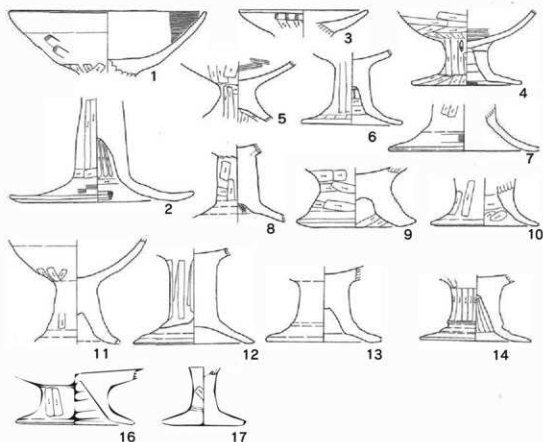


図35 遺構外出土遺物 土師器 高杯

高台付杯 (図36)

高台付杯は9点を図示した。1は口縁部から高台部までが判断できる資料である。5mmほどの短い高台から緩やかに外傾しながら口縁部にいたる。杯部内面にはミガキによる調整と黒色処理が施される。2・4・7は約1cmの高台を有し杯部内面には黒色処理が施され、ミガキを主体とする調整が施される。6の高台は1.5cmの比較的高い高台であり、7は高さが3cmの非常に高い高台である。9は直径が4cmほどの低い高台である。いずれの資料も内面には黒色処理が施される。

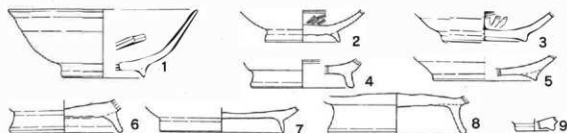


図36 遺構外出土遺物 土師器 高台付杯

甕 (図37・図38・図39・図40・図41)

甕は42点を図示した。大きくは非ロクロの甕とロクロ整形による甕に大別される。また非ロクロの甕については口縁部の形態で2種類に分けられる。1から37は非ロクロ整形による甕で

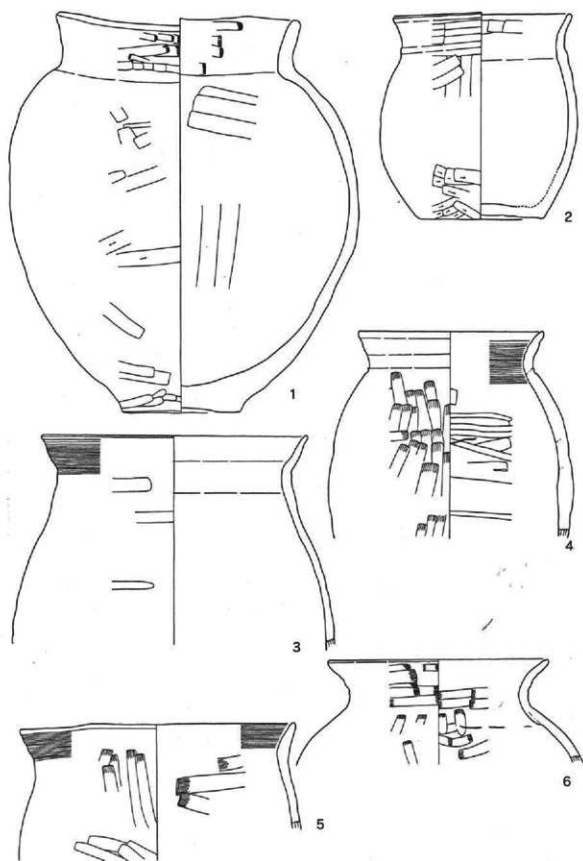


图37 遺構外出土遺物 土師器 壺(1)

S=1/3

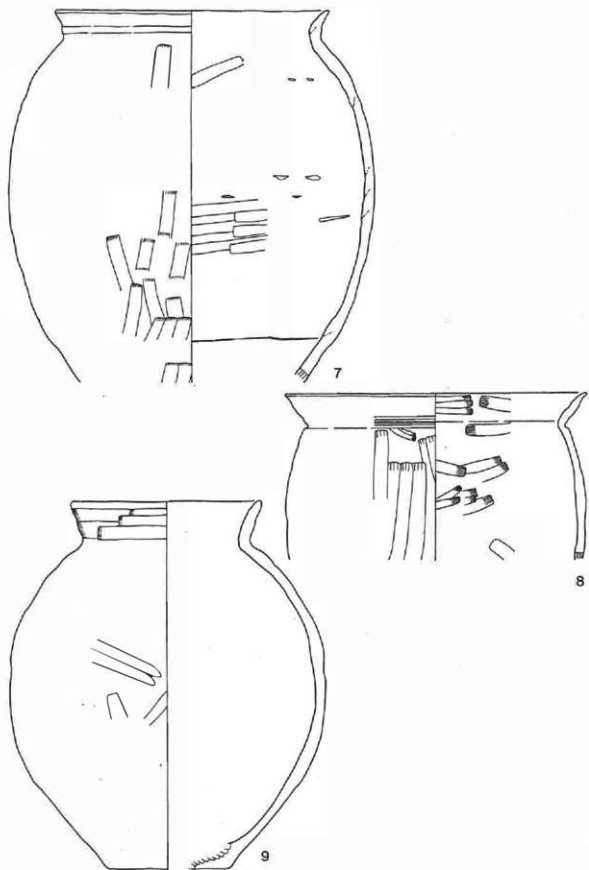


図38 遺構外出土遺物 土師器 甕(2)

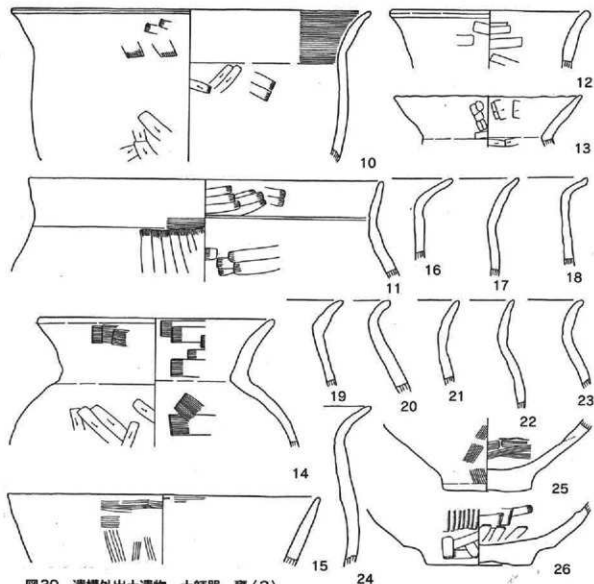


図39 遺構外出土遺物 土師器 甕(3)

ある。

1は全体が判断できる資料である。平底の底部から緩やかに立ち上がる体部が見られ、体部の最大径は体部中段に位置する。口縁部は直線的に外傾するが外傾の度合いには強弱が見られる。器面の調整は内外面ともにヘラケズリ若しくはヘラナデによる調整が主である。

2は小型の甕である。平底状の底部から緩やかに立ち上り口縁部にいたる。口縁部は弱く外反する。体部下半から底部及び口縁部付近にかけてはヘラケズリ及びヘラナデが施される。体部の最大径は体部中段からやや下方に位置している。

3から5は体部下半から底部にかけての形状は欠損のため不明であるが、いわゆる長胴甕であると判断される。長胴の体部から直線的に外傾する口縁部が見られる。器面の調整は外面にヘラナデが施され、口縁部にはヨコナデが施される。

7は底部の形状は欠損しており不明であるが、緩やかに内湾しながら立ち上がる体部は最大径が体部中段から上半に位置しており、口縁部は外反しておさまる。口縁部は非常に短いこと

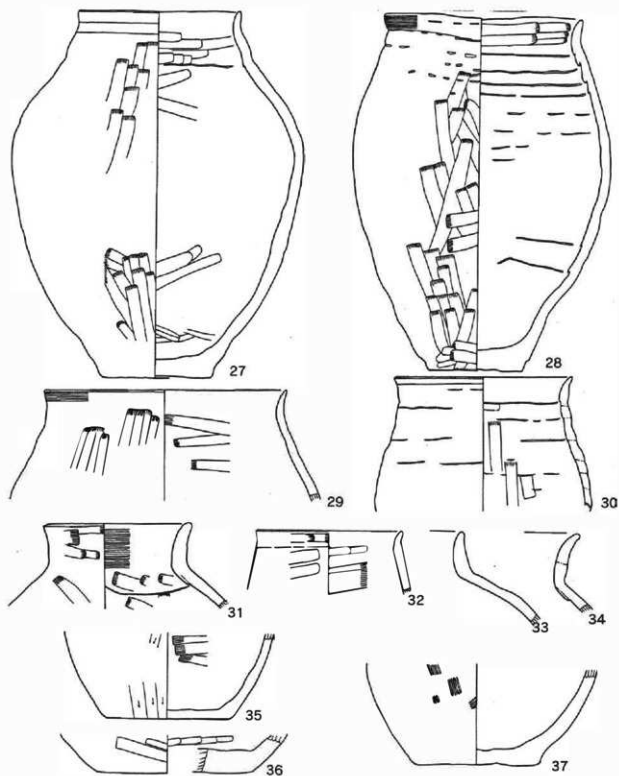


図40 遺構外出土遺物 土師器 壺(4)

が特徴である。

9は全体が判断できる資料であり、7と同様に平底の底部から緩やかに内湾しながら口縁部にいたる。口縁部は比較的長く直線的に外傾する。体部の外面にはヘラナデ若しくはナデが施され、口縁部にはヘラナデが施される。

10から15は口縁部を中心とした資料である。底部の形状は不明であるが、緩やかに内湾する体部に比較的長い口縁部がつき、微妙に外反する口縁端部が見られる。器面の調整は口縁部付近にヘラナデを主とする調整を施す。

10と15は体部上半から口縁部にかけての資料であり、体部下半及び底部の形状は不明である。

体部は最大径が体部中段に位置するものと推測され、口縁部は長く緩やかに外反する。器面の調整は体部にはヘラケズリ、口縁部にはヘラナデが施される。

16から24は口縁部資料であり、断面実測で図示した。体部は長胴化が見られるものと思われ、口縁部は強く外傾しておさまる。

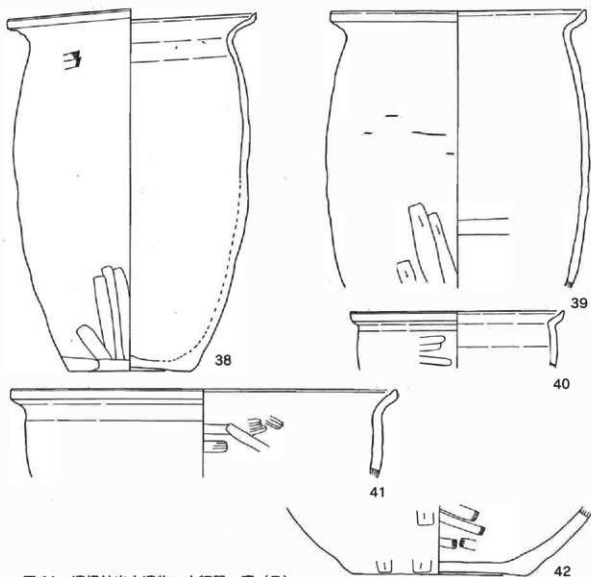


図41 遺構外出土遺物 土師器 甕(5)

27から37は口縁部が直立するものである。27・28は全体が判断できる資料である。平底の底部から緩やかに内湾する体部が見られる。体部の最大径は中段よりやや上方に位置する。口縁部は短くほぼ直立気味に立ち上がる。外面にはヘラナデによる調整が施され、口縁部にはヨコナデが施される。31・32は27と28と同様の器形を有するものと思われるが非常に小型の作りになっている点が特徴である。

38から42はロクロ整形によるものである。38は全体が判断できる資料である。平底の底部の周縁には横方向のヘラケズリが施される。体部は緩やかに内湾しながら立ち上り、長胴化が見られる。口縁部は強く外反し、口唇部付近で直立気味に立ち上がる。

39から41は底部の形状は欠損のため不明であるが38と同様に長胴化が進んだ体部であると思われる。口縁部は強く外反し口唇部で直立気味に立ち上がるが、38と比較すると短い。

その他の遺物 (図4.2)

その他の遺物として記載するものには、鉢・椀・壺・小型杯・甌、高台付皿・蓋がある。

1から4は鉢として分類した。1・2は丸底状の底部から強く内湾しながら体部を形成する。体部は上半で屈曲し外反して口縁部にいたる。外面の調整はヘラナデによる調整が施され内面には細かなミガキが施される。また内面には明瞭な黒色処理が施される。3は丸底状の底部から強く内湾する体部を有するものである。口縁部付近は1・2と異なり、外反せずに直立気味に立ち上がる。器面の調整は1・2と同様に外面にはヘラナデ、内面には細かなミガキと黒色処理が施される。

5から13は椀として分類したものである。椀は杯と比べて器形が丸く鉢と比べて小型の作りになっているものである。

6・7は中央がやや窪み平底状の底部から強く内湾する体部を有する。口縁部は短く強く外傾しておさまる。器面の調整としては外面にはヘラケズリを主とする調整を施し、内面にはヘラナデによる調整を施す。口縁部にはヨコナデを施す。

13は唯一ロクロ整形による椀と判断したものである。底部の形状は欠損のため不明であるが、丸みの強い体部下半から直立気味に口縁部にいたり、口縁部は強く外傾する。口唇部はつまみ出されている。

14・15は小型の壺である。残存している範囲は口縁部であることから詳細については不明である。口縁部の全体は直線的であるが、口唇部付近でやや内湾しおさまる。14は口縁部にはヨコナデが施される。15は外面に縦方向のミガキを施す。内面は黒色に変色しているがこれが黒色処理なのか黒斑なのかは判断できなかった。

16から25は小型の杯である。このうち16から20の内面には黒色処理が施されている。器形は底部から口縁部にかかる全体が判断できるものは16だけである。底部は直径が約7cmであるが器高は約2.5cmと低い。外面には底部付近にヘラケズリを施し、内面にはミガキを施す。21から25は内黒処理を施さないものである。全体が判断できるのは21である。平底状の底部から直線的に外傾しながら口縁部にいたり口唇部付近でさらに強く外反する。外面にはヘラケズリが施し、内面にはミガキを施す。24は底部付近の資料であり、厚手の底部になっておりほかの

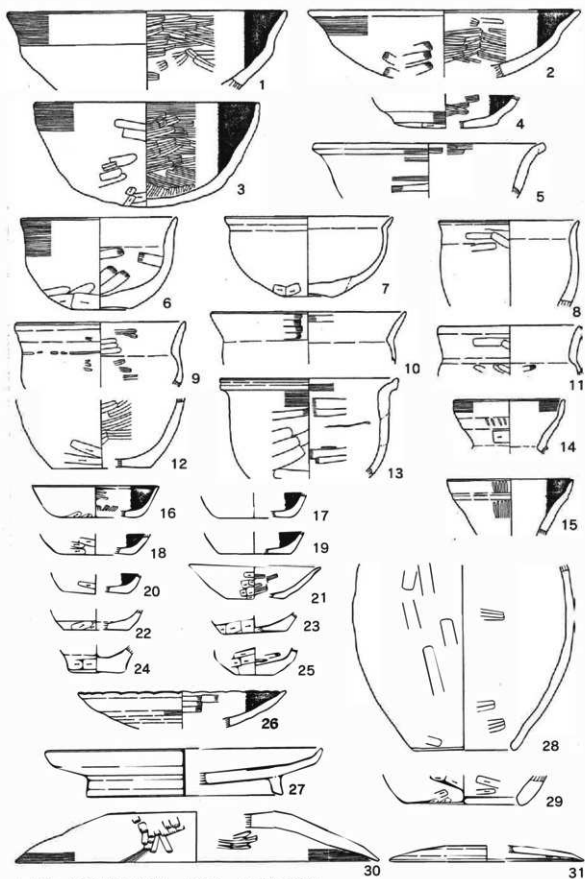


図42 遺構外出土遺物 土師器 その他の遺物

(S=1/3)

資料とは異なる。25は平底状の底部から内湾気味の体部が見られる。

27は高台付の皿である。ロクロによって整形されており、口径は約23cmの比較的大きな作りになっている。高台は約1.5cmで平らな底部から口縁部付近で約1cmほど直立し口縁部を形成する。

28と29は甔である。大きく穿孔された底部から緩やかに立ち上り体部を形成する。口縁部の形状は欠損のため不明である。外面にはヘラナデ若しくはナデによる調整が施され、内面にはナデ及びミガキが施される。

30・31は蓋である。30は口径が約30cmをはかる大型の蓋である。つまみの形状は欠損のため判断できないが、平坦な天井部から直線的に口縁部にいたる。器面には粘土継ぎによる凹凸が激しい。31は口径が16cmの蓋である。つまみの形状は不明であるが、平坦で狭い天井部から微妙に内湾気味に口縁部にいたる。内面には黒色処理が施される。

(2) 須恵器

出土した須恵器は蓋・壺・杯・甕・椀・皿・高台付杯・高杯・円面硯である。

蓋 (図43)

蓋は13点が出土している。

1から3は口縁部にかえりを有するものである。比較的平坦で狭い天井部からハの字に広がりながら口縁部にいたる。口縁部内面には約5mmほどのかえりが見られる。つまみは欠損しており不明である。

4から7は比較的深い作りになっている蓋である。つまみは欠損しており不明であり、かえりはない。4は天井部にケズリが施される。8は口径が25cmの大型の蓋である。天井部及びつまみを確認することはできない。やや丸みをおびた天井部から緩やかに体部を形成し、口縁部付近で強く屈曲し口縁部にいたる。口縁部の断面形はコの字型である。9から13のつまみは欠損しており不明である。平坦で広い天井部からハの字に広がり体部を形成する。口縁部は強く屈曲しおさまる。

13は外面に回転ヘラケズリを施す。

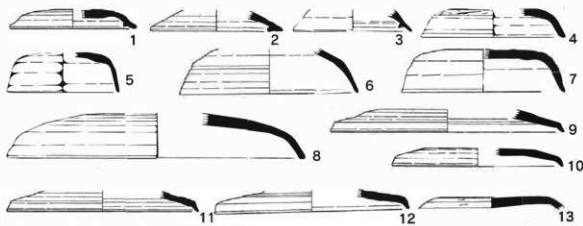


図43 遺構外出土遺物 須恵器 蓋

(S=1/3)

壺 (図44)

壺は4点を確認している。1と2は口縁部資料である。1は直立気味に立ち上がる口縁部は微妙に外反しながら口唇部にいたる。2は直線的に口唇部までいたる。3は頸部及び肩部資料である。丸みの強い肩部から直立する頸部が伸びる。頸部と体部に接合部には断面が三角形のいわゆるリング状の突帯が巡る。4は底部資料である。底部には5mmほどの高台が見られ、平底の底部から直立する体部を形成する。

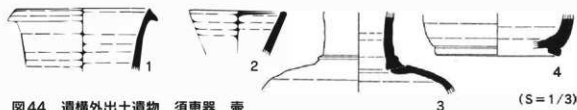


図44 遺構外出土遺物 須恵器 壺

(S=1/3)

杯 (図45)

杯は3点を図示した。全体が判断できる資料は出土していない。底部は回転ヘラ切りおよび回転糸切りによって切り離され、周縁には回転ヘラケズリによる再調整が施されている。



図45 遺構外出土遺物 須恵器 杯

(S=1/3)

甕 (図46・47)

甕は16点を図示した。全体が判断できるものは少なく、口縁部資料を中心に図示した。1は口縁部から頸部にかけての資料である。頸部は強く外反しながら口縁部にいたり、口唇部はさらに外反しておさまる。2・3は口縁部から体部上半にかけての資料である。丸みの強い体部から弱く外反する頸部を有する。3は口縁部は直線的におさまり口唇部に凹面が形成される。3・4は口唇部が外反するために外面に稜線が形成される。4の外面は平行タタキ後にナデ消している。5から15は口縁部資料であり断面実測を掲載した。6は外面に平行タタキをほどこし内面には同心円文の当具痕がみられる。11は頸部中段に浅い沈線がめぐり、頸部外面に縄タタキを施す。10は頸部中段に断面三角形の突帯が巡る。8から10・14・15は頸部に櫛状工具による波紋を施す。15は櫛描波紋が2列の沈線間に施され8から10は波紋の下部に沈線を施す。12・13は口縁部内面に凹面が形成される。

その他の遺物 (図48)

その他の遺物として記載するものには碗・皿・高台付杯・高杯・円面碗がある。

1は碗である。平底状の底部から直線的に立ち上り口縁部にいたる。底部外面には回転ヘラケズリを施す。2は皿である。平坦で直径が大きい底部から微妙に外反しながら口縁部にいたる。器高は約3cmである。4は高杯である。裾部及び口縁部の形状は不明である。皿状の浅い杯部から柱空で太く短い脚部が伸びる。裾部の形状は不明であるが、脚部には断面が三角形の円窓が空けられている。5は円面碗である。裾部が残存している程度であり、全体の形状は不明である。裾部には縦長の透かし窓が見られるが詳細は不明である。

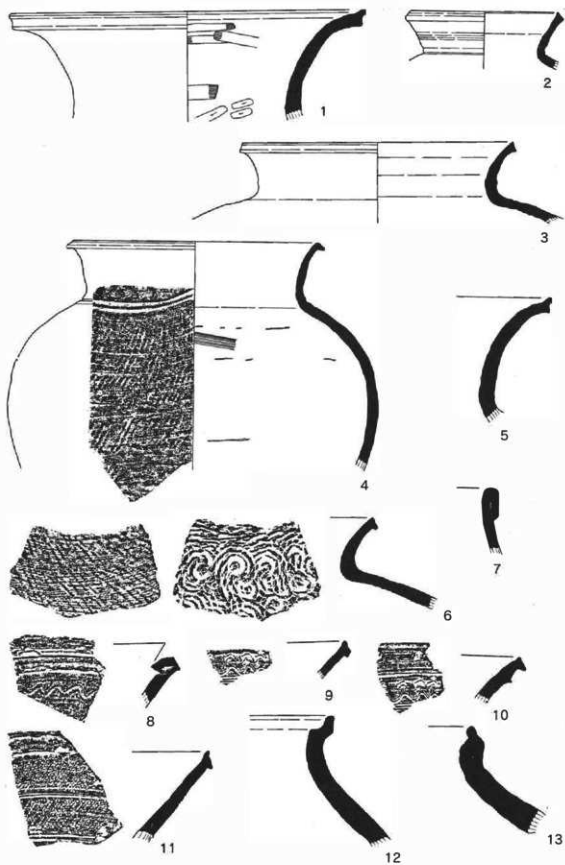


图46 遺構外出土遺物 須恵器 甕(1)

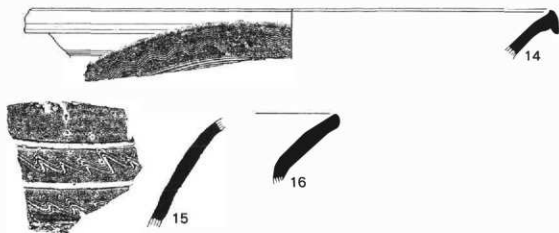


図47 遺構外出土遺物 須恵器 壘 (2)

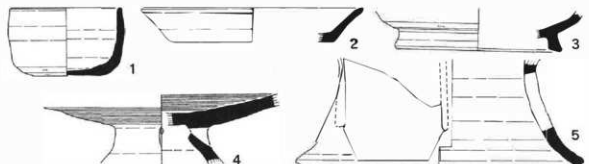


図48 遺構外出土遺物 須恵器 その他の遺物

(S=1/3)

第4章 まとめ

今回の調査では、掘立柱建物跡・堅穴住居跡・堅穴状遺構・溝跡・土坑・井戸跡の遺構とともに土師器・須恵器などの遺物を検出した。

堅穴住居跡は6軒を検出した。そのほか堅穴状遺構として判断した遺構も7基を数えている。堅穴住居跡及び堅穴状遺構はともに出土した遺物が引田式から佐平林式である古墳時代後期のものと、8世紀後半から9世紀初頭の表杉ノ入式期に大別される。古墳時代後期の住居跡は調査グリッドG-9からI-10に分布し、8世紀後半から9世紀初頭の表杉ノ入式期の住居跡はB-4からE-6にかかる地点に分布しており、明瞭に区分することができる。古墳時代後期の住居群と平安時代の住居群には年代的な開きがあることから直接的な関係を推測することはできないが、この地域が古墳時代後期と平安時代には集落跡として利用されていた地域であるといえる。古墳時代後期の住居跡に関連する可能性がある墳墓については北側丘陵上に大磯横穴墓群・館前古墳A・館前古墳B・鎮塚古墳群などが所在している。しかしこれらの古墳の調査例はほとんどなく、かろうじて大磯古墳群の発掘調査が実施されている程度である。しかし大磯古墳群の調査についての詳細は不明であり、町遺跡で検出された古墳時代後期の住居跡と墳墓との関係は不明である。

検出した堅穴住居跡や堅穴状遺構は掘立柱建物跡や溝跡との重複関係にあり、堅穴住居跡や堅穴状遺構は掘立柱建物跡よりも古いことが確認されている。掘立柱建物跡と堅穴住居跡が直接的な重複関係にあるのは5号掘立柱建物跡・5号堅穴住居跡・6号堅穴状遺構であり、3号掘立柱建物跡・3号堅穴住居跡の重複が確認されている。3号堅穴住居跡は8世紀後半から9世紀初頭の年代が想定されており、それを切る3号掘立柱建物跡は3号堅穴住居跡が廃絶した後に建てられた掘立柱建物跡であるといえる。3号掘立柱建物跡は建物跡の桁行、つまり建物跡の軸方向が真北方向から東に偏する建物跡であり、同様の特徴を有する建物跡は2号掘立柱建物跡である。よって2号・3号掘立柱建物跡は築造規格を同じにする建物跡であると判断され、2号・3号掘立柱建物跡は8世紀後半から9世紀初頭より後に作られた建物群であると考えることができる。

2号・3号掘立柱建物跡と造営意図が異なる建物跡としては軸方向が真北方向に揃う1号・4号・5号掘立柱建物跡がある。2号・3号掘立柱建物群と1号・4号・5号掘立柱建物群とは直接的な重複関係にはなく、掘立柱建物造営の新旧関係を見出すことできない。

町遺跡で検出された掘立柱建物跡は、8世紀後半から9世紀初頭になると建物跡の軸方向が真北方向から東に偏する建物群が登場する。隣接する泉廃寺跡では建物跡の軸方向が真北方向より東に偏する建物群は7世紀後半から8世紀初頭にかけて造営された建物群であると想定されており、郡衙造営の中で比較的早い段階に登場する建物群の特徴である。よって町遺跡の建物跡の軸方向が東に偏する2棟の掘立柱建物跡は、泉廃寺跡の建物群の造営意図に当てはまると判断するには年代的な開きがあり、町遺跡における建物変遷は泉廃寺跡の変遷と連動するとは考えにくい。よって、町遺跡で検出された5棟の掘立柱建物群のうち、2号・3号掘立柱建物跡は8世紀後半から9世紀初頭の年代を与えることができるが、1号・4号・5号掘立柱建物跡の造営年代は8世紀後半から9世紀初頭に前後する時期のものであると消極的な評価をせざるを得ない。

町遺跡は、立地的な関係から泉廃寺跡に関連する遺跡であると考えられるが、集落内の建物変遷は郡衙内の建物変遷とは異なった動きをし、集落構造にあわせて独自の変化を行うものと推測される。

出土した土器は土師器と須恵器があり、調査の段階に遺構にともなわずに出土し遺構外出土遺物として取り扱ったものが多い。大観すると土師器は杯・甕・高杯・高台付杯・高台杯皿・蓋・甔・壺があり、集落跡から出土する日常什器の類が多い。時代的に大別すると古墳時代後期の引田式から佐平林式の土器群・奈良時代の国分寺下層式の土器群・平安時代の表杉ノ入式の土器群に分けられる。しかし古墳時代後期から奈良時代の栗圃式の土器群は出土していないといった特徴がみられる。このような土器の変遷は遺構外出土遺物の杯で顕著に見られる。図34の1から6は非ロクロ整形の杯であり、底部から内湾気味に立ち上がる体部を有する。口縁部は口辺部で括れ外反しておさまる。内面には口縁部の括れが原因の稜線が形成される。内面には黒色処理は施されない。このような杯の特徴は古墳時代後期引田式から佐平林式の特徴であると考えられる。国分寺下層式に比定できる資料は7から17である。非ロクロ整形による杯

で、丸底の底部から口縁部にいたる。口縁部は外反せず立ち上がる。外面にはヘラケズリを主とする調整が施され、内面には黒色処理が施される。さらに平安時代の表杉ノ入式の土器は18から32である。ロク口整形による杯で、底部には回転ヘラケズリによる再調整が施される。内面には黒色処理が施される。これらの杯には古墳時代後期から奈良時代初頭の栗罎式の内黒処理を施した有段杯は見られない。

このような土器のあり方は、町遺跡が所在するこの地域において最もはじめに集落が登場するのが古墳時代後期になってからであることを示している。古墳時代後期の引田式から佐平林式期の間で登場した集落跡は、栗罎式期までは存続せず集落は途絶えてしまう。また、明瞭な遺構は確認されていないが、国分寺下層式期である奈良時代になると再度集落跡が営まれるようになるが、集落跡は平安時代まで営まれ町遺跡の堅穴住居跡や掘立柱建物跡はこの時期のものである。集落は10世紀代のいわゆる赤焼土器が出現するまでは存続しない。

このような変遷の背景には古墳時代後期の集落には北側の丘陵に所在する後期古墳との関連が想定され、古墳が造られなくなるとともに集落は廃絶してしまう。更に奈良時代の集落が登場する原因はこの地に行方郡衙である泉廃寺跡が造営されたことに起因すると考えられ、集落跡は平安時代まで続き10世紀以前に廃絶してしまう。集落の廃絶は行方郡衙の衰退に連動した動きととらえることができる。

このように町遺跡の遺構、遺物のあり方は、泉廃寺跡の造営以前から廃絶までの時期を大観することができ、今後泉廃寺跡の変遷や泉廃寺跡を含めた周辺地域の変動を知るうえで非常に有効な指標を得ることができたと評価することができよう。

参考 引用文献

- 1984 戸田 有二 「群馬県吉井町下五反田・末沢窯跡」 「福島県原町市・入道迫瓦窯跡」
『考古学研究室発掘調査報告書』 国士館大学文学部考古学研究室
- 1985 長谷川 厚 「東国における律令成立までの土器様相と
その歴史的動向の成果と課題」 『東国土器研究』 東国土器研究会
伊藤 博幸 「陸奥国における黒色土器」 『東国土器研究』 東国土器研究会
木本 元治 「福島県内の黒色土器（平安時代）」 『東国土器研究』 東国土器研究会
- 1995 須藤 隆 今泉隆雄他 「新版古代の日本 ⑨東北・北海道」 角川書店
- 1996 加藤 道男 「東北地方の古墳時代の土器（土師器）」 「南小泉式土器」
「引田式土器」 「住社式土器」 「栗罎式土器」 『日本土器辞典』 雄山閣
- 1996 戸田 有二 柳沼賢治 「福島県の7世紀の土器」 「福島県の8世紀の土器」
「福島県の9世紀の土器」 『日本土器辞典』 雄山閣
- 1996 柳沼 賢治 「福島県の10世紀の土器」 『日本土器辞典』 雄山閣
- 1997 宇佐美雅夫 「赤粉遺跡」 榎葉町教育委員会
- 2000 堀 耕平 「泉廃寺跡」 『原町市内遺跡発掘調査報告書5』 原町市教育委員会
- 2000 荒 淑人 「広畑遺跡」 『県営高平地区は場整備関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
原町市教育委員会

第2編 法幢寺跡

第1章 調査に至る経過

第1節 調査経過

当遺跡の現況は原町市泉字寺前の低地丘陵の南斜面裾に位置する畑地であった。この地点ではこれまで遺跡の存在が周知されていなかったことから、造成工事を着工したところ、工事中にまとまって土器等の遺物が出土したため、工事を一時中断し、遺跡の範囲と遺構の分布状況を把握するため試掘調査を実施した。その結果、平安時代の集落と近世墳墓群の存在を確認した。また、北東約80mの低地丘陵の中腹に相馬氏の一族岡田氏の墓地（法幢寺の開山碑・近世の墓石等）があるほか、その山裾には寺の本堂や山門があったと伝承されていることを確認した（図2）。また、江戸時代末に編さんされた相馬中村藩の地誌『奥相志』中郷 泉村の項に、泉村に法幢寺という寺院の存在が記述されており（註1）、今回の調査地区は現在では廃寺となっている法幢寺の墓地跡と推定された。このような経過で、福島県相双農地事務所（当時）と協議の結果、本調査を実施し記録保存を行うこととなった。

なお、今回の高平地区ほ場整備事業に係る発掘調査の翌年度（平成9年度）には、北側と北西側の市道拡幅範囲の本調査をおこなっており、新たに住居跡や多数の土壌が検出されているが（第2次調査区）、別事業であるため、別途報告書を刊行する予定である。

第2節 調査要項

- 1 遺 跡 名 法幢跡（ほうとうじあと・遺跡番号2060277）
- 2 所 在 地 福島県原町市泉字寺前427外
- 3 遺跡の性格 弥生時代の土器棺墓（1基。弥生土器）
平安時代の集落（竪穴住居跡7軒・掘立柱建物跡5棟・溝17条。
土師器・須恵器・羽口・鉄滓）
江戸時代の土壌（163基。古銭（文久永宝・寛永通宝）・キセル・和鏡・
陶器・漆
器・人骨・鉄鍋・棺桶・棺箱）
- 4 調 査 期 間 （試掘調査）平成8年8月21日～平成8年9月6日
（本調査）平成8年9月24日～平成8年11月16日
- 5 調 査 面 積 3,551m²
- 6 調 査 体 制 原町市教育委員会

- 7 調査担当 原町市教育委員会生涯学習部文化課
 発掘調査係 主任文化財主事 堀 耕平 (試掘調査)
 副主査 鈴木 文雄 (本調査)
- 8 事務局体制 原町市教育委員会 教 育 長 井村 寛
 生涯学習部 部 長 中善寺敏行
 次 長 佐藤 禎一
 参事兼文化課長 佐藤 一男
 文化振興係長 高田 毅
 主 査 木幡 雅巳
 文化財主事 荒 淑人
 事務補助 館岡 るみ
- 発掘補助員 (試掘調査) 滝沢輝雄・佐久間政好・佐藤 昭・白石正男・遠藤 明・
 木幡春江・杉浦桂子・玉木セツ子・新妻順子・八木米子・加賀田勇一・
 新開光子・玉木 清・鈴木伸子
 (本調査) 小元智・鈴木伸子・志賀セツ子・荒川幸雄・佐藤フクイ・
 武山民男・藤田正司・平音次郎・門馬 誠・阿部定雄・宇佐美實・
 宇佐美茂子・佐藤時雄・佐藤敏雄・門馬正光・大野利雄・白石正男・
 原田三郎・山田春雄・遠藤 明・木幡春江・杉浦桂子・玉木 清・
 玉木セツ子・新妻順子・八木米子・高井孝子・米津 豊・西 幸吉・
 西 敏子・真壁ヨシ子・栢本 充・加賀田勇一・新開光子・遠藤キミ子・
 北山富子・志賀秀夫・志賀とも子・稲村丑治・寺島日出雄・
 五十嵐フミ子・草野八重子・青田博子・相良英樹
- 整理補助員 寺内美智子・古谷洋子・遠藤和子・太田正子・山本恵子

第2章 遺跡の概要

第1節 位置と地形

法幢寺跡は常磐線原ノ町駅から北東約3kmに位置する。新田川に開析された沖積地と、原町市と鹿島町の間を東西方向に続く丘陵地との境の丘陵部から丘陵裾部に立地している(図1)。今回の調査地区は標高10~11mを測る南向きの緩斜面の畑であった。

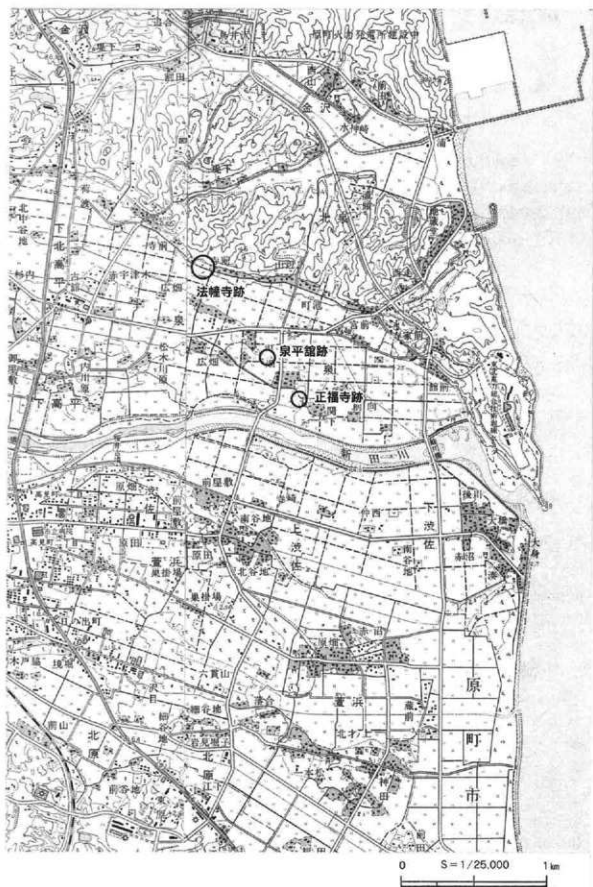


図1 法幢寺跡位置図

第2節 周辺の遺跡

(1) 弥生時代の遺跡

南方の新田川対岸に、弥生時代中期の桜井式土器の標式遺跡である高見町A遺跡に代表される桜井遺跡群がある(註2)。

(2) 平安時代の遺跡

東方に奈良・平安時代の隆奥国行方郡衛跡に比定される泉庵寺跡(註3)、泉庵寺跡周辺の町遺跡・広畑遺跡(註4)、東日本最大規模の製鉄遺跡である金沢製鉄遺跡群(註5)、南方に平安時代の小鍛冶遺構を伴う相馬胤平居館跡などがある(註6)。

(3) 江戸時代の遺跡

南東に法幢寺を氏寺とした岡田氏の居館跡である泉平館跡がある。館跡の本体部分は未調査であるが、ほ場整備に伴う周辺部分の発掘調査で、部分的な畝掘りの濠や橋跡とみられる遺構が検出されている(註7)。さらに南東には18～19世紀の礫を積み重ねた火葬墓群が確認された正福寺跡が位置している(註8)。東の地藏堂B遺跡では複数の土葬墓と頭に鍋を被せた葬法もみられる(註9)。

第3節 法幢寺跡

『奥相志』中郷(原町市)の項には、法幢寺について以下の記述がある(註10)。

岡田山法幢寺 寺前にあり。曹洞宗岡田山同慶寺の末寺。本尊観世音木仏坐像、釈迦如来。寺田十二石三斗一升明暦中十石七斗四升四合六勺、貞享中十石九斗六升二合四勺(泉邑)、延享中十石七斗四升五合。

開山同慶五世器夷慈仙和尚、大檀超岡田氏累代の功德院なり。靈屋あり。在昔元亨中岡田胤盛胤康父子重胤公に従ひ、総州より行方郡にうつる。公太田邑に在り、岡田氏院内邑後井内に作るに居り。法幢寺は岡田氏に随ひて総州より来りてこゝに居り。正中三年より公小高城に在り、岡田氏岡田壘に移り、寺も亦之に従ふ今同邑長泉院前に寺跡あり。今泉の寺境はもと泉氏当邑に居り、その牌所東泉院の趾なり此地往古天台宗の院所にして山の寺と号すと伝ふ。慶長二丁酉年泉氏当邑を去り。東泉院亦退院す。こゝに於て岡田胤盛岡田邑より泉邑にうつる今下町の地に古壘あり。寺亦随ひて東泉院跡にうつる。昔は末寺二箇所あり。泉陽寺修藏院と号せり。ともに廃絶して寺跡のみあり法幢十世要道代修藏院号を中村仏立寺に譲るといふ。元禄中当山七世州音の時、寺城新堀の替地境内の山除地となる。西塔中林は古昔より除地なり。享保中八月世江、寺格の廃せるを挙げて古格に復し、蒼龍寺の次に叙す。同年号中、月江郷里に托鉢し、古の洪鐘大破せしを

改鑄し、且つ小鐘太鼓を寄附し、又六地藏を建つ。同年号中覺嚴代、月江の遺領を以て山門樓閣を建つ。古往泉長者、藤権現助請の社跡寺域の山頂にあり。故に当山十一世鉄心こゝに小宮を建て、之を祀れり。伽藍護神白山権現祠は境内にあり。

世牌

初祖道元禪師尊牌、同慶五世当寺開山器與仙大和尚永祿七年甲子八月三日示寂、二世邦安泰和尚年月不知朔日寂、三世の室端朔日寂、四祥山堯二十五日寂、五伯仙龍明曆二申正月二十三日寂、六興山隆貞享三寅三月三日寂、七一空音円応寺に転ず、八月江心同慶寺に転ず示寂、九密岩巖蒼龍寺に転ず、十廓山道元文五庚申十月四日寂、十一鉄心牛蒼龍寺に転ず、十二月江之円応寺に転ず、十三祖岳門蒼龍寺に移転して隠居、十四大賢心蒼龍寺に転ず、十五孔天頤、十六鉄山、十七魯禪、十八真牛義天天明中の住僧。

合院

海月山清光院 もと萱浜邑にあり。曹洞宗小高山同慶寺の末寺。本尊文殊菩薩。開山同慶三世園庵和尚。文政中当寺を法幢寺に合す。萱浜邑の下に寺跡を記す。本尊釈迦如来。

世牌

永平古仏尊牌、同慶三世当院開山仲庵の大和尚天文十五丙午十月二十三日示寂、二世無庵岳、三世山如護法院に転ず、四教真説真光寺に転ず、五芦庵舟、六純長秀、七祖岳法幢寺に移転す、八孔天光照寺に転ず、九祖宗、十竹庵丈安永七戊十二月二十三日金竜寺に於て寂す、十一巨山全戒後甲州に住す十二大超道天明四辰五月十日寂、十三欽山松山寺に移転、十四寿山、十五堤山天明中の住僧。

普門山龍禪寺 もと下高平邑にあり。同慶寺の末寺。本尊観世音古仏靈作。故に普門院と号すといふ。門山同慶六世祖堂和尚。古昔金沢氏の牌所なり。寛政中当寺を法幢寺に合す下高平邑の下に寺跡を記す。

世牌

初祖仏法禪師尊牌、総持開山瑠山禪寺尊牌、同慶六世当寺開山祖堂初大和尚永祿十丁卯三月二十一日、二世覺道幻延享四丁卯十二月二十六日寂、開山より二世まで百余年の間住持無かりしか、三世深心英洞雲寺に転ず、宝曆三丑六月六日寂、四天山鳳善光寺に転じて寂す。五祖心牛妙徳院に転ず、六泰心祖広天明中住。

奥志志によれば、岡田山法幢寺は相馬重胤の奥州下向に随った岡田胤盛・胤康父子とともに下総(現、千葉県西北部)から奥州行方郡(現、福島県相馬地方)に移された岡田氏の菩提寺であった。法幢寺は相馬重胤に従って行方郡内を移住した岡田氏とともに移転を繰り返した。その最初は元亨年間(1321～1324)相馬重胤が別所館(現、原町市中太田)に移り住んだのが元亨3年(1323)に院内邑(後、井内)への移転であった。2回目の移転は、相馬重胤が小高城(現、相馬郡小高町小高)に移った正中3年(嘉暦元年)(1326)で、岡田氏も岡田邑の長泉院(廃寺)(現、相馬郡小高町岡田)の前に移っている。3回目に移ったのが慶長2年(1597)

岡田宣胤の代に泉村（現、原町市泉）に居住した泉氏の牌所であった東泉院の跡である。かつては2つの末寺を持ち、享保年間（1716～1736）には山門楼閣を構えていたが、江戸時代末（19世紀後半）には曹洞宗小高山同慶寺（相馬家の菩提寺）の末寺となっている。今回発掘調査を実施したのは、3回目の移転先である泉に建立された法幢寺の墓域である。

第3章 調査の方法

第1節 試掘調査

遺物が出土した畑と周辺の丘陵南斜面裾部の畑に、幅2m、長さ15～20mの試掘トレンチを10本設定し（対象面積4,000㎡に対し試掘面積388㎡、約10%）、バックホーにより表土（厚さ約30cm）除去を行った後、人力で遺構検出作業を行った（図3）。

試掘調査の結果、調査区の西側半分からは住居跡・土壇などの遺構と、弥生土器・平安時代の土師器・須恵器などの遺物が出土したが、東側半分からは遺構・遺物は確認できなかった。

第2節 本調査

試掘調査の結果に基づき、対象範囲4,000㎡の西側半分2,800㎡を本調査範囲とした。

初めにバックホウで表土（畑耕作土）の除去を行い、その後人力で遺構検出作業をおこなった。その結果、数軒の竪穴住居跡と掘立柱建物跡、それらと重複する多数の土壇プランを検出した。今回の調査範囲と北東の丘陵の中腹にある近世墓群さらに「奥相志」に「古往泉長者、藤権現勧請の社跡寺域の山頂にあり。故に当山十一世鉄心こゝに小宮を建て、之を祀れり」という記述から（註11）、東西約200m・南北約200mの範囲を遺跡の範囲としてグリッドを設定した。

グリッドは第9座標系、 $X = 183.950$ 、 $Y = 102.950$ を原点として50m四方の大グリッドを設定し、さらに大グリッドを5m四方の100の小グリッドに分割し、基準点を設定した。今回の調査地区は、D1・D2グリッドで、 $X = 183.770$ 、 $Y = 103.000$ 附近である。

遺構の重複が多いため、精査は遺構の新旧関係を検討しながら、江戸時代の土壇精査の後に平安時代の住居跡・掘立柱建物跡等の精査を行った。

写真撮影は遺構の半裁状況・遺物出土状況・全景等を各遺構精査の都度おこなった。空中写真撮影は業者に委託しラジコンヘリを使用した。

遺構の実測は各遺構精査の都度、セクション図と平板測量および簡易遣り方測量によって平面図を作成した。遺構配置図は測量業者に委託して基準点をもとに平板測量を行った。

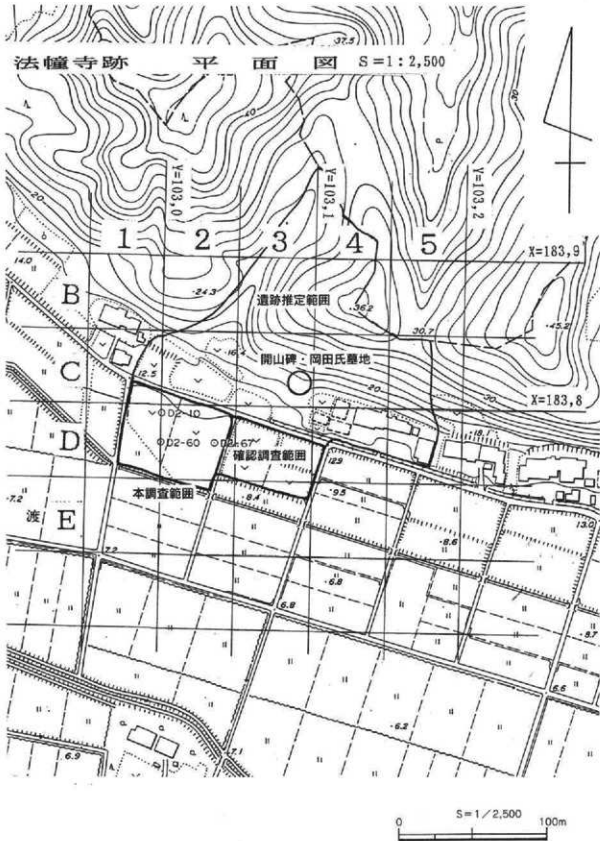


図2 法幢寺跡平面図

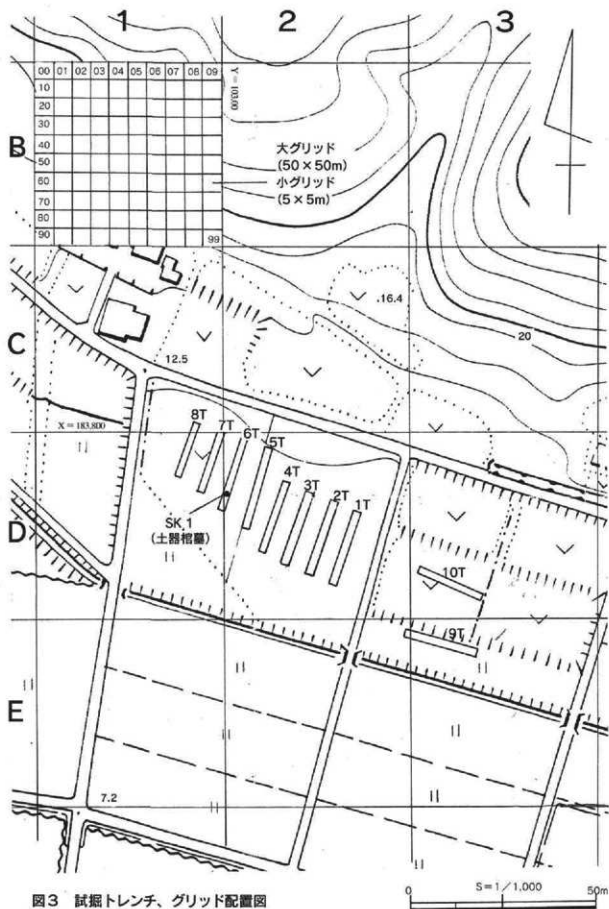


図3 試掘トレンチ、グリッド配置図

第4章 調査成果

第1節 弥生時代

土器棺墓1基を検出した。

(1) 土器棺墓

SK1 (図5・6)

遺構

試掘調査の段階で、6号トレンチから土器棺墓1基を検出した。墓坑の掘り方は上面で48×42cm・底面で直径17cm・深さ30cmの楕円状の土壌に、正位に底部穿孔の壺を埋納している。

遺物

壺は胴部上半が畑の耕作によって大部分が欠損しているが、胴部最大計40cm、残存高29cmを測る桜井式の壺で、胴部上半には沈線文による4単位の三角形文で、胴部下半には縄文が施文されている。壺の底から別固体の壺の破片が出土していることから、合わせ口の土器棺であったと考えられる。

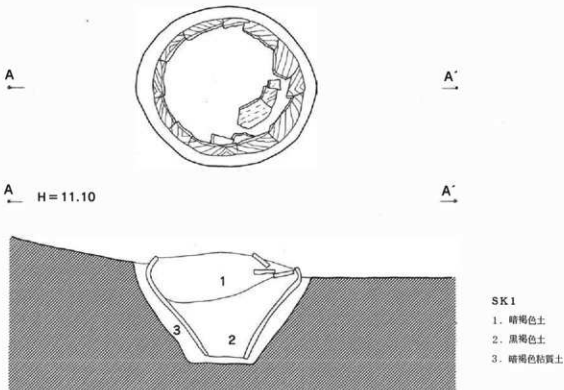


図5 SK1

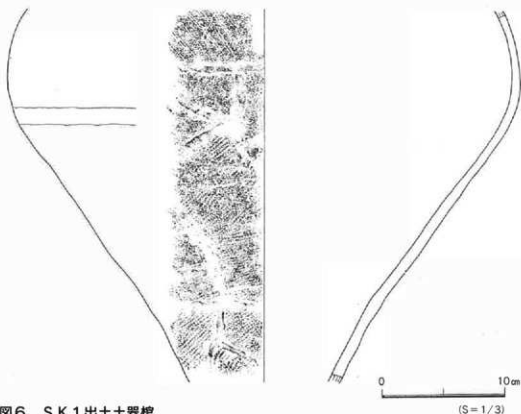


図6 SK1出土土器館

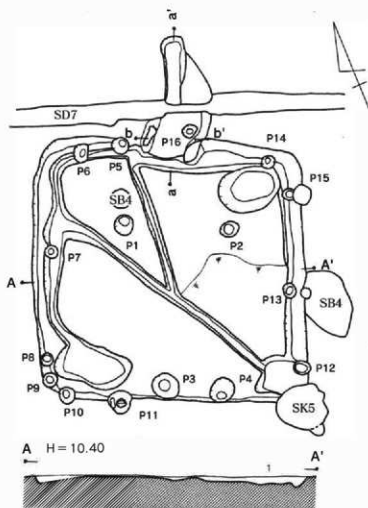
第2節 平安時代

竪穴住居跡7軒、掘立柱建物跡5棟、溝跡15条を検出した。

(1) 竪穴住居跡

S11 (図7・8)

位置 D1-28・29・38・39グリッドに位置する。重複関係 SB4・SD7・SK5に切られる。主軸方位 N-21°-E 平面形 正方形 規模 長軸4.35m×短軸4.17m×深さ0.29m カマド 北壁に位置する。カマド材は黄色砂質土である。天井部は土圧により崩落している。煙道部は北壁から2m北にのび、SD7に切られている。覆土 暗褐色土。自然堆積による覆土。床 起伏に富むが堅緻な貼床。ローム層を掘り込み、直接貼床を構築している。ピット 各々の計測値は表の通りである。深さは床面からの計測値である。当住居跡では16個が確認されている。位置・規模からみてP1・2が主柱穴と考えられるが、これらと対面する位置には柱穴は認められない。P3は住居中軸上に乗る、入口施設に関連する柱穴の可能性ある。壁際に接するP4～15は、壁柱穴と考えられる。周溝 住居東・西・北壁際をめぐる。幅0.55～0.18m×深さ0.10m。なお、住居西辺部の周溝は、住居西壁際より0.10～0.20mほど内側をめぐる。また南西隅部には、住居床面より0.03～0.05mほど低い不整槽



SI1ピット計測値 (m)

	長径	短径	深さ
P 1	0.31	0.29	0.16
P 2	0.30	0.25	0.26
P 3	0.46	0.39	0.24
P 4	0.39	0.35	0.44
P 5	0.28	0.25	0.33
P 6	0.28	0.22	0.23
P 7	0.22	0.19	0.17
P 8	0.19	0.18	0.13
P 9	0.22	0.21	0.18
P10	0.26	0.23	0.17
P11	0.40	0.35	0.24
P12	0.26	0.20	0.21
P13	0.23	0.21	0.10
P14	0.22	0.21	0.19
P15	0.18	0.14	0.14
P16	0.23	0.21	0.07

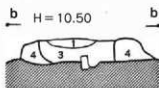
土層説明 (A - A')

1. 暗褐色土：粘性なし。しまり中。
所々に炭化物を含む。

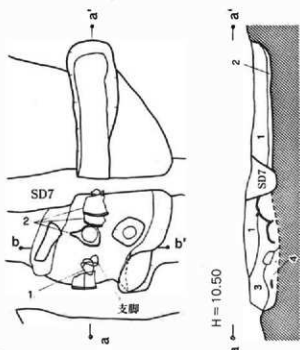
A H = 10.40



0 2m
(S=1/60)



0 1m
(S=1/30)



カマド土層説明 (a - a'・b - b')

1. 暗褐色砂質土
2. 暗黄褐色砂質土
3. 黄色砂質土
4. 黄色砂質土 (袖部)

図7 SI1

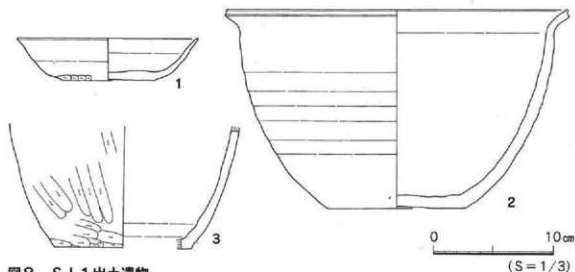
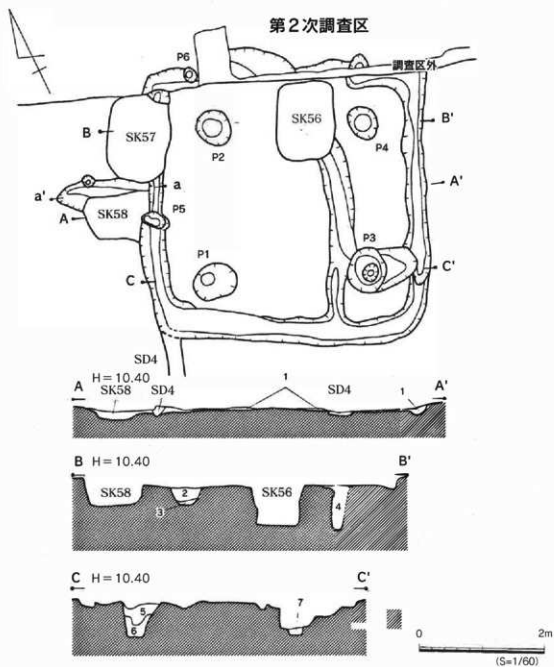


図8 S11出土遺物

円形の落込みが認められ、周溝はこれと連結している。また、住居南東隅にも落込みが認められ、この落込みから北西方向へ、幅0.15～0.18m×深さ0.06mほどの溝がのびている。この溝は住居中央部で二又に分かれ、一方は住居西辺の周溝に、他方は住居北辺の周溝に連結している。貯蔵穴 住居北東隅部（カマド右脇）には、長径1.00m×短径0.67m×深さ0.21mの楕円形の掘り込みがみられ、貯蔵穴と考えられる。遺物の出土状況 カマド火床部直上から、土師器杯・鉢、支脚が出土している。出土遺物 土師器杯1点、鉢1点、支脚1点が出土した。1は土師器杯で、ロクロ調整、外面体部下端から低部にかけて手持ちラケズリが見られる。2は土師器鉢で、内・外面に回転台によるナデが施されている。底部外面には手持ちヘラケズリが見られる。備考 本住居跡を囲むような位置にSD6溝がめぐるため、SD6は本住居跡に伴う可能性がある。

S12 (図9・10・11)

位置 D2・00・01・10・11グリッドに位置する。重複関係 SD4・SK56・57・58に切られる。主軸方位 N-62°-W 平面形 正方形 規模 4.48m×4.61m×深さ0.15m カマド 西壁に位置する。SK58に南側を切られており、大半が失われている。煙道部は住居西壁から1.50m西へのびる。袖部は遺存していなかったが、住居覆土に黄色砂質土が混入しており、カマド材と考えられる。覆土 暗褐色土。自然堆積による覆土。厚さ10cmほどしか遺存していなかった。床面直上に堆積した層には、焼土や木炭粒が多量に含まれていた。床 やや起伏があるが堅緻な貼床。ローム層を掘り込み、直接貼床を構築している。ピット 6個が確認された。このうちのP1～4が、本住居跡に伴う主柱穴と考えられる。周溝 住居北側部分が調査区外にかかるため、北側については不明であるが、東・西・南側壁際では途切れることなく全周している。住居北壁では、周溝を掘削した後にカマドを構築している。また、住居東壁周溝の西約1.30mの位置に、これと平行する溝が検出された。この溝は、住居南壁の周溝に連結している。遺物の出土状況 床面直上から土師器杯が、カマドから須



S12ピット計測値 (m)

	長径	短径	深さ
P1	0.69	0.53	0.37
P2	0.59	0.52	0.33
P3	1.12	0.71	0.48
P4	0.56	0.44	0.72
P5	0.37	0.22	0.24
P6	0.24	0.19	0.05

土層説明 (A-A'・B-B'・C-C')

1. 暗褐色土：黄色砂質土少量含む。
2. 黒褐色土
3. 暗黄褐色土：黄色砂質土多量含む。
4. 黒褐色土
5. 黒褐色土
6. 暗黄褐色土：黄色砂質土多量含む。
7. 暗褐色粘質土：黄白色粘質土を含む。

図9 S12

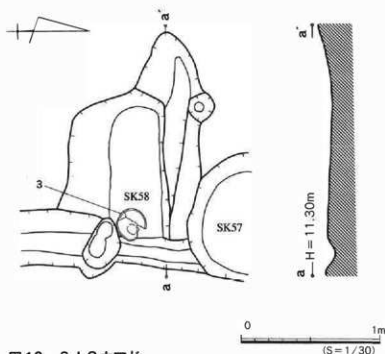


図10 S12カマド

惠器広口壺が出土した。出土遺物 土師器杯2点(図11-1・2)、甕2点(4・5)、須惠器広口壺1点(3)が出土した。1はやや丸みを帯びた底部に弱く外反する口縁部をもつ坏である。口縁部外面にナデ、体部～底部にヘラケズリ、内面全面にミガキが施されている。2は内面にヘラミガキ・黒色処理が施され、口縁部外面にナデ、体部～底部外面にヘラケズリが施された坏である。3は回転台によるナデが施された須惠器広口壺である。口縁部は強く外傾し、口縁端部がつまみあげられ直に立つ。外面体部下端および低部外周に回転ヘラケズリが施されている。4は甕で、胴部上半以上が出土している。体部は丸みをもって立ちあがり、口縁部は大きく外反する。口縁端部はつまみあげられやや内傾する。外面は口縁部から胴部上半に回転台によるナデ、以下に縦位のヘラケズリが施されている。備考 本住居跡は、当調査区検出の堅穴住居群中、唯一カマドを西壁に持つものである。

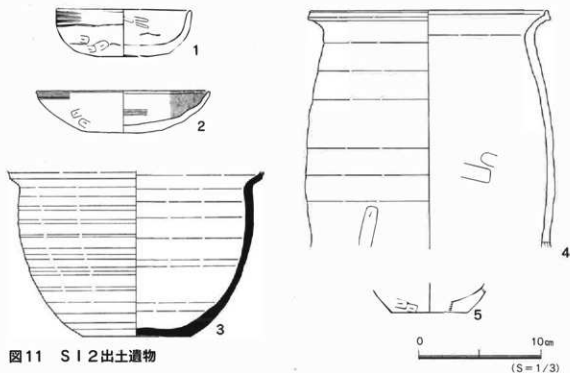


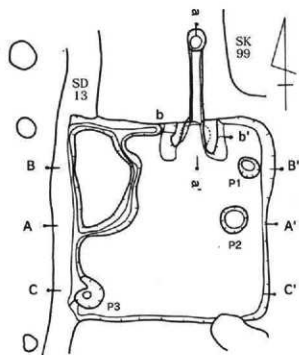
図11 S12出土遺物

S13 (図12・13)

位置 D2・34・35グリッドに位置する。重複関係 SD13に切られる。主軸方位 N-17°-E 平面形 正方形 規模 3.17m×3.24m×深さ0.27m カマド 北壁に位置する。黄色砂質土をカマド材とする。煙道部は住居北壁より1.43m北へのびる。覆土 暗褐色土。自然堆積による覆土。厚さ約0.20mが遺存していた。床 平坦で堅緻な貼床。ローム層を掘り込み、直接貼床を構築している。ピット 3個を確認した。周溝 住居北壁から西壁にかけてめぐる。幅0.31～0.18m×深さ0.16m。なお、住居北西部の床面で、周溝に連結する浅い溝を確認している。遺物の出土状況 カマド右袖付近の床面から、土師器がまともに出て出土している。また、カマドの覆土内から土師器片・焼土が出土している。出土遺物 須恵器杯1点、甕1点、土師器杯4点、碗1点、甕3点が出土した。1は須恵器杯である。体部から口縁部まで真っ直ぐ立ちあがる。ロクロ調整、底部外面は回転ヘラケズリにより調整されている。2は須恵器の甕である。頸部から口縁部には内・外面とも回転台によるナデが施され、胴部外面には平行タタキ目、内面には無文当て具痕を残す。3～6は土師器の杯である。3は半球状の器形をもち、内面全面にヘラミガキ、口縁部外面にナデ、体部から底部に手持ちヘラケズリにより調整が行なわれている。内・外面とも黒色処理が施されている。5はロクロ調整の坏で、体部から口縁部まで真っ直ぐ立ちあがる。底部外面には回転糸切り痕を残す。内面には黒色処理が施されている。6もロクロ調整の坏である。外面体部下端に手持ちヘラケズリが施されている。底部外面には回転糸切り痕を残す。7は高台をもつ碗である。内・外面とも全面にヘラミガキ、黒色処理が施されている。8～10は土師器の甕である。8はやや丸みのある底部、弱く丸みをおびて立ちあがる胴部、強く外側に屈曲する口縁部をもつ。内面は口縁部にナデ、以下はヘラナデが施されている。外面は口縁部にナデ、以下にヘラケズリによる調整がみられる。10は回転台による調整が施された甕である。

S14 (図14・15・16)

位置 D2・46・47・56・57グリッドに位置する。重複関係 SI5・6を切り、SK92・142に切られる。主軸方位 N-22°-E 平面形 正方形 規模 4.38m×4.40m×深さ0.32m カマド 北壁に位置する。黄色砂質土をカマド材とする。煙道部は住居北壁より1.70m北へのびる。覆土 暗褐色土。自然堆積による覆土。床面直上の層は、黄白色粘質土を多量に含んでいる。床 やや起伏があるが堅緻な貼床。ローム層を掘り込み、直接貼床を構築している。住居中央部の床面が一部被熱している。ピット 13個を確認した。このうちP1～P4が、位置・規模から本住居跡に伴う主柱穴と考えられる。また、P8・9・12も比較的深く、補助的な柱穴の可能性がある。P5はカマドに對面する位置にあり、入口施設に関連するピットと考えられる。周溝 北壁のカマド部分で途切れる以外は全周するものと思われる。幅0.43～0.20m×深さ0.11m。なお、カマド内より南方向へ、周溝と同規模の溝が走る。出土遺物 土師器杯3点、小形甕1点が出土した。1・2は非ロクロ、3はロクロ



S13ピット計測値 (m)

	長径	短径	深さ
P1	0.35	0.32	0.11
P2	0.44	0.41	—
P3	0.45	0.42	0.16

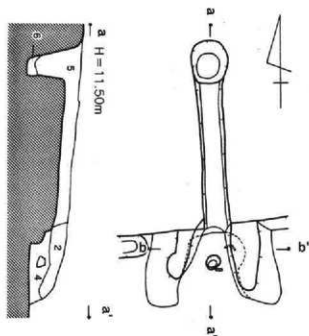
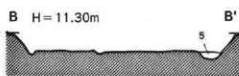
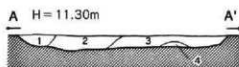
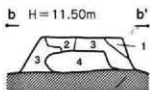


図12 S13



土層説明 (A-A'・B-B'・C-C')

1. 暗褐色土：黄色砂質土粒多量含む。
2. 暗褐色土：黄色砂質土粒少量含む。
3. 暗黄褐色土：黄色砂質土粒少量含む。
4. 暗褐色土
5. 暗褐色土
6. 暗褐色土



カマド土層説明 (a-a'・b-b')

1. 暗褐色砂質土
2. 暗褐色土：木炭粒を含む。
3. 黄色砂質土：カマド材。
4. 暗赤褐色砂質土：木炭粒、焼土多量含む。
5. 暗褐色土：木炭粒を含む。
6. 濃暗褐色土：木炭粒を含む。

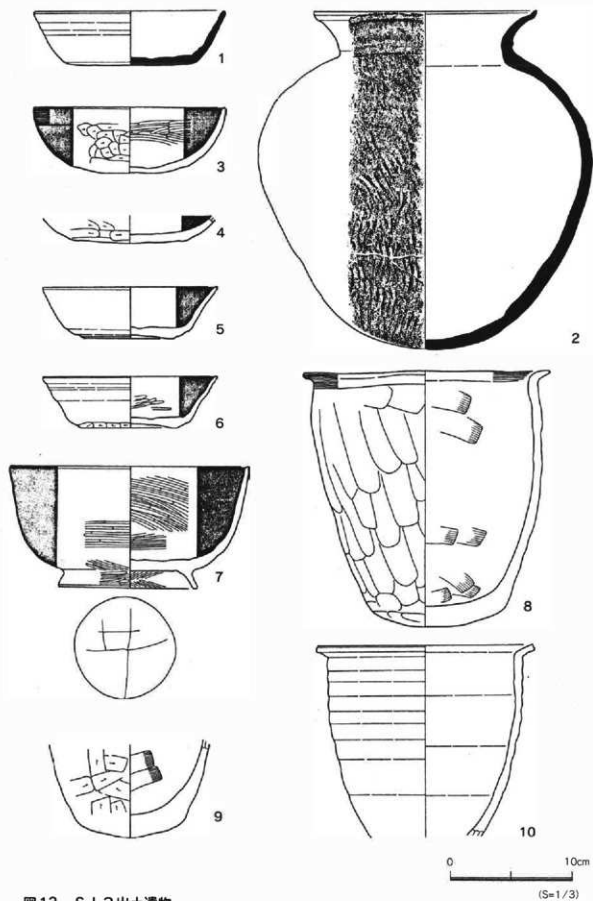
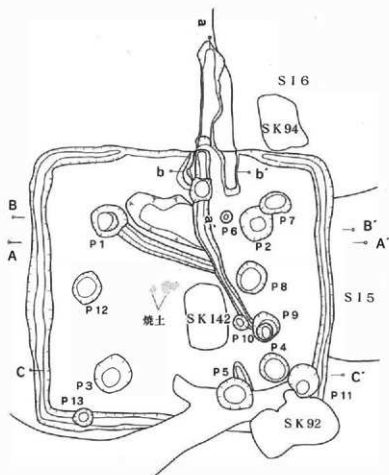


図13 S13出土遺物



S14ピット計測値 (m)

	長径	短径	深さ
P1	0.55	0.51	0.67
P2	0.57	0.55	0.18
P3	0.62	0.58	0.63
P4	0.48	0.44	0.39
P5	0.61	0.52	0.33
P6	0.18	0.18	0.30
P7	0.50	0.34	0.45
P8	0.50	0.48	0.30
P9	0.45	0.43	0.47
P10	0.24	0.21	0.24
P11	0.52	0.49	0.25
P12	0.53	0.42	0.60
P13	0.30	0.28	0.25



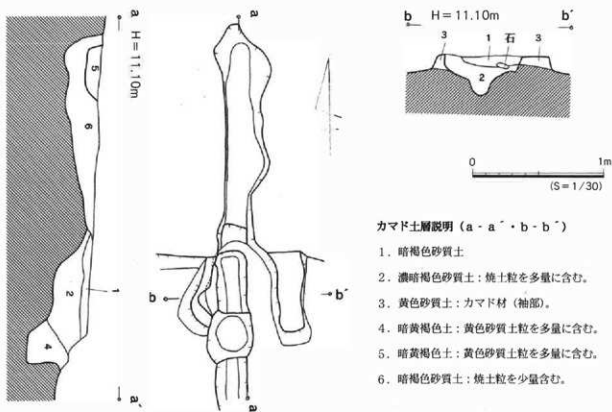
土層説明 (A - A')

1. 暗褐色土：
木炭粒含む。
2. 暗褐色土：
黄白色粘質土多量含む。



(S = 1/60)

図14 S14



カマド土層説明 (a - a'・b - b')

1. 暗褐色砂質土
2. 濃暗褐色砂質土：焼土粒を多量に含む。
3. 黄色砂質土：カマド材（袖部）。
4. 暗黄褐色土：黄色砂質土粒を多量に含む。
5. 暗黄褐色土：黄色砂質土粒を多量に含む。
6. 暗褐色砂質土：焼土粒を少量含む。

図15 S14カマド

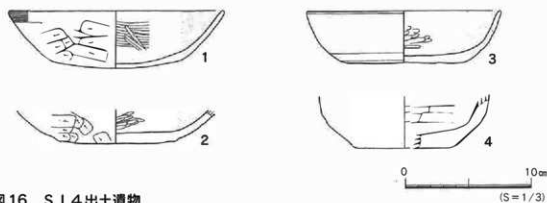
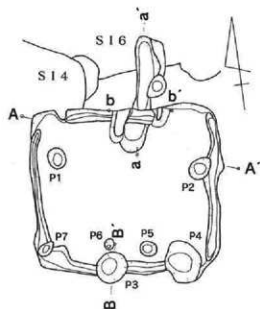


図16 S14出土遺物

調整の坏である。いずれも内面にミガキ、黒色処理が施されている。備考 貼床の一部に被熱がみられ、住居内に近接するSD14からフイゴ羽口が出土しており、小規模な鍛冶炉が存在していた可能性がある。

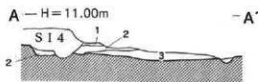
S15 (図17・18)

位置 D2 - 47・48・57・58グリッドに位置する。重複関係 S16を切り、S15に切られる。主軸方位 N - 6° - E 平面形 正方形 規模 2.62m×3.06m×深さ0.09m



S15ピット計測値 (m)

	長径	短径	深さ
P1	0.32	0.27	0.25
P2	0.39	0.28	0.39
P3	0.52	0.48	0.29
P4	0.70	0.57	0.25
P5	0.27	0.23	0.11
P6	0.17	0.15	0.07
P7	0.29	0.18	0.12



H = 11.00m

B-1-B'



0 2m

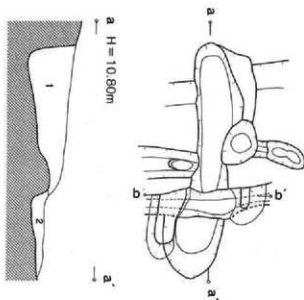
(S=1/60)

土層説明 (A-A')

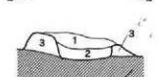
1. 暗褐色土
2. 暗褐色土：黄白色粘質土ブロックを多量に含む。
3. 暗褐色土：黄白色粘質土多量含む。

土層説明 (B-B')

1. 暗褐色土
2. 暗黄褐色土：黄色砂質土粒を多量に含む。
3. 黒褐色土



H = 10.80m



0 1m

(S=1/30)

カマド土層説明 (a-a'・b-b')

1. 暗褐色土：焼土粒・木炭粒を多量に含む。
2. 暗赤褐色土：焼土粒・木炭粒を多量に含む。
3. 黄色砂質土：暗褐色土を含む。カマド材（袖部）。

図17 S15

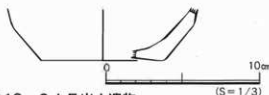


図18 SI5出土遺物

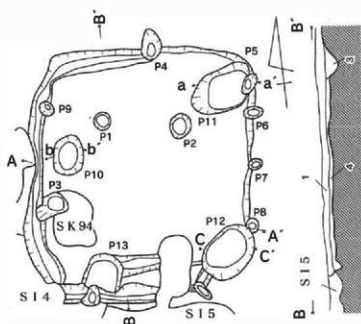
カマド 北壁に位置する。黄色砂質土をカマド材とする。煙道部は住居北壁より1.16m北へのびる。覆土 暗褐色土。自然堆積による覆土。覆土下層に黄白色粘質土を多量に含む。床 やや起伏があるが堅緻な貼床。ローム層を掘り込み、直接貼床を構築している。ピット 7個を確認した。P2～4・7のように、壁際に接する位置にあるものが多い。周溝 住居北西、北東、南東の隅部でそれぞれ途切れるが、各辺に認められる。住居北壁際では周溝を掘削した後カマドを構築している。出土遺物 土師器小形甕1点が出土したのみである。

SI6 (図19・20)

位置 D2・47・48グリッドに位置する。重複関係 SI4・5、SK94に切られる。主軸方位 N・5.5° - E 平面形 正方形 規模 3.65m×3.65m×深さ0.19m カマド 本住居跡はカマドを持たない。覆土 暗褐色土。自然堆積による覆土。床面直上の層は、黄色砂質土粒を多量に含んでいる。床 起伏に富むが堅緻な貼床。ローム層を掘り込み、直接貼床を構築している。床面の標高は東へ向かってやや下がる。西端と東端の比高差は0.10～0.15mほどである。ピット 13個を確認した。このうちP1・2は、本住居跡に伴う支柱穴と考えられる。また、壁際に接して並ぶP4～9は、壁柱穴の可能性がある。P10～13は、他のピットに比してやや大型の土坑状の落込みである。このうちP11・12からは焼土・炭化物が多量に出土した。周溝 住居西壁、北壁の一部および南壁の一部をめぐる。幅0.34～0.11m×深さ0.08m。出土遺物 土師器杯2点、甕1点が出土した。1・2はロクロ調整の坏である。両者とも内面にヘラミガキ、黒色処理が施されている。2は体部下端が回転ヘラケズリにより調整されている。

SI7 (図21・22)

位置 D2・27・28・37・38グリッドに位置する。本次調査区では住居南半部を確認し、この北側に接する第2次調査区で北半部を確認している。重複関係 SI6、SK96に切られる。また、第2次調査区検出のSI9を切る。主軸方位 N・3.5° - E 平面形 正方形 規模 4.58m×4.62m×深さ0.25m カマド 北壁に位置する。黄色砂質土をカマド材とする。煙道部は住居北壁より1.72m北へのびる。覆土 暗褐色土。自然堆積による覆土。床 起伏に富むが堅緻な貼床。ローム層を掘り込み、直接貼床を構築している。ピット 8個を確認している。このうちP1～4が、本住居跡に伴う支柱穴と考えられる。P1内より土師器甕口縁部、P2内より台付甕台部が出土している。周溝 北壁カマド部分で途切れる以外は全周する。周溝掘削の際、カマド構築部分は予め掘り残したものと考えられる。幅0.42～0.21m×深さ0.21m。遺物の出土状況 P3北側の床面直上から土器が集中して出土している。出土遺物 土師器杯2点、高台付坏1点、高坏1点、甕2点、須恵器甕1点が出土した。1・

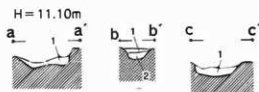


S16ピット計測値 (m)

	長径	短径	深さ
P1	0.29	0.28	0.47
P2	0.40	0.34	0.43
P3	0.54	0.35	0.36
P4	0.48	0.33	0.25
P5	0.36	0.20	0.18
P6	0.29	0.19	0.31
P7	0.21	0.17	0.17
P8	0.23	0.19	0.18
P9	0.24	0.21	0.15
P10	0.64	0.48	0.21
P11	1.11	0.67	0.21
P12	0.96	0.69	0.19
P13	0.61	0.56	0.07

土層説明 (A - A'・B - B')

1. 暗褐色土
2. 暗褐色土：焼土・木炭粒を多量に含む。
3. 暗黄褐色土：黄色砂質土粒を多量に含む。
4. 暗黄褐色土：黄色砂質土粒を多量に含む。
5. 暗褐色土：焼土・木炭粒を含む。



土層説明 (a - a')

1. 暗褐色土：黄色砂質土粒を多量に含む。

土層説明 (b - b')

1. 暗赤褐色土：焼土粒・木炭粒を多量に含む。
2. 明赤褐色土：黄色砂質土・焼土を多量に含む。

土層説明 (c - c')

1. 暗赤褐色土：焼土を多量に含む。



図19 S16

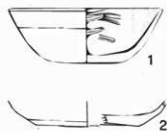
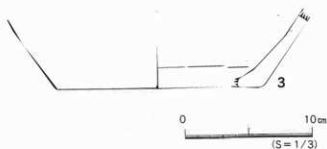
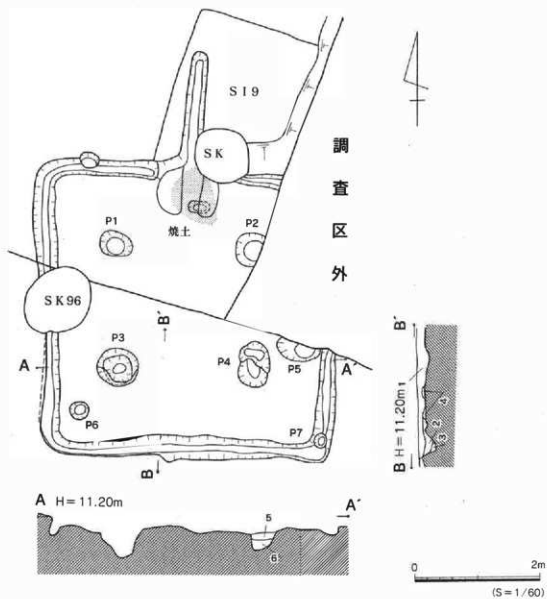


図20 S16出土遺物





土層説明 (A - A'・B - B')

1. 暗褐色土：黄色砂質土粒少量、木炭微量含む。
2. 暗褐色土：黄色砂質土粒、焼土・木炭微量含む。
3. 暗灰色土
4. 暗褐色土：黄色砂質土粒多量、黄白色粘質土粒少量含む。
5. 明褐色土：白色粘土粒多量含む。
6. 暗褐色土

S17 ビット計測値 (m)

	長径	短径	深さ
P 1	0.52	0.38	0.32
P 2	0.54	—	0.27
P 3	0.64	0.62	0.48
P 4	0.71	0.45	0.47
P 5	0.72	—	0.17
P 6	0.31	0.28	0.13
P 7	0.22	0.20	0.22
P 8	0.32	0.17	0.12

図21 S17

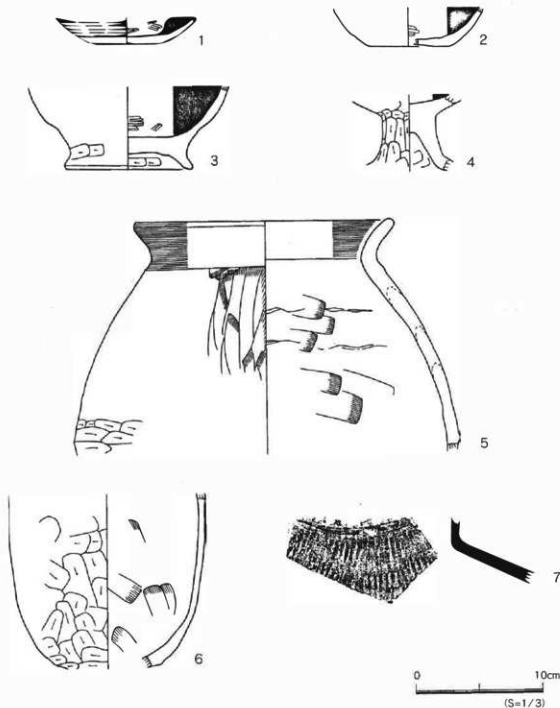


図22 S17出土遺物

2はロクロ調整の土師器杯である。両者とも内面に黒色処理が施されている。1は外面体部下端と底部に回転ヘラケズリが施されている。3は貼り付け高台をもつ坏である。内面に黒色処理が施されている。5・6は土師器の甕である。5は口縁部外面にナア、胴部外面に条線の細かいハケメが縦位に施されている。胴部中位には横位のヘラケズリがみられる。内面は口縁部にナア、胴部にヘラナアが施されている。胴部には輪積み痕が残る。

(2) 掘立柱建物跡

SB1 (図23)

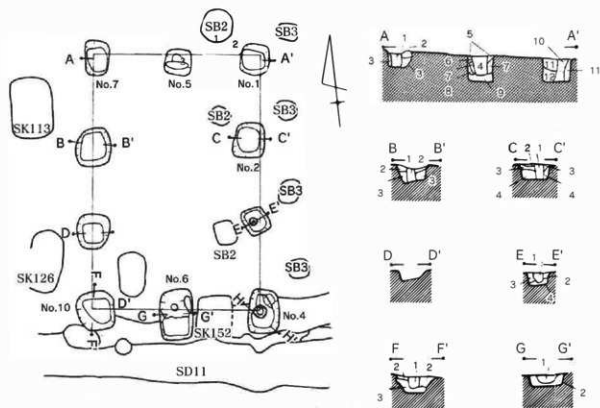
位置 D2・85・86・95・96グリッドに位置する。重複関係 SD11に切られる。また、SB2と重複するが、掘方は切り合わないため先後関係は不明である。主軸方位 N-9°-Eを示す南北棟建物である。平面形式 桁行3間×梁行2間の掘立柱建物である。規模 桁行総長5.4m×梁行総長3.6mを測る。柱間寸法は、各掘方で柱痕跡を確認しているためこれに基づいて計測すると、東側桁行が北から1.7m+1.8m+1.9m、西側桁行が北から1.8m+1.9m+1.7m、北側梁行が西から1.8m+1.8m、南側梁行が1.8m+1.8mを測る。従って柱間寸法は概ね6尺等間に設定されていたものと思われる。柱穴 掘方は隅丸方形ないし不整形を呈する。掘方埋土は暗褐色土と黄褐色土を互層に埋戻されており、版築が認められる。柱痕跡の径は0.15～0.20mを測る。掘方各毎の計測値は表の通りである。深さについては、確認面からの計測値とともに、()内に絶対標高を示した。出土遺物 なし

SB2 (図24)

位置 D2・86・87・96・97グリッドに位置する。重複関係 SD11・SK124・152に切られる。また、SB3と重複するが、先後関係は不明である。主軸方位 N-8.3°-Eを示す南北棟建物である。平面形式 桁行3間×梁行2間の掘立柱建物である。規模 各柱穴で柱痕跡を確認していないので、掘方の中央で規模を復元すると、桁行総長は東側で6.35m、西側で6.5m、梁行総長は北・南側とも3.6mである。柱間寸法は、東側桁行が北から1.8m+2.45+2.1m、西側桁行が北から1.8m+2.6m+2.1m、北側梁行が西から2.0m+1.6m、南側梁行が西から2.1m+1.5mを測る。桁行は中央間約8～8.5尺と広く取り、両脇間をそれぞれ6尺・7尺に設計したものと考えられる。梁行は7尺+5尺に設定されたものと思われる。柱穴 掘方は円形ないし隅丸方形を呈する。多くの掘方では埋土に明確な版築は認められないが、No7掘方で暗褐色土と黄褐色土の互層が認められた。柱痕跡はNo8掘方の断面で確認できた。柱の径は0.15mほどと推定される。また、土層断面で柱痕跡を明確に確認できないNo2・5・7・9掘方では柱が抜き取られた可能性がある。出土遺物 なし

SB3 (図25)

位置 D2・86・87・96・97グリッドに位置する。重複関係 SK124に切られる。また、SB2と重複するが、先後関係は不明である。主軸方位 N-7.2°-Eを示す。南北棟建物と考えられる。平面形式 桁行は3間、梁行は東側が調査区外にかかるため不明であるが、SB1・2と同様2間の可能性が高い。規模 各柱穴で柱痕跡を確認していないため、掘方の中央で規模を復元すると、桁行総長は西側で計測して5.0m、梁行総長は北側で計測して3.6mである。柱間寸法は、東側桁行が北から1.65m+1.7m+1.65m、北側梁行が西から1.8m+1.8mを測る。桁行は約5.5尺、梁行は6尺に設計されていたと考えられる。柱穴 掘方は円形ないし隅丸方形を呈する。掘方埋土は、暗褐色土や黒褐色土であるが、明確な版築は認められ



SB1 柱穴計測値 (m)

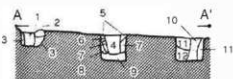
	長径	短径	深さ
No.1	0.66	0.60	0.32 (9.13)
No.2	0.74	0.65	0.32 (9.19)
No.3	0.57	0.49	0.29 (9.14)
No.4	0.94	0.65	0.26 (9.06)
No.5	0.56	0.55	0.36 (9.05)
No.6	1.08	0.71	0.26 (9.02)
No.7	0.74	0.41	0.38 (9.24)
No.8	0.76	0.74	0.39 (9.11)
No.9	0.72	0.68	0.22 (9.24)
No.10	0.84	0.79	0.38 (9.10)

A-A'

1. 暗褐色土：粘性なし。しまり強。淡褐色土を含む。
2. 黄褐色土：粘性なし。しまり弱。
3. 暗褐色土：黄褐色土を含む。
4. 暗褐色土：粘性なし。しまり有。黄褐色土ブロックを含む。
5. 黄褐色土：粘性弱。しまり中。
6. 黄褐色土
7. 暗褐色土：粘性弱。しまりなし。
黄褐色土・灰褐色土を均一に含む。
8. 暗褐色土：粘性なし。しまり弱。黄褐色土を含む。
9. 黄褐色粘質土：粘性弱。しまり中。
10. 暗褐色土：粘性なし。しまり中。
11. 暗褐色土：粘性なし。しまり中。黄褐色土ブロックを少量含む。
12. 暗褐色土：黄褐色土・灰白色粘質土ブロックを含む。

B-B'

1. 暗褐色土：粘性なし。しまり有。灰白色砂を含む。
2. 黄褐色土：粘性なし。しまり有。褐色土を含む。
3. 暗褐色土：粘性なし。しまり有。黄褐色土ブロックを含む。
4. 黄褐色土：粘性なし。しまり有。



H=9.60



C-C'

1. 暗褐色土：黄色砂質土粒を少量含む。
2. 暗褐色土：黄色砂質土を多量に含む。
3. 暗褐色土：黄色土を少量含む。
4. 暗黄褐色土：黄色砂質土多量含む。

E-E'

1. 暗褐色土：黄色砂質土粒少量含む。
2. 暗褐色土：黄色砂質土粒多量含む。
3. 暗黄褐色土：黄色砂質土粒少量含む。
4. 灰白色粘質土

F-F'

1. 暗黄褐色土：黄色砂質土粒少量含む
2. 灰色土：黄色砂質土粒多量含む。
3. 灰色土：灰白色粘質土ブロック多量含む。

G-G'

1. 暗褐色土：黄色砂質土粒少量含む。
2. 黄褐色粘質土

図23 SB1

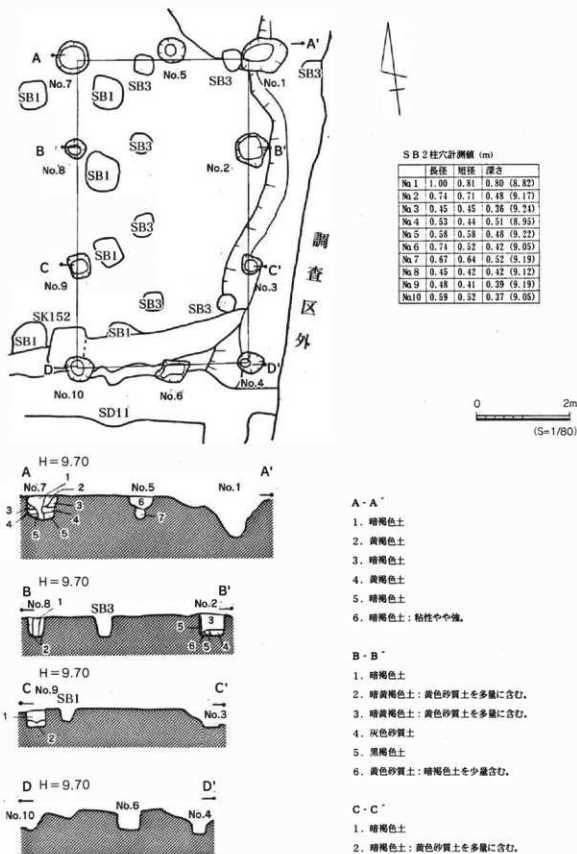


図24 SB2

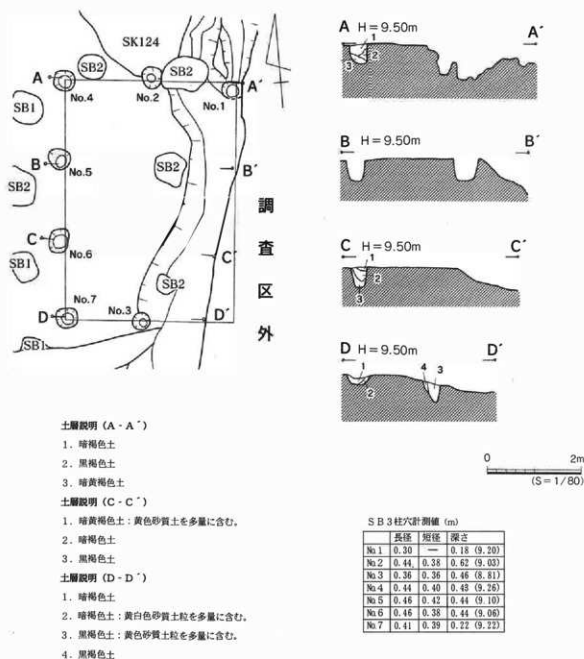


図25 SB3

SB4 (図26)

位置 D1 - 28・29・37・38・38グリッドに位置する。重複関係 S11を切る。主軸方位 W-24° - N (N-64° - W)を示す東西棟建物である。平面形式 桁行が2間、梁行は西側が1間、東側が2間の側柱建物である。また南側桁柱列の南に平行する柱穴列 (No 8-10) も本遺構に伴うものとするれば、南庇をもつ建物と考えられる。規模 各柱穴で柱痕

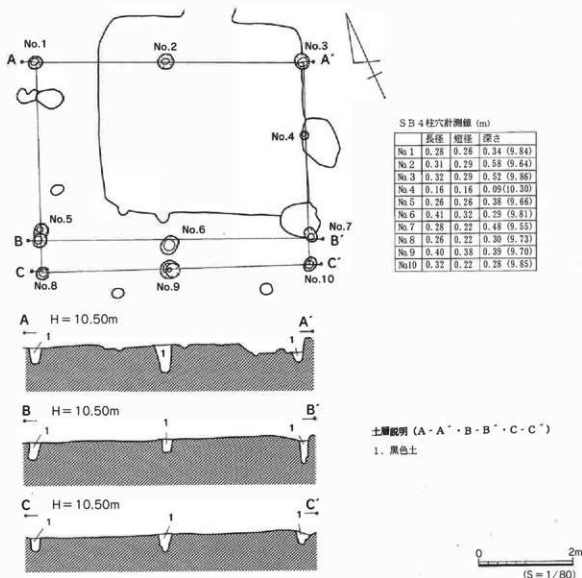


図26 SB4

跡を確認していないため、掘方の中央で規模を復元すると、桁行総長は北側で5.6m、南側で東側梁行が北から1.5m+2.2m、西側梁行が3.75mを測る。柱穴掘方は円形を呈する。掘方埋土は黒色土一層のみで、版築は認められない。

SB5 (図27)

位置 D2-67・77グリッドに位置する。重複関係 SK86・118・119・123・163に切られる。主軸方位 N-18.2°-Eを示す南北棟建物である。平面形式桁行3間×梁行2間の側柱建物である。規模 各柱穴で柱痕跡を確認していないため、掘方の中央で規模を復元すると、桁行総長は東側で3.9m、西側で3.95m、梁行総長は北側・南側とも3.45mを測る。柱間寸法は、東側桁行が北から1.2m+1.35m+1.35m、西側桁行が北から1.2m+1.5m+12.5mを測る。南側梁行は西から1.65m+1.8mを測り、北側梁行では中央

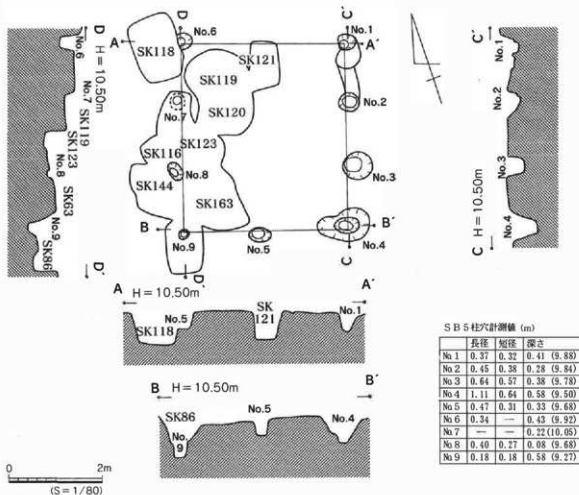


図27 SB5

柱がSK121の掘削によって失われているが、これと同値であると推定される。柱穴掘方は円形ないし楕円形を呈する。柱間寸法は、北側桁行が西から2.7m+2.9m、南側桁行が西から2.7m+3.0m、西側梁行5.7m、庇で5.7mを測る。梁行総長は東側で3.7m、西側で3.75m、また庇の出は0.65mである。備考 当建物跡を囲むような位置にSD7溝が巡る。SD7は本建物跡に伴う可能性がある。

(3) 溝跡

SD1 (図28~31)

位置 調査区北西端から南東方向にのびる溝である。当調査区で約62m分を確認している。なお、調査区東側、D2・74・75付近で一部途切れている。直線的に北西-南東方向にのびるが、D2・20・30グリッド付近で緩やかにカーブしている。重複関係 SD2・5・13を切り、SK13・155に切られる。主軸方位 N-54°-W前後 断面形 逆台形 規模 幅0.5~1.3m×深さ0.12~0.62m。(底面の標高は西で10.13m、東で9.80m 覆土 暗褐色土。自然堆積による覆土。出土遺物 覆土中より須恵器高台付坏の底部が出土した。

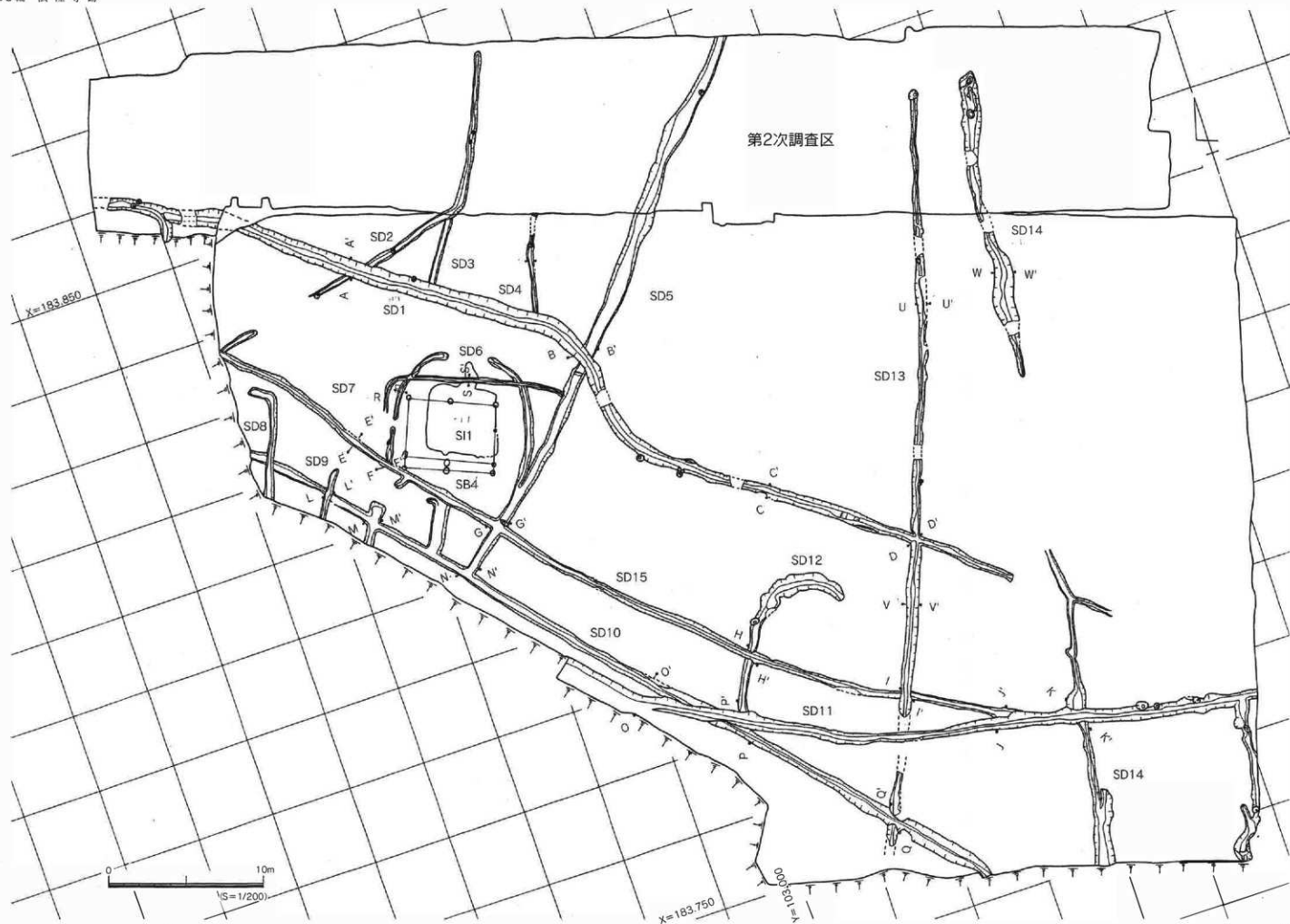


図28 溝跡平面図

SD2 (図28)

位置 調査区北西端、D1・16・07・08グリッドに位置する東西溝である。当調査区で約17m分を確認している。なお、D1・07・16グリッド付近で一部途切れている。また、第2次調査区で東側延長部分を確認している。重複関係 SD1に切られ、SD3を切る。主軸方位 N-77.5°-Eである。ただし、第2次調査区D1・09グリッド付近で52°北へ折れ曲がり、N-25.5°-Eとなる。断面形 逆台形 規模 幅0.24~0.50m×深さ0.45m。覆土 暗褐色土の単層。自然堆積による覆土。出土遺物 なし。

SD3 (図28)

位置 D1・09・19グリッドに位置する。当調査区で約4.5m分を確認している。北東ではSD2に、南西ではSD1にぶつかる。重複関係 SD1・2に切られる。主軸方位 N-55.7°-E 断面形 逆台形 規模 幅0.40m×深さ0.20m 覆土 暗褐色土の単層。自然堆積による覆土。出土遺物 なし。

SD4 (図28・30)

位置 D2・10グリッドに位置する。当調査区で約4.9m分を確認している。南はSD1にぶつかり、それ以南では検出されなかった。また、第2次調査区でも、当溝跡の北側延長部分は確認されなかった。重複関係 SI2を切り、SK57・58に切られる。主軸方位 N-14°-E 断面形 V字形 規模 幅0.20~0.45m×深さ0.17m (底面標高11.04m) 覆土 暗褐色土の単層。自然堆積による覆土。出土遺物 なし。

SD5 (図28・29)

位置 調査区中央やや西寄りを南北に走る。当調査区で約26m分を確認している。また第2次調査区でこの北側延長部分を確認している。南はSD10にぶつかる。重複関係 SD1・10・15に切られる。主軸方位 N-48°-E前後 断面形 浅い皿状 規模 幅0.65~1.30m×深さ0.04~0.13m。(底面標高9.70~10.59m。南へ向かって低くなっている) 覆土 黒褐色土の単層。自然堆積による覆土。出土遺物 なし。

SD6 (図28~31)

位置 D1・27・28・29・37・39グリッドに位置する。竪穴住居SI1を囲むように半円形にめぐる。西側と北側で一部途切れる。また両端はそれぞれSD5とSD15にぶつかり、それ以南では検出されなかった。重複関係 SD7・15に切られる。また、SD5とも重複するが、先後関係は不明である。断面形 浅い皿状 規模 幅0.25~0.53m×深さ0.04m 覆土 暗褐色土の単層。自然堆積による覆土。出土遺物 弥生土器1点が出土した。外面に平行沈線文、LR単節斜縄文が施文されている。備考 当溝跡は、SI1

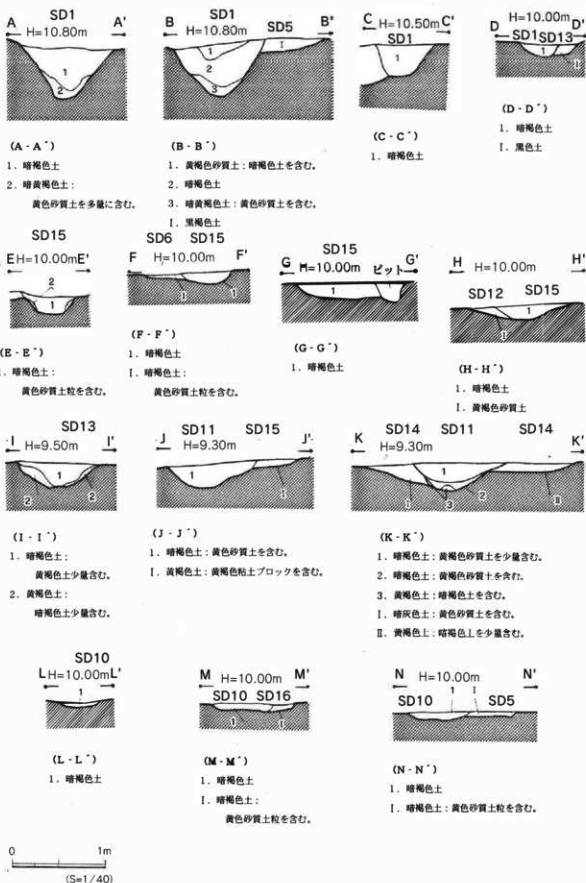


図29 溝跡土層断面図(1)

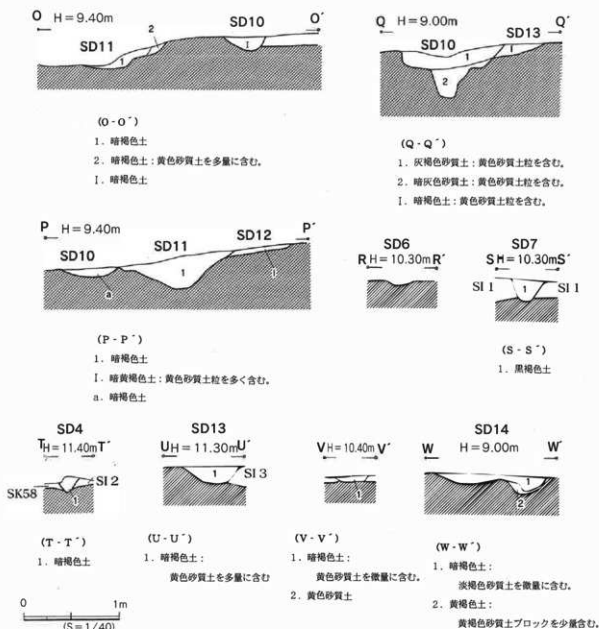


図30 溝跡土層断面図(2)

を囲むような位置関係にある。SD6は北側部分が途切れるが、その位置はSI1のカマド部分と一致している。また、SI1と同位置で重複する掘立柱建物跡SB4とSD7も、これと同様の位置関係にある。SI1とSB4はほぼ同方位をとり、同位置で重複していることから、竪穴住居から掘立柱建物へと変遷したものと考えられ、SD6とSI1、SD7とSB4はそれぞれセットとなるものと思われる。また、SI2と第2次調査区検出のSD16も同様の関係があるものと考えられる。溝跡の性格については、建物の占地する一定の敷地を区画する機能か、雨水などの建物内への流入を防ぐ排水機能を推定できる。当調査区の地形は北から南へ標高が低くなっており、各溝跡が南側に開く形態となっており、また住居周堤の存在を考慮すれば、排水溝の可能性が高い。

SD7 (図28・30)

位置 D1 - 28・29、D2 - 30グリッドに位置する。西端は南に折れ曲がりD1 - 27グリッドで途切れる。重複関係 S11・SD6を切る。また、SD5と重複するが、先後関係は不明である。主軸方位 N - 64° - W 断面形 V字形 規模 幅0.25～0.34m×深0.22m 覆土 黒褐色土の単層。自然堆積による覆土。出土遺物 なし。

SD8 (図28)

位置 調査区東端、D1 - 16・26・36グリッドに位置する南北溝である。北端は西へ折れ曲がり、1.5mほどのびたところで途切れる。南端は調査区外へのびる。当調査区で約7.5m分を確認している。重複関係 SD10に切られる。主軸方位 N - 20.5° - E 断面形 浅い皿状 規模 幅0.45m～0.60m 覆土 暗褐色土の単層。自然堆積による覆土。出土遺物 なし。

SD9 (図28)

位置 D1 - 37・38グリッドに位置する。調査区南端から3.3m北へのびた位置で途切れる。重複関係 SD10に切られる。主軸方位 N - 36° - E 断面形 浅い皿状 規模 幅0.40m 覆土 暗褐色土の単層。自然堆積による覆土。出土遺物 なし。

SD10 (図28～31)

位置 調査区南西端を北西・南東方向に走る溝跡である。当調査区で約55m分を確認しており、調査区外へさらにのびる。重複関係 SD5・8・9・13を切る。また、SD11とも重複するが、先後関係は不明である。主軸方位 N - 44° - W 断面形 浅い皿状 規模 幅0.58～1.15m×深さ0.06～0.10m (底面標高9.00～9.76m。北西から南東へかけて低くなっている) 覆土 暗褐色土の単層。自然堆積による覆土。出土遺物 平瓦1点が出土した。凹面に布目、凸に格子タタキ目がみられる。

SD11 (図28～31)

位置 調査区南端を東西に走る溝跡である。重複関係 SB2・SD14・15を切る。また、SD10とも重複するが、先後関係は不明である。主軸方位 N - 62.5～78.5° - W前後 断面形 浅い皿状～V字形 規模 幅0.55～1.21m×深さ0.26～0.40m (底面の標高は8.88～9.00m。底面の標高に顕著な高低差はみられない) 覆土 暗褐色土。自然堆積による覆土。出土遺物 須恵器円面硯1点が出土した。

SD12 (図28～30)

位置 D2 - 61・62・71グリッドに位置する。D2 - 61・62グリッドでJ字状にカーブし途切れる。重複関係 SD11・15・SK26に切られる。主軸方位 N - 60°

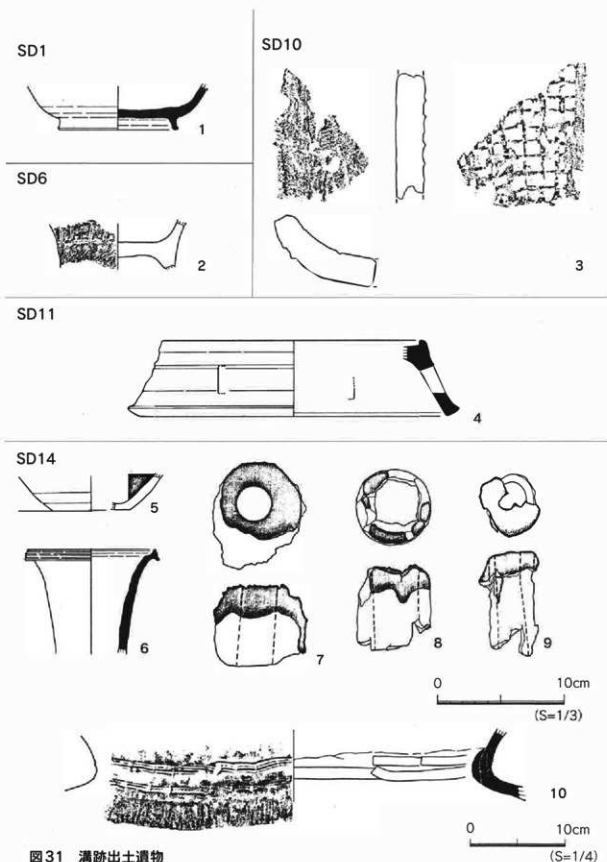


図31 溝跡出土遺物

E 断面形 浅い皿状 規模 幅0.50～1.1m×深さ0.12m 覆土 黄色砂質土を含む暗黄褐色土。自然堆積による覆土。 出土遺物 なし。

SD13 (図28～30)

位置 調査区中央東寄りを南北方向に走る溝跡である。当調査区で約40m分を確認した。また、第2次調査区でこの北側延長部分を確認している。第2次調査区D2-12グリッドで途切れている。南は調査区外までのびるものと考えられる。**重複関係** SI3・SD15・SK107を切り、SD1・SK71・101・138に切られる。**主軸方位** N-19°～24°-E前後 **断面形** V字形 **規模** 幅0.40～0.87m×深さ0.10～0.25m(底面標高8.72～11.02m。調査区北側から南側へかけて低くなっており、2m程の高低差がある) **覆土** 黄褐色土を含む暗褐色土。自然堆積による覆土。I-I'セクションで三角堆積を観察できた。**出土遺物** なし。

SD14 (図28～31)

位置 調査区東部を南北に走る溝跡である。当調査区で約30m分を確認しているが、D2-55・65付近で途切れる。また、D2-75グリッドで二又に分かれている。第2次調査区で当溝跡の北側延長部分を確認しているが、D2-06グリッドで途切れている。南端は調査区外へのびるものと思われる。**重複関係** SD11に切られる。**主軸方位** N-12°-E **断面形** 浅い皿状 **規模** 幅0.25～1.25m×深さ0.18～0.20m(底面標高8.64～8.94m。北から南へ向かって若干低くなっている) **覆土** 自然堆積による覆土。**出土遺物** 土師器杯低部破片1点、須恵器長頸瓶口縁部～頸部破片1点、須恵器大甕頸部～肩部破片1点、輪羽口3点が出土した。

SD15 (図28・29)

位置 調査区西端～南東端にかけて東西に走る溝跡である。当調査区で約55m分を確認している。西端は調査区外にのび、東端はSD11にぶつかる。**重複関係** SD5・6・12を切り、SD13に切られる。**主軸方位** N-42～61°-E前後 **断面形** 浅い皿状 **規模** 幅0.45～0.82m×深さ0.13～0.17m(底面標高9.13～9.88m。北西から南東へ向かって低くなっており、0.70mほどの高低差がある) **覆土** 暗褐色土の単層。自然堆積による覆土。**出土遺物** なし。

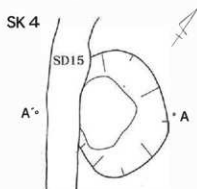
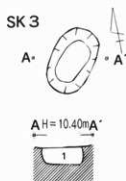
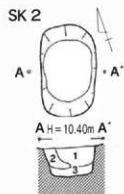
第3節 江戸時代

土壌(土葬・堅棺)及び火葬墓163基を検出した。出土遺物は、土器・陶磁器類は図49・50に、古銭は図51・52にまとめて掲載した。また、古銭については計測値を表にまとめた。

(1) 土壌

SK2 (図32)

位置 D1-06グリッド **重複関係** なし **形態** 隅丸長方形。ほぼ垂直に掘り込まれて

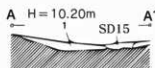


SK 2

1. 暗黄褐色砂質土:
黄色砂質土粒を含む。
2. 暗褐色砂質土
3. 黄褐色土

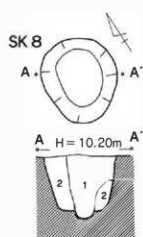
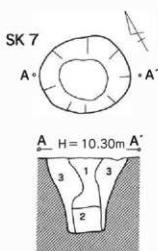
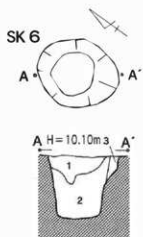
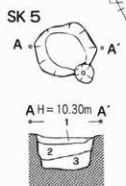
SK 3

1. 暗褐色砂質土:
黄色砂質土粒を含む。



SK 4

1. 暗褐色砂質土: 焼土粒・木炭粒を含む。



SK 5

1. 黄色砂質土
2. 暗褐色土:
黄色砂質土粒を含む。
3. 黄色粘質土

SK 6

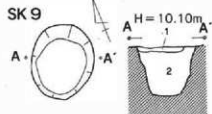
1. 暗褐色土:
黄色砂質土粒を含む。
2. 暗黄褐色土: 黄色砂質土・
黄白色砂質土・黒色土を
斑状に含む。
3. 黒色土

SK 7

1. 黒色土:
黄色砂質土粒を含む。
2. 黒色土:
黄色砂質土粒を多量に含む。
3. 黄色砂質土:
黒色土を多く含む。

SK 8

1. 黒色土:
黄色砂質土粒を多量に含む。
2. 黄色砂質土:
黒色土を少量含む。



SK 9

1. 黒色土:
黄色砂質土粒・骨片を含む。
2. 暗黄褐色土



図32 土壌 (1)

いる。規模 長軸0.95m×短軸0.71m×深さ0.38m 覆土 黄色砂質土・暗褐色土により埋め戻されている。遺物 錆により互いに付着した銅銭4枚が出土した。

SK3 (図32・49)

位置 D1-17グリッド 重複関係 なし 形態 楕円形。ほぼ垂直に掘り込まれている。規模 長軸0.86m×短軸0.56m×深さ0.20m 覆土 暗褐色砂質土の単層。遺物 大堀相馬焼小壺の銅部下半～底部破片が出土した。ロクロ成形で、底部には回転糸切り痕を残す。内面全面から胴部下半にかけて鉄釉（鉛釉）がかけられている。18世紀中頃のものである。

SK4 (図32)

位置 D1-27グリッド 重複関係 SD15に切られる。形態 楕円形。浅い皿状に掘り込まれている。規模 長径1.65m×深さ0.15m。短径はSD15に切られているため不明。覆土 暗褐色砂質土。遺物 鉄釘1点が出土した。備考 覆土は焼土粒、木炭粒を含んでおり、火葬墓と考えられる。

SK5 (図32)

位置 D1-39グリッド 重複関係 なし 形態 不整形円形。ほぼ垂直に掘り込まれている。規模 長径0.78m×短径0.57m×深さ0.44m 覆土 黄色砂質土・暗褐色土を交互に埋め戻している。遺物 銅銭3枚、キセル片3点、不明鉄製品2点が出土した。銅銭3枚は錆により互いに付着した状態で出土した。

SK6 (図32)

位置 D1-49グリッド 重複関係 なし 形態 楕円形。ほぼ垂直に掘り込まれている。規模 長軸1.07m×短軸0.93m×深さ0.82m 覆土 黄色砂質土・暗褐色土により埋め戻されている。土壌底部には方形の棺材が遺存しており、方形の堅棺であったことが確認できた。遺物 銅銭37点が出土した。このうち、2枚、3枚、12枚、18枚がそれぞれ付着した状態で出土している。

SK7 (図32)

位置 D2-40グリッド 重複関係 なし 形態 楕円形。上半が斜めに掘りこまれ、下半に至るとほぼ垂直となる。規模 長軸1.19m×短軸1.03m×深さ0.98m 覆土 土層断面を観察すると、両壁際に黄色砂質土による埋土が、中央に黒色土が柱状に堆積している状況が認められた。堅棺を埋設し、黄色砂質土により埋め戻した後、棺が腐朽し、上層部の黒色土が黄色砂質土の内側に堆積したと思われる。遺物 キセル片1点が出土した。

SK8 (図32)

位置 D2-40グリッド 重複関係 なし 形態 楕円形ないし卵形。ほぼ垂直に掘り込まれている。また、土壌の掘り込み底面が10cmほど掘り窪められている。規模 長軸1.15m×短軸1.00m×深さ0.82m 覆土 両壁際に黄色砂質土が、中央に黒色土が柱状に堆積している状況が土層断面から観察できた。堅棺を埋設し、黄色砂質土と黒色土により埋め戻したものと考えられる。遺物 錆により付着した銅銭5枚、鉄釘5点が出土した。鉄釘は堅棺に打ち込まれていたものと考えられる。

SK9 (図32)

位置 D2-40・50グリッド 重複関係 なし 形態 楕円形。ほぼ垂直に掘り込まれている。規模 長軸0.99m×短軸0.82m×深さ0.64m 覆土 黒色土・暗黄褐色土により埋め戻されている。上層に骨片が含まれていた。遺物 遺物は出土しなかった。

SK10 (図33・49)

位置 D1-49グリッド 重複関係 なし 形態 円形。垂直に掘り込まれている。規模 径1.04m×深さ0.80m 覆土 両壁際に黄色砂質土が、中央に黒色土が柱状に堆積している状況が土層断面から観察できた。堅棺を埋設し、黄色砂質土と黒色土により埋め戻したものであると思われる。遺物 銅銭3点、キセル片4点、陶器1点(完形)が出土した。出土した陶器は大塚相馬焼の端反碗である(図49-2)。ロクロ成形、削り出し高台を持つ。内面全面から高台部外面にかけて灰釉の施釉が認められるが、生焼けて釉が融解しておらず、乳白色を呈する(糖白釉)。高台部内面に「〇」の墨書が見られる。19世紀第2四半期のものである。

SK11 (図33)

位置 D1-49グリッド 重複関係 なし 形態 円形の浅い掘り込み。規模 径0.78m×深さ0.22 覆土 黒色土。木炭粒を含んでいる。遺物 出土しなかった。

SK12 (図33)

位置 D1-59グリッド 重複関係 なし 形態 楕円形。垂直に掘り込まれている。規模 長軸1.16m×短軸0.85m×深さ0.50m 覆土 黄色砂質土ブロックを含む暗褐色土。上層に一部木炭粒を含む黒色土が堆積している。遺物 陶磁器片1点、鉄釘4点が出土した。

SK13 (図33・49)

位置 D2-30グリッド 重複関係 SD1を切る。形態 隅丸長方形。垂直に掘り込まれている。規模 長軸1.05m×短軸0.88m×深さ1.03m 覆土 土層断面を観察すると、土壌下半壁際に黄色砂質土・暗褐色土が、その内側に暗褐色土が柱状に堆積し、断層を形成している状況が認められた。その上部には暗褐色土が、中央へ沈み込んだ状況で堆積していた。

堅棺を埋設し、暗褐色土と黄色砂質土により埋め戻した後、棺が腐朽し、棺の上部を覆う土層が下へ陥没したものと考えられる。遺物 銅銭5点、キセル片3点、木片4点、陶器1点(完形)が出土した。木片は堅棺のものである。陶器は人堀相馬焼の丸碗である(図49-3)。覆土下層より正位で出土した。ロクロ成形、削り出し高台をもつ。高台部を残し全面に施釉されているが、生焼けて釉が融解しておらず、乳白色(糠白)を呈する。19世紀第2四半期のものである。

SK14 (図33)

位置 D2-50グリッド 重複関係 なし 形態 円形。ほぼ垂直に掘り込まれている。規模 径1.09m×深さ0.66m 覆土 黒色土・黄色砂質土で埋め戻されている。上層に木炭が含まれていた。遺物 銅銭3点、キセル片5点、銅線1点、木炭片8点、鉄片38点が出土した。

SK15 (図33)

位置 D2-40・50グリッド 重複関係 なし 形態 円形。ほぼ垂直に掘り込まれている。規模 径1.03m×深さ0.61m 覆土 両壁際に黄色砂質土が堆積し、その内側に黒色土が柱状に堆積している状況が土層断面から観察できた。堅棺を埋設し、黄色砂質土により埋め戻したものと考えられる。遺物 銅銭8点、鉄釘片11点、キセル片4点が出土した。銅銭は8点のうち2枚・3枚がそれぞれ付着した状態で出土している。鉄釘は堅棺に使用されたものと思われる。

SK16 (図33)

位置 D2-41・51グリッド 重複関係 なし 形態 不整形。斜めに掘り込まれている。規模 長軸1.20m×短軸1.17m×深さ1.28m 覆土 暗黄褐色土と黄色砂質土により埋め戻されている。遺物 鉄銭と思われる破片3点、キセル片4点、鉄釘片9点、木片3点が出土した。備考 覆土の状況からは、棺埋設の痕跡は確認されなかったが、鉄釘片や木片の出土や掘りこみの形状から、堅棺が埋設されていた可能性が高い。

SK17 (図33)

位置 D2-51グリッド 重複関係 なし 形態 円形ないし不整隅丸方形。垂直に掘り込まれている。堅棺を埋設するため、土壌の底部が棺の大きさに合わせて12cmほど掘り窪められている。棺の据え方と考えられる。規模 長軸1.29m×短軸1.22m×深さ1.61m 覆土 方形の堅棺が遺存していた。堅棺は1辺57cm、残存高72cmほどである。土層断面を観察すると、堅棺の両脇壁際には黄色砂質土が、堅棺の直上には暗褐色土が堆積し、さらに黄色砂質土・暗褐色土の順に埋め戻されている状況が明らかとなった。遺物 銅銭3枚、キセル片1点が出土した。

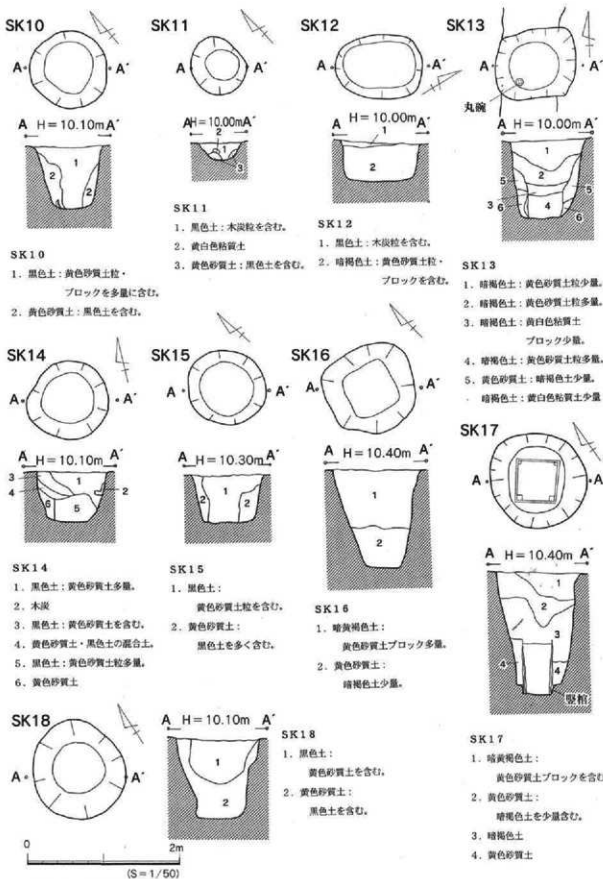


図33 土層(2)

SK18 (図33)

位置 D2-50グリッド 重複関係 なし 形態 円形。上半は斜めに掘りこまれ、途中で屈曲して垂直になる。規模 径1.34m×深さ1.03m 覆土 黒色土と黄色砂質土により埋め戻されている。遺物 銅銭4枚、木片8点、鉄釘片2点、キセル片3点が出土した。備考 覆土の状況からは、棺埋設の痕跡は確認されなかったが、鉄釘片や木片の出土や掘りこみの形状から、堅棺が埋設されていた可能性が高い。

SK19 (図34・49)

位置 D2-51グリッド 重複関係 なし 形態 円形。斜めに掘り込まれている。規模 径0.93m×深さ0.71m 覆土 土層断面から、両壁際に黄色砂質土が堆積し、その内側に黒色土が沈み込んだ状況を観察できた。土壌底部に方形の棺材が遺存しており、方形の堅棺が埋設されていたことを確認できた。遺物 銅銭5点、鉄釘片3点、陶器碗の底部破片1点が出土した。銅銭は2枚、3枚がそれぞれ付着した状態で出土している。

SK20 (図34)

位置 D2-51・52グリッド 重複関係 なし 形態 円形。垂直に掘り込まれている。規模 径1.09m×深さ1.31m 覆土 黄色砂質土、暗褐色土を交互に埋め戻している。遺物 出土しなかった。

SK21 (図34)

位置 D2-51グリッド 重複関係 なし 形態 不整形。浅い皿状の掘り込み。規模 長軸0.67m×短軸0.62m×深さ0.06m 覆土 骨片・木炭片を含む暗褐色土。遺物 出土しなかった。

SK22 (図34)

位置 D2-52グリッド 重複関係 なし 形態 円形。ほぼ垂直に掘り込まれている。規模 径0.94m×深さ0.58m 覆土 暗褐色土と黄色砂質土とを交互に埋め戻している。遺物 鉄鍋1点、銅銭2点、木炭片1点、鉄釘片1点、小玉68個が出土した。鉄鍋は覆土下層から逆位で出土している。備考 出土した鉄鍋は、遺体の頭部に被せられたものと考えられる。

SK23 (図34)

位置 D2-61グリッド 重複関係 なし 形態 隅丸方形。ほぼ垂直に掘り込まれている。掘り込みの壁と底面に段をもつ。規模 長軸1.10m×短軸1.10m×深さ0.90m 覆土 黄色砂質土により埋め戻されており、中央に黒色土が堆積している。土層断面からは、上層の黒色土が内側に沈み込んでいる状況が観察できた。棺が腐蝕し、墓壇 埋土が陥没したものである。遺物 鉄銭と思われる鉄製品破片9点、鉄釘片40点が出土した。備考 土壌掘り

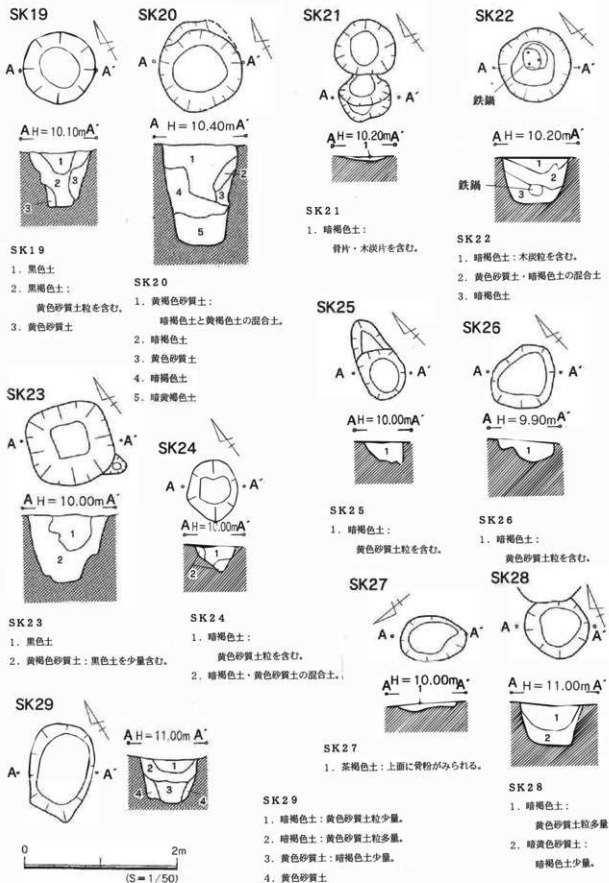


図34 土壌 (3)

込み底面に認められる落込みは、堅棺の据え方の可能性がある。また、土層断面に認められた黒色土は、墓壙が埋め戻された後、棺が腐蝕し陥没した部分に堆積した土層と考えられる。鉄釘は棺に使用されたものと推測される。

SK24 (図34)

位置 D2-61グリッド 重複関係 なし 形態 楕円形の浅い掘り込み。規模 長軸0.83m×短軸0.66m×深さ0.34m 覆土 暗褐色土 遺物 なし

SK25 (図34)

位置 D2-61グリッド 重複関係 なし 形態 長円形の浅い掘り込み。規模 長軸1.13m×短軸0.57m×深さ0.30m 覆土 暗褐色土の単層。遺物 なし

SK26 (図34)

位置 D2-61グリッド 重複関係 SD12を切る。形態 不整形の浅い掘り込み。規模 長軸0.98m×短軸0.84m×深さ0.32m 覆土 暗褐色土の単層。遺物 土師器1点が出土した。

SK27 (図34)

位置 D2-62グリッド 重複関係 なし 形態 楕円形。浅い皿状の掘り込み。規模 長軸0.86m×短軸0.60m×深さ0.10m 覆土 茶褐色土。覆土上面に骨粉が認められる。遺物 銅銭7点が出土した。

SK28 (図34)

位置 D2-21グリッド 重複関係 SK31と重複するが、先後関係は不明である。形態 円形。ほぼ垂直に掘り込まれている。規模 径0.87m×深さ0.51m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。遺物 銅銭7点、鉄釘片7点、キセル片4点、木片2点、歯骨10点が出土した。備考 土層断面からは棺の痕跡を確認できなかったが、木片・鉄釘の出土や掘り込みの形状から堅棺墓と考えられる。

SK29 (図34)

位置 D2-21グリッド 重複関係 SK30と重複するが、先後関係は不明である。形態 楕円形。ほぼ垂直に掘り込まれている。規模 長径1.18m×短径0.83m×深さ0.56m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。土層断面からは、埋土下層に黄色砂質土が堆積し、上層の暗褐色土層の中央が下へ沈み込んでいる状況が観察できた。棺が腐蝕し、墓壙埋土が陥没したと思われる。遺物 銅銭5枚、キセル片3点が出土した。銅銭は5枚が錆により付着した状態で出土している。また、土葬骨片が出土した。

SK30 (図35・49)

位置 D2-21・31グリッド 重複関係 SK29と重複するが、先後関係は不明である。形態 楕円形。ほぼ垂直に掘り込まれている。規模 長径1.19m×短径0.73m×深さ0.66m 覆土 暗褐色土により埋め戻されている。遺物 墓壇底面から磁器小碗1点(1)が逆居で、ミニチュア硯1点(2)が正位で出土している。その他に、墓壇埋土中よりキセル片1点が出土した。出土した小碗は肥前産のもので、山水文の染付がみられる。19世紀前半のものである。

SK31 (図35)

位置 D2-21グリッド 重複関係 SK28と重複するが、先後関係は不明である。形態 円形。ほぼ垂直に掘り込まれている。規模 径1.07m×深さ0.78m 覆土 土層断面からは、埋土下層から両壁際に黄色砂質土が堆積し、上層の暗褐色土がその内側に沈み込んだ状況が認められた。棺が腐蝕し、墓壇埋土が陥没したと思われる。遺物 出土しなかった。

SK32 (図35)

位置 D2-21グリッド 重複関係 なし 形態 楕円形。ほぼ垂直に掘り込まれている。規模 長径1.03m×短径0.91m×深さ0.75m 覆土 埋土下層の壁際に黄色砂質土が堆積し、その内側に暗褐色土が堆積している状況を土層断面から観察できた。堅棺を埋設し、暗褐色土と黄色砂質土により埋め戻したと思われる。遺物 銅銭4点が出土した。

SK33 (図35)

位置 D2-11グリッド 重複関係 なし 形態 円形。ほぼ垂直に掘り込まれている。規模 径1.18m×深さ1.05m 覆土 土層断面からは、両壁際に黄色砂質土が堆積し、上層の暗褐色土・黄色砂質土がその内側に沈み込んでいる状況が観察できた。堅棺を埋設し、暗褐色土と黄色砂質土により埋め戻したものと考えられる。遺物 キセル片4点、ベッコウの髪飾り1点が出土した。

SK34 (図35・49)

位置 D2-12・22グリッド 重複関係 なし 形態 隅丸長方形。垂直に掘り込まれている。規模 長軸1.45m×短軸0.99m×深さ0.55m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。土層断面からは両壁際に黄色砂質土が堆積し、上層の黄色砂質土・暗褐色土がその内側に沈み込んでいる状況を観察できた。遺物 硯1点、磁器水滴1点、陶器1点、小石60点が、土壇底面の北寄りから集中して出土している。硯は正位で、水滴は横位で出土した。またその他に、銅銭2点、にぎりバサミ1点、不明鉄製品1点が出土している。水滴は獅子形で、前面と後面を接合した痕跡が顕著に認められる。形押しにより成形されたものである。19世紀のものである。硯は、陸の部分に斜格子状の刻線が認められる。また裏面は平坦ではなく段差があり、擦痕・墨痕が認められるため、裏面も使用されたものと考えられる。

SK35 (図35)

位置 D2-12グリッド 重複関係 なし 形態 円形。ほぼ垂直に掘り込まれている。
規模 径1.04m×深さ0.76m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。遺物 キセル片2点、鉄釘片6点が出土した。

SK36 (図35)

位置 D2-12・13グリッド 重複関係 なし 形態 長方形。垂直に掘り込まれている。墓々底面が方形に掘り窪められている。堅棺の据え方と考えられる。規模 長軸1.38m×短軸1.02m×深さ0.64m 覆土 黄色砂質土・暗褐色土により埋め戻されている。土層断面からは、埋土下層から壁際にかけて黄色砂質土が堆積し、上層の暗褐色土がその内側に沈み込んだ状況を観察できた。遺物 歯骨片26点が出土した。

SK37 (図35)

位置 D2-22グリッド 重複関係 なし 形態 楕円形の浅い掘り込み。底面にビット状の落込みが2ヵ所認められた。規模 長軸1.05m×短軸0.97m×深さ0.21m 覆土 黄色砂質土ブロックを多量に含む暗褐色土の単層。人為的に埋め戻されたものである。遺物 木片3点が出土した。

SK38 (図35)

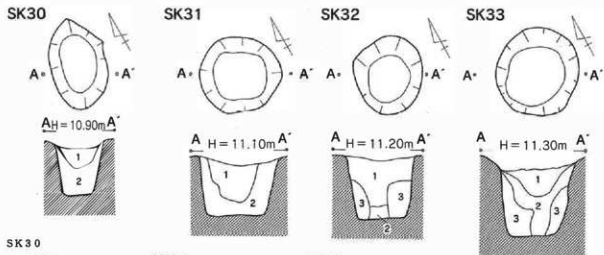
位置 D2-22グリッド 重複関係 なし 形態 円形。ほぼ垂直に掘り込まれている。規模 径0.93m×深さ0.58m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。遺物 銅銭4枚、キセル片3点が出土している。銅銭は4枚のうち2枚が、錆により付着した状態で出土している。

SK39 (図35)

位置 D2-21グリッド 重複関係 なし 形態 円形。垂直に掘り込まれている。規模 径1.11m×深さ0.72m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。土層断面からは、埋土下層部分に黄白色粘質土が堆積し、上層の暗褐色土がその内側に沈み込んでいる状況を観察できた。遺物 銅銭6点、キセル片2点、不明鉄製品1点が出土した。

SK40 (図35・49)

位置 D2-22・32グリッド 重複関係 なし 形態 楕円形。垂直に掘り込まれている。規模 長軸0.92m×短軸0.53m×深さ0.65m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。土層断面からは埋土下層壁際に黄色砂質土が堆積し、上層の暗褐色土がその内側に沈み込んでいる状況を観察できた。遺物 陶器1点(完形)、銅銭8点、鉄銭と考えられる鉄製品1点、キセル片4点が出土した。出土した陶器は大塚相馬焼の碗である。ロク口成



SK30

1. 暗褐色土：
黄色砂質土ブロック含む。
2. 暗褐色土

SK31

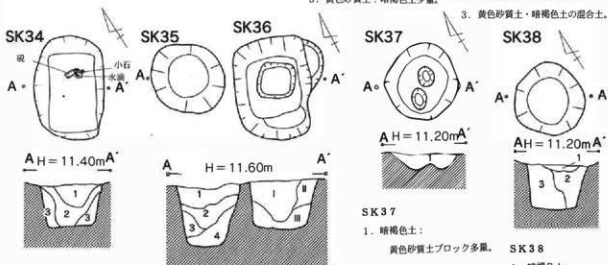
1. 暗褐色土：黄色砂質土粒多量。
2. 黄色砂質土：暗褐色土少量。

SK32

1. 暗褐色土：黄色砂質土粒多量。
2. 暗褐色土：黄色砂質土粒少量。
3. 黄色砂質土：暗褐色土少量。

SK33

1. 暗褐色土：黄色砂質土粒多量。
2. 黄色砂質土：暗褐色土少量。
3. 黄色砂質土・暗褐色土の混合土。



SK34

1. 暗褐色土：黄色砂質土粒多量。
2. 黄色砂質土
3. 黄色砂質土：暗褐色土少量。

SK35・36

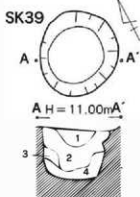
1. 暗褐色土：黄色砂質土ブロック多量。
 2. 暗褐色土：黄色砂質土ブロック少量。
 3. 黄色砂質土粒・暗褐色土の混合土。
 4. 黄色砂質土：暗褐色土少量。
- I. 暗褐色土：黄色砂質土ブロック少量。
II. 黄色砂質土：黄色砂質土ブロック主体。
暗褐色土少量。
III. 黄色砂質土粒・暗褐色土の混合土。

SK37

1. 暗褐色土：
黄色砂質土ブロック多量。

SK38

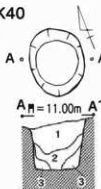
1. 暗褐色土：
黄色砂質土粒少量
2. 黄色砂質土主体：
暗褐色土少量。
3. 暗褐色土：
黄色砂質土粒多量



SK39

1. 暗褐色土：黄色砂質土粒少量。
2. 暗褐色土：黄色砂質土粒多量。
3. 暗褐色土
4. 黄白色粘土

SK40



SK40

1. 黄色砂質土：
暗褐色土少量。
2. 暗褐色土：
黄色砂質土多量。
3. 黄色砂質土：
暗褐色土少量。



図35 土壌 (4)

形、削り出し高台を持つ。高台部を除く全面に糠白釉が施釉されている。また口縁部外面に胴緑釉が、内面に鉄絵による笹文が施されている。19世紀前半のものである。

SK41 (図36)

位置 D2-31・32グリッド 重複関係 SK43を切る。形態 隅丸長方形の浅い掘り込み。規模 長軸1.30m×短軸0.85m×深さ0.29m 覆土 暗褐色土の単層。遺物 銅銭1点が出土した。

SK42 (図36)

位置 D2-31グリッド 重複関係 なし 形態 円形。ほぼ垂直に掘り込まれている。規模 径1.07m×深さ0.75m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。土層断面からは、埋土下層から壁際部分に黄色砂質土が堆積し、上層の暗褐色土がその内側に沈み込んでいる状況を観察できた。遺物 キセル片4点が出土した。

SK43 (図36)

位置 D2-31グリッド 重複関係 SK41に切られる。またSK48とも重複するが、先後関係は不明である。形態 円形。ほぼ垂直に掘り込まれている。規模 径0.95m×深さ0.61m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。土層断面からは埋土が内側に沈み込んでいる状況を観察できた。遺物 銅銭3枚が付着した状態で出土している。また、鉄釘片10点が出土した。

SK44 (図36)

位置 D2-32グリッド 重複関係 SK45に切られる。形態 円形の浅い掘り込み。規模 径0.78m×深さ0.20m 覆土 暗褐色土の単層。遺物 出土しなかった。

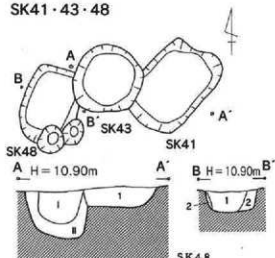
SK45 (図36・49)

位置 D2-32グリッド 重複関係 なし 形態 不整隅丸方形。ほぼ垂直に掘り込まれている。規模 長軸0.91m×短軸0.81m×深さ0.62m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。遺物 陶器碗1点が正位で出土した。出土した陶器は大堀相馬焼の碗の完形品である。ロクロ成形、削り出し高台をもつ。高台部内・外面を含む全面に糠白釉が施釉されている。19世紀第2四半期のものである。

SK46 (図36・49)

位置 D2-31・32グリッド 重複関係 SK47に切られる 形態 円形。垂直に掘り込まれている。規模 径1.05m×深さ0.54m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。土層断面からは埋土の上層部が内側に沈み込んでいる状況を観察できた。遺物 土

SK41・43・48

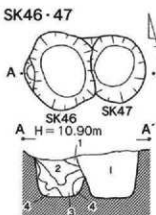


SK41・43

1. 暗褐色土：黄色砂質土粒少量。
- I. 暗褐色土：黄色砂質土粒少量。
- II. 黄色砂質土粒主体：暗褐色土少量。

1. 暗褐色土：
黄色砂質土粒・木炭少量。
2. 黄色砂質土粒主体：
暗褐色土少量。

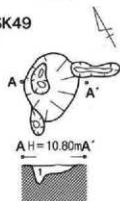
SK46・47



SK46・47

1. 暗褐色土：黄色砂質土粒含む。
2. 暗褐色土
3. 暗褐色土：黄色砂質土粒多量。
4. 暗褐色土：黄色砂質土の混合土
- I. 暗褐色土：黄色砂質土粒を含む。

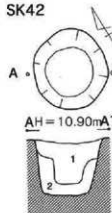
SK49



SK49

1. 暗褐色土：
黄色砂質土粒少量。

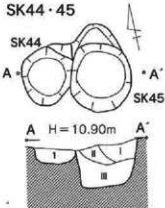
SK42



SK42

1. 暗褐色土：
黄色砂質土ブロック多量。
2. 黄色砂質土ブロック主体：
暗褐色土少量。

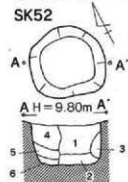
SK44・45



SK44・45

1. 暗褐色土
I. 暗褐色土・黄色砂質土の混合土
- II. 暗褐色土：黄色砂質土粒多量。
- III. 暗褐色土：黄色砂質土粒少量。

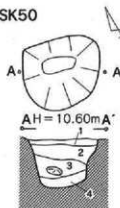
SK52



SK52

1. 暗褐色土：黄色砂質土粒・木炭粒少量。
2. 明褐色土
3. 暗黄褐色土
4. 暗褐色土：黄色砂質土粒少量。
5. 暗褐色土：黄色砂質土粒少量。
6. 黄色砂質土粒：暗褐色土少量。

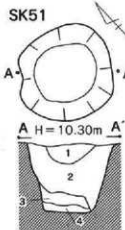
SK50



SK50

1. 黄色砂質土粒主体：
暗褐色土少量。
2. 暗褐色土：
黄色砂質土粒少量。
3. 黄色砂質土・
暗褐色土の混合土。
4. 暗褐色土

SK51



SK51

1. 黒褐色土/黄色砂質土粒少量。
2. 黄褐色砂質土ブロック・
黒褐色土の混合土
3. 黒褐色土
4. 黄白色粘質土

SK53

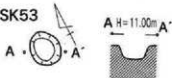


図36 土層(5)

墳底面からカワラケの灯明皿1点が正位で出土した。その他に、銅銭6枚、キセル片4点が出土した。銅銭は6枚が錆により付着した状態で出土している。

SK47 (図36・49)

位置 D2-32グリッド 重複関係 SK46を切る。形態 円形。垂直に掘り込まれている。規模 径0.90m×深さ0.49m 覆土 暗褐色土の単層。遺物 陶器1点、銅銭4枚が出土した。陶器は大塚相馬焼の碗の完形品で、逆位で出土している。ロクロ成形、削り出し高台をもつ。高台部内面を除く全面に糠白釉が、口縁部外面に銅緑釉が流しかけにより施釉されている。19世紀前半のものである。

SK48 (図36)

位置 D2-31グリッド 重複関係 SK43と重複するが、先後関係は不明である。形態 隅丸長方形。ほぼ垂直に掘り込まれている。規模 長軸1.02m×短軸0.74m×深さ0.27m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。覆土は厚さ25cmほどしか遺存していなかったが、土層断面では両壁際に黄色砂質土が、中央に暗褐色土が堆積している状況が観察できた。遺物 銅銭10枚、鉄釘片7点が出土した。銅銭は10枚が付着した状態で出土している。備考 覆土の遺存状況はよくないが、土層の堆積状況から、堅棺墓の可能性はある。

SK49 (図36)

位置 D2-31グリッド 重複関係 なし 形態 楕円形。断面は浅い皿状を呈するが、一部ピット状に深く掘り込まれている。規模 長径0.92m×短径0.68m×深さ0.25m 覆土 暗褐色土の単層。遺物 なし

SK50 (図36)

位置 D2-41グリッド 重複関係 なし 形態 不整形。ほぼ垂直に掘り込まれている。規模 長軸1.03m×短軸0.94m×深さ0.64m 覆土 黄色砂質土・暗褐色土が交互に埋め戻されている。遺物 なし

SK51 (図36)

位置 D2-51グリッド 重複関係 なし 形態 円形。ほぼ垂直に掘り込まれている。規模 径1.32m×深さ0.91m 覆土 黒褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。最下層には黄白色粘質土が堆積していた。遺物 銅銭5点、鉄釘片22点、木片3点、不明金具1点が出土した。備考 覆土の状況からは明確に捉えられなかったが、掘り込みの形状や鉄釘・木片の出土から堅棺が埋設されていたものと考えられる。

SK52 (図36)

位置 D2-62グリッド 重複関係 なし 形態 不整形ないし方形。垂直に掘り込まれている。規模 長軸1.01m×短軸0.91m×深さ0.52m 覆土 堅棺を埋設し、暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻された状況が土層断面から観察された。遺物 なし

SK53 (図36)

位置 D2-21グリッド 重複関係 なし 形態 円形の浅い掘り込み。規模 径0.48m×深さ0.17m 遺物 銅銭9点が出土した。このうち8枚は付着した状態で出土している。

SK54 (図37)

位置 D2-13・23グリッド 重複関係 なし 形態 方形。垂直に掘り込まれている。規模 長軸1.04m×短軸1.04m×深さ0.88m 覆土 墓壇埋土下層部から壁際に黄色砂質土が堆積し、上層の暗褐色土がその内側に沈み込んでいる状況が、土層断面から観察された。堅棺を埋設し、暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されたものと思われる。遺物 銅銭9枚、キセル片2点、炭片8点、鉄釘片10点が出土した。銅銭は5枚、4枚がそれぞれ互いに付着した状態で出土している。鉄釘は堅棺に使用されたものと考えられる。

SK55 (図37)

位置 D2-21グリッド 重複関係 SK154と重複するが、先後関係は不明である。形態 円形。ほぼ垂直に掘り込まれている。規模 径0.86m×深さ0.66m 覆土 堅棺を埋設し、暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻された状況が土層断面から観察された。遺物 銅銭1枚、鉄銭3枚、キセル片7点が出土した。

SK56 (図37)

位置 D2-10・11グリッド 重複関係 SI2を切る。形態 隅丸長方形。ほぼ垂直に掘り込まれている。規模 長軸1.24m×短軸0.94m×深さ0.65m 覆土 暗黄褐色土により埋め戻されている。遺物 銅銭6枚が出土した。このうち5枚は互いに付着した状態で出土している。

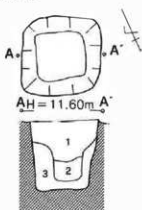
SK57 (図37)

位置 D2-00・10グリッド 重複関係 SI2を切る。形態 隅丸長方形。垂直に掘り込まれている。規模 長軸1.38m×短軸1.01m×深さ0.47m 覆土 暗褐色土・黄褐色土により埋め戻されている。遺物 銅銭6枚が出土した。

SK58 (図37)

位置 D2-10グリッド 重複関係 SI2を切る。形態 隅丸長方形の浅い掘り込み。

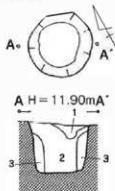
SK54



SK54

1. 暗褐色土：
黄色砂質土ブロック多量。
2. 暗褐色土：
黄色砂質土ブロック少量。
3. 暗褐色土：
黄色砂質土粒少量。

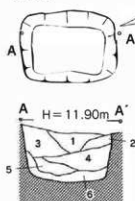
SK55



SK55

1. 暗褐色土：
黄色砂質土粒少量。
2. 暗褐色土：
黄色砂質土粒多量。
3. 黄色砂質土主体：
暗褐色土少量。

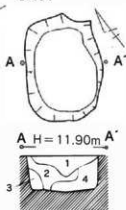
SK56



SK56

1. 暗黄褐色土・黄色砂質土粒微量。
2. 暗黄褐色土・黄色砂質土粒少量。
3. 暗黄褐色土・黄色砂質土粒多量。
4. 暗褐色土
5. 暗黄褐色土・黄色砂質土粒少量。
6. 暗黄褐色土

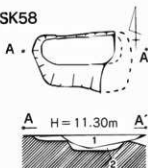
SK57



SK57

1. 暗褐色土：
黄色砂質土粒少量。
2. 暗褐色土：
黄色砂質土粒微量。
3. 黄色砂質土主体：
暗褐色土少量。
4. 黄色砂質土主体

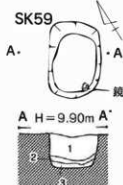
SK58



SK58

1. 暗褐色土：
焼土が層全面に見られる。
炭化物を少量含む。
2. 暗黄褐色土

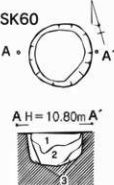
SK59



SK59

1. 暗褐色土：
黄色砂質土少量。
2. 暗褐色土
3. 暗黄褐色土

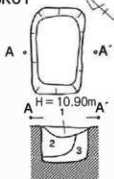
SK60



SK60

1. 暗褐色土・黄色砂質土粒の混合土
2. 暗褐色土・黄色砂質土粒少量。
3. 暗褐色土・黄色砂質土粒多量。

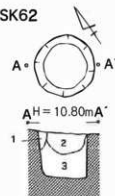
SK61



SK61

1. 暗褐色土・黄色砂質土粒多量。
2. 暗褐色土・黄色砂質土粒少量。
3. 暗褐色土・黄色砂質土粒の混合土。

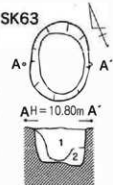
SK62



SK62

1. 黄色砂質土粒主体
2. 暗褐色土：
黄色砂質土ブロック多量。
3. 暗褐色土：
黄色砂質土粒少量。

SK63



SK63

1. 暗褐色土・黄色砂質土粒多量。
2. 黄色砂質土・暗褐色土少量。



図37 土壌 (6)



図38 SK 59出土和鏡

規模 長軸(1.01 m)×短軸0.76 m×深さ0.23 m 覆土 上層部に焼土・炭化物を顕著に含んでいる。遺物 なし

SK 59 (図37・38)

位置 D2-6 2グリッド 重複関係 なし 形態 隅丸長方形。垂直に掘り込まれている。
規模 長軸0.98 m×短軸0.77 m×深さ0.47 m 覆土 暗褐色土により埋め戻されている。遺物 土壁南側壁際より和鏡1枚が出土した。和鏡の表面には紙片が付着しており、紙に包まれた状態で埋納されたものと思われる。

SK 60 (図37)

位置 D2-4 2グリッド 重複関係 なし 形態 円形。垂直に掘り込まれている。規模 径0.81 m×深さ0.44 m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。覆土は厚さ40cmほどしか遺存していなかったが、土層断面では両壁際に黄色砂質土が、中央に暗褐色土が堆積している状況が観察できた。遺物 銅銭11点、キセル片5点が出土した。銅銭は3枚、5枚がそれぞれ互いに付着した状態で出土している。

SK 61 (図37)

位置 D2-3 2グリッド 重複関係 なし 形態 長方形。垂直に掘り込まれている。

規模 長軸1.15m×短軸0.67m×深さ0.46m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。遺物 銅銭5枚、キセル片5点、不明木製品1点、不明金具2点、鉄釘片15点が出土した。

SK62 (図37)

位置 D2-42グリッド 重複関係 なし 形態 円形。垂直に掘り込まれている。規模 径0.75m×深さ0.62m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。遺物 銅銭6枚が出土した。

SK63 (図37)

位置 D-43グリッド 重複関係 なし 形態 楕円形。垂直に掘り込まれている。規模 長径1.03m×短径0.78m×深さ0.48m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。土層断面からは埋土の上層部が内側に沈み込んでいる状況を観察できた。遺物 銅銭3枚が互いに付着した状態で出土した。その他に炭片2点、鉄釘片14点、木片2点が出土した。

SK64 (図39)

位置 D2-33・43グリッド 重複関係 なし 形態 隅丸長方形。垂直に掘り込まれている。規模 長軸1.16m×短軸0.85m×深さ0.31m 覆土 暗褐色土と黄色砂質土により埋め戻されている。覆土は厚さ30cmほどしか遺存していなかったが、土層断面では両壁際に黄色砂質土が、中央に暗褐色土が堆積している状況を観察できた。遺物 銅銭5枚が出土した。このうち2枚は互いに付着した状態で出土している。

SK65 (図39)

位置 D2-43グリッド 重複関係 なし 形態 不整円形。垂直に掘り込まれている。規模 長軸0.93m×短軸0.81m×深さ0.48m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。土層断面では両壁際に黄色砂質土が、中央に暗褐色土が堆積している状況を観察できた。遺物 鉄銭と思われる鉄製品7点、炭片2点が出土した。

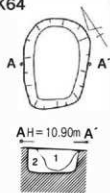
SK66 (図39)

位置 D2-43・44グリッド 重複関係 なし 形態 長方形。垂直に掘り込まれている。規模 長軸1.09m×短軸0.64m×深さ0.46m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。遺物 銅銭2枚、鉄銭4枚、鉄釘片23点が出土した。

SK67 (図39)

位置 D2-43・44グリッド 重複関係 なし。北半部に攪乱を受けている。形態 隅丸長方形。ほぼ垂直に掘り込まれている。規模 長軸1.47m×短軸1.07m×深さ0.30m 覆

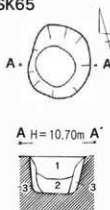
SK64



SK 64

1. 暗褐色土・黄色砂質土粒の混合土。
2. 黄色砂質土粒・暗褐色土の混合土。
3. 暗褐色土・黄色砂質土粒の混合土。

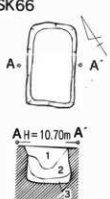
SK65



SK 65

1. 暗褐色土：黄色砂質土粒少量。
2. 暗褐色土：黄色砂質土粒多量。
3. 黄色砂質土粒主体：暗褐色土少量。

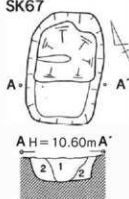
SK66



SK 66

1. 黄色砂質土・暗褐色土の混合土。
2. 黄色砂質土：暗褐色土多量。
3. 黄色砂質粘質土。

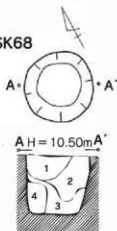
SK67



SK 67

1. 暗褐色土：黄色砂質土の混合土。
2. 暗褐色土：黄色砂質土粒少量。

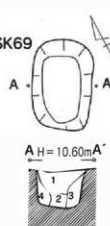
SK68



SK 68

1. 暗褐色土：黄色砂質土粒多量。
2. 黄色砂質土粒・暗褐色土の混合土。
3. 暗褐色土：黄色砂質土粒多量。
4. 黄色砂質土粒主体：暗褐色土少量。

SK69



SK 69

1. 暗褐色土：黄色砂質土粒多量。
2. 暗褐色土：黄色砂質土少量。
3. 黄色砂質土：暗褐色土少量。

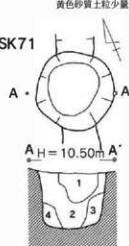
SK70



SK 70

1. 暗褐色土：黄色砂質土粒・木炭粒少量。
2. 黄色砂質土。

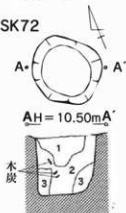
SK71



SK 71

1. 暗褐色土：黄色砂質土ブロック少量。
2. 黄色砂質土粒：暗褐色土少量。
3. 暗褐色土：黄色砂質土ブロック多量。

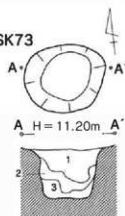
SK72



SK 72

1. 暗褐色土：黄色砂質土粒少量。
2. 黄色砂質土粒：暗褐色土・木炭少量。
3. 黄色砂質土粒：暗褐色土の混合土。

SK73



SK 73

1. 暗褐色土：黄色砂質土ブロック多量。
2. 暗褐色土：黄色砂質土粒少量。
3. 暗褐色土・黄色砂質土の混合土。



図39 土壌 (7)

土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。土層断面では、両壁際に黄色砂質土が、中央に暗褐色土が堆積している状況が観察できた。遺物 銅銭6枚、キセル片2点、鉄釘片16点、不明金具3点、不明鉄製品3点が出土した。銅銭は6枚のうち3枚が互いに付着した状態で出土している。

SK68 (図39)

位置 D2-53グリッド 重複関係 なし 形態 円形。垂直に掘り込まれている。規模 径0.96m×深さ0.78m 覆土 堅棺を埋設し、暗褐色土と黄色砂質土により埋め戻した状況が土層断面から観察できた。遺物 銅銭5枚、キセル片5点が出土した。銅銭は、5枚が互いに付着した状態で出土している。

SK69 (図39)

位置 D2-44・54グリッド 重複関係 なし 形態 隅丸長方形。垂直に掘り込まれている。規模 長軸1.21m×短軸0.79m×深さ0.48m 覆土 土層断面で両壁際に黄色砂質土が、中央に暗褐色土が堆積している状況が観察できた。堅棺を埋設し、暗褐色土と黄褐色土により埋め戻されたものと考えられる。遺物 銅銭6点が出土した。このうち4枚は互いに付着した状態で出土している。

SK70 (図39)

位置 D2-54グリッド 重複関係 なし 形態 隅丸長方形。ほぼ垂直であるが浅い掘り込み。規模 長軸1.19m×短軸0.66m×深さ0.26m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。遺物 銅銭3点、キセル片8点、鉄釘片7点が出土している。

SK71 (図39)

位置 D2-54グリッド 重複関係 SD13を切る。形態 円形。垂直に掘り込まれている。規模 径1.07m×深さ0.79m 覆土 黄色砂質土・暗褐色土により埋め戻されている。上層の暗褐色土・黄色砂質土が内側に沈み込んでいる状況が土層断面から観察できた。堅棺を埋設し、暗褐色土と黄褐色土により埋め戻されたものと思われる。遺物 銅銭6点が出土した。うち2枚は互いに付着した状態で出土している。

SK72 (図39)

位置 D2-54グリッド 重複関係 なし 形態 隅丸方形。垂直に掘り込まれている。規模 長軸0.92m×短軸0.83m×深さ0.74m 覆土 黄色砂質土・暗褐色土により埋め戻されている。壁際に黄色砂質土が堆積し、上層の暗褐色土がその内側に沈み込んでいる状況が土層断面から観察できた。堅棺を埋設し、暗褐色土と黄褐色土により埋め戻されたものと思われる。遺物 鉄銭と思われる鉄製品9点、火打石2点、キセル片2点が出土した。

SK73 (図39)

位置 D2-45グリッド 重複関係 SD14を切る。形態 楕円形。垂直に掘り込まれている。規模 長径1.07m×短径0.88m×深さ0.64m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。遺物 鉄銭6枚が出土した。うち4枚は互いに付着した状態で出土している。

SK74 (図40)

位置 D2-46グリッド 重複関係 なし 形態 隅丸長方形。ほぼ垂直に掘り込まれている。規模 長軸1.39m×短軸0.79m×深さ0.41m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。遺物 銅銭4点が出土している。

SK75 (図40)

位置 D2-55グリッド 重複関係 なし 形態 円形。垂直であるが浅い掘り込み。規模 径1.03m×深さ0.22m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。遺物 銅銭6枚が互いに付着した状態で出土した。

SK76 (図40)

位置 D2-55グリッド 重複関係 なし 形態 楕円形。垂直に掘り込まれている。規模 長径1.18m×短径0.99m×深さ0.44m 覆土 黄色砂質土・暗褐色土により埋め戻されている。壁際に黄色砂質土が堆積し、上層の暗褐色土がその内側に沈み込んでいる状況が土層断面から観察できた。遺物 なし

SK77 (図40)

位置 D2-65グリッド 重複関係 なし 形態 円形。垂直に掘り込まれている。規模 径0.93m×深さ0.38m 覆土 黄色砂質土・暗褐色土により埋め戻されている。壁際に黄色砂質土が堆積し、上層の暗褐色土がその内側に内側に沈み込んでいる状況が土層断面から観察できた。遺物 なし

SK78 (図40・49)

位置 D2-65グリッド 重複関係 なし 形態 長方形。垂直であるが浅い掘り込み。規模 長軸0.87m×短軸0.59m×深さ0.05m 覆土 暗褐色土 遺物 陶器1点が出土した。出土した陶器は大堀相馬焼の灯明皿の完形品である。ロクロ成形、底部外面に回転糸切り痕を残す。底部外面を残し全面に灰釉が施釉されている。18世紀末のものである。

SK79 (図40)

位置 D2-65グリッド 重複関係 なし 形態 長方形。垂直に掘り込まれている。規模 長軸1.00m×短軸0.68m×深さ0.34m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻さ

れている。遺物 銅銭6枚、鉄釘片9点が出土した。銅銭は5枚が互いに付着した状態で出土している。

SK80 (図40)

位置 D2-65グリッド 重複関係 SK157を切る。形態 長方形と思われる。ほぼ垂直に掘り込まれている。規模 長軸1.08m×短軸0.82m×深さ0.29m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。遺物 なし

SK81 (図40)

位置 D2-75グリッド 重複関係 SK158を切る。形態 長方形。ほぼ垂直に掘り込まれている。規模 長軸1.05m×短軸0.79m×深さ0.32m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。遺物 なし

SK82 (図41・49)

位置 D2-76グリッド 重複関係 なし 形態 隅丸長方形。垂直に掘り込まれている。規模 長軸0.81m×短軸0.62m×深さ0.46m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。上層の暗褐色土が内側に沈み込んでいる状況が土層断面から観察できた。遺物 陶器1点、鉄釘片2点、木片1点、不明鉄製品13点が出土した。出土した陶器は肥前産の碗の完形品で、逆位で出土している。ロクロ成形、削り出し高台をもつ。外面に山水家屋文・寿字の染付が見られる。また、高台部内面に崩した寿字が染付で記されている。18世紀後半のものである。

SK83 (図41)

位置 D2-76グリッド 重複関係 なし 形態 円形。上部は緩やかに、下部は垂直に掘り込まれている。規模 径0.66m×深さ0.42m 覆土 黄色砂質土・暗褐色土により埋め戻されている。遺物 なし

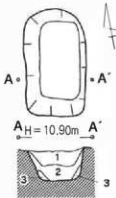
SK84 (図41・49)

位置 D2-76グリッド 重複関係 SK159と重複するが先後関係は不明である。形態 隅丸長方形。垂直に掘り込まれている。規模 長軸1.25m×短軸0.83m×深さ0.38m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。遺物 陶器1点が出土した。出土したのは土瓶に伴うと思われる蓋である。ロクロ成形、天井部外面に鉄軸が施軸されている。館ノ下焼で、19世紀のものである。

SK85 (図41)

位置 D2-76・77グリッド 重複関係 なし 形態 長方形。垂直に掘り込まれてい

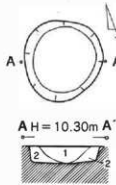
SK74



SK74

1. 暗褐色土：
黄色砂質土粒多量。
2. 黄色砂質土粒主体：
暗褐色土少量。
3. 黄色砂質土

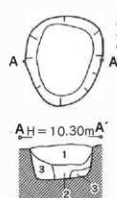
SK75



SK75

1. 暗褐色土：
黄色砂質土粒多量。
2. 黄色砂質土・
暗褐色土の混合土：
木炭粒含む。

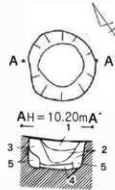
SK76



SK76

1. 暗褐色土：
黄色砂質土粒多量。
木炭粒微量。
2. 暗褐色土：
黄色砂質土粒少量。
3. 黄色砂質土粒・
暗褐色土の混合土

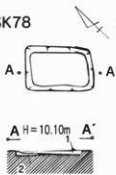
SK77



SK77

1. 黄白色粘土；暗褐色土少量。
2. 黄色砂質土；暗褐色土少量。
3. 黄色砂質土；暗褐色土多量。
4. 黄色砂質粘質土；暗褐色土少量。
5. 黄色砂質土ブロック主体；
暗褐色土少量。

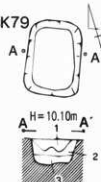
SK78



SK78

1. 暗褐色土：
黄色砂質土少量。
2. 黄色砂質土：
暗褐色土少量。

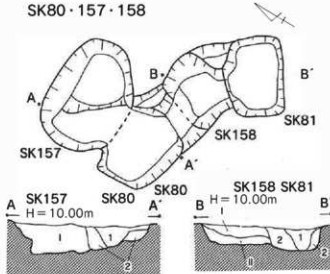
SK79



SK79

1. 黄色砂質土ブロック主体：
暗褐色土少量，木炭粒微量。
2. 暗褐色土：
黄色砂質土粒少量。
3. 暗褐色土：
黄色砂質土粒少量。

SK80・157・158



SK80・157

1. 暗褐色土：
黄色砂質土粒少量。
2. 暗褐色土・
黄色砂質土粒混合土
1. 暗褐色土

SK81・158

1. 暗褐色土：
黄色砂質土少量。
- 暗褐色土・
黄色砂質土混合土
- I. 暗褐色土
- II. 暗褐色土：
黄色砂質土粒を多量。



図40 土壌(8)

る。規模 長軸1.01m×短軸0.72m×深さ0.40m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。遺物 なし

SK86 (図41)

位置 D2-66・67・76・77グリッド 重複関係 SB5を切り、SK117に切られる。SK144・163とも重複するが、先後関係は不明である。形態 隅丸長方形。垂直に掘り込まれている。規模 長軸1.13m×短軸0.76m×深さ0.63m 覆土 最下層に黄色砂質土が、両壁際に暗褐色土・黄色砂質土の混合土が堆積し、上層の暗褐色土がその内側に沈み込んでいる状況が、土層断面から観察できた。堅棺を埋設し、黄色砂質土・暗褐色土により埋め戻されたものと考えられる。遺物 なし

SK87 (図41)

位置 D2-66グリッド 重複関係 なし 形態 円形。垂直に掘り込まれている。規模 径0.85m×深さ0.64m 覆土 埋土下層壁際に黄色砂質土が堆積し、上昇の黄色砂質土・暗褐色土がその内側に沈み込んだ状況が、土層断面から観察できた。堅棺を埋設し、黄色砂質土・暗褐色土により埋め戻されたものと考えられる。遺物 銅銭5枚、鉄銭と思われる鉄製品3点、キセル片4点、鉄製品1点が出土した。銅銭は2枚、3枚がそれぞれ付着した状態で出土している。

SK88 (図41)

位置 D2-66グリッド 重複関係 SK159と重複するが、先後関係は不明である。形態 隅丸長方形。垂直に掘り込まれている。規模 長軸1.83m×短軸0.87m×深さ0.59m 覆土 黄色砂質土・暗褐色土により埋め戻されている。遺物 銅銭4点が出土した。

SK89 (図41)

位置 D2-66グリッド 重複関係 なし 形態 円形。上部は緩やかな傾斜をもち、下部は垂直に掘りこまれている。規模 径0.68m×深さ0.19m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。遺物 なし

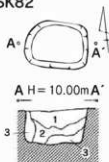
SK90 (図42)

位置 D2-67・77グリッド 重複関係 SK91・162に切られる。形態 隅丸長方形。垂直に掘り込まれている。規模 長軸1.22m×短軸0.76m×深さ0.53m 覆土 灰色砂質土・暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。遺物 なし

SK91 (図43)

位置 D2-67グリッド 重複関係 SK90を切る。形態 隅丸長方形。垂直に掘り

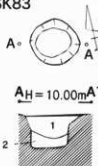
SK82



SK82

1. 暗褐色土：
黄色砂質土粒多量。
2. 暗褐色土：
黄色砂質土粒少量。
3. 黄色砂質土粒主体：
暗褐色土少量。

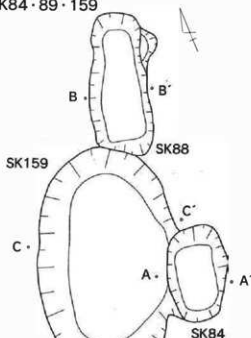
SK83



SK83

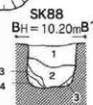
1. 暗褐色土：
黄色砂質土粒の混合土。
2. 黄色砂質土：
暗褐色土少量。

SK84・89・159



SK84

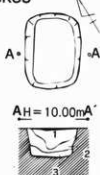
1. 暗褐色土：
黄色砂質土粒の混合土。
2. 黄色砂質土粒主体：
暗褐色土少量。



SK88

1. 暗褐色土：
黄色砂質土粒多量。
2. 黄色砂質土：
暗褐色土少量。
3. 暗褐色土：
黄色砂質土粒の混合土
4. 暗褐色土：
黄色砂質土粒少量。

SK85



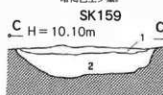
SK85

1. 黄色砂質土ブロック主体：
暗褐色土少量。
2. 暗褐色土：
黄色砂質土粒少量。
3. 暗黄褐色土：
黄色砂質土混合土。



SK86

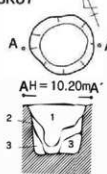
1. 暗褐色土：
黄色砂質土粒少量。
2. 暗褐色土：
黄色砂質土粒多量。
3. 暗褐色土：
黄色砂質土粒の混合土。
4. 黄色砂質土粒：
暗褐色土少量。



SK159

1. 暗褐色土；黄色砂質土粒を含む。
2. 濃暗褐色土；木炭粒・焼土粒少量含む。

SK87



SK87

1. 黄色砂質土粒主体：
暗褐色土少量、木炭粒微量。
2. 暗褐色土：
黄色砂質土ブロック少量。
3. 黄色砂質土：
暗褐色土少量。

SK89



SK89

1. 暗褐色土
2. 暗褐色土：
黄色砂質土粒少量。
3. 黄色砂質土粒：
暗褐色土少量。



図41 土壌(9)

込まれている。規模 長軸1.02m×短軸0.75m×深さ0.80m 覆土 壁際に灰色砂質土・暗褐色土が堆積し、上層の土がその内側へ沈み込んだ状況が土層断面から観察できた。遺物 なし

SK92 (図42)

位置 D2-57グリッド 重複関係 SI4を切る。形態 不整形円形。垂直に掘り込まれている。規模 長径0.84m×短径0.74m×深さ0.71m 覆土 両壁際に暗褐色土や灰色土が堆積し、その内側に沈み込んだ状況で灰色粘質土・暗褐色土が堆積している。遺物 なし

SK93 (図42)

位置 D2-67グリッド 重複関係 なし 形態 隅丸長方形。垂直に掘り込まれている。規模 長軸1.35m×短軸0.79m×深さ0.70m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。遺物 なし

SK94 (図42)

位置 D2-47グリッド 重複関係 SI6を切る。形態 隅丸長方形。垂直に掘り込まれている。規模 長軸0.93m×短軸0.62m×深さ0.23m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。遺物 なし

SK95 (図42)

位置 D2-37グリッド 重複関係 なし 形態 長方形。垂直に掘り込まれている。規模 長軸0.92m×短軸0.66m×深さ0.23m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。遺物 なし

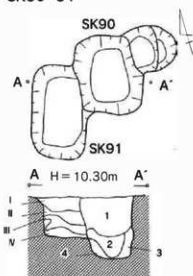
SK96 (図42・49)

位置 D2-37グリッド 重複関係 SI7を切る。形態 円形 規模 径1.03m×深さ0.86m 覆土 土層断面からは両壁際に黄色砂質土・暗褐色土が堆積し、暗褐色土がその内側に沈み込んでいる。最下層には黄白色粘質土が堆積する。遺物 陶器1点が出土した。出土した陶器は大堀相馬焼端反小碗の完形品である。ロクロ成形、直角仕上げの高台をもつ。高台部を残し、全面に施軸され、外面に染付により草文が描かれている。19世紀後半のものである。その他に銅銭3枚が互いに付着した状態で出土している。また、銅製の^{銅製}簪1点^が出土している。

SK97 (図42)

位置 D2-25・26グリッド 重複関係 SK98と重複するが、先後関係は不明である。形態 楕円形。垂直に掘り込まれている。規模 長径0.86m×短径0.75m×深さ0.60m 覆土 黄色砂質土・暗褐色土で埋め戻されている。最下層には、黄白色粘質土を含む暗褐色土が堆積していた。遺物 なし

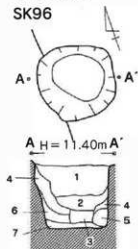
SK90・91



SK90・91

1. 暗褐色土：黄色砂質土粒少量。
2. 暗褐色土：黄色砂質土粒多量。
3. 暗褐色砂質土：黄色砂質土粒少量。
4. 灰色砂質土：黄色砂質土粒多量。
- I. 暗褐色土：黄色砂質土粒多量。
- II. 灰色砂質土：黄色砂質土粒少量。
- III. 灰色砂質土：黄色砂質土粒を多量。
- IV. 明灰色粘質土

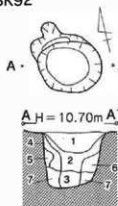
SK96



SK96

1. 暗褐色土：黄色砂質土粒微量。
2. 暗褐色土：黄色砂質土粒少量。
3. 暗褐色土：黄色砂質土粒多量。
4. 黄色砂質土粒主体：暗褐色土少量。
5. 黄色砂質土
6. 暗褐色土：黄色砂質土粒の混合土
7. 黄白色粘質土

SK92



SK92

1. 暗褐色土：黄色砂質土粒少量。
2. 暗褐色土：黄色砂質土粒微量。
3. 灰色粘質土：黄色砂質土粒少量。
4. 暗褐色土：黄色砂質土粒多量。
5. 暗褐色土：黄色砂質土粒微量。
6. 灰色砂質土：黄色砂質土ブロック多量。
7. 明灰色粘質土：黄色砂質土粒少量含む。

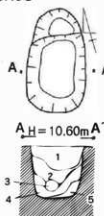
SK97・98



SK98

1. 暗褐色土：黄色砂質土少量。
2. 黄色砂質土：暗褐色土少量。

SK93

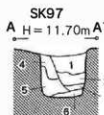


SK93

1. 暗褐色土：黄色砂質土少量。
2. 暗褐色土：黄色砂質土の混合土
3. 暗褐色砂質土
4. 暗褐色土：黄色砂質土多量。
5. 暗褐色土：黄色砂質土少量。

SK95

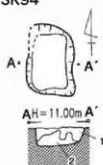
1. 暗褐色土：黄色砂質土粒少量。
2. 黄色砂質土：暗褐色土少量。



SK97

1. 黄色砂質土：暗褐色土多量。
2. 黄色砂質土：暗褐色土少量。
3. 黄色砂質土ブロック主体：暗褐色土少量。
4. 暗褐色土：黄色砂質土多量。
5. 暗褐色土：黄色砂質土少量。
6. 暗褐色土：黄白色粘質土粒含む。

SK94



SK94

1. 暗褐色土：黄色砂質土粒少量。
2. 黄色砂質土

SK95



図42 土壇 (10)

SK98 (図42)

位置 D2-26グリッド 重複関係 SK97と重複するが、先後関係は不明である。形態 長方形。垂直に掘り込まれている。規模 長軸1.11m×短軸0.87m×深さ0.47m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。上層の暗褐色土が、中央に沈み込んでいる状況が土層断面から確認できた。遺物 銅銭10点が出土した。うち2枚は互いに付着した状態で出土している。

SK99 (図43)

位置 D2-25・35グリッド 重複関係 なし 形態 長方形 規模 長軸1.78m×短軸1.09m×深さ0.73m 覆土 両壁際に暗褐色土・黄色砂質土が堆積し、上層の暗褐色土・黄色砂質土がその内側へ沈み込んでいる状況が土層断面から観察できた。遺物 銅銭6枚、キセル片2点が出土した。銅銭は2枚、3枚がそれぞれ互いに付着した状態で出土している。

SK100 (図43)

位置 D2-25グリッド 重複関係 なし 形態 隅丸長方形の浅い掘り込み。規模 長軸1.14m×短軸0.80m×深さ0.04m 覆土 黒褐色土の単層。木炭粒を多量に含んでいた。遺物 なし

SK101 (図43)

位置 D2-24・25グリッド 重複関係 SK102に切られる。形態 長方形。垂直に掘り込まれている。規模 長軸1.57m×短軸0.94m×深さ0.49m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。土層は全体に中央へ沈み込んだ状況である。遺物 キセル片2点、鉄銭と考えられる鉄製品2点が出土した。

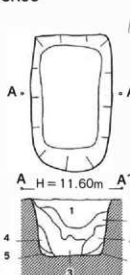
SK102 (図43)

位置 D2-25グリッド 重複関係 SK101を切る。形態 楕円形。垂直に掘り込まれている。規模 長径1.07m×短径0.71m×深さ0.58m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。遺物 なし

SK103 (図43)

位置 D2-34グリッド 重複関係 なし 形態 隅丸長方形。ほぼ垂直に掘り込まれている。規模 長軸1.64m×短軸1.15m×深さ0.56m 遺物 銅銭5枚が出土した。うち4枚は互いに付着した状態で出土している。

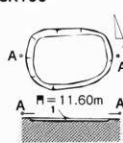
SK99



SK99

1. 暗褐色土：
黄色砂質土粒多量。
2. 暗黒褐色土
3. 黄色砂質土粒：
暗褐色土少量。
4. 暗褐色土：
黄色砂質土粒少量。
5. 黄色砂質土

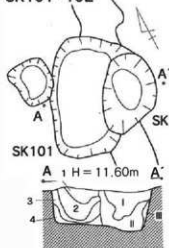
SK100



SK100

1. 黒褐色土：
木炭粒多量。

SK101・102



SK101・102

1. 暗褐色土：
黄色砂質土粒少量。
2. 暗褐色土：
黄色砂質土粒多量。
3. 暗褐色土・
黄色砂質土の混合土
4. 暗褐色土・
黄色砂質土粒の混合土
- I. 暗褐色土・
黄色砂質土ブロックの混合土
- II. 暗褐色土：
黄色砂質土粒少量。
- III. 暗褐色土：
黄色砂質土粒少量。

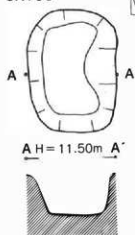
SK104



SK104

1. 暗褐色土：
骨片を多量に含む。

SK103



SK105



SK105

1. 暗褐色土：
黄色砂質土粒少量。
骨片・木炭粒多量含む。

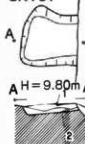
SK106



SK106

1. 暗褐色土：
骨粉を含む。
2. 黄褐色土

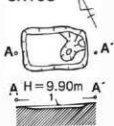
SK107



SK107

1. 暗黄褐色砂質土
2. 黄色砂質土：
暗褐色土少量。

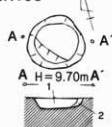
SK108



SK108

1. 暗褐色土：
骨片・黄色砂質土粒を含む。

SK109



SK109

1. 暗褐色土：
骨片・黄色砂質土少量。
2. 黄色砂質土

SK110



SK110

1. 黒色土：
骨片・木炭粒を含む。



図43 土壌 (11)

SK104 (図43)

位置 D2-36グリッド 重複関係 なし 形態 楕円形。ごく浅い掘り込み。規模 長径0.54m×短径0.47m×深さ0.06m 覆土 暗褐色土の単層。火葬骨片を多量に含んでいる。遺物 火葬骨片が出土した。備考 火葬墓。

SK105 (図43)

位置 D2-56グリッド 重複関係 なし 形態 不整形の浅い掘り込み。規模 長径0.55m×短径0.41m×深さ0.04m 覆土 暗褐色土の単層。骨片・木炭粒を多量に含んでいる。備考 火葬墓。

SK106 (図43)

位置 D2-66グリッド 重複関係 なし 形態 円形。ごく浅い掘り込み。規模 径0.41m×深さ0.08m 覆土 上層部の暗褐色土に骨粉が含まれていた。遺物 火葬骨片が出土した。備考 火葬墓。

SK107 (図43)

位置 D2-73グリッド 重複関係 SD13に切られる。形態 SD13に東半分を切られるが、長方形と思われる。掘り込みはほぼ垂直であるが浅い。規模 短軸0.81m×深さ0.15m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。遺物 なし

SK108 (図43)

位置 D2-74グリッド 重複関係 なし 形態 長方形の浅い掘り込み。規模 長軸0.88m×短軸0.57m×深さ0.03m 覆土 暗褐色土の単層。骨片を含んでいる。遺物 なし

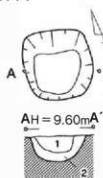
SK109 (図43)

位置 D2-7グリッド 重複関係 なし 形態 楕円形の浅い掘り込み。規模 長径0.75m×短径0.71m×深さ0.13m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。骨片を含む。遺物 銅銭2枚が出土した。

SK110 (図43)

位置 D2-74グリッド 重複関係 なし 形態 長方形 規模 長軸0.92m×短軸0.71m×深さ0.09m 覆土 黒色土の単層。骨片・木炭粒を含んでいる。遺物 なし

SK111



SK111

1. 暗褐色土:
木炭粒微量。
2. 暗褐色土:
黄色砂質土粒多量。

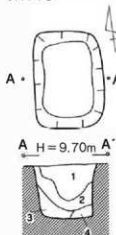
SK112



SK112

1. 暗褐色土:
木炭粒・黄色砂質土粒含む。
2. 黄色砂質土:
暗褐色土を少量含む。
3. 黒色土

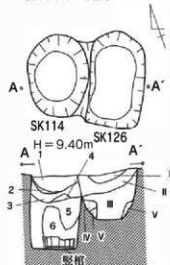
SK113



SK113

1. 暗褐色土:
黄色砂質土粒多量。
2. 黄褐色砂質土:
暗褐色土少量。
3. 黒色土:
黄色砂質土粒含む。
4. 黄白色砂質土:
黒色土少量。

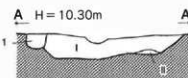
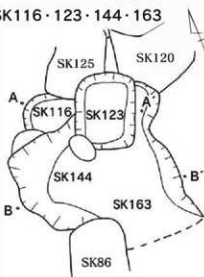
SK114・126



SK114・126

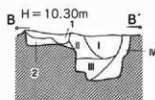
1. 黄色砂質土
 2. 灰色砂質土
 3. 黄色砂質土
 4. 暗灰色砂質土
 5. 暗黄褐色砂質土
 6. 暗褐色土
- I. 黄色砂質土
 - II. 暗黄色砂質土：暗褐色土多量。
 - III. 暗褐色土：黄色砂質土粒多量。
 - IV. 黄色砂質土
 - V. 暗灰色砂質土

SK116・123・144・163



SK144・163

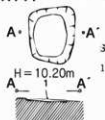
1. 暗黄褐色土
- I. 暗褐色土
- II. 暗黄褐色土



SK116・123

1. 暗褐色土：骨粉多量。
 2. 黄褐色土
- I. 暗褐色土：黄色砂質シルトブロック少量。
 - II. 暗褐色土：ロームブロック含む。
 - III. 暗褐色土：黄色砂質土・白色砂質土少量。
 - IV. 暗褐色土：ロームブロックを均一に含む。

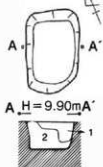
SK117



SK117

1. 黒褐色土:
骨粉多量。炭化物含む。

SK115



SK115

1. 暗褐色土:
黄色砂質土粒多量。
2. 暗褐色土:
黄色砂質土粒少量。



図44 土壌 (12)

SK111 (図44)

位置 D2-85グリッド 重複関係 なし 形態 方形。碗形の掘り込み。規模 長軸0.88m×短軸0.82m×深さ0.33m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。土層断面からは、上層の暗褐色土が中央へ沈み込んだ状況が観察できた。遺物 なし

SK112 (図44)

位置 D2-75・85グリッド 重複関係 なし 形態 隅丸長方形。垂直に掘り込まれている。規模 長軸1.03m×短軸0.61m×深さ0.29m 覆土 黒色土・黄色砂質土・暗褐色土の順に埋め戻されている。遺物 鉄鍋1点、キセル片2点、鉄釘片17点が出土した。鉄鍋は土壕北東側壁際より出土している。備考 本土壕から出土した鉄鍋は、遺体の頭部に被せられたものと推定される。鉄鍋の出土位置が土壕北東壁際であることから、頭部を北東へ向けた状態で埋葬されたものと考えられる。土層断面からは棺の形態を推定できる状況は観察されなかったが、鉄釘片が17点出土していることから、遺体は木製の棺に納められていたものと推定される。

SK113 (図44・50)

位置 D2-85グリッド 重複関係 なし 形態 長方形。垂直に掘り込まれている。規模 長軸1.03m×短軸0.73m×深さ0.71m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。土層断面からは、埋土が全体として中央へ沈み込んでいる状況を観察できた。遺物 陶器1点が出土した。出土した陶器は館ノ下焼鬘盤ヒヤコガシの完形品である。底部外面を残し、全面に施釉されている。

SK114 (図44)

位置 D2-85グリッド 重複関係 SK126に切られる。形態 楕円形。垂直に掘り込まれている。規模 長径1.08m×短径0.79m×深さ0.97m 覆土 黄色砂質土・灰色砂質土・暗褐色土などにより埋め戻されている。土壕底部に棺桶が遺存していた。棺桶は径42.5cm、残存高17.5cmである。遺物 銅銭6枚、キセル片1点が出土した。

SK115 (図44)

位置 D2-76グリッド 重複関係 なし 形態 長方形。垂直に掘り込まれている。規模 長軸1.11m×短軸0.71m×深さ0.36m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。遺物 銅銭6枚、鉄釘片1点が出土した。銅銭は2枚、4枚がそれぞれ互いに付着した状態で出土している。

SK116 (図44)

位置 D2-66グリッド 重複関係 SK123に切られる。またSK125・144とも重複するが、先後関係は不明である。形態 不明 規模 長軸不明×短軸不明×深さ0.20

m 覆土 暗褐色土・黄褐色土により埋め戻されている。上層の暗褐色土には、骨粉が少量に含まれていた。遺物 なし

SK117 (図44)

位置 D2-77グリッド 重複関係 SK86・144を切る。形態 不整形のごく浅い掘り込み。規模 長軸0.72m×短軸0.62m×深さ0.02m 覆土 黒褐色土の単層。骨片・炭化物を多量に含んでいた。遺物 火葬骨片が出土した。また、銅銭5枚が互いに付着した状態で出土している。備考 火葬墓。

SK118 (図45)

位置 D2-67グリッド 重複関係 SB5を切る。形態 長方形。垂直に掘り込まれている。規模 長軸1.37m×短軸1.01m×深さ0.65m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。遺物 銅銭4枚が互いに付着した状態で出土している。

SK119 (図45)

位置 D2-67グリッド 重複関係 SK120を切る。形態 隅丸長方形。垂直に掘り込まれている。規模 長軸1.10m×短軸0.91m×深さ0.68m 覆土 最下層に灰色粘質土・黄白色粘質土が堆積し、上層部は暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。遺物 刀子1点が出土した。

SK120 (図45)

位置 D2-67グリッド 重複関係 SK119に切られる。形態 隅丸長方形。垂直に掘り込まれている。規模 長軸1.78m×短軸1.10m×深さ0.38m 覆土 暗褐色土の単層。遺物 なし

SK121 (図45)

位置 D2-67グリッド 重複関係 SK120と重複するが先後関係は不明である。形態 長方形。垂直に掘り込まれている。規模 長軸1.09m×短軸0.71m×深さ0.55m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。遺物 キセル片6点、炭片2点が出土した。

SK122 (図45)

位置 D2-67グリッド 重複関係 なし 形態 楕円形 規模 長径0.71m×短径0.58m×深さ0.28m 覆土 黄色砂質土・暗褐色土により埋め戻されている。上層の暗褐色土が中央へ沈み込んでいる状況が土層断面から確認できた。遺物 なし

SK123 (図44)

位置 D2-67グリッド 重複関係 SK116を切る。またSK144・163とも重複するが、先後関係は不明である。形態 長方形。垂直に掘り込まれている。規模 長軸1.02m×短軸0.80m×深さ0.63m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土・ロームブロックなどにより埋め戻されている。遺物 鉄釘片6点が出土した。

SK124 (図45)

位置 D2-77・87グリッド 重複関係 SB2・3を切る。形態 隅丸長方形 規模 長軸1.04m×短軸0.67m×深さ0.44m 覆土 黄色砂質土・暗褐色土により埋め戻されている。上層の暗褐色土が中央へ沈み込んでいる状況が土層断面から確認できた。遺物 銅銭7枚が出土した。

SK125 (図45)

位置 D2-67グリッド 重複関係 SK116・123と重複するが、先後関係は不明である。形態 隅丸長方形。やや斜めに掘り込まれている。規模 長軸1.04m×短軸0.72m×深さ0.28m 遺物 銅銭7点が出土した。このうち4枚は互いに付着した状態で出土している。また、キセル片1点が出土している。

SK126 (図44)

位置 D2-85グリッド 重複関係 SK114を切る。形態 隅丸長方形。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、底面付近はU字状を呈する。規模 長軸1.26m×短軸0.73m×深さ0.66m 覆土 黄色砂質土・暗褐色土により埋め戻されている。上層の暗褐色土が中央へ沈み込んでいる状況が土層断面から観察できた。遺物 鉄釘片1点が出土した。

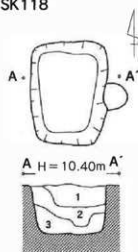
SK127 (図45)

位置 D2-22グリッド 重複関係 なし 形態 方形。垂直に掘り込まれている。規模 長軸1.01m×短軸0.99m×深さ0.90m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。土層断面から壁際に黄色砂質土・暗褐色土が堆積し、その内側に上層の暗褐色土が流れ込んでいる状況が観察できた。堅棺を埋設し、黄色砂質土・暗褐色土により埋め戻された後、棺が腐朽し、上層の土が流れ込んだものと考えられる。遺物 銅銭7枚、鉄釘片19点、木片2点が出土した。銅銭は4枚が互いに付着した状態で出土している。

SK128 (図45)

位置 D2-22グリッド 重複関係 なし 形態 隅丸長方形。浅い碗形の掘り込み。規模 長軸0.85m×短軸0.60m×深さ0.18m 覆土 暗黄褐色土の単層。遺物 鉄釘片1点、木片3点が出土している。

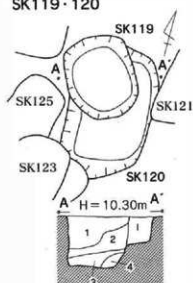
SK118



SK118

1. 暗褐色土：黄色砂質土ブロック多量。
2. 暗褐色土・黄色砂質土ブロックの混泥土
3. 黄色砂質土ブロック主体：暗褐色土少量。

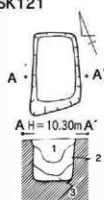
SK119・120



SK119・120

1. 暗褐色土：
黄色砂質土粒少量。
2. 黄色砂質土：
暗褐色土少量。
3. 灰色粘質土
4. 黄白色粘質土
1. 暗褐色土：
黄色砂質土粒少量。

SK121



SK121

1. 暗褐色土：
黄色砂質土多量。
2. 暗褐色土：
黄色砂質土少量。
3. 暗褐色土：
黄白色土粒多量。

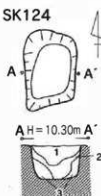
SK122



SK122

1. 暗褐色土：
黄色砂質土粒微量。
2. 暗褐色土：
黄色砂質土粒少量。
3. 黄色砂質土：
暗褐色土少量。

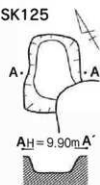
SK124



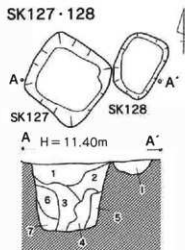
SK124

1. 暗褐色土：
黄色砂質土粒少量。
2. 暗褐色土：
黄色砂質土微量。
3. 暗褐色土：
黄色砂質土ブロック含む。

SK125



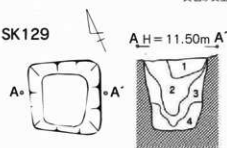
SK127・128



SK127・128

1. 暗黄褐色土・黄色砂質土粒混泥土
2. 暗黄褐色土：黄色砂質土粒微量。
3. 暗黄褐色土：黄色砂質土粒多量。木炭粒微量。
4. 暗黄褐色土：黄色砂質土粒少量。
5. 黄色砂質土ブロック主体：暗褐色土少量。
6. 黄色砂質土粒主体：暗褐色土少量。
7. 暗褐色土：黄色砂質土粒微量含む。
1. 暗黄褐色土：黄色砂質土少量含む。

SK129



SK129

1. 暗黄褐色土：
黄色砂質土粒微量。
2. 暗黄褐色土：
黄色砂質土粒多量。
3. 暗褐色土：
黄色砂質土粒微量。
4. 暗黄褐色土：
黄色砂質土粒少量。



図45 土壌 (13)

SK129 (図45)

位置 D2-23グリッド 重複関係 なし 形態 方形。垂直に掘り込まれている。規模 長軸0.95m×短軸0.92m×深さ0.94m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。土層断面からは、埋土が全体として中央に沈み込んでいる状況を観察できた。遺物 なし

SK130 (図46)

位置 D2-22・23グリッド 重複関係 なし 形態 方形。垂直に掘り込まれている。規模 長軸0.98m×短軸0.91m×深さ0.78m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。壁際に暗褐色土が堆積し、その中央に暗褐色土が柱状に堆積している状況を土層断面から観察できた。堅棺を埋設し、黄色砂質土・暗褐色土により埋め戻されたものと考えられる。遺物 銅銭6枚が出土した。

SK131 (図46)

位置 D2-62グリッド 重複関係 なし 形態 楕円形の浅い掘り込み。規模 長径0.74m×短径0.57m×深さ0.19m 覆土 埋土には骨片が多量に含まれていた。遺物 なし

SK132 (図46)

位置 D2-52グリッド 重複関係 なし 形態 円形。浅い皿状の掘り込み。規模 径0.67m×深さ0.15m 覆土 暗褐色土の単層。遺物 なし

SK133 (図46)

位置 D2-74グリッド 重複関係 なし 形態 不整楕円形。底面に段をもつ。規模 長径1.41m×短径1.01m×深さ0.38m 覆土 暗褐色土。遺物 なし

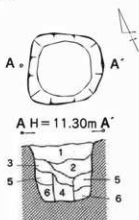
SK134 (図46)

位置 D2-51グリッド 重複関係 なし 形態 不整円形ないし楕円形。規模 長径0.89m×短径0.74m×深さ0.05m 覆土 暗褐色土。木炭粒・骨片を含んでいた。遺物 なし

SK135 (図46・50)

位置 D2-51グリッド 重複関係 なし 形態 円形。垂直に掘り込まれている。規模 径1.34m×深さ0.98m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。土層断面から、壁際に暗褐色土・黄色砂質土の埋土が、その中央に暗褐色土・黄色砂質土が柱状に堆積し、断層を形成している状況が認められた。その上部には暗褐色土が、中央へ沈み込んだ状況で堆積していた。堅棺を埋設し、暗褐色土と黄色砂質土により埋め戻した後、棺が腐朽し、棺の上部を覆う土層が下へ陥没したものと考えられる。遺物 陶器片2点が出土した。1は大堀相馬焼の鉢ないし片口の底部破片である。内面全面から体部下半まで鉄軸が施されている。

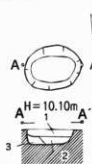
SK130



SK130

1. 暗黄褐色土：黄色砂質土粒少量。
2. 暗黄褐色土：黄白色粘質土ブロック多量。
3. 暗黄褐色土：黄色砂質土粒微量。
4. 暗褐色土：黄色砂質土粒多量。
5. 暗褐色土：黄色砂質土粒少量。
6. 暗褐色土：黄色砂質土ブロック多量。

SK131



SK131

1. 暗褐色土：木炭粒微量。
2. 暗褐色土：骨片多量。
3. 黄色砂質土：暗褐色土少量。

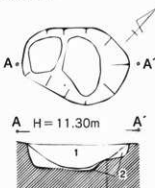
SK132



SK132

1. 暗褐色土：木炭粒微量。

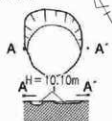
SK133



SK133

1. 暗褐色土：黄色砂質土ブロック少量。
2. 暗褐色土：黄色砂質土粒を均一に含む。

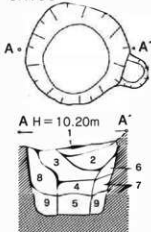
SK134



SK134

1. 暗褐色土：木炭粒・骨片含む。

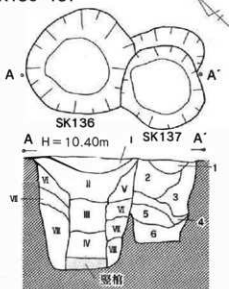
SK135



SK135

1. 暗褐色土：黄色砂質土粒少量。
2. 暗黄褐色土：黄色砂質土粒多量。
3. 暗黄褐色土：黄色砂質土粒少量。
4. 暗褐色土
5. 黄色砂質土粒：暗黄褐色土少量。
6. 暗黄褐色土・黄色砂質土粒の混合土
7. 暗褐色土：黄色砂質土粒少量。
8. 暗褐色土：黄色砂質土粒多量。
9. 黄色砂質土：暗褐色土少量。

SK136・137



SK136・137

1. 暗黄褐色土：黄色砂質土粒少量。
2. 暗褐色土：黄色砂質土粒多量。
3. 黄色砂質土粒：暗褐色土微量。
4. 暗褐色土：黄色砂質土粒少量。
5. 黄色砂質土粒：暗褐色土少量。
6. 黄白色粘質土：暗褐色土少量。
- I. 暗褐色土：黄色砂質土粒多量。
- II. 黄色砂質土：暗褐色土少量。
- III. 黄色砂質土ブロック：暗褐色土微量。
- IV. 暗褐色土：黄色砂質土粒多量。
- V. 暗褐色土：黄色砂質土粒多量。
- VI. 黄白色粘質土ブロック：暗褐色土微量。
- VII. 黄白色粘質土ブロック：暗褐色土少量。
- VIII. 黄白色粘質土



図46 土壌 (14)

2は大堀相馬焼小碗の底部破片である。高台部を残し、全面に糠白釉が施されており、生焼けで釉が融解しておらず、乳白色を呈する。19世紀後半のものである。このほかに、銅銭6枚が付着した状態で出土した。また、鉄釘片が18点出土している。

SK136 (図46)

位置 D2-41グリッド 重複関係 SK137を切る。形態 不整形円形。垂直に掘り込まれている。規模 長径1.37m×短径1.15m×深さ1.08m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。墓壇底面には堅棺が遺存していた。土層断面から、堅棺脇の壁際に暗褐色土・黄色砂質土の埋土が、堅棺の上部には暗褐色土・黄色砂質土が柱状に堆積し、断層を形成している状況が認められた。柱状の堆積土の上部には暗褐色土が、中央へ沈み込んだ状態で堆積していた。堅棺を埋設し、暗褐色土と黄色砂質土により埋め戻した後、棺が腐朽し、棺の上部を覆う土層が下へ陥没したものと考えられる。遺物 なし

SK137 (図46)

位置 D2-40・41グリッド 重複関係 SK136に切られる。形態 円形。垂直に掘り込まれている。規模 径1.47m×深さ1.48m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。最下層には黄白色粘質土が堆積していた。遺物 なし

SK138 (図47)

位置 D2-82・92グリッド 重複関係 SD13を切る。形態 不整形方形。壁がやや傾斜する緩やかな掘り込み。規模 長軸1.61m×短軸0.93m×深さ0.42m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。遺物 なし

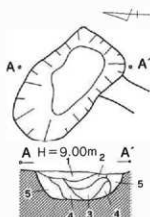
SK139 (図47)

位置 D2-93グリッド 重複関係 SK146と重複するが、先後関係は不明である。形態 円形 規模 径0.90m×深さ0.35m 遺物 なし

SK140 (図47・50)

位置 D2-94グリッド 重複関係 なし 形態 長方形。ほぼ垂直に掘り込まれているが、上部は傾斜をもつ。規模 長軸1.01m×短軸0.71m×深さ0.36m 覆土 暗褐色土により埋め戻されている。上層の土は中央に沈みこんでいる。遺物 陶器2点、不明鉄製品4点、不明金具1点が出土した。出土した陶器は館ノ下焼の蓋物の蓋と身で、両者とも完形品である。正位で出土している。蓋はロクロ成形で返りをもち、つまみをもたない。身は胴の丸い小壺形で、高台をもたず底部外面に糸切り痕を残す。蓋は天井部外面のみに、身は全面に濃い土灰釉(なまこ釉)ないし鉄釉が施されている。19世紀、横田窯産のものである。

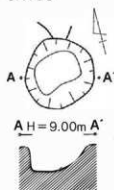
SK138



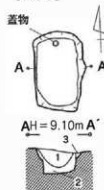
SK138

1. 暗黄褐色土：黄色砂質土粒多量。
2. 暗黄褐色土：黄色砂質土ブロック多量。
3. 暗褐色土：黄色砂質土粒少量。
4. 暗褐色土：黄色砂質土ブロック多量。
5. 黄色砂質土粒：暗褐色土少量。

SK139



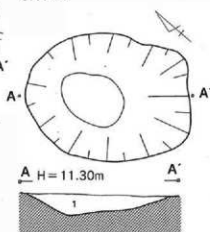
SK140



SK140

1. 暗褐色土：
淡黄褐色土少量。
2. 暗褐色土：
黄色砂質土・
白色砂質土粒少量。
3. 暗褐色土

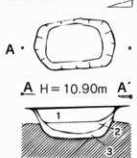
SK141



SK141

1. 暗褐色土

SK142



SK142

1. 暗褐色土：
黄色砂質土粒少量。
黄色砂質土粒多量。
2. 黒褐色土
3. 暗褐色土

SK143



SK143

1. 暗褐色土：
黄色砂質土粒少量。
骨片多量。

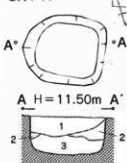
SK145



SK146



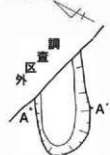
SK147



SK147

1. 暗黄褐色土：黄色砂質土多量。
2. 暗褐色土
3. 黄色砂質土：暗褐色土少量。

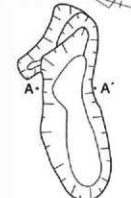
SK148



SK148

1. 暗褐色土

SK149



SK149

1. 暗褐色土：
ロームブロック少量。



図47 土坑 (15)

SK141 (図47)

位置 D2-70グリッド 重複関係 なし 形態 不整楕円形。皿状の掘り込み。規模 長径2.18m×短径1.65m×深さ0.27m 覆土 暗褐色土の単層。遺物 なし

SK142 (図47・50)

位置 D2-57グリッド 重複関係 SI4を切る。形態 隅丸長方形。壁はやや傾斜している。規模 長軸1.07m×短軸0.66m×深さ0.42m 覆土 暗褐色土・黒褐色土・黄色砂質土・暗褐色土の順に埋め戻されている。上層部は黄色砂質土粒を多量に含んでいた。遺物 陶器1点、カワラケ1点が出土した。陶器は肥前産の小碗である(1)。ロクロ成形、削り出し高台をもつ。全面に施釉され、外面に染付で草花文が描かれている。18世紀のものである。カワラケは灯明皿で、ロクロ成形、底部外面に糸切り痕を残す(2)。

SK143 (図47)

位置 D2-56グリッド 重複関係 なし 形態 円形。浅い碗形の掘り込み。規模 径0.41m×深さ0.11m 覆土 暗褐色土の単層。骨片を多量に含んでいた。遺物 なし

SK144 (図44)

位置 D2-67グリッド 重複関係 SK163を切る。また、SK123・116とも重複するが、先後関係は不明である。形態 不明 規模 長軸 南北1.32m×短軸不明×深さ0.26m 覆土 暗黄褐色土の単層。遺物 なし

SK145 (図47・50)

位置 D2-68グリッド 重複関係 なし 形態 墓塚底面部分を確認したのみであり不明。規模 不明 遺物 鉄鍋1点、陶器4点が出土した。その他に、銅銭12枚、キセル片1点、不明鉄製品84点が出土している。鉄鍋は逆位で出土しており、遺体の頭部に被せられたものと考えられる。陶器は2が大堀相馬焼の碗、1が大堀相馬焼の丸碗、3が館ノ下焼の蓋物である。1は逆位、2・3は正位で出土している。1は中形の丸碗である。ロクロ成形、削り出し高台をもつ。外面に木葉彫文が施文されている。高台部を残し、全面に無色の釉が施釉された後、外面に流しかけにより鉄釉が施されている。19世紀第1四半期のものである。2は大形の碗である。ロクロ成形、削り出し高台をもつ。外面体部下半に3条の沈線がみられる。内面全面から口縁部外面にかけて灰釉が、外面体部中位やや上から高台部には鉄釉が施されている(腰錆釉)。18世紀第3ないし第4四半期のものである。3は蓋物の蓋と身である。蓋はロクロ成形で宝珠形のつまみをもち、短く外反する返りを有している。天井部外面に灰釉が施釉されている。身は短い円筒形で、肩が直に折れ曲がり、蓋受けが短く立つ。ロクロ成形、削り出し高台をもつ。高台部を残し全面に灰釉が施釉され、外面には鉄絵で草花文が描かれている。また、低部外面中央に墨書で「口」の字が記されている。19世紀第2四半期のものである。

SK146 (図47)

位置 D2-93グリッド 重複関係 SK139と重複するが、先後関係は不明である。
形態 不整形。上部は緩やかな傾斜をもち、下部を垂直に掘り込まれている。規模 長軸
1.02m短軸0.77m深さ0.32m 遺物 なし

SK147 (図47)

位置 D2-36グリッド 重複関係 なし 形態 不整形。垂直に掘り込まれている。
規模 長軸1.09m×短軸0.92m×深さ0.51m 覆土 暗褐色土、黄色砂質土により埋め戻さ
れている。遺物 なし

SK148 (図47)

位置 D2-26・36グリッド 重複関係 なし 形態 調査区外にかかるため、全体は不
明であるが、長円形と考えられる。規模 長軸不明×短軸0.70m×深さ0.33m 覆土 暗
褐色土の単層。遺物 なし

SK149 (図47)

位置 D2-23・32・33グリッド 重複関係 なし 形態 不整形円形。規模 長径2.59
m×短径0.85m×深さ0.27m 覆土 暗褐色土の単層。遺物 なし

SK150 (図48)

位置 D2-36グリッド 重複関係 なし 形態 不整形円形 規模 長径1.22m×短径1.17
m×深さ0.39m 遺物 なし

SK151 (図48)

位置 D2-56グリッド 重複関係 なし 形態 楕円形。ほぼ垂直に掘り込まれている。
規模 長径0.81m×短径0.71m×深さ0.27m 遺物 なし

SK152 (図48)

位置 D2-96グリッド 重複関係 SB1・2を切る。形態 長方形。垂直に掘り込
まれている。規模 深さ0.26m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。
遺物 銅銭6枚、キセル片1点、木片1点が出土した。銅銭は3枚ずつがそれぞれ互いに附着
した状態で出土している。

SK153 (図48)

位置 D2-47グリッド 重複関係 なし 形態 長方形。垂直に掘り込まれている。規
模 長軸0.79m×短軸0.56m×深さ0.37m 遺物 なし

SK154 (図48)

位置 D2-21グリッド 重複関係 SK55と重複するが、先後関係は不明である。形態 長円形。壁が緩やかな傾斜をもつ浅い掘り込み。規模 長軸1.18m×短軸0.55m×深さ0.21m 遺物 なし

SK155 (図48・50)

位置 D2-41グリッド 重複関係 SD1を切る。形態 不整形円形。ほぼ垂直に掘り込まれている。規模 径0.90m×深さ0.60m 遺物 陶器1点(1)、磁器1点(2)が逆位で出土した。1は館ノ下焼の碗の完形品である。ロクロ成形、削り出し高台をもつ。高台部を残し全面に灰釉が施され、外面には鉄絵で丸に吉文が描かれている。館ノ下焼の丸に吉文碗は、横田窯に類例がある。体部に大きく描かれたこの文様は木碗の絵柄のモチーフを模した可能性がある。19世紀第2～第3四半期のものである。2は肥前焼の碗である。ロクロ成形・削り出し高台をもつ。外面・内面ともに染付で二重網目文が描かれ、見込に菊花文が描かれている。全面に無色の釉が施されている。18世紀第2四半期のものである。その他に、鉄鍋片が出土している。備考 出土した鉄鍋は、遺体の頭部に被せられたものと考えられる。

SK156 (図48)

位置 D2-52グリッド 重複関係 SD1に切られる。またSK20とも重複するが、先後関係は不明である。形態 不整形の掘り込み。規模 長軸1.25m×短軸不明×深さ0.43m 覆土 黒褐色土の単層。遺物 なし

SK157 (図40)

位置 D2-65グリッド 重複関係 SK80に切られる。形態 卵形。不整形の掘り込み。規模 長径1.54m×短径1.08m×深さ0.39m 覆土 暗茶褐色土の単層 遺物 なし

SK158 (図40)

位置 D2-65グリッド 重複関係 SK81に切られる。形態 長方形と思われる。壁が緩く傾斜する浅い掘り込み。規模 長軸0.92m×短軸0.70m×深さ0.26m 覆土 暗褐色土・黄色砂質土により埋め戻されている。遺物 なし

SK159 (図41)

位置 D2-66・76グリッド 重複関係 SK84・89と重複するが、先後関係は不明である。形態 楕円形。壁は緩やかに傾斜する。規模 長径2.84m×短径1.90m×深さ0.41m 覆土 暗褐色土 遺物 なし

SK160 (図48)

位置 D2-57グリッド 重複関係 なし 形態 円形。浅い掘り込みであるが、中央部が一部ピット状に掘り込まれている。規模 径1.15m×深さ0.44m 覆土 上層部に焼土が少量に含まれていた。遺物 土師器2点が出土しているが、流れ込みによるものと思われる。

SK161 (図48)

位置 D2-45グリッド 重複関係 なし 形態 不整長方形。垂直に掘り込まれている。規模 長軸1.11m×短軸0.76m×深さ0.35m 覆土 黄色砂質土・暗黄褐色土により埋め戻

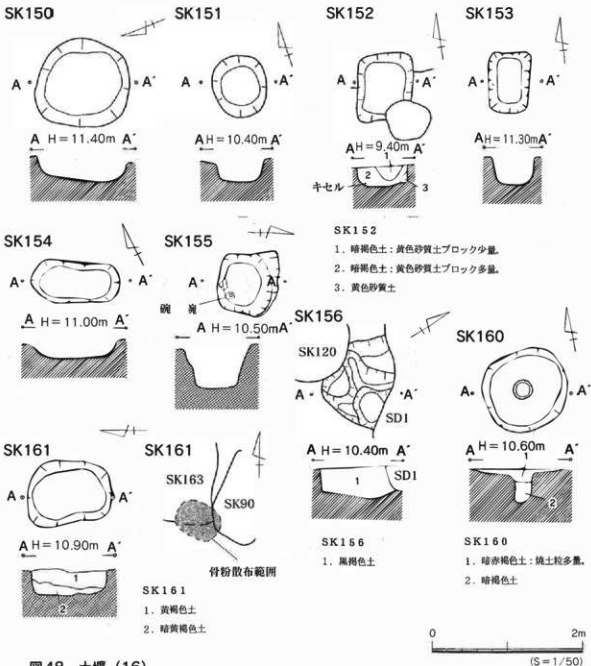


図48 土坑 (16)

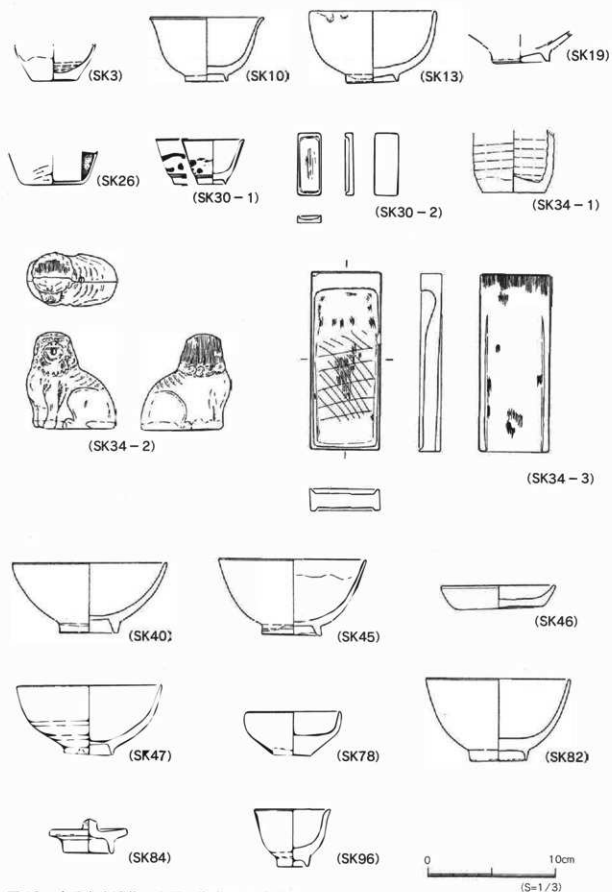


図49 土壇出土遺物 土器・陶磁器類 (1)

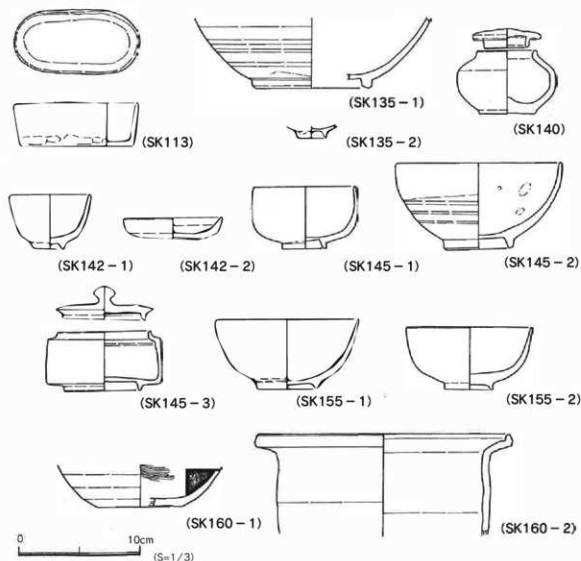


図50 土壌 出土遺物 土器・陶磁器類(2)

されている。遺物 銅銭6点、鉄釘片4点が出土した。銅銭は2枚が互いに付着した状態で出土している。

SK162 (図48)

位置 D2-67グリッド 重複関係 SB5、SK90・163を切る。形態 SK90・163の覆土上面で骨粉が散布しているのを確認したのみで形態は不明である。規模不明。骨片は径0.60mほどの範囲に散布していた。遺物 なし

SK163 (図44)

位置 D2-67グリッド 重複関係 SK144・162に切られ、SK123とも重複するが、先後関係は不明。形態 不整形。壁は緩やかに傾斜している。規模 不明・深さ0.24m 覆土 暗褐色土。遺物 銅銭4点が出土した。うち2枚は互いに付着した状態で出土している。

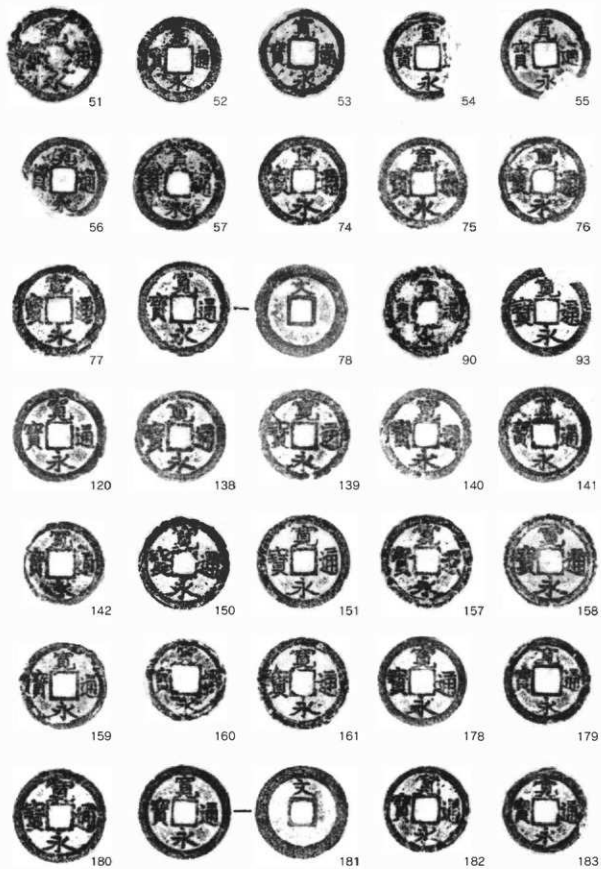


图51 土堀出土遺物 古銭(1)

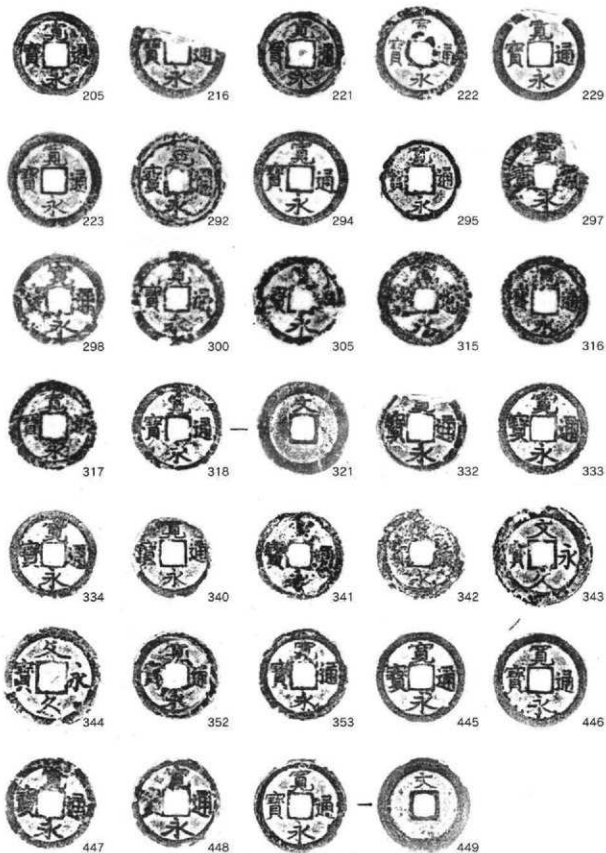


図52 土曜出土遺物 古銭 (2)

表 錢貨計測表

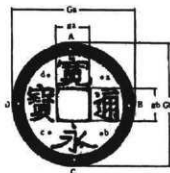
* 錢貨の各測点については、以下のとおりである。

$$\text{外縁外径 } G = \frac{Ga + Gb}{2}$$

$$\text{内郭外径 } g = \frac{ga + gb}{2}$$

$$\text{外縁厚 } T = \frac{A+B+C+D}{4}$$

$$\text{文字面厚 } t = \frac{a+b+c+d}{4}$$



** 数字に () を付したものは、規定の測点を得られなかったもので、
数式の名母が規定より少なかったものである。

*** 表中の「-」は、遺存状況が悪かったために、測定不能の場合を示す。

錢種 無印: 寛永通宝
文銭: 寛永通宝文銭
文久: 文久永宝

古銭観察表

No.	遺構	錢種	(※2次調査検出分を含む)			t	重量(g)	備考
1~4	SK2		-	-	-	-	-	4枚付着
5~7	SK5		-	-	-	-	-	3枚付着
8~9	SK6		-	-	-	-	-	2枚付着
10~12	SK6		-	-	-	-	-	3枚付着
13	SK6		23.50	3.45	0.77	2.00	3.30	
14	SK6		-	4.87	-	-	1.10	一部欠
15~26	SK6		-	-	-	-	-	12枚付着
27~44	SK6		-	-	-	-	-	18枚付着
45~49	SK8		-	-	-	-	-	5枚付着
50	SK10		-	-	-	-	-	破片
51	SK10		24.75	4.25	1.62	1.12	3.00	/
52	SK10		22.90	6.65	1.00	1.00	2.00	
53	SK13		23.05	5.25	1.37	0.75	2.00	
54	SK13		-	5.50	-	-	1.30	
55	SK13		-	5.50	-	-	1.60	
56	SK13		-	5.65	-	-	1.60	
57	SK13		25.00	4.95	1.62	0.75	2.80	
58	SK14		22.55	4.25	-	1.25	2.30	
59	SK17		23.35	5.50	1.20	0.95	2.30	
60	SK17		23.70	5.50	1.87	0.75	2.50	
61	SK17		24.95	5.65	1.25	-	3.00	
62~65	SK18		-	-	-	-	-	4枚付着
66~67	SK19		-	-	-	-	-	2枚付着
68~70	SK19		-	-	-	-	-	3枚付着
71~72	SK22		-	-	-	-	-	2枚付着
73	SK27		-	-	-	-	1.80	

No.	遺構	銭種	G	g	T	t	重量(g)	備考
74	SK27		23.95	5.10	1.25	1.25	3.70	
75	SK27		24.15	5.50	1.37	1.25	2.70	
76	SK27		23.50	4.85	1.12	0.80	2.30	
77	SK27		24.80	5.55	1.37	1.00	2.80	
78	SK27	文銭	25.20	5.35	1.55	0.80	2.70	
79~83	SK28		--	--	--	--	--	5枚付着
84~88	SK29		--	--	--	--	--	5枚付着
89	SK32		--	--	--	--	--	破片
90	SK32		23.50	5.60	1.62	1.12	2.40	
91	SK32		25.30	4.95	2.32	1.37	3.90	
92	SK32		25.00	4.35	1.87	1.37	4.00	
93~94	SK34		--	--	--	--	--	2枚付着
95~96	SK38		--	--	--	--	--	2枚付着
97	SK38		25.25	4.75	1.87	1.17	3.90	
98	SK38		23.25	5.25	1.25	1.00	2.30	
99	SK39		--	--	--	--	--	破片
100	SK39		--	--	--	--	--	破片
101	SK39		--	--	--	--	--	破片
102	SK39		--	--	--	--	--	破片
103	SK39		--	--	--	--	--	破片
104	SK39		--	--	--	--	--	破片
105	SK40		23.50	5.90	--	1.80	--	一部付着
106	SK40		--	--	--	--	--	付着
107	SK40		24.00	3.25	--	--	3.00	一部付着
108	SK40		24.80	4.10	1.50	1.53	2.50	
109	SK41		--	--	--	--	--	破片
110~115	SK46		--	--	--	--	--	6枚付着
116~119	SK47		--	--	--	--	--	4枚付着
120~129	SK48		--	--	--	--	--	10枚付着
130~133	SK51		--	--	--	--	--	4枚付着
134	SK53		--	--	--	--	--	一部欠
135	SK53		25.00	4.85	1.00	--	2.20	
136	SK53		24.45	5.45	1.37	0.87	2.60	
137	SK53		23.95	2.37	1.25	1.11	2.80	
138	SK53		24.95	5.00	1.12	0.62	2.90	
139	SK53		24.95	5.10	1.50	0.77	2.70	
140	SK53		24.85	5.50	1.50	1.00	3.10	
141	SK53	文銭	25.20	5.05	1.37	0.50	2.90	
142	SK53		21.75	6.25	--	0.62	2.20	一部欠
143~146	SK54		--	--	--	--	--	4枚付着
147~149	SK55		--	--	--	--	--	3枚付着
150	SK56		25.00	5.10	1.50	0.87	2.80	
151~155	SK56		--	--	--	--	--	5枚付着
156	SK57		23.50	5.75	1.37	1.07	1.90	
157	SK57		24.85	5.00	1.07	1.07	2.70	
158	SK57		24.75	5.05	1.62	1.42	3.10	
159	SK57		23.75	5.75	1.37	0.62	2.20	
160	SK57		21.90	5.15	1.10	1.37	1.90	
161	SK57		24.90	4.90	1.42	0.62	3.40	
162~164	SK60		--	--	--	--	--	3枚付着
165~169	SK60		--	--	--	--	--	5枚付着
170	SK60		--	--	--	--	--	付着物有り
171	SK60		--	--	--	--	--	一部欠

No.	遺構	銭種	G	g	T	t	重量(g)	備考
172	SK60		—	5.50	—	0.85	1.70	一部欠
173~177	SK61		—	—	—	—	—	5枚付着
178	SK62		24.00	5.15	1.25	1.25	3.60	
179	SK62		23.15	6.20	1.25	0.62	2.50	
180	SK62		24.95	5.10	1.50	0.50	2.90	
181	SK62	文銭	25.05	5.35	1.50	0.50	3.10	
182	SK62		23.10	5.95	1.50	0.75	2.90	
183	SK62		22.35	5.95	1.25	0.75	2.30	
184~185	SK64		—	—	—	—	—	2枚付着
186	SK64		—	—	—	—	—	一部欠
187	SK64		—	—	—	—	—	一部欠
188	SK64		—	—	—	—	—	一部欠
189	SK65		—	—	—	—	—	数枚付着
190	SK65		—	—	—	—	—	付着
191	SK65		—	—	—	—	—	破片
192	SK65		—	—	—	—	—	破片
193	SK65		—	—	—	—	—	破片
194	SK65		—	—	—	—	—	破片
195	SK65		—	—	—	—	—	破片
196~199	SK66		—	—	—	—	—	4枚付着
200~202	SK67		—	—	—	—	—	3枚付着
203	SK67		25.45	5.15	1.62	1.00	2.60	
204	SK67		23.95	6.05	1.50	0.62	2.30	
205	SK67		23.10	5.10	1.50	1.00	2.80	
206~210	SK68		—	—	—	—	—	5枚付着
21~1214	SK69		—	—	—	—	—	4枚付着
215	SK69		—	—	—	—	—	付着物有り
216	SK69		—	—	—	—	—	半分欠
217	SK71		—	—	—	—	—	半分欠
218~219	SK71		—	—	—	—	—	2枚付着
220	SK71		25.50	—	1.20	0.80	2.50	一部欠
221	SK71		23.35	5.40	—	1.25	1.80	一部欠
222	SK71		5.10	5.25	1.50	0.95	3.10	
223	SK72		—	—	—	—	—	破片
224~227	SK73		—	—	—	—	—	4枚付着
228	SK73		—	5.00	—	1.25	2.70	一部欠
229	SK73		—	5.25	—	1.20	2.20	一部欠
230	SK74		—	—	—	—	—	半分欠
231	SK74		—	—	—	—	—	半分欠
232	SK74		—	—	—	—	—	半分欠
233	SK74		25.35	5.35	1.05	0.90	2.40	
234~239	SK75		—	—	—	—	—	6枚付着
240~244	SK79		—	—	—	—	—	5枚付着
245	SK79		—	—	—	—	—	破片
246~247	SK87		—	—	—	—	—	2枚付着
278~280	SK87		—	—	—	—	—	3枚付着
281~282	SK88		—	—	—	—	—	2枚付着
283	SK88		24.35	4.90	—	0.90	1.90	周開欠
284	SK88		21.95	5.15	—	0.98	1.70	周開欠
285	SK88		21.85	5.00	1.25	0.90	1.80	
286~288	SK96		—	—	—	—	—	3枚付着
289	SK98		—	—	—	—	—	破片
290	SK98		—	—	—	—	—	半分欠

No.	遺構	銭種	G	g	T	t	重量(g)	備考
291	SK98		--	--	--	--	--	半分欠
292~293	SK98		--	--	--	--	--	2枚付着
294	SK98		25.40	5.50	1.25	0.57	2.20	
295	SK98		25.75	4.50	1.26	1.15	3.60	
296	SK98		25.60	4.95	1.45	1.15	2.40	
297	SK99		--	5.17	--	1.10	2.10	一部欠
298~299	SK99		--	--	--	--	--	2枚付着
300~302	SK99		--	--	--	--	--	3枚付着
303	SK101		--	--	--	--	--	数枚付着
304	SK101		--	--	--	--	--	数枚付着
305~308	SK103		--	--	--	--	--	4枚付着
309	SK103		24.90	4.40	1.65	1.25	3.70	
310	SK109		12.11	6.00	--	--	1.40	一部欠
311	SK109		24.70	5.40	1.12	0.98	2.20	
312	SK114		23.10	5.25	1.50	0.95	2.50	
313	SK114		23.75	5.70	1.25	1.25	2.30	
314	SK114		24.75	5.10	1.20	1.00	2.70	
315	SK114		25.00	4.95	1.35	0.87	2.40	
316	SK114		23.75	5.80	1.37	1.20	2.80	
317	SK114		23.50	6.00	1.52	0.98	2.40	
318~321	SK115	文銭	--	--	--	--	--	4枚付着
322~323	SK115		--	--	--	--	--	2枚付着
324~327	SK118		--	--	--	--	--	4枚付着
328	SK124		21.95	5.45	0.62	0.50	1.40	
329	SK124		23.55	5.50	1.50	0.89	2.30	
330	SK124		22.50	5.75	1.25	--	2.00	一部欠
331	SK124		--	--	--	--	--	半分欠
332	SK124		--	--	--	--	--	半分欠
333	SK124		24.95	5.65	1.25	1.00	3.30	
334	SK124		23.05	5.75	0.78	0.57	2.50	
335~338	SK125		--	--	--	--	--	4枚付着
339	SK125		--	--	--	--	--	破片
340	SK125		23.51	5.10	1.42	0.95	3.40	
341	SK127		24.00	5.10	1.80	1.22	2.70	
342	SK127		26.15	6.65	1.00	0.65	2.20	
343	SK127	文久	--	--	--	--	--	半分欠
344~347	SK127	文久	--	--	--	--	--	4枚付着
348	SK130		--	--	--	--	--	付着物有り
349	SK130		23.10	5.95	--	1.07	2.80	一部欠
350	SK130		23.25	5.00	--	0.89	2.50	一部欠
351	SK130		23.35	5.35	1.02	0.85	2.40	
352	SK130		23.15	5.50	1.12	0.65	2.00	
353	SK130		24.50	5.45	1.15	0.72	2.20	
354~359	SK135		--	--	--	--	--	6枚付着
360~362	SK152		--	--	--	--	--	3枚付着
363~365	SK152		--	--	--	--	--	3枚付着
366~367	SK162		23.10	3.10	--	--	--	2枚付着
368	SK164		--	--	--	--	--	破片
369	SK164		--	--	--	--	--	付着物有り
370~371	SK164		--	--	--	--	--	2枚付着
372~375	SK203		24.05	4.05	--	--	--	4枚付着
376	SK203		--	4.10	--	0.95	1.50	一部欠
377	SK203		22.95	4.05	1.75	1.50	2.30	

No.	遺構	銭種	G	g	T	t	重量(g)	備考
378~382	SK204		23.35	3.55	—	—	—	5枚付着
383~387	SK206		21.55	4.15	—	—	—	5枚付着
388~393	SK208		—	—	—	—	—	6枚付着
394~395	SK209		28.00	3.75	—	—	—	2枚付着
396~398	SK209		23.75	4.60	—	—	—	3枚付着
399	SK209		27.30	4.65	1.65	1.50	4.50	
400	SK209		22.05	4.15	1.12	0.62	2.30	
401	SK209		26.90	5.00	1.43	1.45	4.50	
402	SK209		27.00	4.30	1.45	1.38	4.10	
403	SK209		22.65	4.05	1.40	1.50	3.80	
404~406	SK212		—	—	—	—	—	3枚付着
407~408	SK212		—	—	—	—	—	2枚付着
409~414	SK216		—	—	—	—	—	6枚付着
415~419	SK219		22.75	3.95	—	—	—	5枚付着
420	SK219		22.50	3.80	—	—	1.70	一部欠
421	SK224		21.10	4.25	1.50	1.20	2.80	
422~427	SK224		—	—	—	—	—	6枚付着
428~429	SK224		—	—	—	—	—	2枚付着
430~431	SK224		—	—	—	—	—	2枚付着
432	SK224		—	—	—	—	—	一部欠
433~438	SK226		—	—	—	—	—	6枚付着
439~441	SK227		24.10	4.85	—	—	—	3枚付着
442~444	SK227		23.10	3.50	—	—	—	3枚付着
445	不明		25.00	5.85	1.63	0.90	3.40	
446	不明		23.50	5.50	1.50	1.00	3.30	
447	不明		24.65	6.15	1.13	0.80	2.20	
448	不明		23.65	6.00	1.50	1.00	3.70	
449	不明	文銭	24.45	5.95	1.50	0.93	2.60	
合 計 寛永通宝447枚以上(うち文銭5枚)・文久永宝2枚 (付着して枚数の不明なものは1枚とした)								

(2) 開山碑 (図53)

調査地点北東の山腹には法幢寺の開山碑と墓石が残されている。開山碑は砂岩の切石で、高さ159cm、幅54cm、厚さ26cmの四角柱である。開山碑には寺の由緒が記されていると思われるが銘文がかなり摩滅しており、断片的に人名・月日などを判読できる程度である。銘の読める部分を順に見ると、1行目「下総…岡田山法幢寺…十月」で、法幢寺が下総国から陸奥国行方郡に移された件が記されていると思われる。2行目「…明…卯…一月…」。3行目「…岡田…地則…余…元祖岡田」4行目「…以○代○○此○○山…可…」。5行目「…二…三十六代○○天下皆」。6行目「…十一月十日○○合○○」。7行目「…十六世○八兵衛宣胤○」。8行目「…一月…公別所○田地○丁畝○」。9行目「…門○向○未○○」。10行目「…人○○能○○○之人寺○○重而○」。11行目「…信佛又如○」。12行目「…大仙禪○」。13行目「…日」

7行目の八兵衛宣胤は、胤相馬家初代相馬師常から数えて17代目の相馬利胤（治世年間慶長7年（1602）～寛永2（1625））に使えた岡田八兵衛宣胤である。「奥相志」によれば、宣胤は慶長2丁酉年（1597）、小高郷岡田壘より中郷泉村の壘に移り、慶長16辛亥年（1611）中村城郭の内に移るまでの間、法幢寺の南東約750mの泉平館跡に居住している。岡田氏は相馬一族の長で、領地は文禄年間には265貫860文であった（註12）。

(3) 墓石

墓石の戒名には、享保17年壬子（1732）桃源院殿大誉高寿義○○等 院殿○○大居士のように複数の墓石に院殿の名が見られるが、相馬中村藩では相馬氏・岡田氏・小高神社の相馬氏のみであることから、この墓地は岡田氏の墳墓であることが確認できる。ただし、年号からするとこの墓は岡田氏が泉を去ってから建立されたものと考えられる（註13）。

(4) 大槻氏系図

今回の調査の翌年（平成9年）に、法幢寺跡の市道部分の調査を行ったが、偶然に同年11月18日に東京都多摩市在住の大槻耕一氏が大槻氏系図にある法幢寺の所在を尋ねて来られた。大槻氏は、その系図によれば、清和源氏畠山氏の流れを汲み、奥州安積郡大槻村（郡山市）に城郭を築き居住した義治（永正5年（1508）没）を初代とする。4代吉成（万治元年（1658）没）の時、相馬利胤の家臣となり、以後、大槻氏は相馬中村藩士として幕末におよぶ。14代大槻吉直は二宮尊徳の報徳仕法の実施に尽力した関係で、相馬中村藩士で尊徳の高弟である富田高慶からの書状等の吉直に関する古文書が多数残されており、それらは静岡県小田原市の報徳博物館に寄託されている（註14）。

系図によれば、大槻氏と岡田氏の関係は、初代義治の娘が岡田次部大輔茂胤に嫁いだことに始まる。4代吉成は相馬氏の重臣岡田八兵衛宣胤の親族であったため、宣胤の助力により相馬利胤の家臣となる。吉成は米々沢邑（原町市米々沢）に居住し、相馬利胤から計10貫文の知行を賜り、没後は行方郡泉村禪宗岡田山法幢寺に葬られる。大槻氏が法幢寺を墓所としたのは、4代吉成以降9代吉根までの6代、万治元年（1658）から天明4年（1784）までである。



図53 法幢寺開山碑拓影

(S=1/6)

代	氏名	没年月日	法号
4代	大槻吉成	万治元戊戌年(1658)9月14日	
	妻 井戸川仁兵衛女		道古真公禪定門
	後妻 内藤豊前守	寛文 7丁未年(1667)11月17日	
	内青木藤太夫女		安室宗住禪定尼
5代	大槻吉隆	元禄 5壬申年(1692)	覚宗玄林居士
	妻 大平四郎左エ門女	寛文 8戊申年(1668) 6月 晦日	縁室祖因信尼
6代	大槻吉直	宝永 2乙酉年(1705)12月26日	心岳静求信士
	妻 半野与惣兵衛女	享保10乙巳年(1725) 8月25日	水庵祖陽信尼
7代	大槻吉長	享保 8癸卯年(1723)10月 朔日	覚林復性信志
	妻 木幡次郎右衛門女	享保19甲寅年(1734) 9月11日	心室寿月信女
8代	大槻吉豊	明和 7庚寅年(1770)12月 9日	教外一受信士
9代	大槻吉根	天明 4甲辰年(1784) 8月21日	(隠居) 禪定
	妻 門馬奚疑邦經女	(俗名) 繁	
	女 藤	宝暦11辛巳年(1761)11月19日	慈峯恵眼信女
	女 宝暦 8戊寅年(1758)11月16日		慧覚童女

10代吉唯以後、13代吉著らは宇田郡中村(相馬市中村)の萬年山長松寺に葬られている。

第4節 遺構外出土遺物

弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器など、各時代の遺物が出土している。そのなかから特徴的なものを選んで図示した(図54)

1は弥生土器甕の口縁部である。内外面とも口縁部から頸部にかけてL R単節斜縄文が施文されている。2は土師器甕の底部である。内・外面ともにヘラナデにより調整され、底部外面に木葉痕を残す。3・4はロク口調整の土師器杯である。両者とも内面にヘラミガキ・黒色処理が施されている。底部外面は手持ちヘラケズリにより調整されている。4～7は土師器の甕である。4・5は内面・外面に回転台によるナデが施されている。4は外面胴部中位以下に縦位のヘラケズリがみられる。6は球状の胴部をもつ甕である。調整は口縁部内・外面にナデ、胴部外面にヘラケズリ、内面にヘラナデが施されている。8は須恵器の円面硯である。9は独特の文様をもつ軒丸瓦の瓦当面である。瓦当部側面には、ヘラ沈線による三角文を描き、三角文の頂点に竹管文を配する、泉庵寺跡出土の軒平瓦と同様の文様がみられる。10・11は平瓦である。10は凸面に格子タタキ目を残し、11は凸面がナデにより調整され、タタキ目が消されている。12は丸瓦である。凸面にナデが施されている。また、凹面には粘土板の合わせ目をわずかに残している。

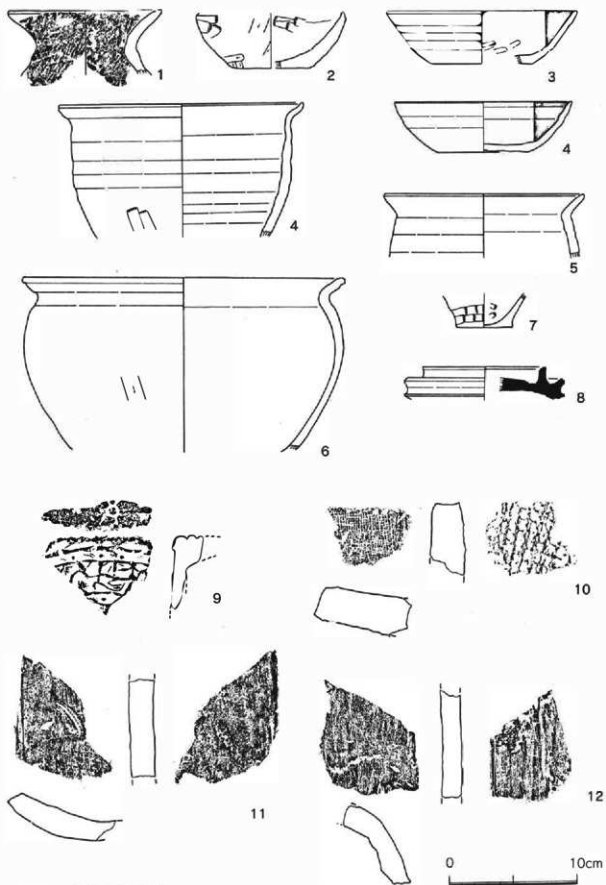


图54 遺構外出土遺物

第5章 まとめ

法輪跡の発掘調査の結果、弥生時代の土器棺墓1基、平安時代の住居跡7軒（小鍛冶遺構含む）・掘立柱建物跡5棟・溝15条、江戸時代の土壇163基を検出した。出土遺物では弥生時代中期の壺、平安時代の土師器・須恵器・羽口・鉄滓など、江戸時代の人骨・古銭（寛永通宝）・キセル・和鏡・陶磁器・漆器・鉄鍋・棺桶・棺箱などが出土した。

弥生時代

新田川の対岸には桜井式土器の標式遺跡桜井遺跡群があり、合わせ口の土器棺墓や住居跡などが検出されているが、今回の発掘から新田川北岸の台地にも弥生時代の遺跡が展開する可能性が高まった。

平安時代

平安時代に属する遺構は、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝跡がある。竪穴住居跡出土の遺物を見ると、S I 2・3・4では非ロクロとロクロ調整の土師器杯が供伴しており、これらの時期を8世紀末～9世紀初頭と考えることができる。また、S I 1・7も出土した遺物はこれと同時期ないし近接した時期のものとみられる。なお、掘立柱建物跡からは遺物は出土していないが、S B 5の主軸方位はS I 4のそれに近く、3時期の重複がみられるS B 1～3はS I 5～7のそれに近似している。S I 4とS B 5、S I 5～7とS B 1～3がそれぞれ近接した位置に営まれていることから、掘立柱建物は竪穴住居とセットとなる可能性が高い。

竪穴住居跡の分布を見ると、調査区東端に集中がみられるが、これらが時間的先後関係にあることを考慮すれば、竪穴住居跡は調査区内全域に一定の間隔をもって分布しているといえる。主軸方位や出土遺物からこれらは同時期ないし近接する時期に営まれたものとみられ、竪穴住居各戸が一定の敷地を占有し、掘立柱建物がこれに伴うという集落景観を想定することができよう。

ところで、S I 4の貼床に被熱が認められ、またこれに近接するS D 14からはフイゴ羽口が出土していることから、S I 4に小鍛冶の存在を想定できることは第4章において報告した。当遺跡の平安時代の集落は、出土する遺物や住居跡・建物跡の規模などの点に特殊性は認められず、一般的な集落と考えられる。しかし、こうした小鍛冶の存在は当遺跡のような一般集落レベルに鍛冶関連の技術が浸透したことを示しており、その背景に、当集落の至近に位置する行方郡断や金沢製鉄遺跡群の存在があったものと推測される。当遺跡はこうした点から、泉麿寺跡を中心とした泉周辺地域の平安時代の様相を明らかにするための貴重な資料となるものである。

江戸時代

163基という多数の墓を検出したことにより、相馬中村藩領内の近世墓として非常に多くの資料を得ることができた。また、出土した陶磁器は18～19世紀の大堀相馬焼（相馬郡浪江町）とこれまであまり報告例のなかった館ノ下焼（相馬市）の良好な資料である。

さて、この地区は寺前^{てらまへ}という小字名で、地元では昔から今回の調査地点から北東の山裾に寺

の本堂や山門があったとか、今回の調査地点とその北側の山裾から山腹にかけては墓地であったといわれてきた地域であった。現在では寺の堂宇をしのぼせる建物は残っていないが、今回の調査地点から北側の山の中腹には相馬氏の一族岡田氏の墓をはじめ、江戸時代から続く墓地が現存する。

前述のように、「奥相志」には、法幢寺は相馬氏の重臣である岡田氏の菩提寺として建立され、もともとは千葉県にあったものが元享年間（1321～1324）に岡田胤盛・胤康に伴って院内村に移転したのをはじめとし、正中3年（嘉暦元年 1326）に岡田村の長泉院の前に、さらに慶長2年（1597）に泉村へと、岡田氏に伴って3度の移転を繰り返したことが記されている。その後、慶長14年（1609）に岡田氏は現在の相馬市に移っている。岡田氏が泉に居を構えていたのは慶長2年（1597）から同14年（1609）までの12年間であったが、泉の法幢寺はその後も残り、享保年間（1716～1736）には山門楼閣を構えていたが、江戸時代末（19世紀）には曹洞宗小高山同慶寺の末寺となっている（註15）。また、岡田氏の親族大槻氏の系図から、岡田氏が相馬に移った後の万治元年（1658）から天明4年（1784）まで大槻氏が「墓所」としていたことがわかる。

今回の発掘調査は、地元の伝承と「奥相志」という文献の記述を裏付けるとともに、多数の江戸時代の土壌群や多くの出土品から、具体的により詳細な法幢寺の実像に迫ることができた。調査区北東の丘陵中腹には岡田氏の墓石があり、岡田氏の墓域であることが確認できるが、今回の調査地区には墓石がなく被葬者の特定はできない。しかし、豊かな副葬品の内容からみると武士階級、つまり大槻氏ら岡田氏の同族墓の可能性が考えられる。また、159基の土葬墓に対し、4基の火葬墓もみられた。法幢寺跡近くの正福寺跡の発掘では、火葬墓だけが28基発見されており、これらは江戸時代の浄土真宗あるいは伝染病者の墓と思われる（註16）。これに対して法幢跡では土葬もあれば火葬もあり、葬法に厳密さはみられない。墓坑の多くは平面形が円形だが、隅丸長方形も散在する。隅丸長方形の墓坑は比較的調査区の東端付近に多いが、占地に区画性があったかどうかは不明である。棺は堅棺を使用したものが多く、棺桶を使用したものや、鍋を被せる葬風も3例みられた。死者の頭部に鍋を被せる葬風は当遺跡に近い地藏堂B遺跡で検出された土壌にも認められたが、東北・関東・中部地方でも発掘例や民俗例があり、ライ病などで亡くなった人に行われた葬法であったといわれている（註17）。ライ予防法により近年までライ病患者の隔離政策が行われつづけてきた背景には、こうした特殊な葬風を生んだ意識があったのかもしれない。

墓の男女別年齢別の占地については、出土した土葬骨の風化が進み小破片が少量出土している程度なので、男女の別を判断するのは難しい。しかし、副葬品から推定すると、ベッコウ製の髪飾りを出土したSK33、和鏡を出土したSK59、簪を出土したSK96のように、化粧道具や装飾品が副葬された土壌は女性の墓と考えられる。また、ミニチュア硯と玩具と思われるミニチュア小碗を出土した土壌であるSK30は子供の墓と考えられる（註18）。

銅銭は、遺物を出土した土壌98基のうち67基にみられ、かなりの高率で副葬された一般的にみられる副葬品といえる。六道銭として、男女の別なく棺に埋納されたものと考えられる。

キセルは36基に出土がみられ、銅銭に次いで多く副葬されている。SK33からはベッコウ製の髪飾りとともに出土しており、キセルも男女の別なく副葬されたものと思われる。

近世村落の檀那寺（墓地も含め）は檀家制度のもとで中世在地武士の持仏堂や持庵から出発しているものも多いいわれ、法幢寺の場合も「奥相志」に開山（慶長2年（1957））以前にこの地に泉氏の菩提寺である東泉院があったと記されていることは興味深い（註19）。ただし、今回の調査地区からは中世の遺構・遺物は発見されなかった。法幢寺は岡田氏の祭祀から出発したが、岡田氏が相馬に移った後も大槻氏ら同族集団の氏寺として存続した。一方、近世の寺請制度のもと、法幢寺と旧泉村の農民との関係については、過去帳等の資料がなく不明である。

最後になりましたが、岡田氏の末裔岡田昭胤氏、大槻氏の末裔大槻耕一氏、現在岡田家の墓地を管理されている佐藤成信氏、大塚相馬焼等の陶磁器についてご教示を頂きました福島市の佐藤仁司氏ならびに東北大学埋蔵文化財調査研究センターの関根達人氏には多大なるご協力を頂きました。厚く御礼申し上げます。

- 註 1 「奥相志」齋藤完高 安政4年（1857）～明治4年（1871）
「相馬市史」4 資料編1（奥相志） 福島県相馬市 1669 P 776～P 777
- 註 2 「国指定史跡桜井古墳範囲確認調査報告書」原町市文化財調査報告書 原町市教育委員会 1985. 3. 30
「桜井」竹島コレクション考古図録第3集 竹島國基 1992. 4. 30
「桜井高見町A遺跡発掘調査報告書」原町市埋蔵文化財調査報告書第12集 東北学院大学文学部史学科辻ゼミナール・原町市教育委員会 1996. 3. 31
「高見町A遺跡」第7次調査 原町市埋蔵文化財調査報告書第24集 2000. 3. 27
- 註 3 「市内遺跡発掘調査報告書」1 原町市埋蔵文化財調査報告書第14集 泉庵寺跡 原町市教育委員会 1997. 3. 31
「市内遺跡発掘調査報告書」2 原町市埋蔵文化財調査報告書第15集 泉庵寺跡 原町市教育委員会 1997. 3. 31
「市内遺跡発掘調査報告書」3 原町市埋蔵文化財調査報告書第17集 泉庵寺跡 原町市教育委員会 1998. 3. 31
「市内遺跡発掘調査報告書」4 原町市埋蔵文化財調査報告書第18集 泉庵寺跡 原町市教育委員会 1999. 3. 29
「市内遺跡発掘調査報告書」5 原町市埋蔵文化財調査報告書第22集 泉庵寺跡 原町市教育委員会 2000. 3. 31
- 註 4 「県営高平地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査報告書」I 原町市埋蔵文化財調査報告書第21集 広畑遺跡 原町市教育委員会 2000. 3. 31

- 註 5 『原町火力発電所関連遺跡調査報告』Ⅰ 福島県文化財調査報告書第236集
福島県文化センター 1990. 3. 31
～
『原町火力発電所関連遺跡調査報告』Ⅳ 福島県文化財調査報告書第297集
福島県文化センター 1994. 1. 31
- 註 6 『市内遺跡発掘調査報告書』1 原町市埋蔵文化財調査報告書第14集 相馬胤平居
館跡 原町市教育委員会 1997. 3. 31 今後、本報告刊行予定。
- 註 7 平成7・8年度の発掘調査成果による。畷堀遺構や柿経と考えられる6枚1組の梵字
のある柿経と思われる遺物などが特筆される。今後、報告書刊行予定。
- 註 8 『県営高平地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査報告書』Ⅰ 原町市埋蔵文化財調査
報告書第21集 正福寺跡 原町市教育委員会 2000. 3. 31
- 註 9 『市内遺跡発掘調査報告書』2 原町市埋蔵文化財調査報告書第15集 地藏堂B遺
跡 原町市教育委員会 1997. 3. 31
- 註10 註1に同じ
- 註11 註1に同じ P 776
- 註12 註1に同じ P 772
- 註13 鹿島町塩崎の故大和田正明氏のご教示による。
- 註14 『報徳博物館館報』第5号 1990. 12. 25 財団法人報徳福運社
- 註15 註1に同じ P 776
- 註16 註8に同じ
- 註17 「鍋を被せる葬風」『信濃』第26巻 第9号 桐原健 1974. 9. 1
- 註18 山川 均氏は、奈良県内における近世墓の副葬品を検討し、近世後半以降には性差
や年齢といった被葬者の個性識別に基づく副葬が顕著になることを指摘している（『季
刊 考古学』第70号「近世」 P 81～P 82 山川均 2000. 2. 1 雄山閣出版）。氏
は、奈良県内の近世墓の副葬品から被葬者像を推定しており、女性の墓は化粧道具入
れとしての紅皿や合子を、子供の墓には玩具を伴うという特徴があることを指摘して
いる。
- 註19 註1に同じ P 776

第3編 泉平館跡

第1章 調査に至る経過

第1節 調査経過

泉平館跡は、幕末に編纂された相馬中村藩の地誌である「奥相志」中郷 泉村の項に記述がみられ、今日でも館腰の小字名が残っている。またかつてはこの場所に土塁があり、地元には館跡の伝承があることから、周知の遺跡となっていた。館腰とよばれる地区のなかで、現在は宅地と畑地になっている沖積地内微高地が郭と推定された。宅地の部分はほ場整備の地区除外地域であったが、周囲に広がる水田はほ場整備地区にかかるため、平成6年度に館跡の範囲を確認するためにトレンチ調査を行なった（第1次調査・試掘調査）。また、ほ場整備では、宅地の周囲の水田および微高地西側部分の畑地を削平することとなり、平成7年には遺跡南側の水田、平成8年には東側の水田および微高地上の畑地について、記録保存のための本調査を行なった（第2・3次調査）。本報告では、このうち第1次調査および第2次調査の成果を報告する。

第2節 調査要項

- | | | |
|-------------|---|-----------------------|
| 1 遺 跡 名 | 泉平館跡（いずみひらだてあと・遺跡番号20600178） | |
| 2 所 在 地 | 原町市泉字町畑地内 | |
| 3 遺跡の性格 | 古墳時代～平安時代の河川流路跡
近世初頭の武士居館（堀跡2条、土坑9基） | |
| 4 調査期間 | （試掘調査）平成6年12月1日～平成7年3月31日
（本調査）平成7年8月25日～平成8年3月29日 | |
| 5 調査面積 | 試掘調査 912m ² 、本調査 9,350m ² | |
| 6 調査体制 | | |
| 調査主体 | 原町市教育委員会 | |
| 調査担当 | 原町市教育委員会文化課 文化財主事 堀 耕平 | |
| 事務局 | | |
| | （平成6年度） | （平成7年度） |
| 教 育 長 | 渡部 秀夫 | 教 育 長 渡部 秀夫 |
| 教 育 次 長 | 中田 幸男 | 教 育 次 長 横山 英夫 |
| 文化課長兼発掘調査係長 | 佐藤 一男 | 参事兼文化課長兼文化財保護係長 佐藤 一男 |
| 課長補佐兼文化振興係長 | 鈴木 吉久 | 文化振興係長 高田 毅 |
| 文化振興係主事 | 平田 良親 | 文化振興係副主査 木幡 雅己 |
| 学 芸 員 | 齋藤 直之 | 発掘調査係主任文化財主事 鈴木 文雄 |

調査員 村山 三男
中沢 満
西 徹雄
佐藤 祐子

発掘補助員（試掘調査）青田猪一郎・押野己一郎・紺野昭義・相良英樹・佐々木隆
佐藤 徹・佐藤 整・佐藤文江・諏佐忠男・高田律子・武志正信・
新館新男・原田 覚・松本ハツノ・米津 豊

（本調査）青田博子・青田 翠・阿部定雄・荒川幸雄・今村テイ子・岩本 等
宇佐美茂子・宇佐美實・遠藤 明・遠藤栄子・遠藤カツ子・遠藤キミ子・
遠藤功子・大石房子・大野利雄・押野己之助・小元 智・加賀田勇一・
鎌倉庫光・栢本 充・菅野秀雄・北原 洋・北山富子・北山 睦・
草野ヤイ子・国分孝徳・木幡庄治・木幡春江・紺野昭義・今野あや子・
今野一子・紺野和子・斎藤禎子・相良英樹・佐久間三雄・桜 正博・
佐々木隆・佐藤昭子・佐藤 徳・佐藤紀美子・佐藤時雄・佐藤敏雄・佐藤 整
佐藤フクイ・佐藤文江・佐藤順厚・白石正男・杉浦桂子・諏佐忠男・
鈴木清身・鈴木シケ・平音次郎・高井孝子・高野秀雄・高橋キイ子・
武志正信・武山民男・玉木 清・玉木セツ子・寺島日出雄・寺島博喜
中田幸一・新館新男・新妻順子・西 幸吉・西 敏子・二谷洋一・
浜名廣志・浜名清美・原田三郎・福島和夫・藤田正司・星アキヨ・
堀川清隆・真壁ヨシ子・牧野みつい・松本武雄・門馬 誠・八木米子
山田春雄・横山キミ子・横山 賢・米津 豊・渡部さと子・渡部真一
渡部時子・渡部トヨ

整理作業員 寺内美智子・古谷洋子・遠藤和子・太田正子・山本恵子

第2章 遺跡の概要

第1節 位置と地形

新田川左岸に形成された沖積地内に島状にのこる微高地上に立地する。当遺跡の南側約110mの地点には新田川が東流し、北約150mの地点には新田川の流れに沿って形成された丘陵が東西に連なっている（図1）。

第2節 周辺の遺跡

当遺跡に関連する遺跡としては、南東約800mの地点に18～19世紀頃の火葬墓28基が検出された正福寺跡が所在する（註1）。また、北西約200mの地点に、当館跡の主である岡田氏



図1 泉平館跡位置図

の菩提寺となった法幢寺跡が位置している。法幢寺跡の調査成果については第2編で詳述した。また、東約1.4kmの地点には、泉氏の居城と推定される泉の館跡が所在している。

第3節 『奥相志』の記載

『奥相志』中郷 泉村の項には、当館跡に関連する記述がある（註2）。

古塁高さ六尺、東西三十六間、南北三十四間 町畑にあり。

慶長二丁酉年、岡田八兵衛宣胤、小高郷岡田墨よりこゝに移り居り、十六年辛亥年中村城郭の内に移る。岡田氏は相馬一族の長なり。采地文禄中二百六十五貫八百六十文。

当館跡を中心とした北西側と南東側には町畑の小字が残り、館跡が位置する地点は館腰と呼ばれている。『奥相志』が編纂された当時には、ここに土塁が存在したことがわかる。現在では失われているが、昭和40年頃までは部分的に残っていたようである。『奥相志』の上の記述によれば、この土塁は岡田八兵衛宣胤が築いたものであり、慶長2（1597）年～阿16（1611）年まで居住した居館であったとされる。岡田氏がこの地に移る前には、泉一帯は相馬氏の重臣であった泉氏が支配していた。当館跡の東約1.4kmの字館前には、泉氏が築いた山城である泉の館跡が位置している。小高郷に居住していた岡田宣胤が泉に移った経緯は、『奥相志』の以下の記述から知ることができる（註3）。

古塁高さ五丈余東西五十間、南北三十間 館前にあり。

泉氏は相馬五郎義胤公三男相馬六郎胤某を以て祖となす。元亨中泉宮内太夫胤安、重胤公に従ひて総州より来りて累世居館す。中郷士百三十騎の隊長にして陪従二十五騎。文禄中の采地三百一貫七百八十文。慶長二丁酉年泉藤右衛門胤政、故ありて火を泉館にはなちて会津に走りて上杉景勝に属す。茲により泉の地を岡田八兵衛宣胤に賜ひ、小高郷岡田邑より此地に徙る。影勝最上と合戦、胤政直江兼継の隊に属して出群の功あり。慶長七壬寅年五月、源家康公より相馬旧封を没すべき命あり。胤政これ聞き帰国、十月欽命ありて相馬封国を賜ふこと旧の如し。こゝに於て泉田氏の跡を胤政に賜はり、標葉郡泉田畠に居り泉田氏累世の居畠なり、泉田右近胤清早世その子掃部幼少なりし故泉氏に賜ふ。慶長十六年辛亥年中村の治府に移れり。

『奥相志』の記述によれば、慶長二年に泉胤政が訳あつて自らの居城である泉館に火を放ち、会津の上杉景勝の下へ走つたため、その後をうけて岡田宣胤が泉に移り、町畑の地に居館を築いたとされる。その後胤政は、慶長十六年に主君である相馬利胤に伴つて、中村城下に移り住んだことが知られる。泉平館跡は、岡田宣胤が慶長2年から16年までの15年間に居住した短命の居館であつた。

第3章 調査の方法

第1節 試掘調査

郭と推定される微高地の周囲に広がる水田に、堀跡の検出が予想される範囲について、幅1 m×2 m×長さ12 m～55 mのトレンチを22本、放射状に設定し、郭を圍繞すると推定される堀跡の検出につとめた。まず、重機により表土除去を行なつた後、人力で遺構検出作業を行なつた。試掘調査の結果、当初の想定どおり、郭の周囲を巡る堀跡を確認した(図2)。

第2節 本調査

試掘調査の結果に基づいて、第2次調査では微高地南側の水田約9,350 m²を本調査範囲とした。

グリッドは第9座標系、X=183.250、Y=103.380を原点とし、5 m四方のグリッドを設定した。グリッドの順序は、南北方向は125 mごとに北からA・B・C…Yとし、これを細分して5 mごとに同じく北からA・B・C…Yとして、各グリッドは両者を組合せてAA・AB・AC…AY・BA・BB・BC…とした。東西方向は西から1・2・3…とした。各グリッドは、例えばAB-21グリッドなどと表示した(図3)。

調査では、はじめに重機による表土除去作業を行ない、その後人力で遺構検出作業を行った。その結果、館を区画する堀跡2条、河川流路跡2条、土坑9基を検出した。

写真撮影は、遺構の半載状況・遺物出土状況・全景などを、各遺構精査の都度おこなつた。

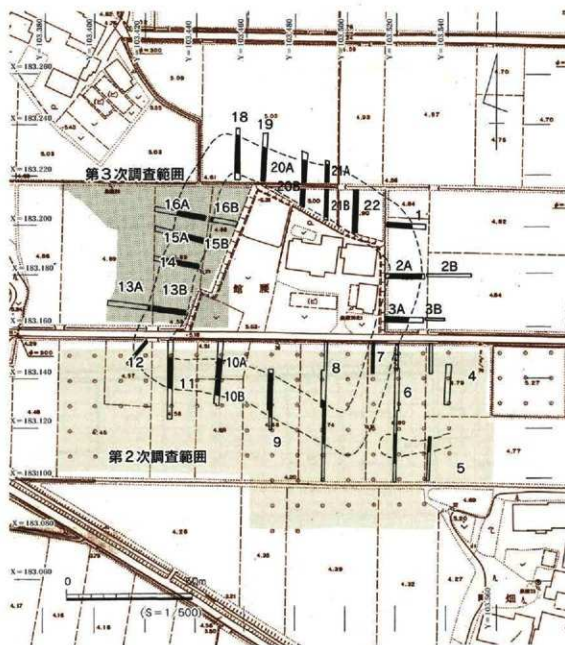


図2 泉平鋸跡 トレンチ配置図

空中写真撮影は業者に委託しラジコンヘリを使用した。

遺構の実測は各遺構精査の都度、セクション図と平板測量による平面図を作成した。全測図は基準点に基づいて平板測量により作成した。

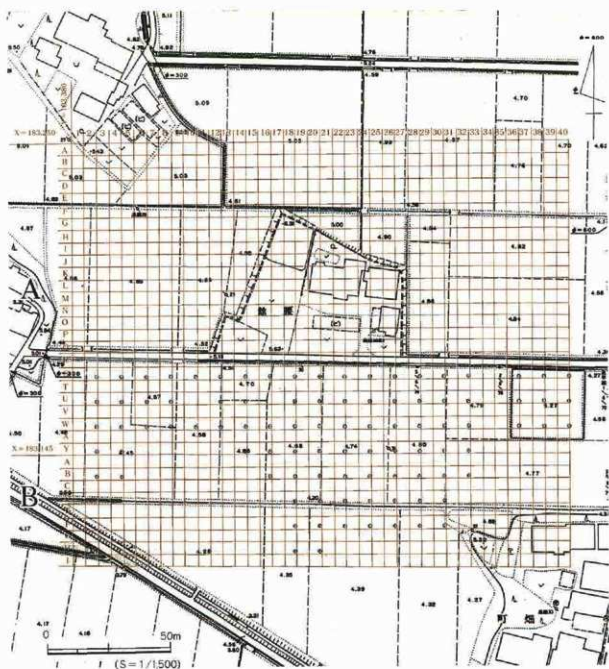


図3 泉平館跡グリッド配置図

第4章 調査成果

第1次調査では、微高地上に立地する郭の周囲を区画する堀跡を確認し、居館の規模や平面プランを把握することができた(図2)。郭を区画する堀は幅13~18mで、微高地の周囲を方形に区画している。微高地から東西に走る市道を隔てた南側は既に削平され、水田となっているが、この部分も郭の一部であり、当時は微高地となっていた可能性が高い。郭の平面規模は1号堀跡の内側で計測して北辺72m、南辺74m、西辺76m、東辺62mを測り、東辺がやや短い台形状のプランをもつ。面積はおよそ4,830㎡である。

第2次調査では、居館に伴う堀跡2条、古墳時代~平安時代の流路跡2条、土坑8基を確認した(図4)。検出された遺構・遺物について、以下に各説する。

第1節 堀跡

1号堀跡(図4~7)

位置 第2次調査では、居館を方形に区画する堀の南辺全部と、東辺約42m分を確認している。
重複関係 1号流路跡を切る。
形態 断面は浅い皿状を呈する。堀跡底面には長方形の浅い掘り込みが並び、それらが接する境界部分は畦状に掘り残されている。長方形の掘り込みは、堀跡南辺では堀跡と平行する方向に長軸をもつ長方形、西辺では堀跡と直交する方向に長軸をもつ長方形である。また、南西コーナー部分では正方形に近い形状となっている。これらの掘り込みの規模は、南辺のもので長軸11.6~14.0m×短軸3.8~5.0m、西辺のものでは長軸8.0~8.0m×1.4~3.0mを測り、西辺のものの方が細長い形状である。深さは0.02~0.40mほどである。また、南辺では畦がH形に掘り残されている部分がある。規模 幅9.5~13.8m×深さ0.25~0.35m。底面の標高は、長方形の掘り込みがあるため一定ではないが、いずれかの方向へ向けて勾配がつけられているという状況も認められない。
覆土 最下層に灰褐色土層が堆積し、その上に暗褐色土・灰暗褐色土が堆積している。自然堆積による覆土である。下層部には部分的に粘土層が堆積している。覆土の状況からは、水堀か空堀かの判別はできなかった。
出土遺物 1号堀跡からは土師器・須恵器・火縄銃の火皿・真鍮製の印籠が出土している。1~11は土師器である。出土した土師器は高杯・杯・高台付杯・赤焼土器・甕がある。1は高杯である。杯部は欠損しており不明であるが、細く中空の脚部から内湾気味の裾部が見られる。外面にはヘラケズリ・ヘラナデが施される。2~5は杯である。2は回転糸切りによって切り離された底部には、不明瞭であるが回転ヘラケズリによる再調整が観察される。内面にはミガキと黒色処理が施される。3~5は回転糸切りによって切り離された底部に、不明瞭であるが底部周縁に回転ヘラケズリの再調整を施すものと思われる。器面の調整はロクロナデを残しており、その他の調整は観察されない。また内面の黒色処理は施されないことから赤焼土器であると考えられる。6・7は高台付杯である。6は約1cmほどの高台部はハの字に

開く。杯部の形状は不明であるが内面に黒色処理が施される。7は細く長い高台部はハの字に開く。杯部は緩やかに外反しながら口縁部に向かうと考えられるが、口縁部は欠損しており詳細は不明である。8～11は甕と判断した。8は口縁部から胴部上半が判断できる資料である。資料はロクロによって整形されている。器形は長胴化が見られる胴部から口縁部に至り、口縁部は強く外反する。口縁端部はつまみ出され断面が三角形となる。9・11は底部資料であり体部や口縁部の形状は不明である。9は非ロクロ整形の甕と判断している。体部下半にはヘラケズリを施し、内面にはナデ若しくはヘラナデの調整を施す。11はロクロ整形による甕である。詳細は不明である。10は小型甕である。体部上半以上の形状は不明であるが、ロクロによって整形されている。12～21は須恵器である。須恵器は蓋・杯・甕が出土している。12は蓋である。つまみの形状は不明であるが、平坦な天井部から緩やかに内湾し口縁部に至る。口縁部は端部で強く内湾するため明瞭な口縁端部を形成する。13は杯である。回転系切りによって切り離された底部には、再調整は施されない。体部は緩やかに外傾するが口縁部は欠損しており、詳細は不明である。14は壺と判断した。残存している範囲では、高さ約5mmほどの高台から上方に向かう体部が観察される。底部及び高台部だけでは判然としないが、高台付杯の高台とは若干異なることから、長頸瓶の底部であると判断した。15は小型の壺である。平底状の底部から体部は若干外傾気味に立ち上がる。上部の形状は不明である。16は高台付杯の底部資料として判断した。残存範囲では丸みの強い体部を観察することができる。底部付近には剥離の痕跡が確認され高台部の剥離痕として判断した。口縁部の形状は不明であり、詳細については不明な点が多い。17～21は甕である。17は小型甕の口縁部資料である。体部からのびてきた口縁部は強く外反しながら口縁端部に至る。口縁端部は断面が三角形を呈する。18は底部資料である。詳細は判然としないが、中央が窪んだ底部から直線的に上方に向かう体部が観察できる。19は口縁下部から体部上半にかけた資料である。詳細は不明である。20・21は口縁部資料である。22～25は陶磁器である。22は椀皿である。底部の形状は不明であるが緩やかに内湾する体部は大きく開きながら口縁部に至る。口縁部は強く外反しておさまる。23は高台部の資料である。約1cmほどの高台部は直立気味に取り付けられており、断面形はコの字型である。杯部内面は平坦であるがそれ以上のことは不明である。24・25は口縁部資料である。24は口縁部の外反は弱いが、25は強く外反する。26は火縄銃の火皿である。火皿は鉄製の火皿部と真鍮製の火蓋部が確認できる。火皿は火縄銃の銃身との接合部と火薬をおさめる火皿で構成され、火薬をおさめる火皿には直径1cmの半球状の窪みが確認される。火皿と火蓋は直径約3mmほどの銃のようなもので留められる。火蓋にはかえりが確認される。27は印籠として判断した。印籠は真鍮製であり身と蓋で構成される。平面形は小判型であり、高さは約2.9cmである。印籠の両側辺部には紐を通したと思われる穴が確認できる。

2号堀跡(図4・5・8)

位置 調査区西側部分で確認した東西堀跡である。当調査区内で約44m分を確認している。西端は1号堀跡の南東コーナーの手前6mほどの地点で途切れ、1号堀跡との間が陸橋状に掘

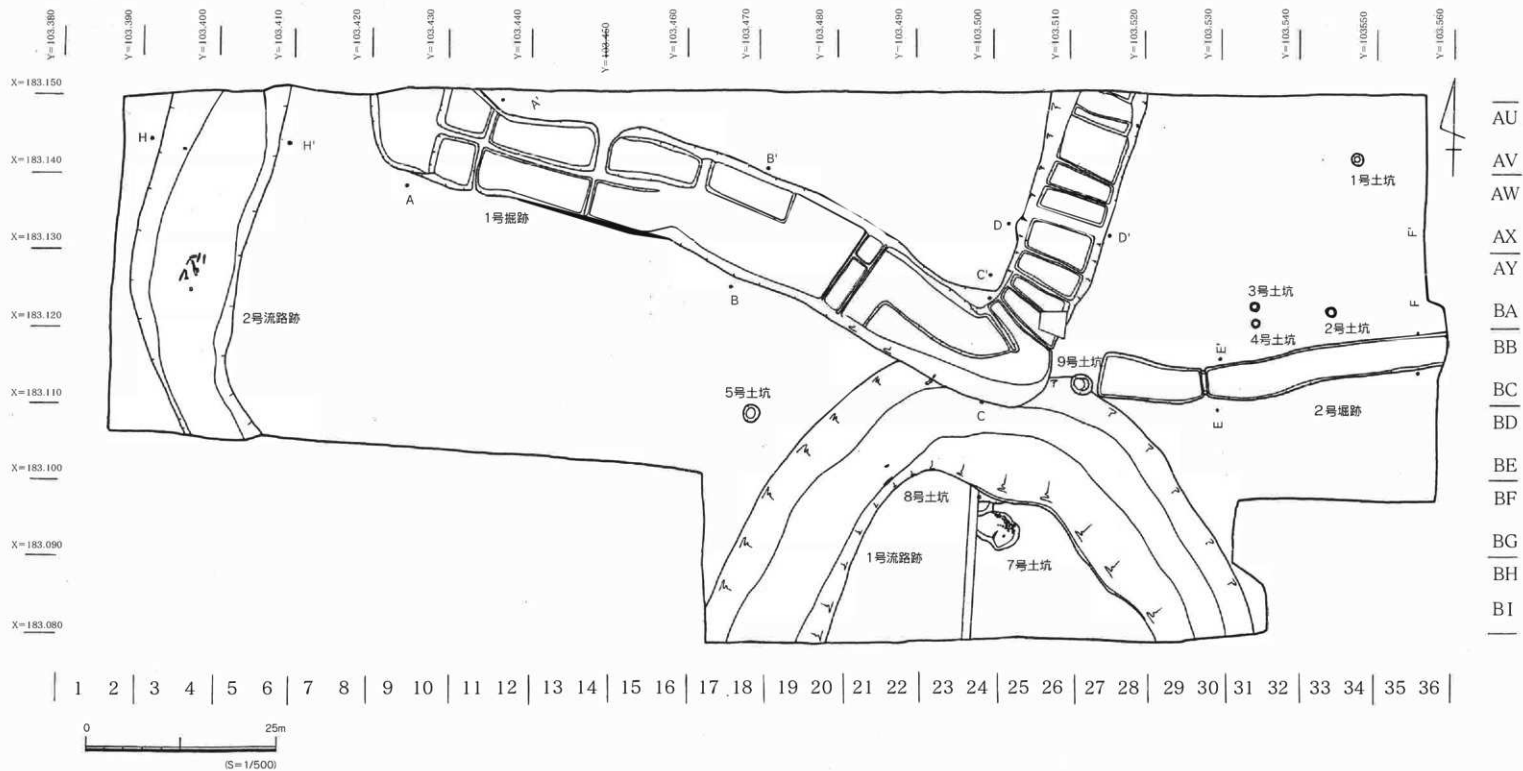


図4 泉平館跡遺構配置図

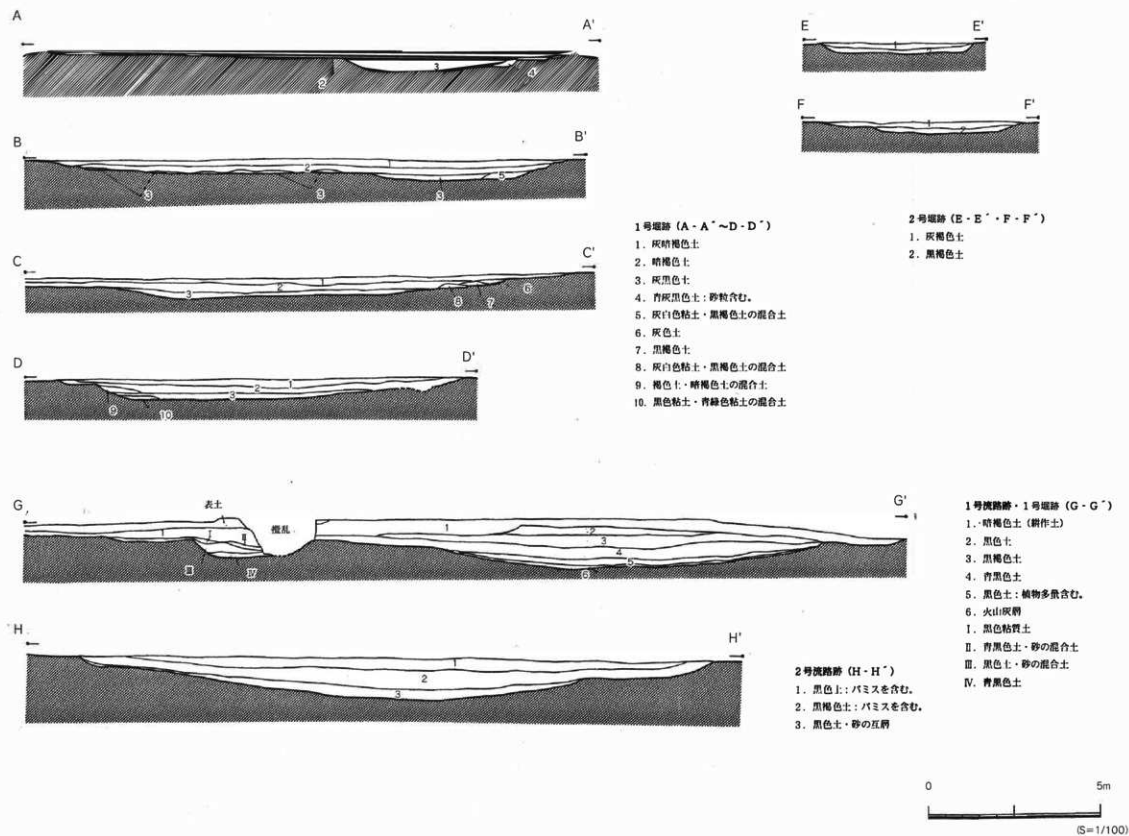


図5 堀跡・流路跡土層断面図

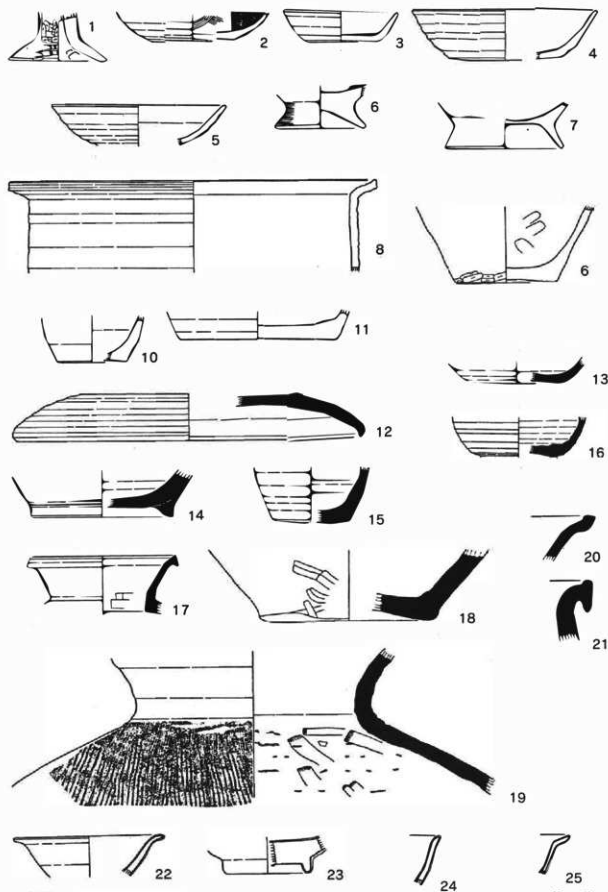


图6 1号堰跡出土遺物

(S=1/3)

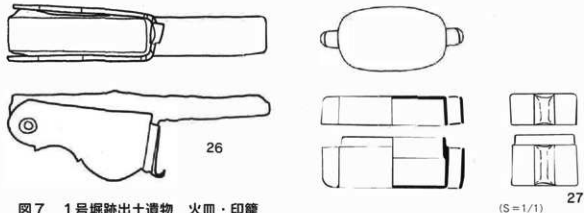


図7 1号堀跡出土遺物 火皿・印籠

り残されている。東端は調査区外へ伸びる。重複関係 なし 形態 断面形は、底面が平坦で、壁は緩やかな傾斜をもって立ちあがる逆台形を呈する。堀跡西端から東約14mほどの位置では、堀の底面が低い畦状に掘り残されている。畦状の部分は、幅0.80m×堀跡底面からの高さ0.07～0.14mを測る。規模 幅4.4m～5.8m×深さ0.22～0.30m 覆土 下層に黒褐色土、上層に灰暗褐色土が堆積している。自然堆積による覆土である。流水ないし滞水している状況は認められず、空堀であったと考えられる。出土遺物 3号溝跡からは須恵器・土師器が1点ずつ出土した。1は須恵器の壺若しくは甕の頸部付近の資料である。残存している範囲では詳細は不明である。2は土師器の小型甕の資料である。内外面にはケズリが施され、底面には木葉痕が観察される。詳細は不明である。



図8 2号堀跡出土遺物

第2節 流路跡

1号流路跡 (図4・5・9～16)

位置 調査区南半部東寄りを走る。流路は蛇行しており、西側部分では南西-北東方向へ流れ、U字状にカーブして北西-南東方向へ方角を変えている。重複関係 1号堀跡、9号土坑に切られる。また、8号土坑とも重複するが、先後関係は不明である。規模 検出面での幅は13～18mを測る。深さは1.5mほどである。覆土 最下層(6層)は火山灰層である。分析の結果、6世紀中葉に榛名山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラと判明した(付章1参照)。その上に堆積した黒色土(5層)には未分解の植物遺体が多量に含まれていた。流木などの植物が川底に堆積したものと考えられる。4層は青黒色土層、3層は黒褐色土層、2層は黒色土層である。3～5層からは土師器・須恵器などの土器が多量に出土した。多くは3層から出土しているが、その上・下層からも出土が見られる。出土した土器には年代幅があり、非

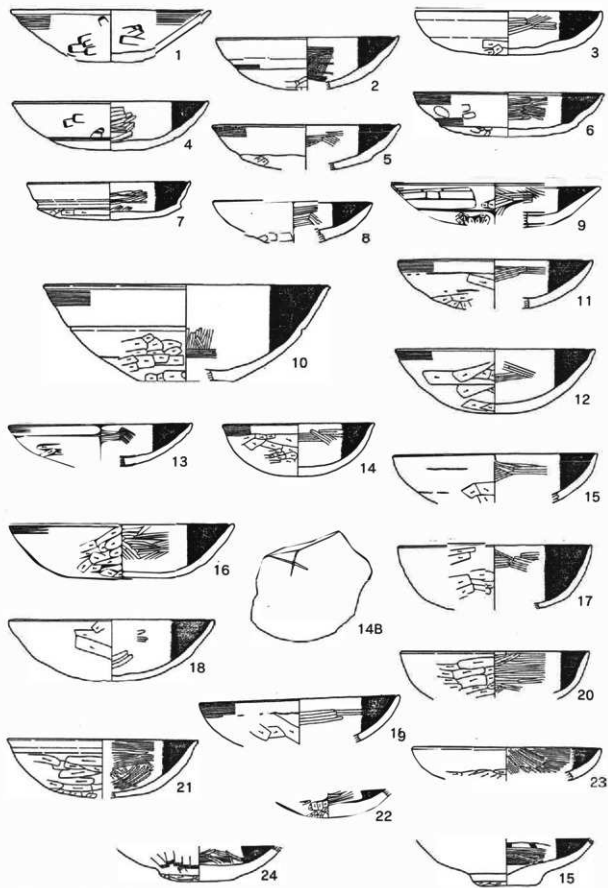


図9 1号流路跡出土遺物 土師器(1)

(S=1/3)

ロクロの比較的古い様相を示す土師器は3層から、量的には少ないがロクロ整形の赤焼き土器は2層からの出土が目立っている。出土遺物 2号流路跡からは土師器・須恵器・瓦・陶器が出土している。土師器は杯・高杯・高台付杯・墨書土器・甕が出土し、須恵器は蓋・高台付杯・杯・壺・甕が出土している。1～25は非ロクロ整形の杯である。1は平底状の底部から緩やかに内湾し口縁部に至る。器面の調整は外面下部にヘラナデ、内面下部にヘラナデが施され、口縁部にはヨコナデが施される。内面には黒色処理は施されない。2～11は丸底状の底部から緩やかに立ち上り体部中段で段を形成し口縁部に至る。器面の調整としては外面の所々にヘラケズリ若しくはヘラナデを施し内面には細かなヘラミガキ及び黒色処理が施される。このうち10は口径が約22.5cm・器高が7.5cmの大型の杯である。12から23は平底状の底部から緩やかに立ち上り口縁部に向かう。体部中段には段は見られない。器面の調整は外面には細かなヘラケズリを施し、内面にはミガキが施され黒色処理が施される。口縁部付近にはヨコナデを施すが、15・17・18・21・23は口縁部のヨコナデは見られない資料である。14は底部にヘラ状工具による線刻が見られることから刻書土器として判断した。刻書の内容は不明である。24・25は底部資料である。杯部上半の形状は欠損しており判然としないが、底部は一端約1cmほど上方に立ち上りそこから緩やかに内湾しながら上方へ向かう。外面にはヘラナデ、内面にはミガキを主体とする調整が施され、黒色処理が施される。26～35は高杯として判断した資料である。26は中空の太く短い脚部からハの字に開く裾部が見られる。脚部には直径約1cmの円窓が確認される。杯部は杯底から緩やかに外傾する体部を有し、口縁部付近で直立気味に立ち上がる。外面には脚部上半から杯部にかけてヘラナデが施され、脚部内面にはナデ及びケズリが施される。杯部内面には磨きを主とする調整が施され、黒色処理が施される。27・28・30・31は中空の脚部をもつ資料である。27は杯部から脚部にかけての資料である。緩やかに外傾する杯部にはヘラナデが施され、杯部内面には黒色処理が施される。脚部は短く外面には明瞭なヘラナデが施される。28は杯部上半は欠損しており判断できないが、杯下部から裾部にかけて蛾残存している資料である。27とほぼ同形の杯部から太く短い脚部が確認される。裾部はハの字に開き裾端部で強い反りが見られる。外面にはヘラナデ及びヘラケズリが施され、内面には黒色処理が施される。29は強く外傾する杯部から非常に短い脚部がつくものである。杯部の外面にはヘラナデを主とする調整が施され内面には細かいミガキ及び黒色処理が施される。31の脚部内面には墨書が観察されるが判読はできない。32～35は高台付杯である。32は断面が三角形の高台から外傾しながら直線的に口縁部に至る。杯部の外面にはヘラナデが施され、高台にはヨコナデが施される。杯部内面には細かなミガキ及び黒色処理が施される。33はハの字に開く高台を有するものである。高台は約1cmを測り。直線的に外傾する杯部が確認される。杯部の外面にはヘラナデが内面にはナデが施され黒色処理が施される。高台には横方向のナデが施される。34は約2cmの高い高台を有する資料である。杯部上半の形状は不明であるが内面にはミガキ及び黒色処理が施される。高台部には横方向のナデが施される。35は約5mmほどの高台が見られ高台断面形は三角形となる。外面にはヘラナデ若しくはヘラケズリの調整が施されるが、判別はできない。杯部及び高台内面にはミガキが施され杯部内面には黒色処理が施される。

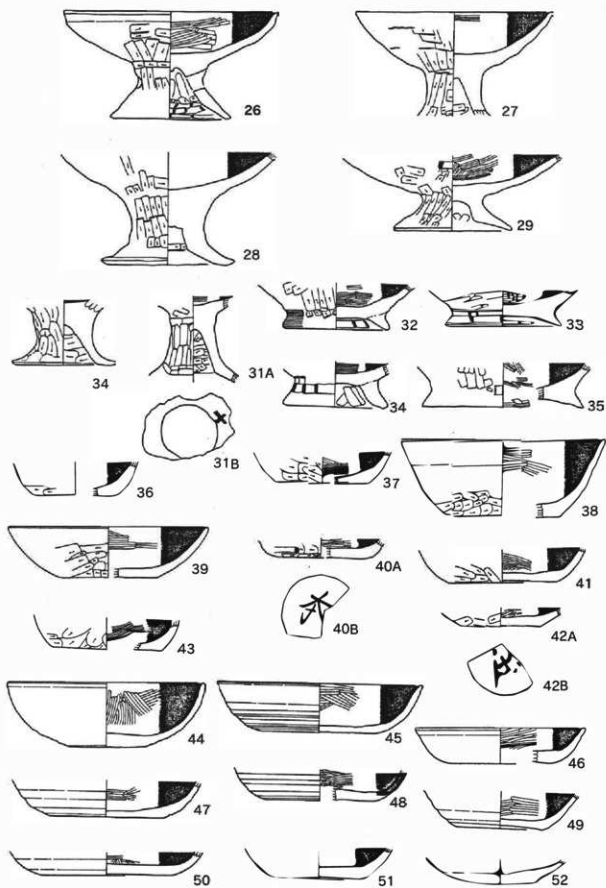
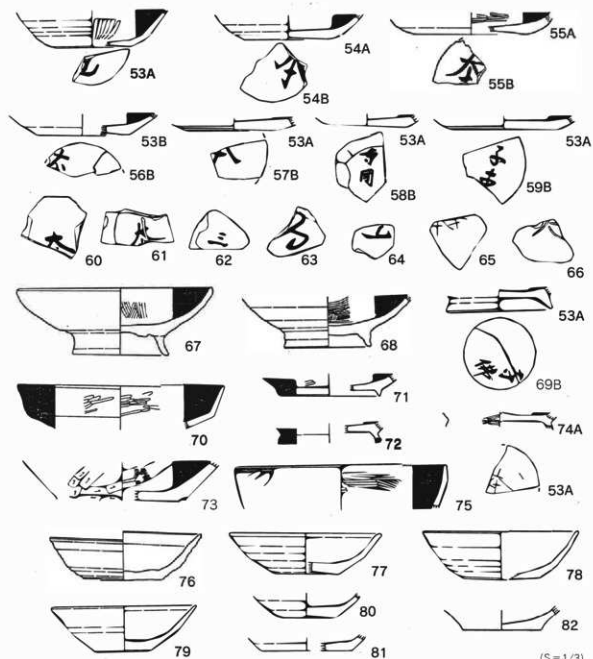


图10 1号流路跡出土遺物 土師器(2)

(S=1/3)



(S=1/3)

図11 1号流路跡出土遺物 土師器(3)

36～52はロクロ整形による杯である。36～42は底部を回転糸切りによって切り離した後底部から杯下部にかけて手持ちヘラケズリの再調整が施される。内面にはミガキと黒色処理が施される。このうち40と42には墨書が確認され40は「本」ないし「本」と判読されるが42は判読できない。43～52は底部を回転糸切りによって切り離し、底部の再調整を行わないものである。内面にはミガキによる調整と行い黒色処理を施すものである。53～64は墨書が確認される杯である。いずれの土器もロクロ整形による杯で、底部は回転糸切りによって切り離される。明瞭な再調整は施されませんが、54・57・59の底部周縁には回転ヘラケズリが施されていると思われる。53の墨書は判読できない。54～57・60・61は「本」ないし「本」と判読でき

る。58は「寺□」、59は「子□」である。62は「三」、63は「万」、64は「□」である。65・66は刻書土器である。65は細い串状工具によって書かれているが判読はできない。66はヘラ状工具による刻書が確認されるが判読はできない。67～74は高台付杯である。67は約2cmの高い高台から緩やかに立ち上がる杯部を有する。杯部の内面にはミガキと黒色処理が施される。68は直立気味の高台が見られ、内面にはミガキおよび黒色処理が施される。69はハの字に開く高台と高台内面には墨書が確認される。杯部の形状は不明であるが内面の黒色処理が確認される。墨書は「寺佛」と判読できる。70～72は内外面に黒色処理を施す資料である。70は杯部資料であり底部および高台部は不明である。杯部は体部中段に向かって外傾しながら立ち上がるが体部中段からは直立気味に屈曲し上方に向かう。71は約5mmほどの高台から杯底部までが残存している。内外面に黒色処理が施される。72は高台端部と杯部は欠損しており不明である。内外面ともに黒色処理が施される。74は刻書が確認された高台付杯である。刻書は高台内面に書かれており細い串状工具により「本」ないし「本」と書かれている。76～82は赤焼土器である。ロクロ整形によって整えられており底部は回転糸切りによって切り離される。再調整は施されない。83～92は甕である。このうち83～89は非ロクロ整形の甕であり、90はロクロ整形の甕である。91・92は底部資料である。83は底部から口縁部までが残存している。平底状の底部から体部がのびる。口縁部は緩やかに外反する。体部の最大径は体部下半に位置しており、下膨らみの体部を有する。外面の調整はヘラナデを主とする調整が施され、内面にはヘラナデ若しくはナデ調整が施される。84・85は口縁部から体部上半にかけた資料である。丸みの強い体部から口縁部がのびる。口縁部は微妙に屈曲しており、断面形は緩いS字状を呈する。87は口縁部と体部上半が確認される資料である。体部は丸みが強く口縁部は短く直線的に外傾する。86・88・89は口縁部から体部上半にかけた資料である。体部は下膨らみの強いものと判断される。口縁部は長く外反しておさまる。外面には細かいヘラナデが縦方向に施され、内面には横方向のヘラナデが施される。86・89は口縁部にヨコナデを施す。90はロクロ整形の甕であり口縁部から体部上半が残存している。体部の詳細は不明であるが長胴の体部に長い口縁部がつくものと思われる。口縁部は直線的に外傾する。外面には明瞭なロクロナデが残り内面にはヘラナデが観察される。口縁端部にはヨコナデによる調整を施す。91・92は底部資料である。平底状の底部から直線的に上方に向かう。外面にはヘラケズリが施され、内面にはナデによる調整が施される。91の内面には漆が付着している。93は甕である。大きく穿孔された底部から緩やかに上方に向かう。甕の上半は不明であるが、外面にはケズリ内面にはミガキが施される。

94～124は須恵器である。須恵器は杯・蓋・高台付杯・壺・甕が確認されている。94～103は杯である。94は底部が回転糸切りによって切り離されており、底部周縁には手持ちヘラケズリによる再調整が施される。95～103の底部は回転糸切りによって切り離されており、底部の再調整は施されない。このうち101・102・103には墨書が確認される。101には底面に「子□」・102は「本」とであると推測される。103は「□田」である。104～106は蓋である。つまみの形状は判然としない。104は比較的平坦で狭い天井部から揺るやかに開きながら体部を形成する。

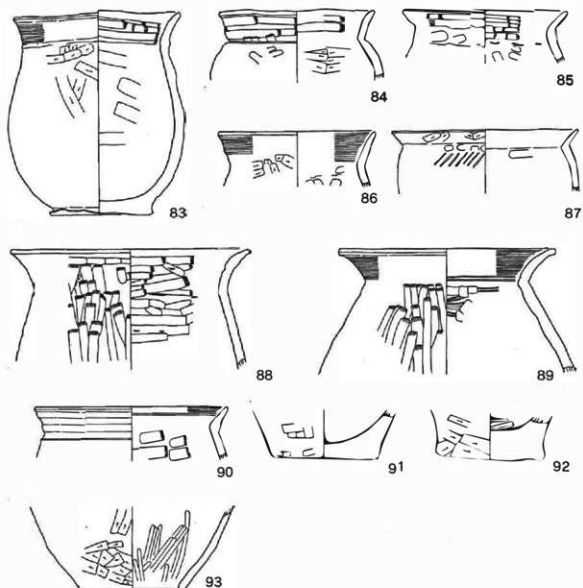


図12 1号流路跡出土物 土師器(4)

(5-1/3)

体部は中段付近で急に屈曲し下方に向かう。105は天井部及びつまみの形状は欠損しており不明であるが、直径の大きい天井部から直線的に口縁部に至る器形であると判断される。106は狭く小さな天井部から湾曲しながら口縁部に至る。107～108は高台付杯である。約5cmほどの短い高台から直径の大きい杯底部が観察される。杯部の体部は緩やかに立ち上り口縁部に至る。108は約1cmの高台から緩やかに内湾する体部が見られる。底部の直径は大きい。また高台部の内面には墨書が確認され「本」と判読できる。109～113・116は大きく壺として分類した。109は長頸瓶の底部であると判断した。底部には約1cmほどの高台が確認される。体部は直立気味に立ち上り上方に向かう。体部及び口縁部の形状は不明である。110は口縁部資料である。口縁部以下の形状については残存していないため詳細は不明である。口縁部は直線的に開きながら口縁端部に至る。111は非常に小型の口縁部である。小型の長頸瓶であると判断されるが詳細は不明である。112は短頸壺である。やや肩の張る体部から直立気味の頸部が立ち

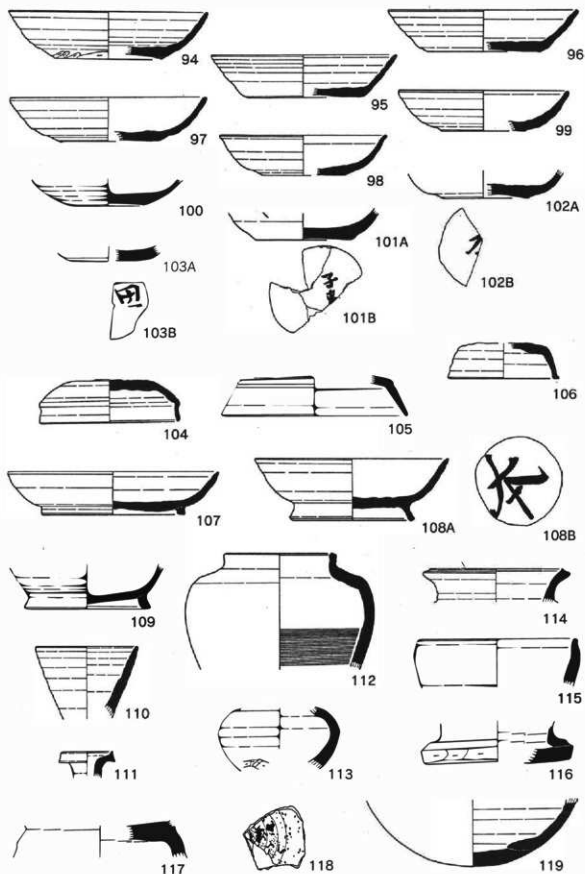


图13 1号流路跡出土遺物 須惠器(1)

(S=1/3)

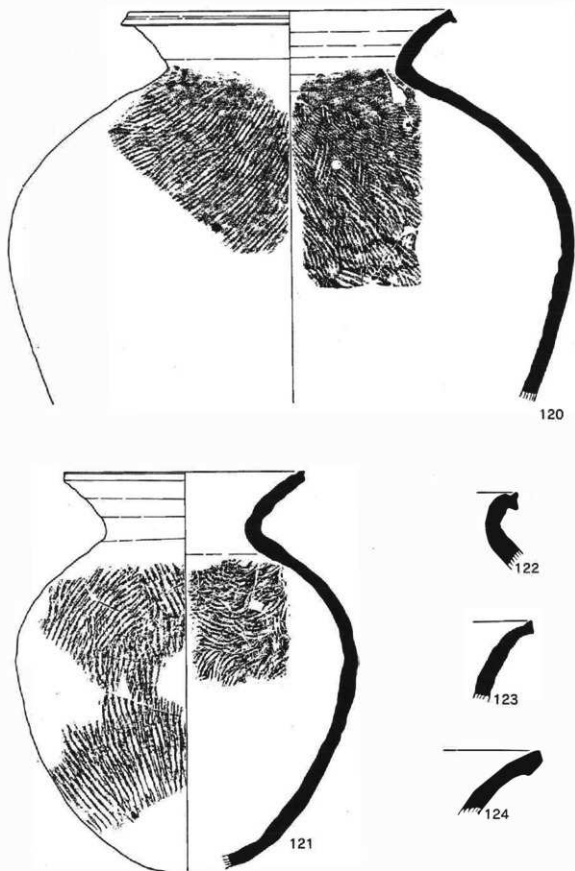


图14 1号流路跡出土遺物 須惠器(2)

(S=1/3)

上がり明瞭な口縁部を形成しないまま口縁端部に至る。113は丸みの強い体部の最大形は体部中段に位置する。口縁部及び底部の形状は不明であり機種などの詳細は不明である。114は小型の甕である。口縁部以外は欠損しており不明である。115は大型の甕として判断した。残存している範囲は口縁部から体部上半にかけての範囲であり詳細は不明である。緩やかに内傾する体部から口縁部に至るが、口縁部は口縁下部で一端内湾し更に外反しておさまる。116は鉢として判断した。断面口の字形の底部から直線的に外傾して口縁部に至るものと判断される。底部の外面にはケズリ調整が施される。117は長頸瓶・高台付杯・の高台部であると思われるが詳細は不明である。118は甕か杯の破片資料である。詳細は不明であるが、破片内面に断片的であるが漆が付着している。119～124は甕である。119は底部資料である。体部上半から口縁部は欠損しており判然としなが、底部の形状は丸い。120は口縁部から体部下半にかけての資料である。丸みの強い体部から口縁部に至り、口縁部は強く外反する。体部の最大径は体部上半に位置しており、外面には平行タタキが施され、内面には無文当具痕が観察される。底部の形状は不明である。121は口縁部から底部にかけての全体が判断できる資料である。底部は丸くやや尖底状である。体部は緩やかに立ち上り口縁部に至る。体部の最大径は体部中段からやや上半に位置している。口縁部は直線的であるが強く外傾する。122～124は口縁部資料である。

125・126は瓦である。資料は碎片であることから、種類については判然としなが、丸瓦と判断した。125は凹面には布目が観察され、凸面には斜格子状のタタキを施す。126は凹面に

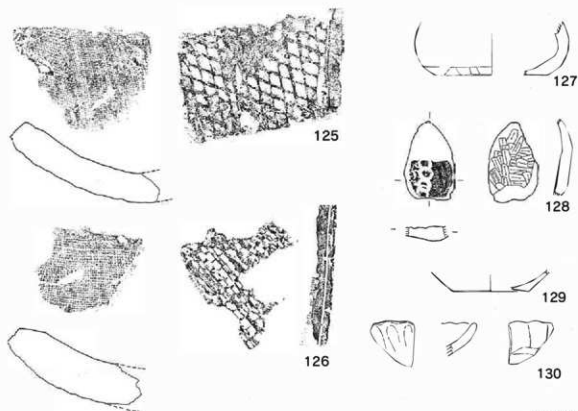


図15 1号流路跡出土遺物 瓦・陶磁器類

(S=1/3)

は布目が残り、凸面には格子タタキが施される。127～130は陶磁器である。127は小壺と判断した。平らな底部から丸みの強い体部が確認される。上部の形状は不明である。128は不明土製品である。外面には竹管状工具による刺突をもって施された円文が観察されるが器種などは不明である。129は急須若しくは土瓶である。平らな底部から直線的に上方に向かう。詳細は不明である。130は口縁部が輪花状の皿として判断した。詳細は不明である。

131～136は土製品である。131から133は土玉である。直径約3cmの球状を呈する。ほぼ中央には約1cmの孔が確認できる。134は土錘である。直径は約3cm、長さ約4cmの円柱状である。円柱のほぼ中央には直径約1cmの孔があげられている。135は土錘である。長さは約10cm、直径は約3cmを測る。中央には直径約7mmの穴が空いている。136は不明土製品である。形状としては取っ手のようにも見えるし、獸脚を表現したもののようにも見えるが判然としない。器面にはヘラ状工具による5本の線刻が確認される。詳細は不明である。

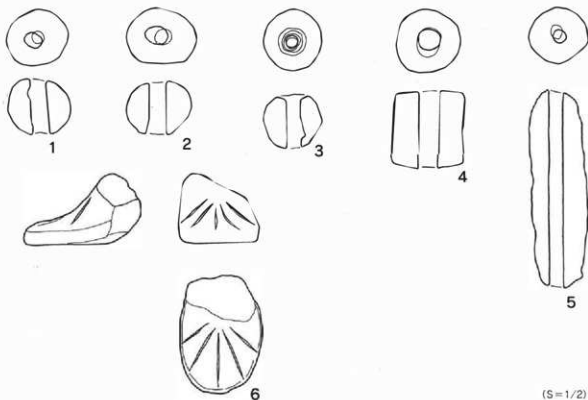


図16 1号流路跡出土遺物 土製品

(S=1/2)

2号流路跡 (図4・5・17・18)

位置 調査区西端を南北方向に走る。調査区南端部分ではやや東へカーブしている。重複関係 なし 規模 検出面での幅は8～14mを測る。深さは1.2mほどである。覆土 最下層は黒色土・砂の互層である。植物遺体を多量に含んでいた。1・2層はバミスを含む黒色土・黒褐色土層である。なお、部分的ではあるが、1層と2層との間に火山灰がレンズ状に堆

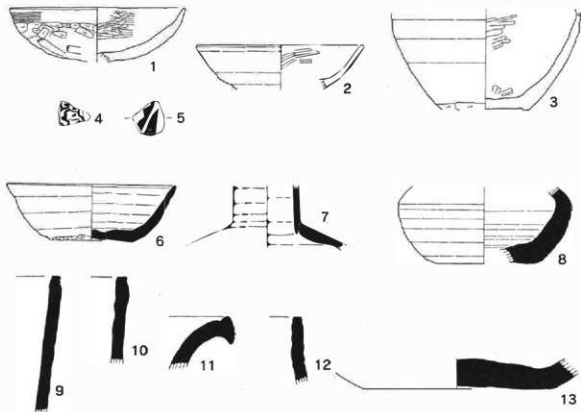


図17 2号流路跡出土遺物(1)

(S=1/3)

積しているのが認められた。火山灰は1号流路跡と同様の榛名二ツ岳伊香保テフラである。

出土遺物 4号溝跡からは土師器・須恵器・縄文土器が出土した。1～5は土師器である。出土した土師器は杯・壺・墨書土器である。1は非ロクロ整形の杯である。丸底状の底部から緩やかに内脛する体部を有する。体部の中段には細かなヘラケズリが施され、内面にはミガキが施される。黒色処理は施されない。口縁部にはヨコナデが施される。2はロクロ整形による杯である。内面にはミガキ・黒色処理が施される。底部の形状は不明である。3は壺として判断した。平らな底部の周縁には非常に低い高台が観察され、緩やかに内脛する体部が口縁部に向かう。器面はロクロ整形によって整えられ、ミガキが施される。4・5は墨書が確認されるが判読はできない。墨書が書かれている破片は杯若しくは壺の底部付近であり、墨書は底部内面に確認される。これ以上は判然としない。13・14は縄文土器である。器形は平らな底部から緩やかに内脛しながら口縁部に至る。器形は口縁部に至るまで大きな変化は見られないが、口縁部付近で若干内脛しそこから外側に折り返されて口縁端部を形成する。器種としては深鉢と判断される。

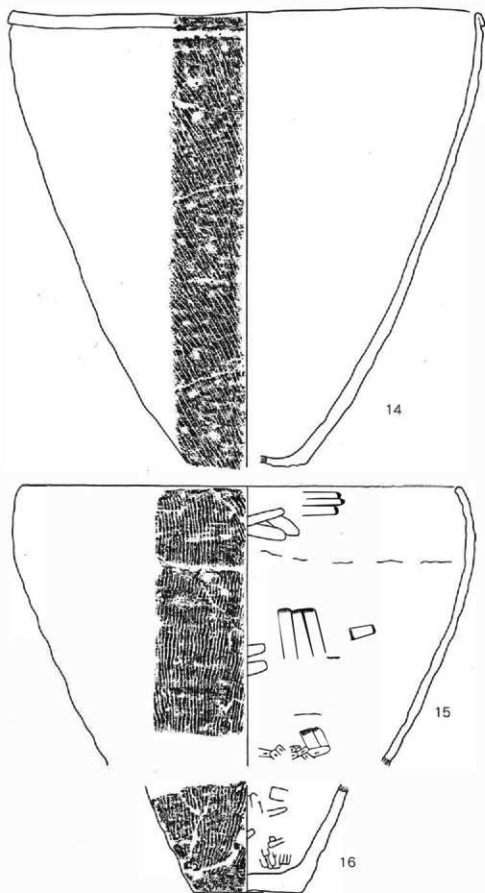


図18 2号流路跡出土物(2) 縄文土器

(S=1/3)

第3節 土坑

1号土坑 (図19)

位置 AV-34グリッドに位置する。重複関係 なし 平面形 円形。壁は急な傾斜をもって立ちあがる。規模 径1.48m×深さ1.61m 覆土 人為的に埋め戻されている。上部層の土層に一部礫が多量に混入している箇所がある。また、中層には自然木が含まれていた。出土遺物 なし 備考 掘り込みの形状や堆積土の状況から、井戸跡と考えられる。

2号土坑 (図19)

位置 BA-33グリッドに位置する。重複関係 なし 平面形 円形。ほぼ垂直に掘り込まれている。規模 径1.17m×深さ1.04m 覆土 人為的に埋め戻されている。出土遺物 なし 備考 掘り込みの形状や堆積土の状況から、井戸跡と考えられる。

3号土坑 (図19)

位置 BA-31グリッドに位置する。重複関係 なし 平面形 円形。ほぼ垂直に掘り込まれている。規模 径1.14m×深さ1.15m 覆土 人為的に埋め戻されている。出土遺物 なし 備考 掘り込みの形状や堆積土の状況から、井戸跡と考えられる。

4号土坑 (図19)

位置 BA-31グリッドに位置する。重複関係 なし 平面形 円形。垂直に掘り込まれている。規模 径1.04m×深さ1.11m 覆土 人為的に埋め戻されている。出土遺物 なし 備考 掘り込みの形状や堆積土の状況から、井戸跡と考えられる。

5号土坑 (図19)

位置 BD-18グリッドに位置する。重複関係 なし 平面形 円形。壁は緩やかな傾斜をもって立ちあがる。規模 径2.28m×深さ0.65m 出土遺物 なし。

7号土坑 (図20)

位置 BC-24・25グリッドに位置する。重複関係 8号土坑に切られる。平面形 不整形楕円形。底面は一段をもち、南西部が10cmほど低くなっている。規模 長軸6.05m×短軸4.34m×深さ0.30～0.41m 覆土 人為的に埋め戻されている。土坑北西半の底面直上には、40～10cmほどの角礫が堆積していた。また、中央部からは長さ110cm、幅24cmほどの加工木が出土している。出土遺物 加工木

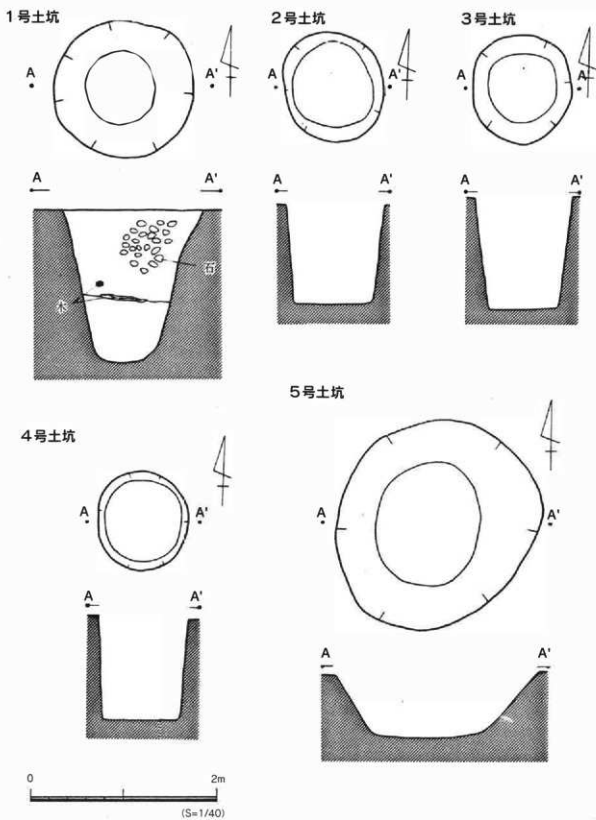


图19 1~5号土坑

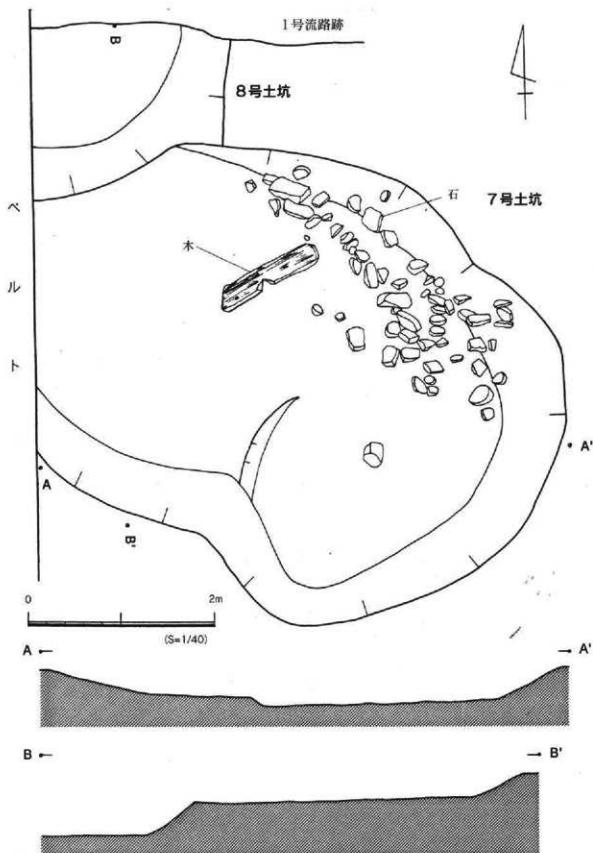


図20 7・8号土坑

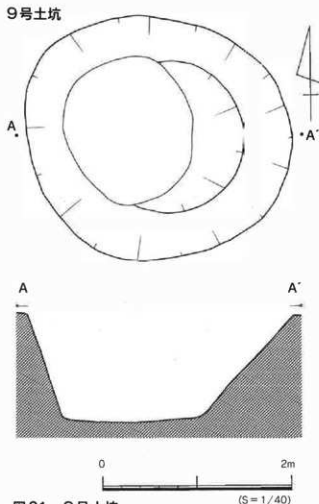


図21 9号土坑

8号土坑 (図20)

位置 BF-24グリッドに位置する。
 重複関係 7号土坑を切る。また、1号流路跡とも重複するが、先後関係は不明である。平面形 1号流路跡と重複するため平面規模は不明。深さ0.62m 規模 不明 覆土 人為的に埋め戻されている。出土遺物 なし。

9号土坑 (図21)

位置 BC-27グリッドに位置する。
 重複関係 1号流路跡と重複するが、先後関係は不明である。平面形 楕円形。壁は緩やかな傾斜をもって立ちあがる。規模 長径2.86m×短径2.57m×深さ1.12m 覆土 人為的に埋め戻されている。出土遺物 須恵器片が少量出土しているが、図化できるものはなかった。

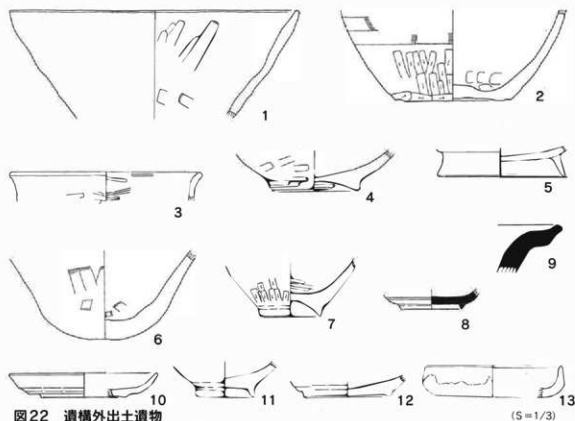
第4節 遺構外出土遺物

遺構に伴わずに出土した遺物には土師器と須恵器・陶磁器がある。

1～7は土師器である。出土した土師器は鉢・杯・碗・高台付杯がある。1は深鉢として判断した。底部の形状は不明であるが外傾しながら直線的に口縁部に至る。内面にはヘラナデが施されるが、外面調整は判然としない。2は平底の底部から緩やかに立ち上り体部中段に至る。外面調整は中段には横方向のヘラナデが施され、下部には縦方向のケズリの後に横方向のケズリが施される。3は底部から体部中段にかけての資料である。丸底の底部から外反気味に上方に向かう体部が観察される。口縁部の形状は不明である。外面の調整は縦方向のヘラナデが施される。詳細は不明である。

4は碗として判断した。口縁部付近が残存しているだけであり、詳細は不明である。直立気味の体部からのびた口縁部は強く外反する。外面にはヘラナデ若しくはヘラケズリの調整が施され、内面にはミガキが施される。

5～7は高台付杯である。5は断面が三角形の高台が見られるが、高台は非常に低く接地面



から約5mm程度である。外面には横方向のユビナデが施され、内面には黒色反りが施される。6は細く長い高台が見られる。杯部の詳細は不明であるが、内面には黒色処理が施されている。7の高台は1.2cmの高台から内腕気味の体部が確認される。調整は外面には縦方向のケズリが施され、内面にはミガキと黒色処理が施される。

8・9は須恵器である。8は高台付杯である。断面が三角形の高台が確認されるが、杯部の形状は判然としない。9は甕の口縁部であると判断した。

10～13は陶磁器である。10・11は高台付杯である。10・12の高台は非常に低い。器形は直径の大きい底部から緩やかに立ち上り口縁部に至る。11は断面がコの字型の高い高台が確認される。杯の底部平坦で緩やかに外傾しながら口縁部に向かう。13は皿として記載する。平坦で径の大きな底部から急に直立し口縁部に至る。口縁部付近には施軸が施される。

第5章 まとめ

当館跡は、堀によって区画された方形の平面プランをもつ、いわゆる方形館である。館の構造をみると、1号堀跡によって方形に区画された微高地上に立地する居館部分と、その東側に

立地し2号堀跡によって区画された部分とで構成されていることがわかる。2号堀跡に区画された部分は現在では水田となっており、両者は現況地表で1.5～2mほどの比高差があるが、1号流路跡がちょうど2号堀跡の西端部分で大きく屈曲することを考えると、2号堀跡で区画された部分も、水田造成が行なわれる以前は微高地となっていた可能性が高い。

1号堀跡に区画された郭の平面規模は1号堀跡の内側で計測して北辺72m、南辺74m、西辺76m、東辺62mを測り、東辺がやや短い台形状のプランをもつ。2号堀跡に区画された部分の全体規模は、大部分が未調査のため不明である。2号堀跡は東西に伸び、西端は1号堀跡の南東コーナー近くで途切れており、1号堀跡との間が陸橋となっている。おそらくこの部分が、区画内部への入口となっていたものと推定される。1号堀跡よりやや小型の堀である2号堀跡に区画されたこの部分は、方形館に付属する別の郭であったと考えられる。ここでは仮に、1号溝跡に区画された方形の居館部分を主郭、2号溝跡に区画された部分を副郭と呼ぶこととする。

主郭を区画する1号堀跡の底面には長方形の浅い掘り込みが並び、それらが接する境界部分は畦状に掘り残されている。畦の高さは2～40cmとやや低いが、これを浅い畝堀とみることもできる。畦の走る方向をみると、南辺では堀と平行する方向に、西辺では堀と直行する方向に走っていることがわかる。堀の内部に設けられた畦の機能を、外敵が堀を伝って侵入するのを防ぐためのものであったと仮定すれば、南辺・西辺とも南北方向の侵入を防ぐためのものであったと理解できる。また、遺構は確認されていないが、『奥相志』の記述から、高さ6尺、東西36間、南北34間の土塁が伴っていたことが分かる。1間を1.818mに換算すれば、東西65.448m、南北61.812mとなり、主郭の各辺との近似値を得ることができる。したがって『奥相志』の記述とも整合し、1号堀跡の内側に土塁が伴っていたものと判断される。

両郭とも、内部の施設については不明な点が多いが、副郭の内部で確認された1～4号土坑は井戸跡と考えられ、井戸を伴う空間として機能したものと考えられる。掘立柱建物跡や礎石建物跡などの建築遺構が確認されていないため、副郭の性格を判断するの難しいが、主郭に岡田氏の居宅が存在するといえれば、副郭はそれに従属する位置にあり、下臣団の居住区ではなかったかと推測される。

ところで、当館跡の立地する地形は沖積地内微高地であり、周囲の沖積地を見渡せる位置にある。館の周囲には水田や農村が広がっていたと推測され、館はそれを掌握するための拠点的な位置に築かれたといつてよい。橋口定志氏は、関東地方の館の類例を分析し、立地、区画施設の面からⅠ～Ⅴ群に分類している(註4)。このうちⅣ群は沖積地内の自然堤防上や微高地上の平坦面に立地し、水堀によって区画されているもので、当遺跡の例はこれに近い。氏は、Ⅳ群に含まれる例では居館の堀が灌漑用的な機能をもつものが多いことを指摘し、居館の水堀が用水系の掌握・管理といった勤農機能をもち、これを媒介とした農民支配が行なわれたことを示す具体的な事例としている(註5)。1号堀跡が水堀か空堀かの判断は難しいが、館の周囲では流路跡が検出されており、泉平館跡がそうした機能を果たしうる場所に占地していたという点には留意すべきである。

当館跡の存続時期については、『奥相志』の記述から、相馬氏の下臣である岡田八兵衛宣胤が慶長2年から同16年までの短い期間に居住した居館であったことが明らかとなっており、厳密な実年代と築造者を把握できる。岡田氏については、『奥相志』や岡田氏に伝わる古文書群（岡田文書）など、豊富な史料が残っている。一方、館の存在形態は、そこに居住した在地領主が地域において果たした在地支配の在り方を具現するものと考えられる。泉平館跡は、文献上で知られる岡田氏が、泉のこの地で行なった在地支配の実態がどのようなものであったのかを、考古学の側から解明するための糸口を与えるものであり、その資料的価値は高く評価されるべきものである。

- (註1) 『県営高平地区は場整備事業関連遺跡発掘調査報告書』I 原町市埋蔵文化財調査報告書21集 2000年3月。
- (註2) 『奥相志』斎藤完高 安政4(1857)年～明治4(1871)年
『相馬市史』4 資料編1(奥相志) 福島県相馬市 1969年
- (註3) 註2に同じ。
- (註4) 橋口定志「中世居館の再検討」『東京考古』5 1987年 東京考古談話会
- (註5) 館の水堀が勸農業をもち、それを媒介として農民支配が行なわれたとする考えは、小山靖憲氏が既に上野国新田荘上今居郷の近世屋敷絵図の検討から明らかにしている(小山靖憲「東国における領主制と村落—平安末～鎌倉期の上野新田荘を中心に—」『史潮』94号 1966年 大塚史学会)。橋口氏は、小山氏のこの議論を継承し、考古学的に検討を加えた上で、小山氏の指摘する館の勸農機能は、中世後半以降のものであることを指摘している。

付章1 原町市、泉平館跡の火山灰分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

福島県浜通り地方に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、安達太良、沼沢、赤城、榛名、浅間さらに、中部、中国、九州地方などの火山に由来する数多くのテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる（早田・八木，1991）。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、火山灰層の可能性のある土層が認められた泉平館跡において採取された試料を対象に、テフラ検出分析及び屈折率測定を行って示標テフラとの同定を試みた。分析対象となった試料は、発掘調査担当者により採取された泉平館跡2次SD02-Wの試料である。

2. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

試料について、テフラ検出分析を行って、テフラ粒子の量や特徴の記載を行った。分析の手順は、次の通りである。

- 1) 試料15gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。試料には、スポンジ状に比較的良く発泡した白色軽石がとくに多く含まれている。軽石の最大径は、1.0mmである。重鉱物としては、角閃石や斜方輝石が認められる。

3. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

試料について、示標テフラとの同定精度を向上させるために、温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）により屈折率の測定を行った。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を表2に示す。試料に含まれる火山ガラス(n)の屈折率は、1.502-1.504である。斜方輝石(γ)の屈折率は1.708-1.711である。さらに角閃石(n2)の屈折率は、1.672-1.677である。これらの特徴から、この試料に含まれるテフラは6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP, 新井, 1962, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992)に由来すると考えられる。軽石の産状などから、試料はHr-FPの可能性が非常に高いと考えられる。ただし、一次堆積層か否かについては、分析者による土層断面の観察が行われていないことから、最終的に判断することは難しい。

4. まとめ

泉平館跡において採取された試料を対象に、テフラ検出分析と屈折率測定を行った。その結果、試料が採取された土層については、榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP, 6世紀中葉)である可能性が非常に高いと考えられた。

文献

- 新井房夫(1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
- 新井房夫(1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフrokロロジーの基礎的研究。第四紀研究, 11, p.254-269.
- 新井房夫(1993) 温度一定型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀試料分析法—研究対象別分析法」, p.138-148.
- 町田 洋・新井房夫(1992) 火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p.
- 坂口 一(1986) 榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器。群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.
- 早田 勉(1989) 6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害。第四紀研究, 27, p.297-312.
- 早田 勉・八木浩司(1991) 東北地方の第四紀テフラ研究。第四紀研究, 30, p.368-378

表1 テフラ検出分析結果

試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径	重鉱物
SD02-W	++++	白	1.0	ho>opx

++++: とくに多い, ++++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない, -: 認められない. 最大径の単位は, mm. ho: 角閃石, opx: 斜方輝石.

表2 屈折率測定結果

試料	火山ガラス (n)	斜方輝石 (γ)	角閃石 (n ₂)
SD02-W	1.502-1.504	1.708-1.711	1.672-1.677

屈折率の測定は、温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）による。

付章2 泉平館跡の自然科学分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

泉平館跡は、近世の居館跡で、相馬一族の長、岡田氏が1597年～1611年まで使用していたとされる。今回発掘調査を行った場所はその南半部にあたと推定されている。調査の結果、館に伴う堀跡が検出され、様々な遺物が検出されている。また、自然流路も検出されており、ここからは古墳時代～奈良・平安時代にかけての遺物などが出土している。今回は遺跡出土の植物遺体や骨・貝類の種類を知り、当時の生業に関する情報を得る。

1. 試料

試料は、泉平館跡から出土した植物遺体11点と、骨・貝類18点である。なお、植物遺体のうち、試料番号9は木材片であるため外観では種類を特定できない。そこで、樹種同定を行うこととした。なお、試料の詳細（出土遺構・時代性など）は結果とあわせて示す。

2. 分析方法

(1) 樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラル（抱水クロラル、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレバートを作製する。

(2) 種実同定

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実遺体を抽出、同定する。同定された種実遺体は、種類ごとに瓶にいれ、ホウ酸・ホウ砂水溶液中に保存する。

(3) 骨・貝類同定

肉眼あるいは拡大鏡にて、その形態から種類を同定する。

3. 結果

(1) 樹種同定

木材片は、樹皮であった。このため、種類の同定に必要な木材組織が観察されなかったため、種類の特定はできなかった。

(2) 種実同定

結果を表1に示す。以下に検出された種類の形態的特徴を示す。

・イヌガヤ (*Cephalotaxus harringtonia* (Knight) K.Koch) イヌガヤ科イヌガヤ属

表1 種実同定結果

	近 世					奈良・平安			弥生古墳
	1号溝跡		6号土坑			2号溝跡			
	1	6	7	8	9	2	3		
木本類									
イヌガヤ	—	—	—	—	—	38	—	—	—
モミ (葉)	—	—	—	—	—	—	—	—	2
モミ (種子)	—	—	—	—	—	—	—	—	1
ヒノキ	—	—	—	—	—	—	—	—	1
サワグルミ	—	—	—	—	—	—	—	—	1
オニグルミ	—	—	1	—	—	4	—	1	—
クマシテ	—	—	—	—	—	—	—	—	1
イヌシテ	—	—	—	—	—	—	—	—	1
ハンノキ属	—	—	—	—	—	—	—	—	2
ブナ	—	—	—	—	—	1	—	—	—
モモ	—	—	—	—	—	—	2	—	—
サンショウ	—	—	—	—	1	—	—	—	—
キハダ	—	—	—	—	—	—	—	—	1
トチノキ	—	1	—	—	—	—	—	—	—
タラノキ	—	—	—	—	—	—	—	—	1
ニワトコ	—	—	—	—	—	—	—	—	4
草本類									
ミクリ属	—	—	—	—	—	—	—	—	多
ヒルムシロ属	—	—	—	—	—	—	—	—	多
オモダカ科	—	—	—	—	—	—	—	—	1
サジオモダカ科	—	—	—	—	—	—	—	—	1
タケ類	破	—	—	—	—	—	—	—	—
カヤツリグサ科	—	—	—	—	1	—	—	—	11
オニシゲ近似種	—	—	—	—	—	—	—	—	1
スゲ属	—	—	—	—	—	—	—	—	16
ホタルイ属	—	—	—	—	—	—	—	—	多
イボクサ	—	—	—	—	—	—	—	—	6
タデ種	—	—	—	—	—	—	—	—	13
ジュンサイ近似種	—	—	—	—	—	—	—	—	1
タケニグサ	—	—	—	—	—	—	—	—	1
キジムシロ属へビイチゴ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—
オランダイサゴ属	—	—	—	—	—	—	—	—	1
フサモ属	—	—	—	—	—	—	—	—	1
メハジキ属	—	—	—	—	—	—	—	—	1
不明	—	—	—	—	—	—	—	—	9

種子が検出された。黒褐色で側面観は長卵形、上面観は凸レンズ型。大きさは1.5cm程度。種皮は黒色で堅く、表面に顆粒状の隆起がある。

・モミ (*Abies firma* Sieb. et Zucc.) マツ科モミ属

葉と種子が検出された。葉は針状、扁平で長さ約1cm、幅約1mm程度。先端部は凹頭で、基部は楔状に細くなるが茎に接着する部分は吸盤状に丸く広がっている。裏面中肋の両側には、気孔帯がある。種子は黒褐色で大きさ7mm程度。くさび型で翼に包まれている。翼は種実と離れにくいいため、ちぎれるように破損している。

・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

枝が検出された。大きさは長さ2cm、幅2mm程度。葉は鱗状茎を完全に包む。下面は中央の葉と側部の葉のつなぎ目がY字状に見える。

・サワグルミ (*Pterocarya rhoifolia* Sieb. et Zucc.) クルミ科サワグルミ属

殻が検出された。褐色で大きさは5mm程度。たてにつぶれた球形。表面は厚くて堅く、あるいは「しわ」があり、突出する。内部には2室がある。

・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim) Kitamura)

クルミ科クルミ属

核が検出された。褐色、木質で非常に堅い。大きさは2.5 cm程度。表面は荒いしわ状となり、縦方向に溝が走っている。内側は子葉が入るくぼみがある。

・クマシデア (*Carpinus japonica* Blume) カバノキ科クマシデア属

果実が検出された。黒褐色で、大きさは5 mm程度。側面観は涙型、上面観は凸レンズ型。表面には縦方向に数本の筋が存在する。

・イヌシデア (*Carpinus Tschonoskii* Maxim.) カバノキ科クマシデア属

果実が検出された。黒褐色で、大きさは4 mm程度。側面観は亜三角形、上面観は凸レンズ型。表面には縦方向に数本の筋が存在する。

・ハンノキ属 (*Alnus*) カバノキ科

果実が検出された。黒褐色で大きさは3 mm程度。楕円形で両側に小さな翼がつく。先端は花柱のあとが残り、2本の小さい突起がみられる。

・ブナ (*Fagus crenata* Blume) ブナ科ブナ属

果実が検出される。大きさは2 cm程度。3稜がある。表面は薄くて堅く、光沢がある。

・モモ (*Prunus persica* Batsch) バラ科サクラ属

核(内果皮)が検出された。褐色～黒褐色で大きさは2.5 cm程度。核の形は楕円形でやや扁平である。基部は丸く大きな臍点がありへこんでおり、先端部はやや尖る。一方の側面にのみ、縫合線が顕著に見られる。表面は、不規則な線状のくぼみがあり、全体として荒いしわ状に見える。

・サンショウ (*Zanthoxylum piperitum* DC.) ミカン科サンショウ属

果実が検出された。黒褐色、楕円形で大きさは4 mm程度。表面には浅い不規則な網目模様が見られる。

・キハダ (*Phellodendron amurense* Ruprecht) ミカン科キハダ属

核が検出された。黒褐色。大きさは4 mm程度。半円形。表面には細かい亀甲状の浅い網目模様がみられる。表面は薄くて堅く、やや光沢がある。

・トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume.) トチノキ科トチノキ属

種子が検出された。大きさは2 cm程度で、種皮は薄く堅い。表面には黒く艶のある部分と、黒褐色でざらつく部分とがある。

・タラノキ (*Aralia elata* (Miq) Seemann) ウコギ科

核が検出された。茶褐色で側面観は半円形、上面観は卵形。長さ2 mm程度。核はやや厚く硬い。核の表面には不規則な瘤状突起がある。

・ニワトコ (*Sambucus rasemosa* L. subsp. *sieboldiana* (Miquel) Hara)

スイカズラ科ニワトコ属

種子が検出された。黒色。長楕円形で、大きさは2 mm程度。下側に臍があり、表面には横軸に平行なしわ状の模様が存在する。

・ミクリ属 (*Sparganium*) ミクリ科

果実が検出された。大きさは4 mm程度。側面観は紡錘形で、上面観は多角形状である。表面

はざらつく。やや堅くて弾力があり、数本の筋が走る。先端部が鋭くとがっていたと思われるが、欠損している。

・ヒルムシロ属 (Potamogeton) ヒルムシロ科

果実が検出された。褐色、広卵形で、大きさは4 mm程度。背部に小さな翼状の突起が2つある。背面の皮ははずれやすい。

・オモダカ科 (Alismataceae)

種子が検出された。U字形で大きさは2 mm程度。淡褐色でわらかい。表面はざらつく。

・サジオモダカ属 (Alisma) オモダカ科

果実が検出された。大きさは2 mm程度。果皮は淡褐色でわらかい。中にU字形の細長い種子がみられる。側面に溝が存在する。

・タケ類 (Gramineae subfam. Babusoideae) イネ科

稈の破片が検出された。節が明瞭に残る。推定される直径は数cm程度。

・カヤツリグサ科 (Cyperaceae)

果実が検出された。褐色、3稜形で細長く、大きさは1 mm程度。表面は薄くてやや堅く、ざらつく。先端がやや尖る。

・オニスゲ近似種 (Carex cf. Dickinsii Fr. et Sav.)

果実が検出された。本体部の大きさは3 mm程度。3稜があり、淡褐色で、表面はざらつく。先端部は急に細くなり長くのびる。

・スゲ属 (Carex) カヤツリグサ科

果実が検出された。大きさは2 mm程度。褐色、3稜形で、先端部は細くなる。表面は薄くて柔らかく、弾力がある。

・ホタルイ属 (Scirpus) カヤツリグサ科

果実が検出された。黒色。堅く光沢がある。大きさは2 mm程度。偏平で背面が高く稜になっている。腹面は平らである。片凸レンズ状の広倒卵形。先端部はとがり、基部はせばまって「へそ」がある。表面には細かい凹凸があり、横軸方向に平行な横しわがあるように見える。数本の針状の花被がみられ、先端には逆刺がある。

・イボクサ (Ancilema Keisak Hassk.) ツユクサ科イボクサ属

種子が検出された。灰色、不定形で、大きさは3 mm程度。種皮はやや柔らかい。くぼんだ発芽孔が存在し、その側面には一文字のくぼみがあり、それに直行するしわ模様が存在する。表面には円形の小孔が多数存在する。

・タデ属 (Polygonum) タデ科

果実が検出された。大きさは2 mm程度。3稜形で表面は薄くて堅く、光沢がある。

・ジュンサイ近似種 (Brasenia Schreberi J.F.Gmel.) スイレン科ジュンサイ属

種子が検出された。楕円形で大きさは3 mm程度。楕円形で、先端に丸くて大きな「へそ」がある。表面は薄くて堅く、ざらつく。

・タケニグサ (Macleaya cordata (Willd.) R.Br.) ケシ科タケニグサ属

種子が検出された。淡黄色で楕円形。大きさは1mm程度。表面には丸い窪みが密に配列する。表面は薄くて堅い。

・キジムシロ属ーヘビイチゴ属ーオランダイチゴ属 (Potentilla-Duchesnea-Fragaria)

バラ科

種子が検出された。褐色。大きさは1mm程度。半月形で、一端に「へそ」が存在する。表面全体はすじ状の模様があるが、不鮮明である。

・フサモ属 (Myriophyllum) アリノトウグサ科

種子が検出された。側面観は半月形で、上面観は3角形。淡褐色で表面は厚くてざらつく。背の部分に突起がある。

・メハジキ属 (Leonurus) シソ科

果実が検出された。大きさは2mm程度。灰褐色、くさび形で大きさは2mm程度。3稜があり、先端部はとがる。表面はやや堅く、ざらつく。

(3) 骨・貝類同定

結果を表2に示す。同定された種類は、獣骨類ではウマ、シカ、イノシシ、ウシ、貝類ではハマグリ、イガイ、タニシ類、マツカサガイ、アカニシである。獣骨は頭部や四肢が検出されるが、特にウマとイノシシは顎や歯列が検出されており、保存状態がよい。

表2 貝・骨同定結果

試料番号	地区・遺構名	層位	種名(和名)	部 位	左右	数 量	備 考
27	1号溝跡 SD01-E-N	12	ハマグリ		左	1点	大型の個体
28	1号溝跡 SD01-S-W	13	イガイ	殻皮		1点	
29	1号溝跡	ホリ-S-11	タニシ類 マツカサガイ			1点 7点	
30	1号溝跡 SD01-E-S	11	ハマグリ		左	2点	内腔のみ
31	1号溝跡 SD01-E-S	12下	ハマグリ		左	1点	
32	1号溝跡 SD01-S-W	11下	アカニシ	殻柱		3点	このほか破片あり
12	1号溝跡 SD01-E-N	12	ウマ	上顎骨、臼歯列4-5		1点(破片化)	いずれも歯は大破
21	1号溝跡	ホリ-S-11	ウマ/ウシ	中手骨/中足骨		1点(破片化)	
19	1号溝跡	ホリ-S-11上	ウマ/ウシ	肢骨		破片数点	
20	1号溝跡	ホリ-S-11	ウマ/ウシ	肢骨		破片数点	
22	1号溝跡 SD01-E-N	12下	ウマ/ウシ	肢骨		1点(破片化)	
23	1号溝跡 SD01-E-N	12	イノシシ ウシ	下顎犬歯 脛骨	右 左	1点(破片化) 1点(破片化)	
18	1号溝跡 SD01-E-S	11	イノシシ	上腕骨、遠位 尺骨、近位	左 右	1点(破片化) 1点(破片化)	骨端欠落
14	1号溝跡 SD01-E-N	12	イノシシ	下顎骨、CからM3までの部分	左	1点(破片化)	P3・P4・M2・M3残存
15	1号溝跡 SD01-E-N	12	イノシシ	下顎骨、P3からM3までの部分	右	1点(破片化)	歯冠は欠損
17	1号溝跡 SD01-E-S	11	イノシシ イヌ	上顎骨、M2・M3 大腸骨	左	1点(破片化)	M3の長39.25mm、幅23.14mm 全長(復元)196.58mm
13	1号溝跡 SD01	12	シカ	角		1点(破片化)	
16	1号溝跡 SD01-E-N	12	シカ	角		1点(破片化)	

4. 考察

種実遺体は、館の周囲をめぐる堀跡である1号堀跡から検出された種類数は少なかったが、自然流路である1号流路跡からは多くの種実が得ることができた。特に弥生・古墳時代に比定される種実類の産出が顕著である。

1号流路跡は、弥生・古墳時代、奈良・平安時代に比定される種実にわかれる。弥生・古墳時代に比定される種実は、木本類、草本類ともに種類数が多い。木本類をみると、林縁部、特に沢沿いや谷斜面など湿ったところを好む種類がめだつ。これに該当する種類としては、ニワトコ、タラノキ、キハダ、ハンノキ属、イヌシデ、クマシデ、サワグルミがあげられる。遺跡の後背には丘陵地があることから、これらは丘陵地と低地との境界付近に生育していたと推定され、地形からみても調和的である。その他、モミとヒノキは温帯性の針葉樹であるが、これも後背の丘陵地などに生育していたと考えられる。原町市で行われた花粉分析の成果をみると、古墳時代頃には、ハンノキ属やコナラ属が多産し、アカガシ亜属、モミ属、クリ属、ブナ属、クマシデ属、ニレ属—ケヤキ属などの種類を伴っている（内山，1987；1990）。コナラ亜属やアカガシ亜属、ブナ属などは、花粉化石で多産しているが種実では検出されていない。花粉生産量や種実の残りやすさなども原因の一つであると思われるが、これらはいずれも風媒花で広範囲の植生を反映していると考えられることから、コナラ亜属やアカガシ亜属、ブナ属などはより山深い場所に生育していたと推定される。一方、草本類をみると、水生植物あるいは水生植物を多く含む分類群（ミクリ属、ヒルムシロ属、オモダカ属、オニスゲ、スゲ属、ホタルイ属、イボクサ、ジュンサイ、フサモ属）が種類数、個体数ともに多く、当時これらが流路内や付近の湿地に生育していたことが考えられる。

奈良・平安時代に比定される種実をみると、イヌガヤ、オニグルミ、ブナ、モモなどがある。モモは渡来種であり、栽培されていたと推測されるが、その他は自生していたものとみられる。食用となるオニグルミとブナは、種実の収量が多く、保存が利くことから、植物質食料として利用されていたことが考えられる。イヌガヤは食用にならないが（日本海側に自生する変種のハイヌガヤは食用になる）、搾油の原料となることから、このような用途で使われていた可能性はある。

近世以降に比定される1号堀跡から出土した種実をみると、僅かではあるがオニグルミ、サンショウ、トチノキ、タケ類、カヤツリグサ科などがある。オニグルミ、サンショウ、トチノキは食用になる。また、タケ類は細片になっているが、用材として利用されることが多く、これらは当時利用されていたものの一部である可能性が考えられる。

骨・貝類は、1号堀跡から多量に出土している。獣骨類では、ウマ、シカ、イノシシ、ウシがある。シカとイノシシは人里近くに生育することから、狩猟対象としては好適であったと思われる。また、ウシやウマは当時の家畜としては一般的であり、農耕用や食用としての利用が考えられる。

一方、貝類ではハマグリ、イガイ、タニシ類、マツカサガイ、アカニシがある。本遺跡は海岸に近いことから、ハマグリなど海生の貝類のほか淡水貝であるタニシ類も採取可能で、これらが食用として利用されていたと考えられる。

骨・貝類については、食用可能な種の占める割合が高く、特に獣骨類は破片化しているものが多いことや部位の欠落が見られることなどから、館内から排出された食物残渣である可能性もある。

今回は、館跡という居住空間における「堀」部分を対象としており、また試料の出土状態に関する情報も十分に把握していないため、館跡の実態に迫る十分な解析を行うことはできなかった。今後、これらの試料の出土状況や他の遺物の出土状態の把握とともに、北半部の「堀跡」部分や館跡周辺についても同様な分析調査を行い、情報の蓄積したい。そのような作業を通して「泉平館跡」の実態を解明していきたい。

引用文献

内山 隆 (1987) 中間温帯林域における花粉分析学的研究 その1 東北地方南東部。

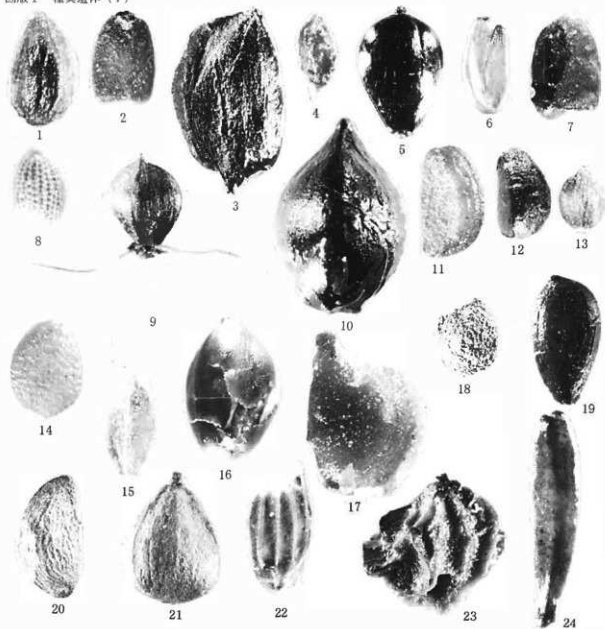
日本花粉学会会誌, 33, p.111—117.

内山 隆 (1990) 中間温帯林域における花粉分析学的研究 その2 東北地方北東部。

日本花粉学会会誌, 36, p.17—32.

原町市教育委員会 (1995) 泉平館跡現地説明会試料

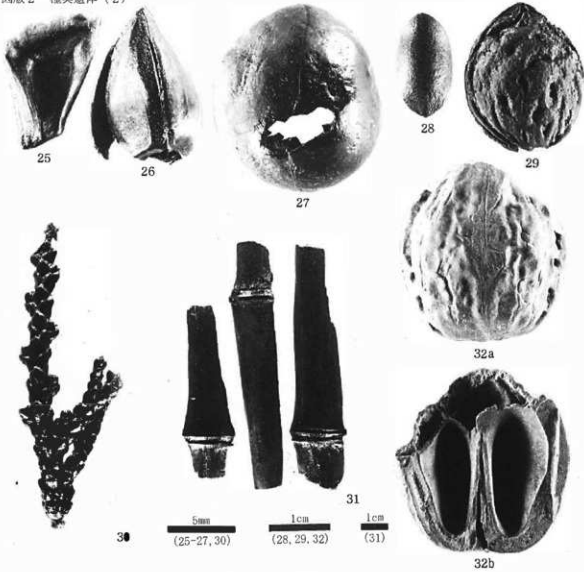
図版1 種実遺体(1)



- | | |
|----------------------|-------------------------------------|
| 1. サジオモダカ属 (2号溝跡:4) | 2. メハジキ属 (2号溝跡:4) |
| 3. ハンノキ属 (2号溝跡:4) | 4. フサモ属 (2号溝跡:4) |
| 5. カヤツリダサ科 (2号溝跡:4) | 6. オモダカ科 (2号溝跡:4) |
| 7. イボクサ (2号溝跡:4) | 8. タケニグサ (2号溝跡:4) |
| 9. ホトлуй属 (2号溝跡:4) | 10. タデ属 (2号溝跡:4) |
| 11. タラノキ (2号溝跡:4) | 12. キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属 (2号溝跡:4) |
| 13. スゲ属 (2号溝跡:4) | 14. ニワトコ (2号溝跡:4) |
| 15. オニスゲ近似種 (2号溝跡:4) | 16. ジュンサイイ近似種 (2号溝跡:4) |
| 17. ヒルムシロ属 (2号溝跡:4) | 18. サンショウ (6号土坑:9) |
| 19. クマンデ (2号溝跡:4) | 20. キハダ (2号溝跡:4) |
| 21. イヌシデ (2号溝跡:4) | 22. ミクリ属 (2号溝跡:4) |
| 23. サワグルミ (2号溝跡:4) | 24. モミ (2号溝跡:4) |

1mm (1-16) 1mm (7-24)

図版2 種実遺体(2)



25. モミ (2号溝跡:4)
 27. トチノキ (1号溝跡:6)
 29. モモ (2号溝跡:3)
 31. タケ類 (1号溝跡:1)

26. プナ (2号溝跡:2)
 28. イヌガヤ (2号溝跡:2)
 30. ヒノキ (2号溝跡:4)
 32. オニグルミ (2号溝跡:5)

写 真 图 版



遺跡航空写真（上か北 平成5年撮影）



1 町遺跡 (上が北)



2 遺跡近景(北から)



3 町遺跡から泉麿寺跡を望む(県指定地)



4 町遺跡から泉麿寺跡を望む(郡庁院)



5 調査区近景(1) (西調査区)



6 調査区近景(2) (西調査区)



7 竪穴住居跡(3号・4号)



8 調査区近景(3) (東調査区)



9 調査区近景(4) (東調査区)



10 1号掘立柱建物跡1 (南から)



11 1号掘立柱建物跡2 (南から)



12 1号掘立柱建物跡3 (東から)



13 2号掘立柱建物跡 (東から)



14 3号掘立柱建物跡 (北東から)



15 4号・5号掘立柱建物跡 (北西から)



16 4号掘立柱建物跡 (南から)



17 5号掘立柱建物跡 (北から)



18 5号掘立柱建物跡 (北西から)



19 北部遺構群 (東から)



20 1号竪穴住居跡 (南から)



21 1号竪穴住居跡 (北から)



22 1号竪穴住居跡 (カマド近景)



23 2号竪穴住居跡 (南から)



24 3号竪穴住居跡 (北から)



25 3号竪穴住居跡 (南から)



26 3号竪穴住居跡 カマドセクション



27 4号竪穴住居跡 (北から)



28 4号竪穴住居跡 (南から)



29 4号竪穴住居跡 (南から)



30 4号竪穴住居跡 カマドセクション



31 5号・6号竪穴住居跡 (西から)



32 5号竪穴住居跡 (西から)



33 5号竪穴住居跡 (南から)



34 6号竪穴住居跡(西から)



35 1号竪穴状遺構(南から)



36 4号竪穴状遺構(南から)



37 5号・7号竪穴状遺構(西から)



38 10号溝跡検出状況(南から)



39 10号溝跡(東から)



40 2号・3号溝跡セクション



41 2号溝跡・3号溝跡セクション



42 土器出土状況



43 作業風景



44 1号溝跡(南から)



45 4号溝跡(北から)



46 5号溝跡セクション



47 6号溝跡セクション



48 7号溝跡セクション(1)



49 7号溝跡セクション(2)



50 7号溝跡(東から)



51 7号・8号・9号溝跡・1号井戸跡



52 1号井戸跡(西から)



53 1号土坑(西から)



54 2号土坑(西から)



55 3号土坑(南から)



56 土器出土状況(1)



57 土器出土状況(2)



58 4号・5号・6号溝跡（北から）



59 6号溝跡（北から）



60 土器出土状況



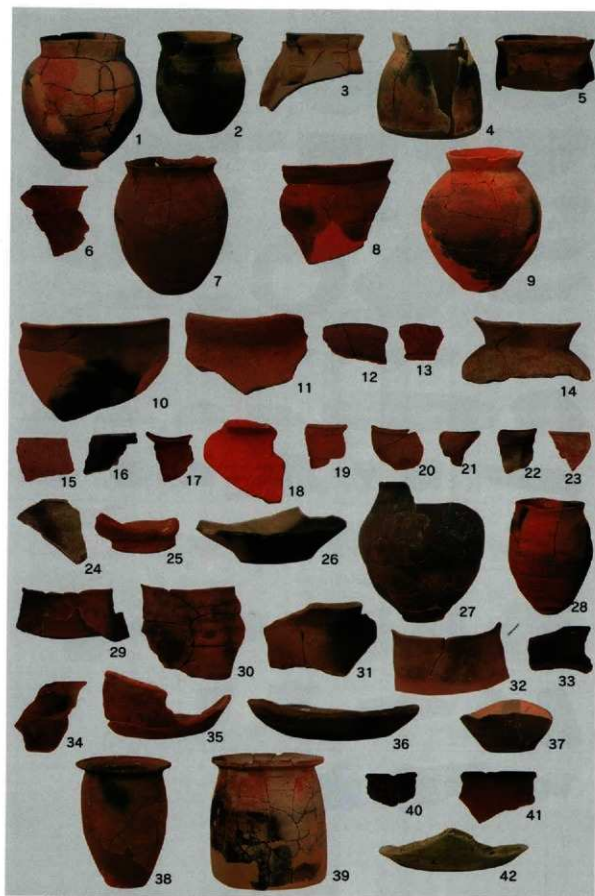
61 土器出土状況



62 出土遺物 (1) 遺構出土



63 遺構外出土遺物(2)土師器 杯・高杯・高台付杯



64 遺構外出土遺物 (3) 土師器壳



65 遺構外出土遺物(4) 土師器 その他の遺物・須恵器・蓋・壺・杯・甕・その他の遺物



1 法幢寺跡遠景(南から)



2 調査区全景(南から)



3 遺跡北西部分 (西から)



4 遺跡南西部分 (西から)



5 遺跡南東部分 (西から)



6 遺跡北東部分 (東から)



7 SKI (再葬墓) (西から)



8 SKI (再葬墓) 断面 (西から)



9 SII (南から)



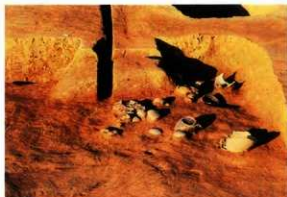
10 SII カマド (南から)



11 SI 2 (南から)



12 SI 3 遺物出土状況 (南から)



13 SI 3 カマド付近遺物出土状況 (南から)



14 SI 3 全景 (南から)



15 SI 3 カマド (南から)



16 SI 4~7 (南から)



17 SI 4 (南から)



18 SI 4 鍛冶炉 (南から)



19 S I 5 (南から)



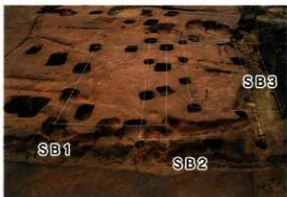
20 S I 5 カマド (南から)



21 S I 6 (南から)



22 S I 7 (南から)



23 SB 1 ~ 3 (南から)



24 SB 1 (南から)



25 SB 1 No 2 柱穴土層断面



26 SB 1 No. 10 柱穴土層断面



27 SB 2 (南から)



28 SB 3 (南から)



29 SB 4・S11・SD6・7 (南から)



30 SB 5 (南から)



31 SD10・11・15 (東から)



32 SD10~15 (西から)



33 SD14 羽口出土状況 (南から)



34 SD1・13 土層断面 (D-D) (南東から)



35 SD15 土層断面F-F' (南から)



36 SD15 土層断面G-G' (南から)



37 土坑群 (D 2-21グリッド) (南から)



38 土坑群 (D 2-41グリッド) (南から)



39 土坑群 (D 2-43グリッド) (南から)



40 土坑群 (D 2-51グリッド) (南東から)



41 土坑群 (D 2-67グリッド) (南から)



42 土坑群 (D 2-76グリッド) (南から)



43 SK 6 竖棺土層断面 (南西から)



44 SK 13 遺物出土状況



45 SK 17 竖棺土層断面 (南西から)



46 SK 19 竖棺土層断面 (南西から)



47 SK 22 鉄鍋出土状況 (南東から)



48 SK 29 竖棺底板出土状況 (南西から)



49 SK 30 遺物出土状況 (南東から)



50 SK 34 (南西から)



51 SK 34 視出土状況(南西から)



52 SK 40 遺物出土状況(南西から)



53 SK 45 遺物出土状況



54 SK 46・47 土層断面(南から)



55 SK 46・47 遺物出土状況(南から)



56 SK 82 遺物出土状況(南から)



57 SK 104 火葬骨出土状況(南から)



58 SK 105 火葬骨出土状況(南から)



59 SK106 火葬骨出土状況(南から)



60 SK117 火葬骨出土状況(南から)



61 SK140 遺物出土状況(西から)



62 SK145 鉄鍋・遺物出土状況(西から)



63 SK155 遺物出土状況(北から)



64 岡田氏墓地(南西から)



65 開山碑(南から)



图6



图8-1



图8-2



图9-1



图9-2



图9-3



图9-4

66 SK1·SK2 出土遺物



图 13-1



图 13-2



图 13-3



图 13-5



图 13-8



图 13-6



图 13-7



图 13-10



图 13-9

67 S13 出土遺物



圖16-1



圖16-2



圖16-3



圖16-4



圖20-1



圖18-8



圖20-2



圖22-3



圖22-1



圖22-4



圖22-5



圖22-6



圖22-7



图31-1



图31-2



图31-4



图31-6



图31-7



图31-8



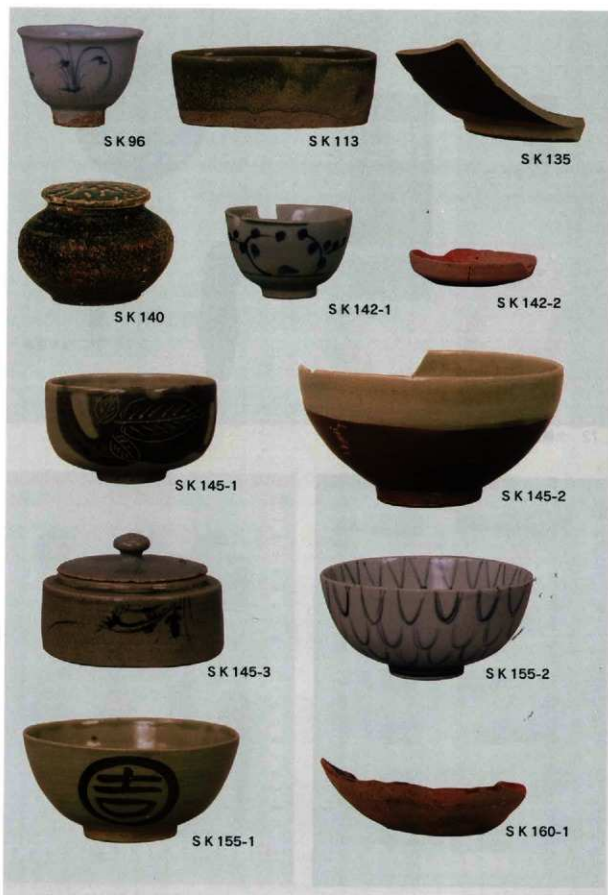
图31-10



图31-9



70 土壇出土遺物(1)



71 土城出土遺物(3)



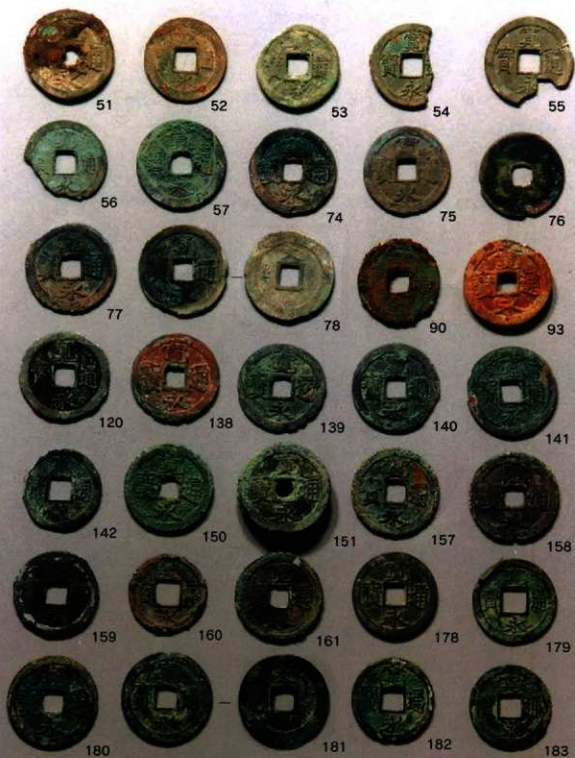
72 土壙出土遺物(3)



73 土壙出土遺物(4) キセル



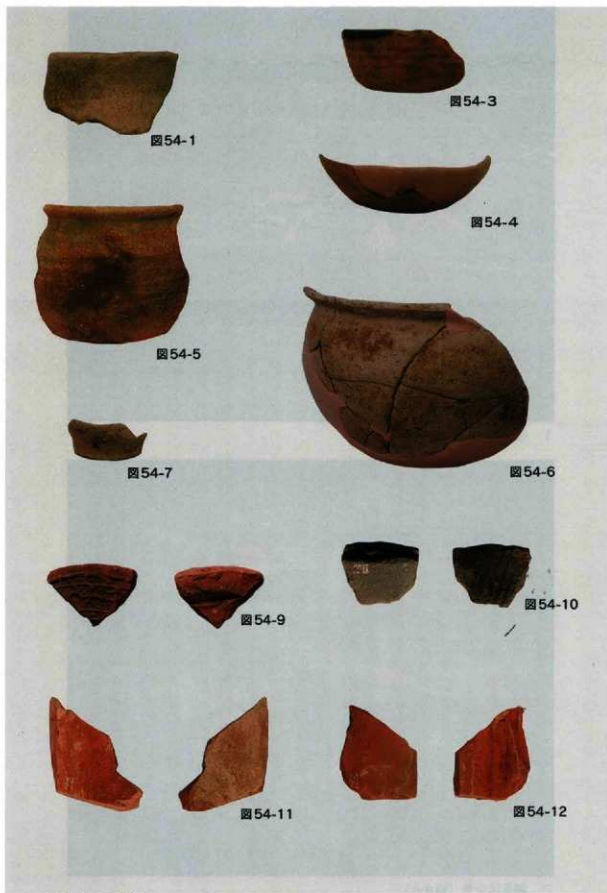
74 土壙出土遺物(5) 留金具・釘



75 古銭 (1)



76 古銭 (2)



77 遺構外出土遺物



1 遺跡近景 (南から)



2 調査区全景 (南から)



3 1号掘跡東辺 (北から) 手前が土橋



4 1号掘跡東辺土橋 (西から)



5 1号掘跡東辺中央部 (西から)



6 1号掘跡南東角部 (西から)



7 1号掘跡東辺 (南から)



8 1号掘跡南辺 (東から)



9 1号掘跡南辺 (西から)



10 1号掘跡南辺土橋 (南から)



11 1号堀跡南辺南セクション (西から)



12 1号堀跡出土呪符



13 2号堀跡 (西から)



14 2号堀跡 (東から)



15 1号土坑



16 2号土坑



17 3号土坑



18 4号土坑



19 7号土坑 (西から)



20 1号流路跡 (南東から)



21 1号流路跡 (南から)



22 1号流路跡セクション (南から、白いのが火山灰)



23 2号流路跡 (南から)



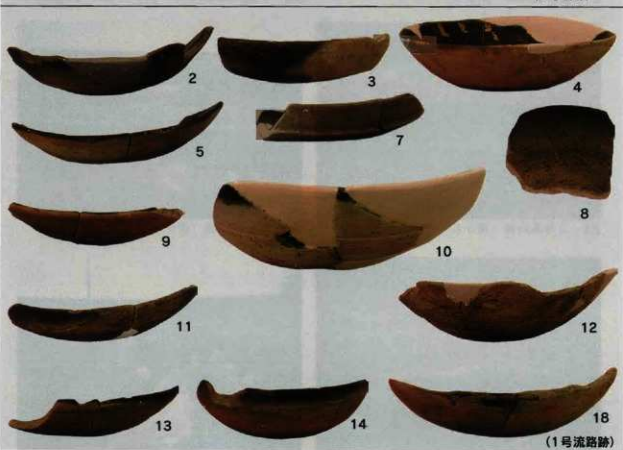
24 2号流路跡 (北から)



25 2号流路跡セクション (北から、白いのが火山灰)



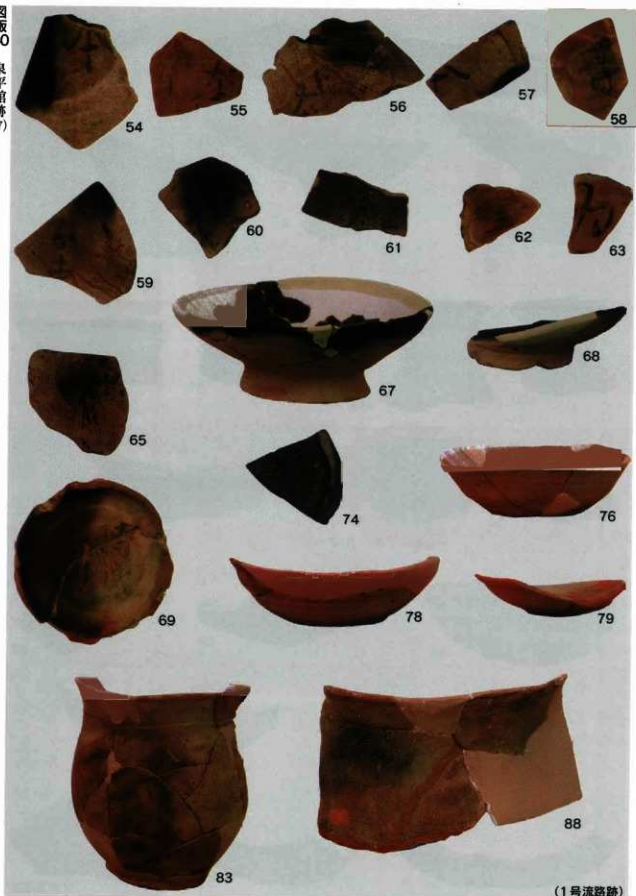
26 現地説明会風景



27 出土遺物 (1)



28 出土遺物 (2)



29 出土遺物 (3)

(1号流路跡)

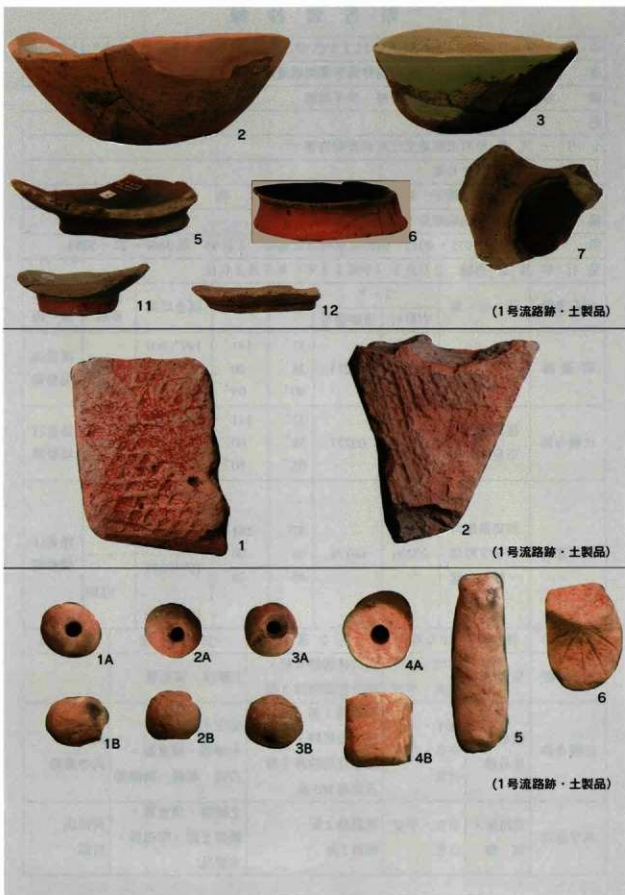


30 出土遺物 (4)

(1号流路跡)



31 出土遺物(5)



32 出土遺物(6)

報 告 書 抄 録

ふりがな	けんえいたかひらちくほじょうせいびじぎょうかんれんいせきはつちょうさほうこくしょ							
書名	県営高平地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査報告書							
副書名	町遺跡・法幢寺跡・泉平館跡							
巻次	Ⅱ							
シリーズ名	原町市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第26集							
編著者名	堀 耕平・鈴木文雄・荒 淑人・藤木 海							
編集機関	福島県原町市教育委員会							
所在地	〒975-0012 福島県原町市三島町二丁目45 Ⅱ0244—24—5284							
発行年月日	西暦 2001 (平成13年) 年3月30日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
町遺跡	福島県原町市泉字町	07206	00273	37° 38′ 40″	141° 00′ 05″	19970801 ～ 19980331	11900	県営ほ場整備
法幢寺跡	福島県原町市泉字寺前	07206	00277	37° 39′ 05″	141° 00′ 50″	19960821 ～ 19961116	3551	県営ほ場整備
泉平館跡	福島県原町市泉字町畑・館腰	07206	00178	37° 38′ 45″	141° 00′ 25″	19941201 ～ 19950331 19950825 ～ 19960329	912 ----- 9350	県営ほ場整備
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
町遺跡	集落跡	古墳・奈良・平安	竪穴住居跡6軒・掘立柱建物跡5棟		土師器・須恵器			
法幢寺跡	墳墓・集落跡	弥生・奈良・平安近世	再葬墓1基・竪穴住居跡7軒・掘立柱建物跡5棟・近世墓163基		弥生土器・土師器・須恵器・古銭・和鏡・陶磁器		岡田氏氏寺墓地	
泉平館跡	流路跡・館跡	奈良・平安近世	流路跡2条・堀跡2条		土師器・須恵器・墨書土器・陶磁器・木製品		岡田氏居館	

原町市埋蔵文化財調査報告書第26集
県営高平地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ
町遺跡・法幢寺跡・泉平館跡

平成13年3月30日発行

発行 福島県原町市教育委員会
〒975-0012 福島県原町市本町二丁目27番地
印刷 有限会社 ライト印刷
〒975-0073 福島県原町市北新田字信田370-1
